

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第595集

は せ ち  
細谷地遺跡第26次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2012

盛岡市都市整備部盛岡南整備課  
(公財) 岩手県文化振興事業団

# 細谷地遺跡第26次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところでです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県盛岡市の盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成22年度に発掘調査を実施した、盛岡市細谷地遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では奈良・平安時代の集落や隣接する中世城館の向中野館遺跡を囲む堀跡が確認されました。特にも、平安時代の掘立柱建物跡がこの調査区周辺に多くみられること、畠に関連する遺構を検出したことは、当時の村の様子を探る上で、貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成24年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 池田克典

## 例 言

- 1 本報告書は、岩手県盛岡市向中野字野原8-11ほかに所在する細谷地遺跡第26次の発掘調査結果を収録したものである。なお、地番は平成25年度以降盛岡市向中野五丁目地内に変更予定である。
- 2 本遺跡の調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は盛岡市都市整備部盛岡南整備課と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（当時。平成23年4月1日より公益財団法人）が実施した。
- 3 岩手県遺跡情報検索システムに記載される遺跡番号はLE26-0214、遺跡略号はOHY-10-26である。
- 4 発掘調査期間、調査面積及び調査担当者は以下のとおりである。  
平成22年4月9日～8月11日／6,633㎡／金子佐知子・星 雅之
- 5 室内整理期間は平成22年11月1日～平成23年3月31日で、金子佐知子・星 雅之が担当した。
- 6 本報告書の執筆は、金子佐知子・星 雅之が分担して行った。遺構に関しては文末に文責を示した。遺物に関しては文中に示していないが、以下の分担で行っている。  
遺物出土状況 遺構担当者  
＜土師器・須恵器・土製品・陶磁器・鉄製品・銭貨＞ 金子佐知子  
＜石器・縄文土器・その他の遺物＞ 星 雅之  
また、VI-4（3）については、石崎高臣氏に執筆していただいた。
- 7 発掘調査では、独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、高橋善躬氏のご協力をいただいた。
- 8 本報告書作成にあたり、次の方々、機関にご指導いただいた。（順不同・敬称略）  
阿部勝則（岩手県立博物館）、石崎高臣（奥州市世界遺産登録推進室）、盛岡市教育委員会
- 9 各種委託業務では以下の機関に依頼した。  
＜航空写真＞株式会社東邦航空  
＜石質鑑定＞花崗岩研究会  
＜炭化材樹種同定＞古代の森研究舎  
＜鉄滓分析＞JFEテクノロジーサーチ株式会社  
＜火山灰分析＞弘前大学 柴 正敏  
＜金属製品の保存処理＞岩手県立博物館
- 10 今回の調査結果は、現地説明会（平成22年7月10日開催）、及び調査略報などがあるが、本書と記載が異なる場合は、すべて本報告書が優先する。
- 11 調査で得られた出土遺物や整理に係わる諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。

## 目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	1
1	遺跡の位置と立地	1
2	周辺の遺跡	1
3	基本層序	5
4	これまでの調査	6
III	野外調査と室内整理の方法	10
1	野外調査の方法	10
(1)	グリッドの設定	10
(2)	精査の方法及び遺構の記録	10
(3)	遺構の命名	12
(4)	広報・普及啓発活動	12
2	室内整理	13
(1)	遺物の整理	13
(2)	遺構実測図の整理	14
(3)	写真類の整理	14
IV	検出された遺構	15
1	調査の概要	15
2	竪穴住居跡	15
3	掘立柱建物跡	31
4	柱穴列	35
5	土坑	37
6	竪穴状遺構	46
7	焼土遺構	47
8	溝跡・堀跡	47
9	畝間状遺構	52
10	道路状遺構	54
11	柱穴状土坑	55

V	出土遺物	112
1	土師器	112
	(1) 坏	112
	(2) 高台付坏	113
	(3) 甕	113
	(4) 甗	114
2	須恵器	114
	(1) 坏	114
	(2) 壺類	115
	(3) 甕類	115
3	石器	115
4	土製品	116
5	陶磁器	116
6	縄文土器	117
7	鉄製品	117
8	銭貨	117
9	その他	117
VI	まとめ	150
1	才川南岸の古代集落について	150
	(1) 奈良時代以前	150
	(2) 平安時代	150
2	RG089堀跡について	154
3	RZ022道路状遺構について	156
4	今次調査の遺物について	158
	(1) 遺構間接合	158
	(2) 土器	158
	(3) 今次調査の墨書土器について	164
	(4) 竪穴住居跡から出土した炭化材について	166
付篇	細谷地遺跡の自然科学分析	167
1	細谷地遺跡から出土した炭化材の樹種	167
2	細谷地遺跡第26次調査出土の火山灰について	171
	報告書抄録	251

## 目 次

凡例 1	第42回	RB031掘立柱建物跡・RC005柱穴列	88
凡例 2	第43回	RD032掘立柱建物跡・RD502a土坑	89
第1回	第44回	RB033掘立柱建物跡・RD502b土坑	90
第2回	第45回	RC006柱穴列	91
第3回	第46回	RC007・008柱穴列	92
第4回	第47回	RD481～485土坑	93
第5回	第48回	RD486～490土坑	94
第6回	第49回	RD491～496土坑	95
第7回	第50回	RD497～501・503土坑	96
第8回	第51回	RD504～507土坑・RE013竪穴状遺構	97
第9回	第52回	RE014竪穴状遺構・RF012焼土遺構	98
第10回	第53回	RG058・083・084溝跡	99
第11回	第54回	RG085～088溝跡	100
第12回	第55回	RC089照跡	101
第13回	第56回	RZ019畝間状遺構	102
第14回	第57回	RZ020畝間状遺構(1)	103
第15回	第58回	RZ020(2)・RZ021畝間状遺構	104
第16回	第59回	RZ022道路状遺構(1)	105
第17回	第60回	RZ022(2)・RZ023道路状遺構	106
第18回	第61回	柱穴状土坑(1)	107
第19回	第62回	柱穴状土坑(2)	108
第20回	第63回	土師器・須恵器(1)	118
第21回	第64回	土師器・須恵器(2)	119
第22回	第65回	土師器・須恵器(3)	120
第23回	第66回	土師器・須恵器(4)	121
第24回	第67回	土師器・須恵器(5)	122
第25回	第68回	土師器・須恵器(6)	123
第26回	第69回	土師器・須恵器(7)	124
第27回	第70回	土師器・須恵器(8)	125
第28回	第71回	土師器・須恵器(9)	126
第29回	第72回	土師器・須恵器(10)	127
第30回	第73回	土師器・須恵器(11)	128
第31回	第74回	土師器・須恵器(12)	129
第32回	第75回	土師器・須恵器(13)	130
第33回	第76回	土師器・須恵器(14)	131
第34回	第77回	土師器・須恵器(15)	132
第35回	第78回	土師器・須恵器(16)	133
第36回	第79回	土師器・須恵器(17)・石器(1)	134
第37回	第80回	石器(2)	135
第38回	第81回	土製品・陶磁器・縄文土器	136
第39回	第82回	鉄製品・銭貨	137
第40回	第83回	土師器表 ススコケ実測図(1)	138
第41回	第84回	土師器裏 ススコケ実測図(2)	139

第85図	才川周辺の古代集落遺構配図	151
第86図	向中野館遺跡・細谷地遺跡で検出された 堀跡及び中世と推定される遺構集成図	155
第87図	道路状遺構集成図	157
第88図	遺構間接合	159

第89図	土師器・須恵器集成図(1)	160
第90図	土師器・須恵器集成図(2)	161
第91図	堀内出土の平安時代の瓶	163
第92図	多文字の扁背土器	164
第93図	黒書土器・刻書土器集成図	165

## 目次

第1表	周辺の遺跡	4
第2表	これまでの調査一覧	8
第3表	調査報告書一覧表	9
第4表	遺構名対照表	13
第5表	竪穴住居跡一覧表	109
第6表	掘立柱建物跡一覧表	109
第7表	柱穴列一覧表	109
第8表	土坑一覧表	109
第9表	竪穴状遺構一覧表	110
第10表	溝跡・堀跡一覧表	110
第11表	柱穴状土坑一覧表	110
第12表	出土位置別遺物重量表	140

第13表	土師器・須恵器観察表	142
第14表	石器観察表	148
第15表	土製品観察表	148
第16表	陶磁器観察表	148
第17表	縄文土器観察表	148
第18表	鉄製品観察表	149
第19表	銭貨観察表	149
第20表	その他の遺物観察表	149
第21表	火山灰一覧表	149
第22表	竪穴住居跡出土の土器	158
第23表	黒書土器・刻書土器一覧表	165

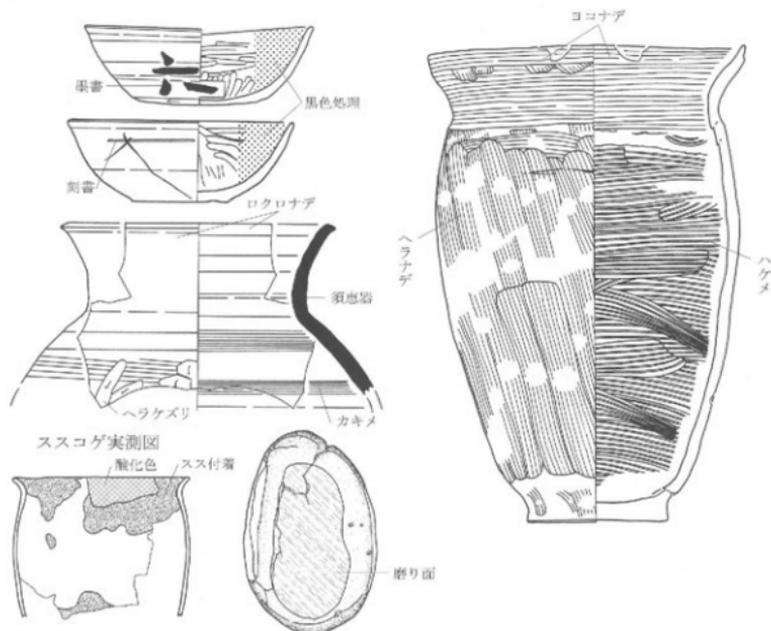
## 写真図版目次

写真図版1	調査前風景(1)	175
写真図版2	調査前風景(2)	176
写真図版3	調査前風景(3)	177
写真図版4	航空写真	178
写真図版5	基本土層・RA128竪穴住居跡	179
写真図版6	RA187竪穴住居跡(1)	180
写真図版7	RA187竪穴住居跡(2)	181
写真図版8	RA188竪穴住居跡(1)	182
写真図版9	RA188竪穴住居跡(2)	183
写真図版10	RA189竪穴住居跡(1)	184
写真図版11	RA189竪穴住居跡(2)	185
写真図版12	RA190竪穴住居跡(1)	186
写真図版13	RA190竪穴住居跡(2)	187
写真図版14	RA191竪穴住居跡(1)	188
写真図版15	RA191竪穴住居跡(2)	189
写真図版16	RA192竪穴住居跡(1)	190
写真図版17	RA192竪穴住居跡(2)	191
写真図版18	RA193竪穴住居跡(1)	192
写真図版19	RA193竪穴住居跡(2)	193
写真図版20	RA194竪穴住居跡(1)	194
写真図版21	RA194竪穴住居跡(2)	195
写真図版22	RA195竪穴住居跡	196
写真図版23	RA196竪穴住居跡(1)	197

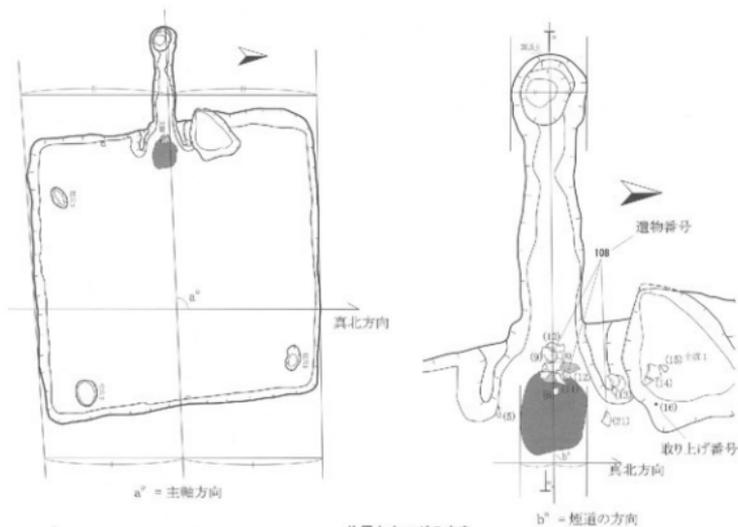
写真図版24	RA196竪穴住居跡(2)	198
写真図版25	RA197竪穴住居跡(1)	199
写真図版26	RA197竪穴住居跡(2)	200
写真図版27	RA198竪穴住居跡(1)	201
写真図版28	RA198竪穴住居跡(2)	202
写真図版29	RA199竪穴住居跡(1)	203
写真図版30	RA199竪穴住居跡(2)	204
写真図版31	RA200竪穴住居跡	205
写真図版32	RB201竪穴住居跡	206
写真図版33	RB026掘立柱建物跡(1)	207
写真図版34	RB026(2)・RB031掘立柱建物跡・RC006柱穴列	208
写真図版35	RB027掘立柱建物跡	209
写真図版36	RB028掘立柱建物跡	210
写真図版37	RB029掘立柱建物跡	211
写真図版38	RB030掘立柱建物跡(1)	212
写真図版39	RD030掘立柱建物跡(2)・RC008柱穴列	213
写真図版40	RB032・RB033掘立柱建物跡	214
写真図版41	RC007・RC008柱穴列	215
写真図版42	RD481～483土坑	216
写真図版43	RD484～487土坑	217
写真図版44	RD488～490土坑	218
写真図版45	RD491～493(1)土坑	219
写真図版46	RD493(2)～495土坑	220

写真図版47	RD496~499土坑	221
写真図版48	RD500~502土坑	222
写真図版49	RD503~506土坑	223
写真図版50	RD507土坑・RB013堅穴状遺構	224
写真図版51	RE014堅穴状遺構・RF012焼土遺構	225
写真図版52	RG058 (1)・RG083 (1) 溝跡	226
写真図版53	RG058 (2)・RG083 (2) 溝跡	227
写真図版54	RG058 (3)・RG084・RG087溝跡	228
写真図版55	RG085・RG086 (1) 溝跡	229
写真図版56	RG086 (2)・RG088溝跡	230
写真図版57	RG089堀跡 (1)	231
写真図版58	RG089堀跡 (2)	232
写真図版59	RG089堀跡 (3)	233
写真図版60	RZ019畝間状遺構	234
写真図版61	RZ020畝間状遺構 (1)	235

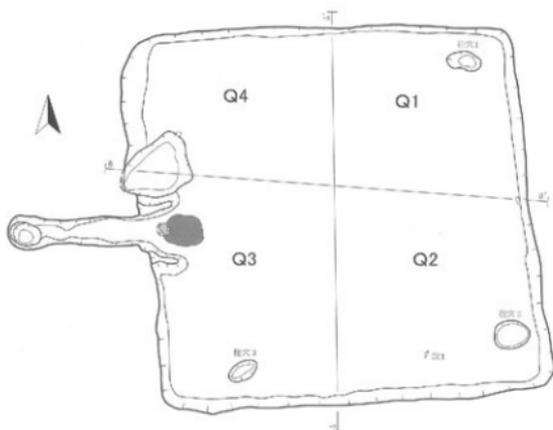
写真図版62	RZ020畝間状遺構 (2)	236
写真図版63	RZ021畝間状遺構	237
写真図版64	RZ022道路状遺構	238
写真図版65	RZ023道路状遺構	239
写真図版66	土師器・須恵器 (1)	240
写真図版67	土師器・須恵器 (2)	241
写真図版68	土師器・須恵器 (3)	242
写真図版69	土師器・須恵器 (4)	243
写真図版70	土師器・須恵器 (5)	244
写真図版71	土師器・須恵器 (6)	245
写真図版72	土師器・須恵器 (7)	246
写真図版73	土師器・須恵器 (8)	247
写真図版74	石器	248
写真図版75	土製品・陶磁器・縄文土器	249
写真図版76	鉄製品・銭貨・鉄滓・その他	250



凡例図1



住居とカマドの方向



遺物取り上げ時の区画

凡例図 2

## I 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、盛岡市が21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市として発展していくことを目指し、高次の都市機能、業務機能等の整備を図るとともに、これに伴って増加する人口を定着させるための良好な居住環境を備えた新たな市街地の整備を行う事業である。平成3年度に事業認可を受け、平成6年度から平成25年度までを事業予定として、対象面積313haに及ぶ土地区画整理事業が進められている。

この間、事業の対象地域に関わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられ、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、調査を必要とする範囲を確定し、本調査は盛岡市教育委員会のほか、岩手県文化振興事業団の受託事業としても実施することとなった。

本遺跡第26次調査については、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成22年4月1日付けで盛岡市と財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、用地6,633㎡について、平成22年4月9日から8月11日まで調査が行われた。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置と立地

細谷地遺跡の所在する岩手県盛岡市は、岩手県のほぼ中央に位置し、東西約45.5km、南北約40km、総面積886.5km<sup>2</sup>、総人口約30万人を有する岩手県の県庁所在地である（第1図、平成20年4月現在）。北は、八幡平市、岩手郡岩手町・巻巻町、東は下閉伊郡岩泉町、宮古市、南は花巻市、紫波郡紫波町・矢巾町、西は岩手郡平石町・滝沢村の3市6町1村と隣接している。盛岡市の町づくりは慶長2年（1597）年に南部信直が盛岡城の築城に取りかかったことに始まる。明治22年には全国39都市の一つとして市制が施行され、現在は北日本の中核都市として発展を続けている。

細谷地遺跡は、東日本旅客鉄道仙北町駅から南西に1.6kmに位置し、盛岡市向中野字野原地内に所在している。国土地理院発行の2万5千分の1地形図「盛岡」の図幅に含まれ、今回の調査区は北緯39度40分37秒、東経141度8分21秒付近に位置する。

調査区は半石川右岸の低位段丘に立地している（第2・5図）。北側調査区は東西90m、南北80m、南側調査区は東西23m、南北23mで、両者は約100m離れている。面積は合計で6,633㎡である。平成21年度に行われた第21・25次調査の南東側で、遺跡全体では北東寄りにあたる。現況は宅地及び工場用地で、標高は122m前後である。

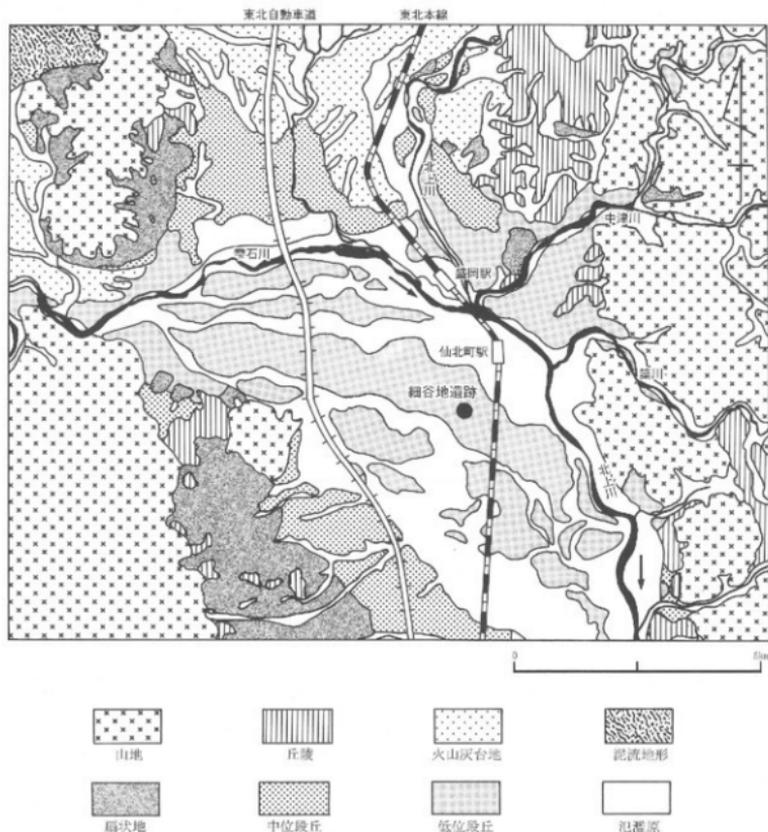
### 2 周辺の遺跡

周辺の遺跡については第3図に位置を、第1表に概要をまとめた。本遺跡の立地する半石川右岸では、低位段丘上に多くの主に古代を中心とした遺跡が分布している。

縄文時代には周辺は狩場としての利用が盛んである。旧河道を中心に湿地が広がっており、これらの水場が集まる動物をターゲットにした陥し穴状土坑が新堰端遺跡、野古B遺跡、本宮熊堂B遺跡、飯岡沢田遺跡、飯岡才川遺跡、矢盛遺跡などから数多く検出されている。これらの陥し穴状土坑は形状から



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺地形分類図

縄文時代後期以降のものと思われ、中期には土器片が飯岡沢田遺跡などから若干出土している程度である。集落が形成されるのは縄文時代晩期となつてからで、細谷地遺跡第10次調査で縄文時代晩期前葉の竪穴住居跡が1棟、貯蔵穴が数基検出されている。後葉になると台太郎遺跡、本宮熊堂A遺跡から集落跡が検出されている。

一方古代の遺跡は数多い。古墳時代末から平安時代にかけて600棟を超える竪穴住居跡が検出された台太郎遺跡のほか、野古A遺跡、本宮熊堂B遺跡などの奈良・平安時代の集落跡、多くの古墳と集落跡の飯岡沢田遺跡、飯岡才川遺跡など盛岡南新都市土地区画整理事業によって平成5年度から継続的に発掘調査された遺跡が周辺に分布している。本遺跡に隣接する向中野館遺跡の旧河道からは多くの墨書土器や木簡が出土しており、水辺で祭祀が行われていた可能性が高い。本遺跡の北西約1.5kmには陸奥国最大の城柵跡である志波城跡がある。

第1表 周辺の遺跡

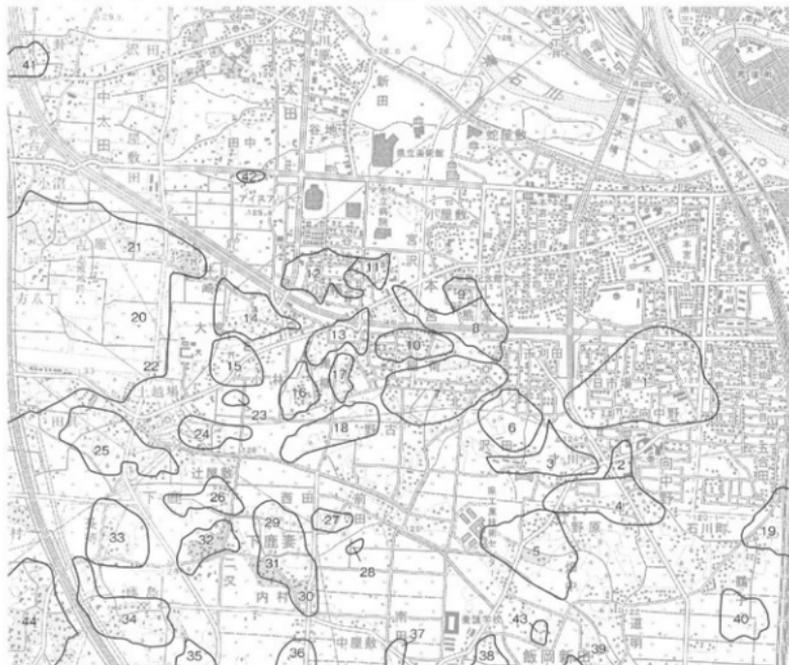
No	遺跡名	位置	時代	遺構・遺物	文献No
1	百人部	集落跡	縄文・古代・中世	縄文瓦葺、壘穴住居跡、土坑、縄文土器、土師器	10, 12, 14, 17, 18, 22, 24, 25, 26, 31, 37, 40, 41, 44, 58, 69, 80, 82, 86, 87
2	六中野館	城館跡	縄文・古代・中世	土坑、壘穴住居跡、溝、土器、土師器、須恵器	14, 15, 82, 83, 88, 66, 67, 93
3	鹿野十川	集落跡	縄文・古代	簡し穴状遺構、壘穴住居跡、楕円柱状物跡、円形銅鏡	13, 19, 21, 37, 48, 54, 57, 62, 70, 95
4	熊石地	集落跡	縄文・古代	壘穴住居跡、楕円柱状物跡、溝、縄文土器、土師器、須恵器	22, 23, 26, 37, 49, 54, 55, 56, 59, 61, 64, 67, 80, 95
5	矢盛	集落跡	縄文・古代	簡し穴状遺構、壘穴住居跡	1, 32, 34, 41, 42, 54, 58, 59, 60, 62, 63, 66, 68, 95
6	教岡田川	集落跡	縄文・安土・古代・中世	簡し穴状遺構、壘穴住居跡、溝、方形銅鏡	27, 28, 46, 95
7	伊志八	集落跡	古代・平安	壘穴住居跡、楕円柱状物跡、溝、土師器	9, 29, 30, 37, 50, 80, 81, 82, 95
8	本宮橋東詰	集落跡	縄文・古代	縄文土坑、簡し穴、壘穴住居跡、土器品、須恵器	2, 10, 11, 19, 20, 34, 37, 38, 39, 43, 95, 47, 62, 96
9	木宮南土A	集落跡	縄文	縄文壘穴中一級集落跡、簡て高、土坑、小銅器	6, 8, 35, 43, 51, 82, 95
10	稲岡	集落跡	古代	壘穴住居跡、溝、土?	9, 32, 37, 41, 82, 95
11	竹沢	集落跡	古代	溝、土師器	6, 47, 81, 82, 94
12	小塚	集落跡	古代	壘穴住居跡、円形銅鏡、楕円柱状物跡、溝	4, 4, 5, 6, 7, 14, 15, 16, 19, 82, 94
13	光明A	集落跡	縄文・古代	簡し穴状遺構、壘穴住居跡	11, 19, 81, 82, 94
14	大宮北	集落跡	古代	壘穴住居跡、溝	8, 66, 79, 80, 82, 89, 94
15	大宮	集落跡	古代・中世	土坑、溝、土師器	78, 82
16	光野B	集落跡	古代	土師器	
17	光野C	集落跡	古代	土師器	
18	野吉田	集落跡	古代	溝、土師器	
19	南前土	集落跡	縄文・古代・中世	簡し穴状遺構、壘穴住居跡、円形銅鏡、溝	79, 80, 81, 82, 95
20	宮成城跡	城館跡	古代(平安)	門跡、土坑、溝跡、列柱状物跡、土器、土師器	78, 79, 80, 81, 83, 84, 85, 90-93
21	林崎	集落跡	平安	楕円柱状物跡、壘穴住居跡、土坑、土師器、須恵器	78, 81, 82, 83
22	新加瀬	城館跡	縄文・古代	土坑、簡し穴状遺構、大溝、縄文土器、土師器	81, 82
23	小林	集落跡	古代	土師器	
24	水門	集落跡	古代	土師器	
25	上級岡八	集落跡	古代	土師器	
26	上級岡五	集落跡	古代	土師器	
27	内田	集落跡	古代	土師器、須恵器	
28	前田	集落跡	縄文・古代	土坑、溝跡、簡し穴、土師器	
29	西日A	集落跡	古代	土師器	
30	中屋敷	集落跡	古代	土師器	
31	内川	集落跡	古代・平安	壘穴住居跡、楕円柱状物跡、溝、土師器、須恵器	87
32	二又	集落跡	古代・平安	壘穴住居跡、溝	87
33	三又	集落跡	古代	壘穴住居跡、土師器	80
34	野瀬	集落跡	縄文・平安	壘穴住居跡(古代)、縄文土器、土師器、須恵器	
35	坂戸秋崎五	集落跡	古代	壘穴住居跡、楕円柱状物跡、炭化米、片銅鏡	33
36	浜田I	集落跡	古代・平安	壘穴住居跡、円形銅鏡	
37	高尾敷I	集落跡	古代	須恵器	
38	石野	集落跡	古代	土師器、須恵器	
39	夕雲	集落跡	古代	溝?、土師器	
40	向中野屋	集落跡	古代	土師器	
41	八郎	集落跡	古代・平安	壘穴住居跡、土坑、溝	78, 81, 82
42	大田田中	集落跡	平安	土師器	
43	藤野	集落跡	平安	楕円柱状物跡、土坑、溝	62
44	大塚I	集落跡	古代	土師器、須恵器	

中世には、13世紀後半～14世紀前半に台太郎遺跡で堀に囲まれた居館跡と中世の土坑墓群、矢盛遺跡で16世紀ごろの堀に囲まれた居館跡と集落跡が検出されている。また、本遺跡に隣接する向中野館遺跡では詳しい年代は不明であるが、中世末頃と思われる城館跡が調査されている。

## 3 基本層序

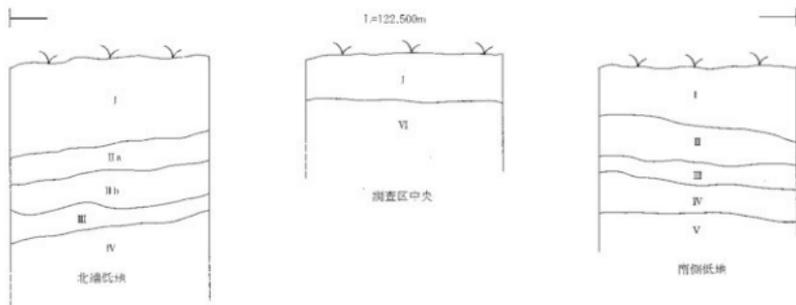
調査区は半石川によって形成された低位段丘（砂礫段丘Ⅲ）上である。基盤の砂礫層をシルト層が覆っている。

- I層 黒褐色シルト（10YR2/2）表土・盛土 粘性、締りなし 層厚15～30cm  
調査区は自動車整備工場であったため、舗装のため部分的に削平されたり、碎石が載る。
- II層 黒～黒褐色シルト（10YR1.7/1～2/2）粘性ややあり 締りあり  
部分的にTo-aテフラを若干含む 古代以降の遺構検出面 層厚5～26cm  
舗装のため、削平されている部分あり
- IIa層 10YR2/1黒～2/2黒褐 粘性あり 締り密 To-a(10YR6/4)に黄橙の小ブロック2%  
IIb層 10YR1.7/1黒 粘性やや強 締り中 草根により混入したと思われる  
To-aブロック部分的に散見されるが、To-a降下時期より古いと思われる
- III層 暗褐～黒褐色粘土質シルト（10YR3/3～2/2）粘性強 締り中 II層とIV層の漸移層  
層厚6～15cm
- IV層 黄褐～に黄褐色砂質シルト（10YR5/8～4/3）粘性強 締り中



(1:25,000 遠野・小沼芳策編)  
『香阿遺跡地図(2000年版)』(香阿市教育委員会2000) に一部加筆して作成

第3図 周辺の遺跡



第4図 基本土層

層厚10~40cm 遺構最終検出面

V層 褐色砂(10YR4/6) 粘性なし 締りあり 層厚10~40cm

VI層 黒褐色砂礫層(10YR2/2) 層厚5~90cm

VII層 褐色砂礫(10YR2/2) 層厚20cm程度

調査区内は一見平沢であるが、北側調査区の基1周辺が最も標高が高い。この付近は北西側から南東方向へ延びる自然堤防の頂部でもともとはもう少し標高が高く、馬の背状の地形となっていたことが推定され、表土のI層を除去するとIV層~VI層が露出する。この部分より北側の調査区北端の沢状の低地にII層の黒色土が厚く堆積している。また、南側に向かっても若干低くなっており、II層が残存している部分が多い。南側調査区は東半のII層の残りが良いが、西に向かうにつれ削平されている。

古代の遺物が含まれるのはII層までで、古代の遺構検出面であるが、II層が削平されている箇所ではIII層、IV層上で遺構を検出している。

#### 4 これまでの調査

本遺跡では昭和61年に盛岡市教育委員会が個人住宅の建設のために試掘調査を行って以降、平成21年までに25回の調査が行われている。第4次以降の本調査については、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより第1~10次、12~20次、24・25次調査の報告書が刊行されている(第2表、第5図)。

これまでに、奈良・平安時代の集落跡、縄文時代の狩場・集落跡、近世の民家跡が検出されている。また、断接する向中野館遺跡においても平成7年以降13回の調査が行われている。向中野館遺跡の南館と北館を分ける旧河道より南側の低位段丘上においては地形的に変化はなく、古代の集落は一体としてとらえることができる。

奈良時代の集落は遺跡東側の自然堤防上に見られる2条の低地の内側に24棟の竪穴住居跡が点在している。竪穴住居跡の重複は見られない。軒遣の方向は北西~西を指向しており、N-45° -W~N-92° -Wを示す。

平安時代の集落は遺跡の西端を除く北側から、低位段丘の延びる南東に向かって密に分布しており、



第5図 細谷地遺跡調査位置図



調査年度	委託者	種類	調査期間	調査主体	報告書	採目箇所	出土遺物
21	都市機構	*	08-04-22~ 05-19	盛岡市教育委員会、未刊	土坑1層 遺跡1条		
22	盛岡市	*	08-11-14~ 11-20	盛岡市教育委員会 未刊	溝跡1条		
23	盛岡市、盛岡市機構	*	08-11-05~ 12-12	盛岡市教育委員会 未刊	土坑4層 溝跡1条		
24	盛岡市	*	09-03-18~ 06-19	(財)岩手県文化振興財団文化財センター 阿 藤377集	塚穴遺跡8層 溝跡1層(平安)	土坑2層 竪穴住居 土坑跡、須恵器、瓦片 瓦葺土坑(平安)	土坑跡、須恵器、瓦片 瓦葺土坑(平安)
25	都市機構	*	09-06-15~ 09-11	同上	阿 藤377集		

第3表 調査報告書一覧表

・(財)岩手県文化振興財団文化財センター・発行報告書(年は西暦下二桁)

凡例→【○】遺跡発見調査報告書【△】岩手県文化財センター盛岡市文化財センター  
【▽】岩手県文化財センター盛岡市文化財センター  
【□】岩手県文化財センター盛岡市文化財センター  
【◇】岩手県文化財センター盛岡市文化財センター

No.	書名(略)	年	巻数	No.	書名(略)	年	巻数	No.	書名(略)	年	巻数
1	穴遺・堀1次	96	2/5	25	白土3次、第26次	02	416	38	飯岡才川、第8・9次	07	494
2	本宮町遺跡・第1次	95	2/26	26	白土3次、第25次	03	417	39	飯岡才川、第9次、第10次	07	500
3	小堀・第2次	96	2/41	27	飯岡町遺跡・第3次	03	418	40	野古A、第21・24・29次	07	501
4	寺岡(平成7年度)	96	2/46	28	飯岡町遺跡・第5次	03	419	41	本宮町遺跡A、第26・29次	07	502
5	小堀・第4次	96	2/65	29	野古A、第12次	03	420	42	飯岡才川、第5・6次	07	503
6	篠崎(平成8年度)	97	2/36	30	野古A、第13次	03	421	43	飯岡才川、第7・8次	07	504
7	小堀・第5次、第7次	96	2/67	31	吉太郎、第44次	03	422	44	*1	08	506
8	大河北・水宮町遺跡	96	2/81	32	晴報(平成14年度)	03	423	45	刈谷地、第13次、第14次	08	513
9	寺岡(平成9年度)	96	2/82	33	廣川津崎遺跡	04	427	46	刈谷地遺跡第15次	08	514
10	赤巻田5次、白土3第16次	99	2/33	34	穴遺3次、第24次	01	451	47	飯岡才川、第12次	08	515
11	赤巻田4次、穴遺A4次	99	3/8	35	本宮町遺跡A、第17次	04	453	48	*2	08	516
12	白土3次、第13次	99	3/9	36	飯岡町遺跡・第8次	04	454	49	平成19年度飯岡町遺跡報告書	08	521
13	寺岡(平成10年度)	99	3/11	37	晴報(平成15年度)	04	455	50	穴遺、第12・13次	09	524
14	白中野4・小堀1(白土3第19)	00	3/21	38	本宮町遺跡A、第18次	05	458	61	細行跡、第16・17次	09	525
15	白中野野跡、小堀10次	00	3/38	39	本宮町遺跡B13・15・20次	01	467	62	平成20年度飯岡町遺跡報告書	09	546
16	篠崎(平成11年度)	00	3/49	40	吉太郎、第51次	05	468	63	穴遺、第18・19次	10	555
17	白土3次、第22次	01	3/63	41	平成16年度飯岡町遺跡報告書	05	469	64	細行跡、第19・20次	10	566
18	白土3次、第18次	01	3/69	42	穴遺・第6次	05	488	65	白中野跡、第10・11次	10	567
19	平越(平成12年度)	01	3/70	43	加茂A・24・残A・25	06	470	66	平成21年度飯岡町遺跡報告書	10	571
20	赤巻田・第10次	02	3/77	44	白土3次、第54次	06	486	67	*3	11	577
21	飯岡才川、第3次	02	3/83	45	赤巻田遺跡、第22次	06	487	68	穴遺、第23・24次	11	578
22	寺岡(平成13年度)	02	3/99	46	飯岡町遺跡、第9・10次	06	489	69	白土3次、第66次	11	579
23	刈谷地、第4・5次	02	4/4	47	平成17年度飯岡町遺跡報告書	06	490	70	飯岡才川、第16次	11	580
24	白土3次、第23次	03	4/15					71	平成22年度飯岡町遺跡報告書	11	588

・岩手県教育委員会発行報告書

- 72) 1979年「東北道新幹線関係遺跡文化財調査報告書」岩手県文化財調査報告書第2集  
73) 1990年「東北道新幹線関係遺跡文化財調査報告書Ⅱ」岩手県文化財調査報告書第68集  
74) 1990年「岩手県大森町新幹線関係遺跡調査報告書」岩手県文化財調査報告書第86集  
75) 1991年「岩手県大森町新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」岩手県文化財調査報告書第90集  
76) 1992年「岩手県大森町新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」岩手県文化財調査報告書第91集  
77) 1993年「岩手県大森町新幹線関係遺跡調査報告書(平成4年度)」岩手県文化財調査報告書第93集

\*1→飯岡才川、第7・13次  
飯岡町遺跡、第12次、穴遺・第9次

\*2→穴遺、第10・11次、白中野野跡、第9次、吉太郎、第58次

\*3→報告書、第21・25次、白中野野跡、第12・13次

・盛岡市教育委員会発行報告書

「盛岡市内遺跡発見調査報告書(平成年度)」

No.	書名(略)	年
78	一畑555-58年度①	1985
79	一畑559年度①	1986
80	一畑600-61年度①	1987
81	一畑610年度①	1989
82	平成5年度①	1998

「盛岡地区道路跡」

No.	書名(略)	年
84	平成5-12年度調査報告書①	2007
85	平成5-12年度調査報告書②	2009

「盛岡市内遺跡発見調査報告書(〇〇年度)」

No.	書名(略)	年
83	平成10年度飯岡町遺跡報告書①	1999
84	平成11年度飯岡町遺跡報告書①	2000
85	平成12年度飯岡町遺跡報告書①	2001
86	平成13年度飯岡町遺跡報告書①	2002
87	平成15年度、16年度飯岡町遺跡報告書①	2005
88	平成17年度飯岡町遺跡報告書①	2006
89	平成18・19年度飯岡町遺跡報告書①	2008

\*83の書名は、「盛岡遺跡報告書」

「盛岡地区〇〇年度飯岡町遺跡報告書」

No.	書名(略)	年
90	平成8・9・10年度①	1999
91	平成11-14年度①	2003
92	平成15-16年度①	2005
93	平成17-18年度①	2008

### Ⅲ 野外調査と室内整理の方法

#### 1 野外調査の方法

##### (1) グリッドの設定 (第6・7図)

盛岡南新都市土地区画整理事業に関わる調査では、盛岡市教育委員会の方針に準じて平面直角座標第X系(日本測地系)を座標変換した調査座標を用いてグリッドの設定を行っている。具体的には本遺跡が所在する太田地区の調査座標点X=-35,000,000、Y=26,000,000を基点として一辺50×50mの正方形グリッド(大グリッド)を設定し、さらにそれを25等分して、2×2mの小グリッドとしている。グリッドの呼称は、北西隅を基点として大グリッドは南方向へ1~25、東方向へA~Y、小グリッドは南方向へ1~25、東方向へa~yとしており、小グリッドの呼称は「1A5b」などとなる。なお、現地においては以下の基準点及び補点を打設し、それらをもとに調査区全体をカバーできるようにグリッドの設定を行った。

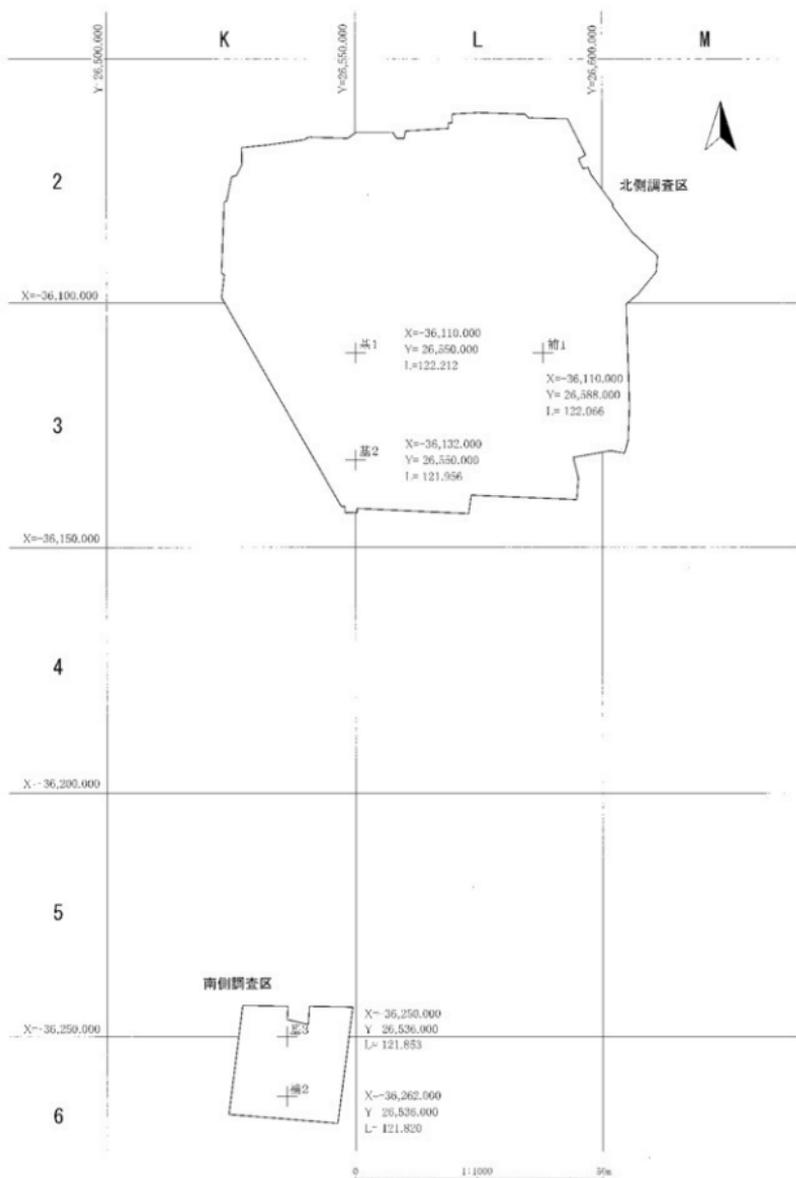
点名	グリッド名	X	Y	標高 (m)
基1	3L6a	-36,110,000	26,550,000	122.212
		(-35,802.3128)	(26,250.4054)	
基2	3L17a	-36,132,000	26,550,000	121.956
		(-35,824.3131)	26,250.4052	
基3	6K1s	-36,250,000	26,536,000	121.853
		(-35,942.3147)	(26,236.4043)	
補1	3L6 t	-36,110,000	26,588,000	122.066
		(-35,802.3130)	(26,288.4045)	
補2	6K7s	-36,262,000	26,536,000	121.820
		(-35,954.3146)	(26,236.4042)	

\* ( )内は世界測地系

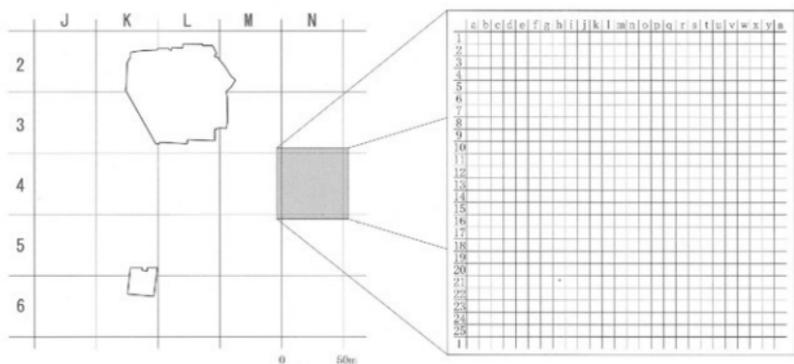
##### (2) 精査の方法及び遺構の記録

調査区内には北端に自動車整備工場のコンクリートのタタキがあり、先に撤去を行う必要があることから北側調査区は南半から調査を開始することになった。まず調査区内の雑物撤去を行い、数か所にトレンチを設定して、人力で試掘を行った。試掘の結果、東側は碎石による固い盛土があり、人力で撤去するのは困難であることと調査の迅速化と人力掘削量の軽減を図るため、調査員監督のもと、重機(バックホー)によってI層を掘削した。そのうち、II層の残存する調査区東側と西側ではII層で遺構検出を行い、遺構が認められない箇所についてはII層も重機によって掘削した。遺構検出はII層及びIII~IV層の2回にわたり行っているが、調査区中央については表土下のIV層もしくは礫層で検出している。また、南側調査区についても試掘を行いI層の堆積状況を確認後、重機による表土掘削をして遺構の検出を行った。

遺構の掘り下げは住居跡、堅穴状遺構では4分法で、その他の土坑、柱穴状土坑では2分法で、土層観察を行いながら進めた。遺構のプランや新旧関係が不明な場合は適宜サブトレンチを設定して層



第6図 グリッド配置図



第7図 グリッド概念図

位確認を行っている。なお、竪穴住居跡では、ベルトを境界とした区画設定を行っており、その区画ごとに層位を付して遺物の取り上げを行っている。区画の名称は北東隅からQ1～Q4とした（凡例図2参照）。また、出土位置を記録した遺物は遺構ごとに土器は土1～、石器、石製品は石1～、鉄製品は鉄1～のように取り上げ番号を付している。

遺構は、完掘時、土層断面、遺物出土状況には写真撮影と実測図の作成を行っている。重複している遺構には、検出時の状況も写真撮影を行い、畝間状遺構についても検出時に写真撮影及び実測を行った。遺構の平面図は遺構実測支援システム「遺構くん」(株式会社CUBIC製)を用いた。打設した基1～基3、補1、補2のいずれかの点に光波測距機を据え、他の点を視準して遺構の測定の座標値を記録した。断面図については、水平に張った糸を基準として手実測によって作成した。

写真撮影は、デジタル一眼レフカメラ1台の他にモノクロフィルムにより6×7判カメラ1台を使用した。デジタルカメラはRAWモードで撮影している。調査区の航空写真については(株)東方航空に依頼し、北側調査区南半の調査終了時と北半調査終了時に各1回撮影した。

### (3) 遺構の命名

遺構の名称は、盛岡市教育委員会で使用している略号に準じて付し、遺跡全体で通し番号としている。野外調査時には、種別の変更や欠番を避けるために○号住、○号土坑などといった仮遺構名とした。室内整理全般(遺物への出土地点の注記を含む)も仮遺構名で行ったが、報告段階で略号に振り替えている。仮遺構名と変更した略号の対応関係は第4表の通りである。なお、収納にあたっては図面、写真類は報告名と対応させているが、遺物の注記は仮遺構名のままである。また、第16次調査においてRA169とされた遺構は今回の調査で土坑であることが判明しRD490と変更した。

### (4) 広報・普及啓発活動

平成22年7月10日 現地説明会(54名参加)

平成22年8月5日 教職経験者10年研修講座社会体験研修(1名参加)

第4表 遺構名対照表

壁穴住居跡	
報告名	旧遺構名
RA128	RA128
RA187	15号住
RA188	14号住
RA189	13号住
RA190	12号住
RA191	16号住
RA192	7号住
RA193	1号住
RA194	3号住
RA195	4号住
RA196	10号住
RA197	5号住
RA198	6号住
RA199	2号住
RA200	9号住
RA201	8号住

竪立柱建物跡	
報告名	旧遺構名
RF9128	1号竪立
RF9129	2号竪立
RF9127	3号竪立
RF9126	4号竪立
RF9133	5号竪立
RF9132	6号竪立
RF9130	7号竪立
RF9131	9号竪立

柱穴列	
報告名	旧遺構名
RC005	2号柱穴列
RC006	PP125、89、97
RC007	1号柱穴列
RC008	8号竪立

土坑	
報告名	旧遺構名
RD481	26号土坑
RD482	25号土坑
RD483	23号土坑
RD484	22号土坑
RD485	21号土坑
RD486	20号土坑
RD487	19号土坑
RD488	7号土坑
RD489	8号土坑
RD490*	12号土坑
* 第16次調査のRA169を参照	
RD491	15号土坑
RD492	2号土坑
RD493	18号土坑
RD494	6号土坑
RD495	5号土坑
RD496	13号土坑
RD497	9号土坑
RD498	11号土坑
RD499	3号土坑
RD500	4号土坑
RD501	24号土坑
RD502a	17号土坑a
RD502b	17号土坑b
RD503	14号土坑
RD504	10号土坑
RD505	2号土坑
RD506	1号土坑
RD507	16号土坑

基穴状遺構	
報告名	旧遺構名
RE014	11号住
RE013	2号壁穴状遺構
RE01	1号壁穴状遺構
焼土遺構	
RF012	1号焼土
RF1へ	2号焼土

溝跡	
報告名	旧遺構名
RG058	2号溝跡
RG083	1号溝跡
RG084	7号溝跡
RG085	3号溝跡
RG086	4号溝跡
RG087	5号溝跡
RG088	6号溝跡
RG069	1号溝跡

その他の遺構	
報告名	旧遺構名
RZ019	北端石状遺構
RZ020	2号石状遺構
RZ021	1号無形遺構
RZ022	1号石路状遺構
RZ023	2号石路状遺構

## 2 室内整理

### (1) 遺物の整理

今回の調査で出土した遺物は、野外調査の雨天時や室内整理期間に水洗を行った。

その後、土器については、土師器、須恵器、縄文土器に分け、袋ごとに番号を付して、重量を計測したうえで手書きで注記を行った。接合は、土師器については遺構内と少なくとも隣接する遺構同士で行った。また須恵器については、器種ごとに分類し、今次調査の遺構間、つぎに可能な限りにおいて過去の調査の遺構間で行っている。過去の調査の遺構間では、掲載遺物については、細谷地遺跡24・25次、19・20次、18次・16・17次、15次、13・14次、9・10次、8次、4・5次、向中野館遺跡12・13次、10・11次で、不掲載遺物については、細谷地遺跡16・17次・18次・4・5次、向中野館遺跡12・13次、10・11次について行った。土器は原則として、口径と底径あるいはそのいずれかが4分の1以上あるものを掲載したが、破片であっても遺構内に他に土器がない場合、また、他に例のない種類のものについては掲載している。また、墨書やヘラ書きのあるものについては、細片であっても掲載した。これらは必要に応じ石膏で復元後、実測、底部等の採拓、石膏部分の着色、写真撮影、実測図のトレースを行い、図版を作成した。なお、掲載した遺物については石膏復元前に重量を計測して一覧表に示している。

礫石器は、表面観察をし、擦痕、敲打痕のあるものを登録し、報告した。実測、計測、写真撮影、実測図のトレースを行った。

鉄製品は、明らかに現代のものと考えられるものを除いたうえで登録した。簡単に泥を落とした後、

ソフトエックス線撮影を行い、元の形状を確認した。そのうえで鋳を落とし、実測・計測・トレース・写真撮影を行った。その後、岩手県立博物館に委託し、保存処理を行った。

土製品は全点掲載し、実測・計測・トレース・写真撮影、古銭は採拓し、写真撮影、計測を行った。鉄滓及び還元部分のある粘土塊については、写真撮影、計測を行った。

炭化材は、遺構内出土のもので、残存状態が良いものについて、古代の森研究舎に委託して、樹種同定を行った（付編1）。

火山灰は、遺構内出土のものについて、数点を選別し、弘前大学柴正敏教授に依頼して火山ガラスの分析を行った（付編2）。

以上の工程を経て、遺構図版、遺物写真図版を作成した。図版中の表現は凡例図1のとおりである。

## (2) 遺構実測図の整理

掲載した遺構図版は、野外調査で作成した平面実測図データと断面図を照合して、必要に応じて第二原図（修正図）を作成した。その後、「遺構くん」及びイラストレータを使用してトレースと版下作製を行っている。整理が終了した実測原図、第二原図には通し番号を付し、台帳を作成した後に収納した。実測図データについては、Ruinstc Documentの遺構全体図ファイル及びこれのEPSデータ、SITファイル、を本センターのハードディスクに保管したほか、入稿原稿のEPSデータをDVDにて保管し、SITファイルをプリントしたものについても保管している。

なお、遺構図版中の表現方法は凡例図2のとおりである。

## (3) 写真類の整理

遺構写真は、6×7判のモノクロフィルムはネガ、コンタクトプリントともにアルバムに整理し、写真台帳を作成した。デジタルカメラによって撮影したデータは小フォルダに遺構ごとに分類し、台帳を作成して、本センターのハードディスクにデータで保管している。なお、入稿原稿についてはJPEGの350dpiのデータに変換し、DVDにて保管している。

遺物写真は、本センターの写真技師によりデジタルカメラ（キヤノン製一眼レフタイプ、1,280万画素）で撮影した。JPEGで撮影している。データは本センターのハードディスクに保管している。なお、入稿原稿については、DVDにて保管している。

（金子）

## 凡 例

- 1 本報告書に掲載した遺構図の方位は平面直角座標第X系の座標北を、遺構図の水糸レベルは海拔高度を示す。
- 2 遺跡内に設けた基準点の成果は、日本測地系における値である。
- 3 遺構図の縮尺は、住居跡、掘立柱建物跡、窪地状遺構、柱穴列、畝間状遺構が1/50、土坑、焼土遺構が1/40、柱穴状土坑が1/80である。溝跡、堀跡、道路状遺構は遺構に応じ変更し、図中に示した。なお、土器の出土状況、接合状況など必要に応じ作成したが、任意縮尺とした。
- 4 層名は基本層序にはローマ数字を、遺構の埋上にはアラビア数字を用いた。
- 5 遺構図版中、遺物に付された番号は（ ）内が取り上げ時の番号、（ ）のないものが掲載番号である。
- 6 土層の色調は、農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を使用した。
- 7 遺物実測図の縮尺は土器1/3、石器1/3、1/4、土製品1/2、1/1、陶磁器1/3、鉄製品及び銭貨1/2である。縮尺が一定でないものについては図版中に示した。
- 8 遺物写真の縮尺は、遺物実測図の縮尺にはば準じている。

## IV 検出された遺構

### 1 調査の概要

細谷地遺跡第26次調査では、奈良～平安時代の集落跡、中世の城館跡、近世屋敷の一部を調査した。遺構総数は、竪穴住居跡16棟、掘立柱建物跡8棟、柱穴列4状、土坑27基、竪穴状遺構2基、焼土遺構1基、溝跡8条、堀跡1条、畝状遺構3箇所、道路状遺構2条で、柱列1条、竪穴状遺構1基を除いて、ほとんどが北側の調査区から検出された(第8～11図、写真図版4)。

今回調査区は、北側調査区の現状が自動車整備工場であり、工場建設に伴う攪乱のほか、近代における水田造成などで、大きく攪乱を受けている。南側も宅地で植栽痕などの攪乱があり、その面積は総面積の約3分の1の2,206㎡に上る。これらの攪乱により、多くの遺構が失われた可能性が高い。特に、調査区北東の近代における水田造成部分は1,000㎡を超えており、周辺の遺構検出状況から近世以降の屋敷跡や平安時代の竪穴住居跡が分布していたものと考えられる。また、北端から東西方向に北隣の向中野館遺跡の主郭を区画する堀跡が検出されたが、この堀は、近年まで用水路として使用されており、東端は大きく削平されていた。

北側調査区は表土を除去すると、北西から南東に向かって礫層が露出する部分が斜めに延びている。これは自然堤防の頂部と思われ、竪穴住居跡、古代の土坑はこの部分とその周辺に、古代の掘立柱建物跡は頂部を避けて、両脇に分布している。

古代の溝跡は調査区東側に南北に平行して2条検出されている。これらは第13次調査、16次調査において南側の延長部分が検出されており、ともに平行して西側に屈曲することがわかっている。また、近世以降の道路跡RZ022も第13次調査、第9次調査で東の延長部分が検出されている。

### 2 竪穴住居跡

#### RA128竪穴住居跡(第12図、写真図版5)

<位置・検出状況>調査区南東の調査区際3M11cグリッドに位置する。本住居跡は平成18年の第13次調査、平成19年の第16次調査において、ほとんどを調査済みであり、今回はカマド煙出しのみの検出である。検出面はIV層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>過去の調査で、隅丸の長方形で辺の長さが4.16×3.76m、壁高は26cmであることがわかっている。今回の調査で、煙道の長さが1.5mであることがわかった。床面積は12.4㎡、主軸方向はN-70°-Wである。

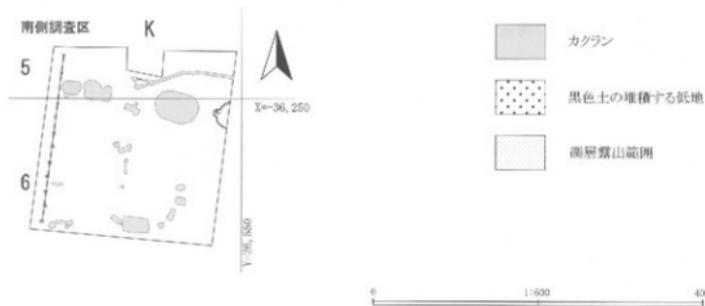
<埋土>煙出しの埋土は5層に細分され、暗褐色土～黒褐色土が主体である。最下層にはカーボン、焼土小粒を含む。自然堆積と思われる。

<カマド>北西壁のほぼ中央に位置する。カマド本体の袖は地山を削り出し、暗褐色～黒褐色土を貼って構築している。今回調査した煙出しと過去に調査した煙道の埋土の状況からは、本来列り貫き式の煙道が崩落したような様相が見られる。焼土はよく発達し、最大厚は5cmである。

<柱穴>検出していない。

<付属施設>ない。

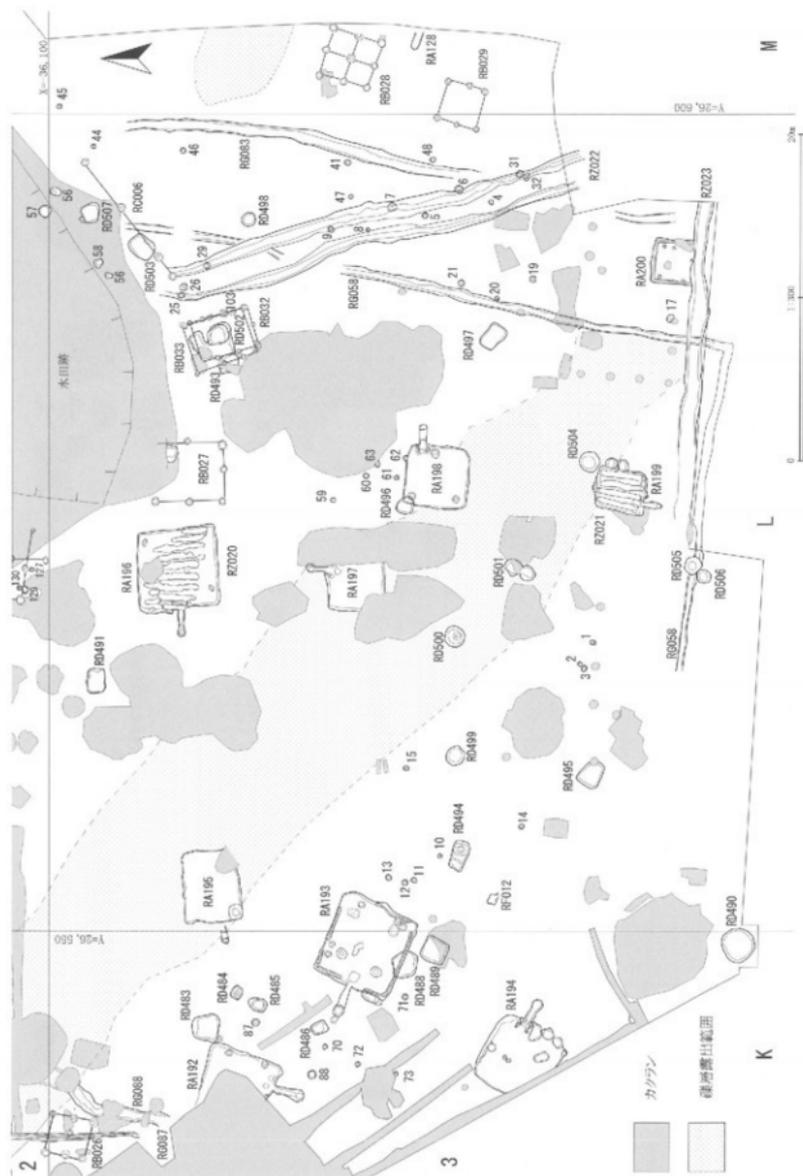
<遺物>今回は出土しなかったが、過去の調査で土師器甕、内黒土師器の坏破片、須恵器破片が出土



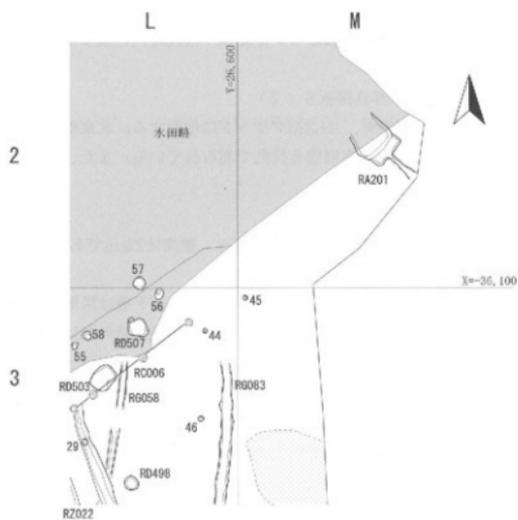
第8図 遺構配置図(全体図)



第9図 遺構配置図(部分1)



第10図 遺構配置図(部分2)



第11図 遺構配置図 (部分3)

している。

<時期・性格>過去に出土した土器の特徴から7世紀末～奈良時代に属する。

#### RA187竪穴住居跡（第13・14図、写真図版6・7）

<位置・検出状況>調査区のはほぼ中央、2L22dグリッドに位置する。北東壁の北半を深い攪乱によって失っている。カマド煙り出しの端、南東壁も攪乱で削られている。また、埋土上面も攪乱層でおおわれていた。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>隅丸方形で、辺の長さが3.94×3.98m、壁高は22cmである。床面積は13.0㎡以上、主軸方向はN-48°-Wである。

<埋土>7層に細分されるが、上層はTo-aを含む黒色シルト、下層は黒褐～暗褐色砂質シルトで、焼土や炭を多く含む。自然堆積と思われる。炭化材は、床面中央付近の炭は埋土下位、壁寄りが埋土中位～上層から検出されている。また、二次堆積の焼土も中央付近では埋土中位から検出されるが、壁寄りでは埋土上層から検出された。

<床面・掘り方・貼り床>床面は平坦でしまっているが、南東よりがやや深い。貼り床があり、住居の西半分は掘り方がごく浅い。貼り床には暗褐色シルトブロックとIV層起源の褐色シルトが珪に混合した土を敷設している。

<壁・壁溝>壁は外傾して立ち上がる。壁溝はない。

<カマド>北西壁中央より若干南寄り位置する。袖にはV層褐色砂質シルトの削り出しが残っていた。焼土は底面～袖にかけて不整形に形成され、厚さは最大で8cmと良く発達している。煙り出しは底部がごく緩やかに下降するタイプで、V層起源の砂質土の堆積状況から削り貫き式であった可能性が高い。

<柱穴>カマド両側の壁際から小柱穴が2個検出された。深さはそれぞれ19cm、13cmである。

<付属施設>北東壁際から土坑が1基検出されている。径1.2×0.6m、深さ10cmである。

<遺物>カマド脇から土師器壺2個が、まとめて出土した。土器の総量は土師器が2,564g、須恵器が97.9g、このほか流れ込みと思われる陶磁器が42.5gある。また、181、182の鉄製品が埋土から出土している。

<時期・性格>出土遺物から古墳時代末～奈良時代に属すると考えられる。また、炭化材、焼土の検出状況から、焼失住居と思われるが、炭化材の量がそれほど多くないことから失火によるものとは思わず、廃絶後の焼失と思われる。

#### RA188竪穴住居跡（第14～16図、写真図版8・9）

<位置・検出状況>調査区北西の2K15sグリッドに位置する。周辺は事務所の基礎などにより攪乱を受けている。特に南半は周囲も含め上面が木の根などで広く攪乱されており、小礫を含む汚れた土壌を取り除いて、削平されたIV層でプランを確認した。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>北東部がやや膨らむ隅丸長方形である。辺の長さは3.91×4.10mで、壁高は23cmである。床面積は13.3㎡、主軸方向はN-88°-W（ただし古い2号カマドによる）である。

<埋土>壁際と最上層を除いて黄褐色土と黒褐色土が珪に混入した埋土が主体である。廃絶後にある程度時間をおいて、埋め戻されたものと考えられる。最上層は自然堆積であろう。南東側の埋土中か

ら焼土ブロックがまとまって検出されている。

<床面・掘り方・貼り床> 固く締まり、凹凸がある。黄褐色の砂質シルトと黒褐色シルトが斑に混合した土で貼り床が施される。掘り方は南西側と、東端が深く、凹凸が激しい。また、土坑1の南側と北西側のカマド2の周辺は、貼り床に黄褐色土上体の土も用いられており、他と異なる。

<壁・壁溝> 壁はやや内湾気味に立ち上がる。壁溝はない。

<カマド> 新旧2基検出された。新しい方の1号カマドは東壁の北寄りに位置する。V層起源の濁った砂質土で袖を構築する。焼土の厚さは約5cmである。煙道は住居の壁から1.1mで、煙り出し部分では下場がオーバーハングしている。上面が削られているもよう、埋土の状況からは掘り込み式か、削り貫き式か不明である。

古い方の2号カマドは西壁の中央からやや北寄りに位置する。袖は残っていない。煙道と煙り出しの上面は建物基礎の溝状の攪乱で削られている。煙道の長さは住居壁から1.16mで、削り貫き式である。燃焼部の焼土は北半が攪乱により削られている。残存部分の焼土の厚さは7cmである。

<柱穴> 北壁寄りから2個、南半床面から2個検出された。

<付属施設> 1号カマドの南側脇に土坑1があるが、攪乱でほぼ半分が失われている。残存する深さは床面から22cmである。

土坑1の西側から床下土坑(土坑2)を検出した。径は0.72×0.67m、深さ23cmである。焼土粒、黄褐色土粒を含む黒褐色シルトで埋められており、上層には貼り床が施されていた。これは、古い柱穴の可能性もある。

南側床面中央付近から現地製の焼土が検出されている。23×16cmの楕円形で、焼土の厚さは0.5cmと薄い。

<遺物> 土器の総量は土師器2,894.8g、須恵器686.9gで、このほか流れ込みと思われる陶磁器が5.1gある。埋土からカマドに使用したとみられる礫が4点出土した。すべて被熱しており、1号カマドの煙出し埋土から出土した礫にはターゲが付着していた。検出面から183の薄い鉄の剥片が出土しているが、真に本住居跡に伴うものか不明である。

<時期・性格> 出土遺物、住居の構造から平安時代で9世紀中葉ごろに属する。

#### RA189竪穴住居跡(第16・17図、写真図版10・11)

<位置・検出状況> 調査区北西の2K18pグリッドに位置する。攪乱によって西壁の一部と西カマド煙道を削られ、東壁の一部と東カマドの煙出し、南壁の一部が失われている。

<重複関係> RG085溝跡及びRC008柱列跡のPP89、PP97に切られている。RG085溝跡の埋土も本遺構の埋土とよく似ており、検出面では区別できなかったが、埋土を中位ぐらいまで掘り込んだ段階で、溝跡に切られていることがわかった。

<規模・平面形状> 北壁の両端が突出した隅丸長方形を呈する。辺の長さは3.91×4.10m、壁高は20cmである。床面積は13.2㎡で、主軸方向はN-97°-Eである(古い2号カマドによる)。

<埋土> 上面にTo-a粒を含む黒色土が主体である。混入物はあまりない。最下層も同様である。自然堆積である。南西側の一部の埋土上層に焼土の混入する部分がある。

<床面・掘り方・貼り床> 床面は平坦で、良く締まっている。黒褐色シルトブロックを30%含むにぶい黄褐色シルトによって、貼り床が施されている。掘り方は深くない全体に一様に凹凸があるが、東壁際の土坑2の南側が他よりも少し深く、底に黒褐色シルトが貼られる。床面中央に17×13cm、厚さ3cmの角礫が床面と同じ高さで埋められている。周囲に他の施設はない。

<壁・壁溝>壁は外傾して立ち上がる。壁溝はない。

<カマド>新旧2基のカマドがある。新しい1号カマドは西壁の中央よりやや南側に位置する。燃焼部の焼土は確認されなかったが、煙道入口の壁面に焼土が形成されている。厚さは4cm程度である。袖は右側の一部を除いて、ほとんど残存していない。V層の上に暗褐色シルトを貼って構築している。煙道は壁から1.27mの長さである。攪乱によって削平されているため、掘り込み式か、削り貫き式か明らかでない。

古い2号カマドは東壁の中央よりやや北側に位置する。袖は残存していない。燃焼部はいったん掘り込まれて除去され、埋め戻されている。袖の構築際の様子とみられる部分に左右に2箇所、焼土が形成されている。煙出しは削平されて残っていない。煙道は底面が徐々に煙出しに向かって降下する。煙道も上面が削られており、掘り込み式か、削り貫き式か不明である。

<柱穴>検出されなかった。

<付属施設>土坑が5基、焼土が1か所検出された。

土坑1は北壁の西端から検出された。壁面が張り出している。底面は住居床面よりも5cm程高く、棚状である。径は0.94×0.41mである。

2号カマドの南側に土坑2がある。本上坑は壁に若干張り出すように掘られており、径は0.83×0.80mである。深さは床面から18cmである。埋土は板状構造の焼土を含む黒褐色土、V層起源の黄褐色砂を含む黒色～暗褐色シルトで、埋め戻しとみられる。埋土中からカマド構築材とみられる25×10×15cmぐらいの垂角礫、掘りこぼし大の平たい礫、28の土器が出土しており、2号カマドの構築材を廃棄して埋めた可能性がある。

2号カマドの北側に土坑3がある。35×34cm、深さ8cmと小規模で、埋土に焼土が混入する。埋め戻されているようである。

1号カマドの北側に土坑4がある。径は53×51cm、深さ15cmである。埋土中から礫や26、27などの土器が多く出土している。

土坑5は1号カマドの南側から検出された。攪乱によって西側が削られており、径は南北で0.53m、深さ13cmである。炭粒や焼土を含むが、貼り床に東側が切られており、住居使用の最終段階には埋め戻されておいた可能性がある。

北壁際東寄り、RG085溝跡と重複する部分から現地性の焼土が検出された。壁が北側に向かって若干張り出しており、古いカマド等の可能性はないかと思っただが、煙道などの施設は見つからなかった。

<遺物>埋土、土坑内、カマド内、床直状から内黒土師器杯、土師器杯、土師器甕、須恵器甕類が出土している。土器の総量は土師器2,579.2g、須恵器47.6gである。また、埋土から184の鉄片状の鉄製品、検出面から185の円盤状鉄製品が出土しているが、185は真に本住居跡に伴うものか明らかでない。

<時期・性格>平安時代で9世紀後半～10世紀初頭に属する。

#### RA190竪穴住居跡 (第18図、写真図版12・13)

<位置・検出状況>北側調査区北西よりの2K20xグリッド付近に位置する。周辺は削平され、浅い攪乱でおおわれており、攪乱層を除去したところIV層で検出した。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>2.80×2.86mの方形で、北東隅に土坑があるため張り出している。壁高は20cm、床面積は6.9㎡である。主軸方向はN-98°-Eである。

＜埋土＞粘性に富む黒褐色土が主体で、4層に細分される。東の壁際には黒色土、焼土粒を含んだ黒褐色土が、西側の壁際、カマド前には床面上に焼土粒が認められる。また、土坑1の内部、床から15cmの高さに混入物の少ない焼土が堆積していた。全体に自然堆積の様相を呈する。

＜床面・掘り方・貼り床＞平坦で締りがあり、固い。特に硬化している部分はカマド前と南半の壁際を除いた部分である。掘り方は中央がやや浅く、四隅が若干深い。北西隅のみ特に深い部分がある。貼り床は黒褐色土の小粒～径7cmのブロックを多く含む褐色の砂質シルトである。

＜壁・壁溝＞壁はやや外反気味に立ち上がる。壁溝はない。

＜カマド＞東壁の北寄りに位置する。袖が残存しており、IV層起源の黄褐色土粒を含む砂質シルトで構築されている。芯材として使われたとみられる扁平な円礫が左袖内から検出された。燃焼部には焼土が円形に形成されている。焼土の厚さは4cmである。燃焼部奥の底直上から支脚の一部と思われる扁平な円礫と、その礫に重なった状態で角柱形の亜角礫が出土している。この亜角礫は焼けており、天井等に芯材として使用されたものと思われる。煙道は列り貫き式で、底部は燃焼部からいったん上昇し、煙出しに向けて徐々に降下している。

＜柱穴＞検出されなかった。

＜付属施設＞北東隅に張り出しがある。カマドの脇に位置し、貯蔵穴としての用途が考えられるので、便宜上土坑1として記載したが、底面と床との高低差はない。

＜遺物＞埋土中～床面から多くの炭化材が出土している。隅や壁際から床中央に向けて放射状に検出された炭化材が多く、壁際から壁に平行して検出されたものが若干ある。それらのうち6点を樹種同定したところ、モクレン属3点、ヌルデ1点、ハシバミ属1点、カバノキ属1点との結果であった。土器はカマド中、カマド南側、土坑1内の埋土中から出土した。総量は土器2,923.8g、須恵器102g、このほか流れ込みとみられる陶磁器小片1.0gである。また、カマドの南側の埋土中から礫も多く出土している。

＜時期・性格＞出土した炭化材や焼土から焼失住居と考えられる。出土した土器の特徴から、平安時代で9世紀中葉から10世紀初頭に属すると考えられる。

#### RA191 壁穴住居跡 (第19図、写真図版14・15)

＜位置・検出状況＞調査区中央の2L22gグリッドに位置する。周辺は植栽痕や工場稼働時の攪乱が多く、本住居跡は西の隅とカマド煙道を攪乱によって削平されている。検出面はIV層である。

＜重複関係＞ない。

＜規模・平面形状＞北東壁の中央に張り出しを持つ隅丸方形で、辺の長さは2.17×1.96mである。壁高は32cm、床面積は2.9㎡で、今回の調査で最も小型である。主軸方向はN-109°-Eである。

＜埋土＞IV～V層起源の黄褐色シルト粒、砂質シルト粒を含む黒褐色土、暗褐色土が主体で、6層に細分される。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面は平坦で締りあり、固い。掘り方は北西側と南の隅が極端に深い。貼り床は粘性のある暗褐色シルトによる。

＜壁・壁溝＞壁は外傾～内湾気味に立ち上がる。壁溝はない。

＜カマド＞東南壁の北端に位置する。袖や煙道の入口に使用されたとみられる礫が残存する。しかし、袖を構築した土はほとんど残っていない。燃焼部には35×30cmの楕円形に焼土が形成される。焼土は良く締達しており、厚さは約7cmである。煙道の底は燃焼部から段となって上がり、水平に延びて廻り出しに至り、下がる。この部分は攪乱によって削られており、列り貫き式か、掘り込み式かは不

明である。

<柱穴>床面中央に1個検出した。南東方向に斜めに掘られており、南東側の壁はオーバーハングしている。深さは38cmである。柱の痕跡も検出されており、柱穴内の土壌は締りのない黒褐色土が主体である。

<付属施設>北西壁の中央に奥行き30cmほどの張り出しがある。カマドの脇にあたり、貯蔵場所として使用したものか。底面は床面と同じ標高である。

<遺物>カマドとその周辺、南隅、煙出しから土師器の坏、小型の甕、甕が出土している。38はRA198の埋土下層より出土した破片と接合した。土器の総量は土師器のみで、846.5gである。柱穴1の周辺床面から礫が2点出土した。

<時期・性格>出土した土器から平安時代で9世紀後葉から10世紀前半に属すると考えられる。

#### RA192竪穴住居跡（第20・21図、写真図版16・17）

<位置・検出状況>北側調査区西側の3K5uグリッド付近に位置する。西側を深い攪乱で抉られ、本来の2分の1ほどしか残存していないものと推測される。南壁と煙道の一部を植栽痕によって削られている。検出面はIV層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>方形を基調としていると思われる。攪乱を受けていない東の壁は、長さ4.63m、北壁は破壊されているが、貼り床の残存値が4.0mである。壁高は29cmである。主軸方向はN-163°-Wである。

<埋土>混入物のない黒褐色土で、粘性により2層に大別される。壁際には壁の崩壊土が混入する。自然堆積の様相を呈する。

<床面・掘り方・貼り床>床は平坦で、おおむね締りあり固い。掘り方は深淺はあまりないが、中央がやや浅い。貼り床は黒褐色土粒を含む褐色の砂質シルトによる。

<壁・壁溝>壁はやや外反気味に立ち上がる。壁溝はない。

<カマド>南壁の東端に位置する。天井は矢われ、袖も痕跡が残っているにすぎない。燃焼部は30×30cmの楕円形に焼土が形成されている。焼土は厚さ3cmほどである。煙道は燃焼部からはほぼ水平に延び、煙り出しに至って10cm下がる。上面が割平されているが、埋土3層はV層の崩壊土と思われる。天井が落ちたものと推測されることから、刳り貫き式であった可能性が高い。

<柱穴>東壁際から2個検出された。いずれも埋土は黒色の砂質シルトである。柱穴1は深さ28cm、径10cmの柱痕跡が検出された。柱穴2は深さ34cm、柱痕跡は径13cmである。

<付属施設>ない。

<遺物>内黒土師器坏、土師器坏、土師器甕、土師器瓶、須恵器壺類が出土している。48の甕、51の須恵器壺はRD188出土の破片と接合したものである。また、50の須恵器広口壺はRA193出土の破片と接合した。埋土上層から釘かと思われる186の鉄製品が出土した。特筆すべき遺物として、Q3の埋土上層から、緑釉陶器皿破片が出土している。また、40の土師器坏は複数の文字が記された墨書土器である。土器の総量は土師器1.835.2g、須恵器386.7gで、緑釉陶器が3.8gである。

<時期・性格>出土遺物から9世紀中葉～後葉ぐらいか。また、遺構としては特に変わったところはないが、緑釉陶器や土師器瓶が出土していることが注目される。

## RA193竪穴住居跡 (第22・23図、写真図版18・19)

<位置・検出状況>調査区南東の3K9xグリッドに位置する。IV層上面で、To-aテフラを含む黒褐色の広がりを検出した。

<重複関係>南西壁がRD488土坑に裁られる。北西壁がRD487を載る。

<規模・平面形状>南東壁の中央が若干張り出した長方形で、辺の長さは5.59×4.90m、壁高は30cmで、床面積は23.5㎡、今回の調査で最も大型の住居跡である。主軸方向はN-67°-Wである。

<埋土>上層は炭を若干含む黒色土、中～下層はIV層起源の黄褐色土粒、炭、小～極大粒のTo-aテフラを含む黒褐～黒色土である。自然堆積と考えられる。

<床面・掘り方・貼り床>床面は平坦で、固く締まる。掘り方は細かい凹凸があり、一様である。貼り床はIV層起源の黄褐色土粒を斑に含む黒褐色土による。

<壁・壁溝>外傾～外反して立ち上がる。南東隅、半島壁の北寄り、北東壁の小穴1と2の間を除いて壁溝が周る。壁溝の深さは7cm程度である。また、南東壁の中央が若干張り出しており、壁溝も同じように湾曲している。

<カマド>北西壁中央に位置する。袖は失われている。燃焼部には58×62cmの不整形の焼土が形成されている。焼土は良く発達し、厚さ10cmである。煙道の底部は燃焼部から煙り出しに向かって徐々に下降する。煙り出しの奥の壁には扁平な礫が2個据えられている。この礫の据え方と思われる掘り込みも検出されている。埋土中にはIV層の崩落土があり、天井が崩落したものと考えられることから、削り貫き式であろう。To-aテフラはこの崩落土より上層に粒状に混入している。

<柱穴>7個検出された。うち柱穴5と柱穴6は埋め戻されて、埋土上面が硬化した床となっている。古い柱穴と思われる。この2個には柱痕跡はない。柱配置は柱穴1～4の長方形である。この4個からはすべて柱痕跡と思われる締りのない層が確認されている。柱穴7は深さ49cmで、南側の壁がややオーバーハングしており、5、6と同様埋め戻されている。

<付属施設>床面ほぼ中央に0.93×0.50mの不整形の焼土が形成されている。現地性と思われ、厚さ4cmである。この焼土の周辺からは、鍛造剥片等は出土していない。北東壁の北寄り壁際から小穴が2個検出された。最大径36～40cm、深さ7～11cmの浅い穴で、埋土はTo-aテフラの小粒を含む黒色土で、自然堆積と考えられる。

<遺物>埋土、床面から内黒土師器杯、土師器杯、両面黒色の高台付杯、土師器壺、須恵器壺類、壺類が出土した。特にカマドの右わきの壁際からまとまって出土している。この場所は本来カマドの袖の場所であるが、これらの土器が軸の芯材として使用されたものか、廃絶後混入したものと判然としなかった。なお、50の須恵器広口壺はRA192から出土した破片と接合したものである。埋土、床直上等併せて土師器5695.7g、須恵器601.8g、流れ込みと思われる陶磁器5.8g、縄文土器27.5gが出土した。

<時期・性格>出土した土器から、平安時代の9世紀後葉～10世紀初頭と位置付けられる。

## RA194竪穴住居跡 (第24～26図、写真図版20・21)

<位置・検出状況>北側調査区南西の3K13aグリッドに位置する。西側の隅が攪乱に切られ、調査区外に延びている。検出面はII層で、炭や焼土を若干含む黒褐色シルトの広がりとして、検出した。埋土の一部が攪乱により床面まで削られていた。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>隅丸方形と推定される。辺の長さは4.55×4.54m、壁高は46cmである。主軸方向はN-121°-Eである。

<埋土>Ⅳ層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色土で、4層に細分される。自然堆積と考えられる。カマド前の床上には黒色土層が薄く堆積し、その上に二次堆積の焼土がブロック状に堆積する。

<床面・掘り方・貼り床>平坦で固く締まる。掘り方は細かい凹凸が一様に広がる。貼り床はⅣ層起源の褐色土を裏に含む黒褐色砂質シルトによる。

<壁・壁溝>内湾気味に立ち上がる。北東壁の一部に壁溝があるが、土坑3によって截られており、時期差があると思われる。

<カマド>南東壁の北寄りに位置する。袖と芯材の礫が残存している。袖はⅣ～Ⅴ層起源の褐～暗褐色の砂質シルトによって構築されている。天井は残っていないが、芯材に使用されたと考えられる被熱した礫がカマド崩壊土上から出土した。燃烧部に焼土は残っていない。煙道入口の壁際両側に礫が据えられている。煙道底部は燃烧部からほぼ水平に延び、煙り出しに至る。煙り出しの埋土は焼土やⅣ層起源の黄褐色土を含む暗褐～黒褐色土で、堆積状況から掘り込み式と考えられる。

<柱穴>床面中央からやや北寄りから1個検出した。大きさ、深さから柱穴となりうるか不明である。径は27×21cm、深さ16cmで、埋土はⅣ層起源の褐色土小粒5%、焼土中粒を3%含む締りのない黒褐色土である。

<付属施設>土坑が6基検出された。南東壁のカマド脇に、土坑4、以下並んで土坑1、土坑2が壁から張り出し気味に掘られている。南の隅に土坑5がある。土坑4は床面から11cmほど掘り込まれており、検出面や埋土中から二次堆積の焼土が検出されている。底面となるⅤ層の砂層も焼けている。土坑1は床面からの深さ6cmほどで、埋土は黒褐色土が主体である。上面を除き、混入物が少ない。土坑2は床面からの深さ13cm、埋土は焼土粒、炭粒を若干含んでいる。土器の小片が多く出土した。土坑5は南の隅が9cmほど凹んでいる。土器が含まれる。

また、北東壁際には壁溝を截って土坑3がある。本上坑も検出面を二次堆積の焼土が覆っていた。深さは6cm程度で、埋土から土器片が出土している。南側の床面に土坑6がある。深さ14cmで、焼土や炭粒を若干含む。埋土から土器が出土している。

<遺物>カマドの埋土直上、カマド埋土、カマド前の埋土下層及び床面、南側の埋土上層、土坑2埋土など住居東半から土器が多く出土している。99は網谷地遺跡第25次調査のRA181から出土した破片と接合したものである。土器の総量は土師器10619.7g、須恵器1446.6gである。鉄器は西よりの床面～埋土下層から穂積具2点(188・189)、鎌1点(190)、土坑3から用途不明の鉄製品1点(191)が出土した。

<時期・性格>埋土中、カマド前の埋土下位の焼土の堆積状況、煙道埋土の堆積状況から、焼土住居と考えられる。出土した土器から平安時代の9世紀後葉～10世紀前半のものと考えられる。

#### RA195塚穴住居跡(第27図、写真図版22)

<位置・検出状況>北側調査区西よりの3L5aグリッド付近に位置する。南東隅を風倒木によって破壊されている。この付近は、もともとは標高が高かったと思われるが、後世にⅡ～Ⅴ層まで削平されて現況は平坦である。表土を除去するとⅥ層の礫層が露出しており、住居跡自体も床面まで削平されている。検出はⅥ層上で行ったが、砂礫の多く混入する黒色シルトの広がりで、壁をかるうじて追うことができた。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>隅丸長方形で、辺の長さは3.52×4.50mである。壁高は最大で11cmで、床面積は13.3㎡程度と推測される。主軸方向はN-100°-Wである。

＜埋土＞砂礫の多く混入する黒色シルトである。

＜床面・掘り方・貼り床＞床面は礫層のため凹凸がある。貼り床はない。

＜壁・壁溝＞壁が若干残っているのみである。内湾気味に立ち上がる。壁溝はない。

＜カマド＞西壁の南寄り位置する。袖は残存していない。焼土も検出していない。煙道は切り貫き式で、煙り出しに向かって下降する。

＜柱穴＞ない。

＜付属施設＞カマドの左わきにあたる南西隅に土坑1がある。深さ15cmで、底から緩やかに壁が立ち上がる。埋土中から土器、礫が出土している。

＜遺物＞土坑1埋土及び埋土、床直上から内黒土師器環、土師器の壺大小が出土している。土器は土師器のみで1,445.9gである。

＜時期・性格＞出土した土器から9世紀後半～10世紀初頭のものと考えられる。

#### RA196竪穴住居跡（第28・29図、写真図版23・24）

＜位置・検出状況＞北側調査区中央の3L3Jグリッドに位置する。本遺構は北辺の壁を攪乱で削られている。攪乱を除去したのち、IV層上でTo-aテフラを含む黒褐色のシルトの広がりを確認した。このプランを詳しく確認したところ、To-aテフラはブロック状に黒褐色シルトに混入しており、数条の畝間状のプランを呈することが判明したので、別にRZ020畝間状遺構として精査している。なお、深い攪乱で、床面より深く破壊されている部分が北半床面に1か所ある。

＜重複関係＞RZ020畝間状遺構に裁られる。

＜規模・平面形状＞北東と南西の隅が鈍角になる隅丸の平行四辺形である。辺の長さは4.95×4.92m、壁高は22cm、床面積は21.2㎡である。主軸方向はN-91°-Wである。

＜埋土＞壁際に壁の崩壊土の暗褐色土が堆積するが、IV層起源の黄褐色土と黒褐色土が斑に混合する黒褐色土が主体で、4層に細分される。主体となる2層は層相から埋め戻しと推測される。最上層はTo-aを全体に少量含む黒褐色土で、自然堆積と思われる。図中の焼土3～5は埋土中から二次堆積のブロック状の焼土が検出された部分である。焼土2は床直上から検出された二次堆積の焼土である。

＜床面・掘り方・貼り床＞西側が若干高いが、平坦で固く締まる。床面中央に29×22cmの楕円形に焼土が検出された。貼り床が続いているもので、焼土の厚さは1cm程度である。炉として使用されていたような形跡はない。掘り方は床中央が浅く、壁際が深い。西壁のカマド前、北壁、東壁のそれぞれ中央付近は浅い。貼り床は黒褐色土ブロックを含む褐色の砂質シルトによるが、上記の掘り方が深い部分はこの上に黒褐色の砂質シルトを貼っている。

＜壁・壁溝＞壁は外傾～内湾気味に立ち上がる。壁溝はない。

＜カマド＞西壁中央に位置する。袖が残存している。V層起源の褐～黒褐色シルトによって構築され、熱で赤化している。燃焼部には焼土が50×40cmの楕円形に形成される。焼土の厚さは5cmである。燃焼部の奥に支脚が残存していた。土師器環を伏せた上に扁平な花崗岩の礫を設置している。礫は火熱により、表面が荒れている。煙道は上面が削平されているが、掘り込み式と思われる。底面は燃焼部から若干上昇するものの、凹凸があり、煙り出しに至って下がる。

＜柱穴＞南西、南東、北東の隅から柱穴1～3の3個検出したが、すべて深さ11～13cmと浅い。

＜付属施設＞カマド北側に土坑1がある。若干オーバーハングして西壁に張り出すように掘られており、深さは床面から15cm程である。埋土には二次堆積の焼土や炭が含まれる。

＜遺物＞南壁際、東壁際、土坑1内、カマド埋土中から土器が出土した。内黒土師器環、土師器環、

両面黒色の高台付杯、土師器甕がある。土器の総量は土師器1,669.9g、須恵器17.0gで、このほか流れ込みとみられる陶磁器破片が1.5gある。南壁寄りの1層下位から鐵と思われる鉄製品(192)が出土した。北壁寄りの焼土5の上から炭化材が出土した。

<時期・性格>床面が焼けている部分があること、床上、埋土中の二次堆積の焼土、炭化材の検出等から焼失住居の可能性はあるが、炭化材、遺物の量が少ないことから居住中の火災の可能性は低い。埋土が人為堆積の様相であることから、火をかけて整理後、埋め戻された可能性もあろう。

出土遺物と埋土上層に含まれるTo-aテフラから9世紀後葉～10世紀初頭に属すると考えられる。

#### RA197竪穴住居跡(第30図、写真図版25・26)

<位置・検出状況>北側調査区南よりの3L9jグリッドに位置する。付近はもともと標高が高かったと推測されるが、削平され、現況は平坦である。表土を除去すると礫層が露出しており、VI層で検出を行った。遺構の東壁と南西隅は深い攪乱によって、失われている。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>方形を基調としていたと推測される、南北の辺の長さは3.6m程度と推測される。壁高は33cmである。主軸方向はN-6°-Eである。

<埋土>2層に大別され、上層はTo-aテフラを含む黒褐色砂質シルト、下層は炭粒を多く含む黒色土である。いずれもVI層起源の砂礫を多く含む。自然堆積と思われる。

<床面・掘り方・貼り床>床は若干の緩やかな凹凸があり、北側には焼土粒と炭粒、南側には炭粒が分布している。締りはそれほど強くない。掘り方は中央が浅く壁際が若干深いが、砂礫層中にあるため、細かい凹凸はない。貼り床は黄褐色土粒を含む黒褐～黒色シルトによる。

<壁・壁溝>壁は砂礫層中にあり、内湾気味に立ち上がる。壁溝はない。

<カマド>北壁に位置する。東側の袖、煙り出しの上面は削られている。天井は残存していない。袖が若干残る。粘性、締りのある暗褐色シルトを芯材の礫に貼って袖としている。燃焼部は48×39cmの不整形に形成され、厚さは6cmである。煙道入口の天井が残存しており、削り貫き式とみられる。底部は燃焼部から緩やかに上昇し、煙出しの手前から急に下降する。

<柱穴>ない。

<付属施設>ない。

<遺物>カマド前から多くの垂角礫、円礫、土器が出土した。内黒土師器の杯、土師器杯、土師器甕、須恵器の壺類がある。土器の総量は土師器2,764.4g、須恵器76.4gである。

<時期・性格>床面や埋土中に含まれる炭粒の状況から、焼失住居の可能性はある。ただし、居住中に火災にあったとは考えにくい。出土した土器の様相と埋土上層に含まれるTo-aテフラの状況から9世紀後葉～10世紀初頭に属すると考えられる。

#### RA198竪穴住居跡(第31・32図、写真図版27・28)

<位置・検出状況>北側調査区南側の3L11nグリッドに位置する。本遺構の周辺は、南側がもともと標高が高かったと思われるが、削平され、現況は平坦である。表土を除去したところ北側がIV層、南側がVI層まで削平されていた。遺構の東半を浅い根の攪乱が覆っており、それを除去して、IV層上で微細な焼土粒や礫を含む黒褐色土の広がりを確認した。

<重複関係>RD496土坑に北西隅を裁られる。

<規模・平面形状>隅丸方形を呈し、辺の長さは3.85×3.90mである。壁高は17cm、床面積は12.5m<sup>2</sup>

である。主軸方向はN-92°-Eである。

<埋土>礫を含む黒褐色土が主体で5層に細分される。壁際に流れ込んだと思われる土層がある。また北半に見頭大の礫を含む層(3層)が見られる。全体に固く締まっている。To-aテフラは含まれない。

<床面・掘り方・貼り床>緩やかな凹凸があるが、固く締まっている。掘り方は西壁、南壁、東壁のカマドより南側の壁際が若干深く、中央は浅い。礫層に掘り込まれているため、細かな凹凸はない。明確な貼り床はカマド左側付近のみである。

<壁・壁溝>やや内湾気味に立ち上がる。壁溝はない。特に南半の壁はVI層である。

<カマド>東壁北端に位置する。袖が若干残っている。礫を芯材としてIV層起源の黄褐色シルトを貼って構築しており、熱により酸化色を呈する。燃焼部には38×28cmの楕円形に焼土が形成されている。焼土の厚さは4cmである。煙道は割り貫き式で、底部は燃焼部から極緩やかに傾り出しに延びている。

<柱穴>北西隅と南西隅で、計2個検出した。比較的浅く、柱穴1が15cm、柱穴2が23cmである。埋土はいずれも2層に細分され、上層が混入物が少なく、締りのない黒色シルト、下層が締りのない砂質シルトである。

<付属施設>カマドの南脇に土坑1がある。埋土はV層起源の砂質シルト、小礫を若干含む締りのない黒褐色土の単層である。

<遺物>床面中央南寄りから土師器甕が細かく割れた状態で出土した。また、カマド前の床直~埋土中にカマドの芯材などに使用されたと考えられる被熱した礫、土器の集中部がある。これらから、内黒土師器坏、須恵器坏、土師器坏、内黒土師器の高台付坏、土師器甕、須恵器長頸瓶が出土している。38の土師器小型甕はRA191出土の破片と接合したものである。土器の総量は土師器2,477.2g、須恵器424.5g、流れ込みと思われる陶磁器4.1gである。

<時期・性格>出土した土器から、平安時代の9世紀後半と考えられる。

(金子)

#### RA199竈穴住居跡 (第33図、写真図版29・30)

<位置・検出状況>北側調査区南東端部の3L17n~19nグリッドに位置する。検出面はIII~IV層で、黒褐色シルトによる方形プランとして把握した。

<重複関係>RZ021竈間状遺構が本遺構の埋土中に掘られている(本遺構より新しい)。

<規模・平面形状>隅丸方形で、辺の長さは3.34×2.54m、床面積は約5.5㎡である。主軸方向はN-175°-Wである。

<床面・掘り方・貼り床>床面は、全体的にはほぼ平坦で、全面に貼り床が施される。カマド周辺は他と較べて硬い(※硬化面を形成する)。竈穴の掘り方は、床面から5~10cmの深さで、掘り方底面は凹凸がある。8・9層と命名した埋土が貼り床土で、IV層黄褐色粘土と黒褐色シルトの混合土が用いられている。

<壁>IV層を壁とする。壁高は30~42cmである。壁形は外傾して立ち上がる。

<埋土>1層と命名した土層部分が、To-aテフラの混入が認められ、RZ021竈間状遺構に伴う土層である。本遺構の埋土は2~7層と命名した土層で、全体的には自然堆積を基調とする。埋土上位には2層黒褐色シルトが主体的に堆積する。張り出し部に堆積する2a層や埋土中位の3層は、黒褐色シルトを主体とし、黄褐色砂質土が混入する。埋土中~下位にかけては焼土ブロックや炭化物を少量含む4・5層暗褐色シルトが堆積する。これら4・5層は人為が介在した土層であるが、堆積の様相

自体は廃棄層とは捉えられなかった。6・7層黒褐色シルトは、北壁際や西壁際の一部に堆積がみられる。8・9層は上述のとおり貼り床である。

<カマド>南壁の中央より西に寄って位置する。袖は左袖部が僅かに残る。燃焼部と判断される焼土は、50×45cmの円形気味の範囲に広がり、床面から3～10cmの厚さで発達している。煙道の長さは約130cm、煙道底面の幅は30cmである。割り抜き式と判断される。煙道の方向はN-175°-Wである。

<柱穴>未検出である。

<付属施設>棚状の施設と土坑状の張り出し部2箇所が認められる。

棚状の施設とは、南壁においてカマド煙道部より東側では有段状を呈する構造が認められたことから、呼称する。この棚状施設は、幅15～20cm、長さ約120cmで、床面より約25cm高い。土坑状の張り出し部は、北東壁で2ヶ所認められる。この土坑状は、長さ約70cm、幅約60cm、深さ12cmに掘り込まれており、床面より約30cm高い。

<その他>南西隅付近で本遺構の埋土を切る不整形の張り出しを検出した。人為により掘り込まれたとは考え難く、木根などによる攪乱と推定した。

<遺物> (第79図133～136、写真図版72・73) 出土土器の総量は860.9gで、内訳は土師器350.8g、須恵器510.1gである。133～135の土師器と、136の須恵器大甕の破片を掲載した。

<時期> 出土土器から平安時代9世紀後葉～10世紀前葉と推定される。加えて、本遺構埋没後に掘られたRZ021畝間状遺構に十和田aテフラの混入が認められることから、本遺構も同テフラ降下時期より古いことが確実であり、時期の下限は10世紀前葉である。

#### RA200堅穴住居跡 (第34図、写真図版31)

<位置・検出状況> 北側調査区南部の3L19t～19vグリッドに位置する。基本層序IV～V層で、黒褐色シルトと暗褐色粘土質砂質土による方形気味のプランを認知した。検出地付近は現代の攪乱が多く、旧地形の削平も著しい状況にあり、堅穴の壁は既に破壊されていた。

<重複関係> 本遺構南側はRZ023道路状遺構に破壊され、完全に消失している。

<規模・平面形状> 平面形は方形を基調とする。辺の長さは東西方向で2.68m、南北方向では残存値で2.55mを測り、床面積は残存値4.8㎡である。主軸方向は、後述するカマド未検出の状況から判断できないが、N-5°-Eの可能性が考えられる。

<床面・掘り方・貼り床> 床面は、壁溝部分を除き貼り床が全面に認められ、ほぼ平坦で全体的に硬く締まる。貼り床土は埋土4層と命名した土層で、厚さは5cm前後で敷かれている。掘り方は凹凸が少なく、ほぼ平坦である。

<壁・壁溝> 上述のとおり壁の残存はない。壁溝は、上幅18～25cm、下幅10～16cm、深さ5～10cmで全周する。

<埋土> 埋土は1～5層に分層した。1・2層は後世の攪乱層と判断される。3層は壁溝内に堆積する埋土で、自然堆積と判断される。4層は貼り床土である。5層は柱穴4に堆積する埋土で人為堆積層と判断される。

<カマド> 未検出にある。床面では、燃焼部(焼土など)も認められないことから、あるいはRZ023道路状遺構に破壊された南壁際に所在した可能性も考えられよう。

<柱穴> 5個検出した。何れも規模が小さく、全般に深度も10cm前後と浅い。柱配置は想定し難いが、梁行を柱穴1・3に求めた場合、約200cmの間隔を持つ。

<付属施設>無し。

<遺物>無し。

<時期>土器などの出土が得られず、時期は不明である。埋土の様相や、竪穴の形状・規模などの観点からは、平安時代と推定される。

#### RA201竪穴住居跡（第35図、写真図版32）

<位置・検出状況>北側調査区東端部の2M20d~22fグリッドに位置する。検出面は基本層序V層下位相当で、黒褐色シルトによる方形気味のプランとして検出した。検出地付近は水田造成により旧地形が著しく改変されており、竪穴の北西側は削平されている。

<重複関係>無し。

<規模・平面形状>平面形は方形を基調とする。辺の長さは2.75m以上×2.34mで、床面積は残存値で3.44㎡である。主軸方向はN-130°-Eである。

<床面・掘り方・貼り床>床面は躍層中（基本層序VII層相当）でやや凹凸がある。貼り床は看取されない。竪高は南東壁で55cmを測り、かなり深い。

<壁>直立気味に立ち上がる。

<カマド>南東壁際の中央に位置する。煙道部のみの検出で、煙道部は既に破壊され消失している。煙道部の長さは残存値で約120cm、煙道底面の幅は16~34cmである。煙道部に伴う埋土2~6層は、自然堆積層と判断され、断面観察から掘り込み式であったと推定される。煙道部南東端付近の3層中より、土器片や礫が比較的纏まった状態で出土した。煙道の方向はN-130°-Eである。

<埋土>埋土は1層黒褐色シルト質砂質土による単層で自然堆積である。煙道部にみられる2~6層についても、自然堆積と推定されるが、土器などの遺物は投棄されていると判断される。

<柱穴>未検出である。

<付属施設>無し。

<遺物>（第79図137~139、写真図版73）出土土器の総量は795.9gで、全て土師器である。カマド煙道部から主体的に出土している。137~139の土師器を掲載した。

<時期>出土土器から平安時代9世紀後半~10世紀前半と推定される。

（丘）

### 3 掘立柱建物跡

#### RB026掘立柱建物跡（第36図、写真図版33・34）

<位置・検出状況>北側調査区西端の3K1sグリッド付近に位置する。検出面はIV層である。本遺構の北に表土を除去すると礫層が露出する部分があり、本来は遺構北側の標高が高かったのではないと思われるが、現況は平坦である。従って、遺構上面がかなり削平されている可能性が高い。

<重複関係>RG087溝跡と重複しているが、直接切りあっているのは本建物跡の中央のPP93のみなので、はっきり確認できなかった。

<規模・構造>7個の柱穴で構成される掘立柱建物である。梁行き1間（242cm・8尺）×桁行き2間（242cm・8尺）の正方形を呈する。梁行きは1間であるが、建物の中央に柱穴（PP93）があることから、梁行きの中間の柱穴が浅く、検出できなかった可能性がある。おそらく田の字型の総柱の建物と思われる。

<柱穴（掘り方、柱痕、埋土）>7個すべて楕円形の柱穴である。東側柱のPP94を除き柱痕跡が確認

された。柱痕跡の径は19~25cm程度である。北側の柱穴ほど浅く、PP94は深さ7cm程度しか残っていない。埋土はⅣ~Ⅴ層起源の黄褐色土粒を斑に含む黒~黒褐色土で裏込めとしている。

<方向>梁行きでN-76° -Wである。

<柱間寸法>梁行きで242cm(8尺)、桁行きで121cm(4尺)である。

<遺物>ない。

<時期・性格>建物の構造から古代に属すると考えられる。倉庫であろう。

#### RB027掘立柱建物跡(第37図、写真図版35)

<位置・検出状況>北側調査区中央の3L4nグリッド付近に位置する。本遺構の周辺は北側に向かって深く削平されており、本遺構北東隅の柱穴、北側柱の中央の柱穴は失われている。PP69の北側に桁行きの延長がないかどうか探したが、見つからなかった。

<重複関係>本建物内にRD492土坑があるが、直接切りあう部分が削平されているため、新旧は不明である。

<規模・構造>掘立柱建物跡である。6個の柱穴が検出された。桁行きはさらに北側に延びる可能性もある。梁行き2間(349cm・11.5尺)×桁行き2間以上(424cm・14尺)である。

<柱穴(掘り方、柱痕、埋土)>円形~楕円形の柱穴である。上面が削られているPP64を除き、柱痕跡が見つまっている。径は14~28cmである。Ⅳ層起源の黄褐色土粒を斑に含んだ黒褐色土を裏込めとしている。

<方向>梁行きの方向はN-90° -Wである。

<柱間寸法>梁行きで152cm(5尺)、197cm(6.5尺)、桁行きで212cm(7尺)である。

<遺物>PP64から土師器破片18.2g、PP66から須恵器破片22.0gが出土しているが、小片で図化に至らなかった。

<時期・性格>埋土の質感や出土遺物から、平安時代の側柱建物跡と推定される。

#### RB028掘立柱建物跡(第38図、写真図版36)

<位置・検出状況>北側調査区南東端の3M9bグリッド付近に位置する。4.5m南西に軸方向をほぼ同じくしてRB029掘立柱建物跡がある。北西隅の柱穴は掘乱によって上面が削平されている。また、北東隅の柱穴は今回の調査区外にあり、第16次のPP30である。東側柱のPP39は東側の宅地造成時に東壁を削られている。検出はⅣ層上面で行った。

<重複関係>ない。

<規模・構造>9個の柱穴の掘立柱建物である。Ⅱの字状の柱配置を持つ総柱の正方形の建物で、梁行き2間(304cm、10尺)、桁行き2間(304cm、10尺)である。

<柱穴(掘り方、柱痕、埋土)>円形~楕円形の柱穴である。柱痕跡は中央と北東の柱穴を除く7個で確認された。柱痕跡の径は15~24cmである。裏込めはⅣ層起源の黄褐色土粒を斑に含む黒褐色又は黒褐色土粒を斑に含む暗褐色シルトである。PP35、PP38、PP40の裏込めの土にはTo-aテフラと思われる白色土の小粒が認められた。

<方向>梁行き方向でN-72° -Wである。

<柱間寸法>梁行き、桁行きともに152cm(5尺)である。

<遺物>ない。

<時期・性格>裏込めの土中のTo-aテフラ、建物の形状から平安時代の総柱の倉庫と考えられる。

## RB029掘立柱建物跡 (第39図、写真図版37)

<位置・検出状況>北側調査区南東の3L12yグリッド付近に位置する。4.5m北東に軸方向をほぼ同じくしてRB028掘立柱建物跡がある。検出面はIV層上面である。

<重複関係>ない。

<規模・構造>6個の柱穴から構成される側柱の正方形の掘立柱建物である。梁行き1間(242cm、8尺)、桁行き2間(242cm、8尺)である。

<柱穴(掘り方、柱痕、埋土)>格円形の柱穴である。柱痕跡はPP50～53の4個の柱穴で確認したが、PP49、PP54は当初建物の一部という認識がなかったため見逃してしまった。柱痕跡は径16～22cmである。裏込めはIV層起源の黄褐色土粒を斑に含む黒褐～暗褐色土である。柱痕跡、埋土ともにTo-aテフラは認められない。

<方向>梁行き方向でN-72°-Wである。

<柱間寸法>梁行き方向が242cm(8尺)、桁行き方向は121cm(4尺)である。

<遺物>ない。

<時期・性格>遺物、テフラともにないが、RB028と方向が同じであり、並ぶように建てられていること、どちらも正方形の建物であることから、RB028と同様平安時代と考えられる。

## RB030掘立柱建物跡 (第40・41図、写真図版38・39)

<位置・検出状況>北側調査区西側の2K15mグリッド付近に位置する。西側は調査区外に伸びており、西の側柱2個は検出できなかった。北西隅の柱穴1個は攪乱によって南壁が削られている。

<重複関係>PP121、124と重複しているが、新旧関係は不明である。本建物跡に属する柱穴の可能性もあるが、柱配置などはっきりしない。

<規模・構造>掘立柱建物跡である。使用した柱穴は11個である。梁行き2間(439cm・14.5尺)、桁行き4間(803cm・26.5尺)で、中央の梁方向にPP113があることと東西に長いPP119の埋土西寄りに柱痕が検出されていることから間仕切りの存在が推定される。

<柱穴(掘り方、柱痕、埋土)>主に楕円形であるが、PP119は隅丸方形で、2本の柱が立っていた痕跡が確認された。規模は大小があり、PP113、PP114、PP119は径60cm以上と大型であるが、他はやや小ぶりである。また、梁方向の側柱PP112、PP114(以上図中にあり)、PP113(図中になし)は、底面に盤状の礫が据えられている。柱痕跡はほとんどの柱穴で確認されており、径は16～23cmである。PP114のとPP116の柱痕跡から柱状の礫が出土している。裏込めの土はIV～V層起源の黄褐色シルトのブロックを斑に含む黒褐色土が主体である。

<方向>梁行き方向でN-84°-Wの南北棟である。

<柱間寸法>梁方向北側の側柱が東から227cm(7.5尺)、212cm(7.0尺)、南側の柱が東から91cm(3尺)、115cm(6.5尺)である。桁方向は東が北から212cm(7.0尺)、197cm(6.5尺)、197cm(6.5尺)、西側が221cm(7.5尺)である。

<遺物>ない。

<時期・性格>遺物が全くないが、平面プランから中世以降と推測される。

## RB031掘立柱建物跡 (第42図、写真図版34)

<位置・検出状況>北側調査区の中央2L22kグリッド付近に位置する。周辺は調査区北東の水田跡に向かって徐々に削平されており、本遺構は南と西側柱のみ残存していた。従って、建物規模等は不明

である。東端のPP133は上面が大きく割られて、浅い。

<重複関係>RC005柱穴列と重複しているが、裁りあっている遺構がないため、新旧は不明である。また、本建物跡のPP139をPP135が載っているが、PP135には他に対応する柱穴が見つからないことから、同一柱穴の新旧の可能性もある。

<規模・構造>全容が不明なため、梁、桁が不明である。南北方向には3間（636cm、21尺）、東西方向には2間（424cm、14尺）残存している。

<柱穴（掘り方、柱痕、埋土）>円形～楕円形を呈する。柱痕跡は確認できなかった。埋土はIV層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色シルトが主体である。

<方向>東西方向はN-82°-Wである。

<柱間寸法>東西方向は212cm（7尺）、南北方向も212cm（7尺）である。

<遺物>ない。

<時期・性格>PP139を載るPP135から近世以降の掘り鉢の破片が出土しており、周辺には近世頃の遺構が集中しているが、本遺構自体は中世の可能性もあろう。

#### RB032掘立柱建物跡（第43図、写真図版40）

<位置・検出状況>北側調査区の中央からやや東に寄った3L5rグリッド付近に位置する。南東隅を掘られ、北西隅の柱穴も掘乱により失っている。また、検出面はIV層であるが、周辺は調査区北東の水田跡に向かって徐々に深く掘られており、本遺構の検出面も北に向かって降下している。

<重複関係>RB033掘立柱建物と重複している。RB033とは南東隅のPP104を共有しており、規模、平面プランも類似することから同じ建物の新旧とも捉えられる。PP104はRB033のPP102を載っている。また、本プラン内にRD502a土坑が収まることから、伴っている可能性が高い。さらにRD502a土坑より、古いRD502b土坑をPP111が載っている。

<規模・構造>梁行き2間（242cm、8尺）、桁行き3間（333cm、11尺）の側柱の掘立柱建物跡である。柱穴は8個検出した。北側梁行きは中間に柱穴を検出できなかったが、もともとなかったものか、削平されたものか不明である。

<柱穴（掘り方、柱痕、埋土）>円形～楕円形で、径22～50cm程度の小型の柱穴である。南側の梁行き中央のPP105は特に浅く、小型である。柱痕跡はPP101、PP111の2個で確認した。径10～12cmである。埋土はIV層起源の黄褐色土粒を含む灰色がかった黒褐色土であるが、柱穴により2～30%と含有量に違いがみられる。

<方向>梁行きでN-73°-Eである。

<柱間寸法>梁行き南側柱で121cm（4尺）、桁行きで北から91cm（3尺）、121cm（4尺）、121cm（4尺）である。

<遺物>ない。

<時期・性格>RD502a土坑が建物内に収まることから、建物内に便壺を据えた便所などの用途が考えられる。時期を示すような遺物はないが、柱穴及び土坑の埋土が灰色味を帯び、粘性の強いものであることから、比較的新しく、近世以降近代までと考えられる。

#### RB033掘立柱建物跡（第44図、写真図版40）

<位置・検出状況>北側調査区の中央からやや東に寄った3L5rグリッド付近に位置する。南東隅を掘乱で削られ、西側の側柱も掘乱で上面や壁を削平されている。また、検出面はIV層であるが、周辺

は調査区北東の水田跡に向かって徐々に深く削られており、本遺構の検出面も北側の標高が低い。  
 <重複関係>RB032掘立柱建物と重複しており、本遺構のPP102はRB032のPP101に裁られている。  
 また、PP104はRB032と共用であり、同一建物の新旧と捉えられるが、規模が若干異なるので別に報告する。PP102の南側のPP103は本遺構と埋土等が類似しており、建物を構成する柱穴の可能性はあるが、はっきりしなかった。柱穴寸法からPP102の方が取まりが良いが、PP103の方を建物に使用した可能性もある。また、RD502a土坑、RD502b土坑と重複している。特にRD502b土坑は本建物の中に収まることから伴うものである可能性が高い。それぞれRD502a土坑とRB032掘立柱建物跡、RD502b土坑と本掘立柱建物跡が伴うとすれば、RD502b土坑はRD502a土坑より古いことから、本建物跡はRB032掘立柱建物跡より旧いと考えられる。

<規模・構造>梁行き1間(273cm、9尺)、桁行き3間(379cm、12.5尺)の圓柱の掘立柱建物跡である。柱穴は8個である。

<柱穴(掘り方、柱痕、埋土)>楕円形で径25~48cmと小型である。柱痕跡はPP100、PP106の2個から検出された。径は18cm、20cmである。埋土はIV~V層起源の黄褐色土粒を含む黒褐~暗褐色上であるが柱穴により、7~30%と多寡がある。全体に灰色味を帯びた粘性のある埋土である。

<方向>梁行き方向でN-71° -Eである。

<柱間寸法>梁行きで273cm(9尺)、桁行きで北から182cm(6尺)、106cm(3.5尺)、91cm(3尺)である。

<遺物>ない。

<時期・性格>RD502b土坑が建物内に収まることから、建物内に桶などの便壺を据えた便所などの用途が考えられる。時期を示すような遺物はないが、RB032掘立柱建物跡と同様柱穴及び土坑の埋土が灰色味を帯び、粘性の強いものであることから、比較的新しく、近世以降近代までと考えられる。

#### 4 柱 穴 列

##### RC005柱穴列(第42図、写真図版34)

<位置・検出状況>北側調査区中央の2L221グリッド付近に位置する。周辺は本調査区北東に広がる水田跡に向かい、IV層が徐々に削平されている部分である。そのため、1条の柱穴列として検出したが、北側と東側にさらに柱穴が展開し、掘立柱建物跡の一部である可能性もある。柱穴は北へ向かうほど削平されており徐々に浅くなる。

<重複関係>RB031掘立柱建物跡と重複しているが、直接切りあう柱穴がないため、新旧は不明である。

<規模・平面形状>北一南方向に並ぶ柱穴列で、4個の柱穴で構成される。軸方向はN-1° -Eである。総延長は636cm(21尺)である。柱穴は円形で径34~45cm、深さは9~35cmである。柱間寸法はすべて212cmである。

<埋土>IV~V層起源の黄褐色土粒を7~30%含んだ黒褐色上シルトである。底面はV~VI層に達する。

<遺物>ない。

<時期・性格>周辺に柱穴が多くあり、PP135から近世の掘り鉢破片が出土していることから、近世である可能性が高いが、本遺構自体は中世~近世としておく。

## RC006柱穴列（第45図）

<位置・検出状況>北側調査区東側の3L2xグリッド付近に位置する。本遺構の北側は調査区北東に大きく広がる水田跡の攪乱で急に深く削平されている。そのため本遺構を柱列として検出したが、北側に柱穴が展開し掘立柱建物として展開する可能性もある。現に北側の攪乱斜面には柱穴が多く存在するが本遺構との関連は不明である。近世の建物だとすれば、下屋柱等は削平されて検出されていない可能性もある。

<重複関係>PP28とPP42の間にRD503土坑があり、重複しているが直接切りあっていないため、新旧は不明であった。

<規模・平面形状>北東—南西方向に並ぶ柱穴列で、4個の柱穴で構成される。軸方向はN-53°-Eである。総延長は895cm（12.5尺）である。柱穴の平面形は川～楕円形で、径44～47cm、深さ28～49cmである。柱間寸法は東より364cm（12.0尺）、379cm（12.5尺）、152cm（5.0尺）である。

<埋土>当初柱穴列として精査していなかったため、不明である。

<遺物>ない。

<時期・性格>西隣のRB032・033掘立柱建物跡や周辺の柱穴状土坑の存在から、本遺構は近世の屋敷地内にあるものと考えられ、建物や塀などの可能性がある。（金子）

## RC007柱穴列（第46図、写真図版41）

<位置・検出状況>南側調査区（飛び地）西端部の5K230～6K8nグリッドに位置する。検出面は褐色砂層（V層相当）や黒褐色砂礫層（VI層相当）で、表土を除去した段階で黒褐色シルト質砂質土による柱穴プランが比較的明瞭に認知された。

<重複関係>無し。

<規模・平面形状>ほぼ南—北方向に直線的に並び、軸方向はN-7°-Eである。全長は21mで、PP75～86の12個の柱穴で構成される。柱間寸法は、165～210cmまでありバラツキがある。個々の柱穴の規模は、直径15～30cmで、深さは5～28cmまでみられる。北に向かうほど柱穴の深度が浅く、規模自体もやや小形化する傾向にある（※削平の度合に関係する可能性もある）。PP84は僅かにプランが残存したもので、ほとんど壁立ちしない状況であった。

<埋土>黒褐色シルト質砂質土を主体に、褐色砂土が混じる。遺存状態が良いPP75～PP81を覗る限り、人為堆積と推定されたが、明確には分らなかった。

<遺物>無し。

<時期・性格>遺構の時期を推定する遺物は出土していない。土層の様相からは、近世～現代の何れかと推定される。本遺構は、近年まで所在していた民家同士の地境付近に位置することから、検出時は塀や植林などの痕跡である可能性も推定された。ただ、土層の観察からは何かを抜き取ったような様子は看取できなかったことと、柱穴の埋土に現代ゴミなどの混入が認められなかったことから、積極的に現代と判断することに躊躇があり、柱穴列として遺構登録した経緯がある。本遺構の西側部分の範囲は平成20年度に盛岡市遺跡の学び館により発掘調査が実施されているが（※細谷地遺跡第23次調査）、柱穴などは未検出にあり、本遺構が建物として展開する類の遺構とは考え難い。（星）

## RC008柱穴列（第46図、写真図版39）

<位置・検出状況>北側調査区北西の2K16pグリッド付近に位置する。当初東側のRB030掘立柱建物跡の一部として考えていたが、距離が少し離れていること、軸が若干異なることから建物とは別個の

柱穴列とした。

<重複関係>RD482土坑、RA189竪穴住居跡と重複し、本柱穴列がどちらも裁っている。

<規模・平面形状>南—北方向に並ぶ柱穴列で、3個の柱穴で構成される。主軸方向はほぼ真北方向である。総延長は484cm（16尺）である。柱の平面形は楕円形で、径33～46cm、深さ31～40cmである。柱穴寸法は242cm（8尺）である。

<埋土>PP89とPP125には柱痕跡を確認した。表込めはIV層起源の黄褐色土を2～10%含んだ黒～黒褐色シルトである。PP97には柱痕跡を確認できなかった。

<遺物>ない。

<時期・性格>平安時代のRA189竪穴住居跡、古代のRD482土坑を裁っていることから、それよりも新しい。遺物がないことから具体的な時期は不明であるが、おおむね中世以降と推定される。

## 5 土 坑

### RD481土坑（第47図、写真図版42）

<位置・検出状況>北側調査区北西端の2K12qグリッド付近に位置する。北東隅～中央を掘削で破壊され、南側の壁を住宅基礎で削平されている。検出面はII層～III層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>隅丸方形と推定され、残存している辺の長さは1.55×1.48mである。

<埋土>上層にTo-aテフラの粒を含む黒色シルト、下層に同テフラを含む黒褐色シルトが堆積する。自然堆積である。炭、焼土の類は検出されなかった。

<底面・壁>底面は平坦で、壁は若干内湾気味に立ち上がる。壁高は18cmである。

<遺物>45.5gの土師器が出土したが、小片のため図化していない。

<時期・性格>埋土に含まれるTo-aテフラから平安時代に属する。

### RD482土坑（第47図、写真図版42）

<位置・検出状況>調査区北西の2K16pグリッド付近に位置する。東側の壁の一部を掘削によって破壊されている。検出面はII～III層である。

<重複関係>西側の一部をRC008柱穴列のPP125によって裁られている。

<規模・平面形状>円形で、径1.30×1.28mである。

<埋土>IV層起源の黄褐色土粒を若干含む黒色シルトが主体である。

<底面・壁>底面は凹凸があり、縮まって固い。浅い掘り方があり、黒褐色土粒を含む暗褐色シルトを貼っている。壁高は20cmである。

<遺物>11.1gの土師器小片が出土した。

<時期・性格>埋土の質感、出土遺物から平安時代と推定される。

### RD483土坑（第47図、写真図版42）

<位置・検出状況>北側調査区西側の3K5vグリッド付近に位置する。南東の壁の一部が掘削によって削られている。西側に近接してRA192竪穴住居跡がある。検出面はIII～IV層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>やや胴の張った隅丸方形である。辺の長さは1.70×1.67mである。

<埋土> 2層に細分され、上層はIV層起源の黄褐色土ブロックを含んだ黒色シルト、下層は黒褐色土粒を多く含んだ暗褐色の砂質シルトである。自然堆積とみられる。

<底面・壁> 底面は細かい凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。壁高は30cmである。

<遺物> 埋土から土師器3.1gが出土した。

<時期・性格> 出土遺物、埋土の質感から平安時代と推定される。

#### RD484土坑 (第47図、写真図版43)

<位置・検出状況> 北側調査区西側の3K6xグリッドに位置する。検出面はⅢ～IV層である。

<重複関係> ない。

<規模・平面形状> 隅丸長方形を呈し、辺の長さは0.74×0.65mである。

<埋土> 3層に細分される。上層は焼土粒や炭粒が含まれる黒～黒褐色シルトで、下層にはIV層起源の黄褐色土粒や黒色土粒を含む極暗褐色シルトが堆積する。自然堆積と考えられる。

<底面・壁> 底面中央が凹んでいる。壁はやや内湾気味に立ち上がる。壁高は18cmである。

<遺物> ない。

<時期・性格> 周辺の遺構の分布状況から、平安時代と推定される。明確な現地性焼上の堆積はないが、含有物から焼成土坑とみられる。

#### RD485土坑 (第47図、写真図版43)

<位置・検出状況> 北側調査区西側の3K7wグリッドに位置する。検出面はⅢ～IV層である。

<重複関係> ない。

<規模・平面形状> 楕円形を呈し、径は1.12×0.81mである。

<埋土> 4層に細分される。崖際に壁の崩壊土が堆積する。下層は混入物の少ない黒褐色シルト、上～中層はIV層起源の黄褐色土粒を多く含む黒褐～暗褐色シルトである。自然堆積とみられる。

<底面・壁> 底面はVI層上面に形成され、平坦である。壁は急な角度で立ち上がり、開口部でやや内湾気味に開く。

<遺物> 埋土から土師器61.4gが出土した。

<時期・性格> 出土遺物、周辺の遺構の分布状況、埋土の質感から平安時代と推定される。

#### RD486土坑 (第48図、写真図版43)

<位置・検出状況> 北側南東の3K9wグリッド付近に位置する。検出面はⅢ～IV層である。

<重複関係> ない。

<規模・平面形状> 隅丸長方形で、辺の長さが0.97×0.73mである。

<埋土> IV層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色シルトで、黄褐色土粒の多寡で2層に細分される。自然堆積と考えられる。

<底面・壁> 底は凹凸があり、南側がやや浅い。壁は外傾して立ち上がる。

<遺物> 土師器7.7gが出土した。

<時期・性格> 埋土の質感、出土遺物から平安時代と推定される。

#### RD487土坑 (第48図、写真図版43)

<位置・検出状況> 北側調査区南西の3K10wグリッド付近に位置する。検出面はⅢ～IV層である。

遺構西側に攪乱が入る。

<重複関係> RA193竪穴住居跡の西壁に裁られている。

<規模・平面形状> RA193竪穴住居跡に裁られているため、不明だが残存部分から類推すると楕円形か隅丸長方形を呈すると考えられる。径は1.43mである。

<埋土> 4層に細分される。上層の1～2層は根の攪乱の可能性がある。主体となる3層は混入物の少ない黒色シルトである。自然堆積と思われる。

<底面・壁> 底面は内湾し、壁も内湾気味に立ち上がる。底、壁ともに緩やかな凹凸がある。壁高は15cmである。

<遺物> 土師器20.7gが出土した。

<時期・性格> 出土遺物、埋土の状況から平安時代と推定される。

#### RD488土坑（第48図、写真図版44）

<位置・検出状況> 北側調査区南西の3 K11xグリッド付近に位置する。検出面はⅢ～Ⅳ層で、焼土粒、炭粒、Ⅳ層起源の黄褐色土粒の混入する黒褐色土の広がりとして、検出した。

<重複関係> 本遺構がRA193竪穴住居跡の南壁を裁っている。

<規模・平面形状> 楕円形を呈し、径は1.79×1.55mである。

<埋土> 6層に細分される。遺構の南側と北側で堆積状況が異なる。南側は下層にカーボンを含んだ暗褐色土、中層に二次堆積の焼土層、上層に焼土粒や炭粒が混入する。北側は南側の土層より古く、Ⅳ層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色土で、人為堆積の可能性がある。

<底面・壁> 平坦であるが、中央部分がやや高い。このような断面のため、北側と南側は別個の土坑の可能性と、規模が半分ぐらいの可能性、住居跡の方が新しい可能性などを考慮したが、全体として住居跡の埋土と異なること等から、一体のものと考えて報告した。壁は外傾して立ち上がる。壁高は24cmである。

<遺物> 埋土上～下層からまんべんなく多量の土器が出土している。総量は土師器2288.8g、須恵器126.9gで、このほか流れ込みと思われる陶磁器10.1gが出土した。なお、本遺跡の過去の調査で焼成土坑から鋭利な割れ口を持つ土器の破片が多量に出土することがあったが、本土坑から出土した土器片にはそのような特徴は見られなかった。

<時期・性格> 出土遺物から平安時代に属する焼成土坑である。

#### RD489土坑（第48図、写真図版44）

<位置・検出状況> 北側調査区南東の3 K12yグリッドに位置する。遺構の南半分を攪乱によって削られている。検出面はⅢ～Ⅳ層である。

<重複関係> ない。

<規模・平面形状> 隅丸方形を呈し、辺の長さは1.50×1.50mである。

<埋土> 焼土粒とⅣ層起源の黄褐色土粒、暗褐色土粒、炭粒を混含む暗褐色土が主体で、人為堆積の可能性があるが、最上層は自然堆積と思われる。また、主に東半下位に焼土を多く含んだ層が堆積する。

<底面・壁> 底面は細かい凹凸がある。掘り方もあり、暗褐色土粒を混含む褐色の砂質シルトで埋め戻している。壁は外傾して立ち上がる。壁高は27cmである。

<遺物> 埋土及び底面直上から土師器33.3gが出土した。北西隅の底から少し浮いた状態で炭化材が

出土している。炭化材の下位から焼土が検出された。

<時期・性格>明確な現地製の焼土層は見られないが、埋土や炭化材の状況から焼成土坑と考えられる。出土した遺物から平安時代と考えられる。

#### RD490土坑（第48図、写真図版44）

<位置・検出状況>北側調査区南西隅の3L21yグリッド付近に位置する。本遺構は第16次調査で南東約4分の1を調査している。その際RA169竪穴住居跡として調査していたが、今回の調査の結果、土坑であることが判明したので、訂正して報告する。第16次調査の際の検出面はⅡ層であったが、今回の調査区内では攪乱によって上面がかなり削られており、Ⅲ～Ⅳ層で検出した。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>楕円形を呈し、径1.99×1.93mである。

<埋土>赤褐色の焼土粒とⅣ層起源の黄褐色土粒を含む黒色シルトで、締りがない。自然堆積と考えられる。

<底面・壁>平坦で、壁はゆるやかに内湾気味に立ち上がる。壁高は27cmである。

<遺物>埋土から土師器620gが出土した。

<時期・性格>第16次調査と異なり、今回の調査部分では埋土に極端に締りがないことから新しいものの可能性があるが、出土遺物から古代以降とする。

#### RD491土坑（第49図、写真図版45）

<位置・検出状況>北側調査区中央の3L2hグリッドに位置する。検出面はⅣ層である、

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>隅丸長方形を呈する。規模は1.52×1.10mである。

<埋土>炭粒を含む黒色土が主体である。自然堆積と考えられる。北西寄りの埋土下位から炭片がまとまって出土した。全体に自然堆積の様相を呈する。

<底面・壁>底面は緩やかな凹凸があり、中央付近に被熱した痕跡があるが、固化できるほどはっきりしない。壁は外傾して立ち上がる。壁高は16cmである。

<遺物>ない。

<時期・性格>埋土の層相から焼成土坑で、古代に属すると推定される。

#### RD492土坑（第49図、写真図版45）

<位置・検出状況>北側調査区中央の3L4oグリッドに位置する。この付近は調査区北東に広がる水田跡の法向にあたり、北に向かって深く削平されている。本遺構はこの攪乱により、北半が失われ、南半も上面が大きく削られている。

<重複関係>RB027掘立柱建物跡と重複しているが、直接載りあっていないため新旧は不明である。

<規模・平面形状>残存部分から推定すると隅丸長方形を呈していた可能性が高い。辺の長さは0.98mである。

<埋土>焼土粒、To-a粒を含む黒色土が主体である。

<底面・壁>底面は中央に向かって凹んでおり、焼土が形成されている。焼土は最大で8cmである。掘り方があり、細かい凹凸が見られる。Ⅴ層起源の黄褐色砂を含む極暗褐色の砂質シルトで埋め戻されている。壁は内湾気味に立ち上がる。壁にも焼土が形成されている。壁高は16cmである。

<遺物>埋土から土師器34.9gが出土した。

<時期・性格>遺構の様相から焼成土坑で、出土遺物と埋土中のTo-aテフラから平安時代に属する。

#### RD493土坑 (第49図、写真図版45・46)

<位置・検出状況>北側調査区の中央からやや東よりの3L6rグリッドに位置する。上面と遺構中央が攪乱によって南北に割られている。

<重複関係>RB033掘立柱建物跡と重複し、同建物のPP107に載られている。

<規模・平面形状>残存部分から、隅丸長方形と考えられる。辺の長さは1.28×1.12mである。

<埋土>二次堆積の焼土と焼土粒を多く含む黒褐色の砂質シルトが主体である。1～2層中に白色土の小粒が見られるが、To-aテフラか。下位に炭、焼土ブロックが堆積する。

<底面・壁>底面は若干の凹凸があり、壁は直立気味に立ち上がる。壁高は16cmである。

<遺物>ない。

<時期・性格>以上の特徴から焼成土坑で、埋土中に含まれる白色粒がTo-aテフラならば平安時代か。

#### RD494土坑 (第49図、写真図版46)

<位置・検出状況>北側調査区の南西側の3L13cグリッドに位置する。検出面はⅢ～Ⅳ層で、To-aテフラを含む黒褐色土の広がりとして検出した。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>隅丸長方形を呈する。辺の長さは1.81×1.02mである。

<埋土>遺構の中央部分はⅣ層起源の黄褐色土粒を斑に含む黒褐～褐色土で、人為堆積の可能性がある。東と西に中央の層を切るような形でTo-aテフラを含む黒褐色土が堆積する。この層相からもともとあったやや小型の土坑の東西に木根等が入り込んだようにも見られるがはっきりしなかった。

<底面・壁>底面は東西、特に東側が深く、副穴状である。壁は内湾気味に立ち上がる。壁高は36cmである。

<遺物>埋土から土師器79.3gが出土した。

<時期・性格>To-aテフラ粒を含む埋土や出土遺物から平安時代と思われるが、性格は不明である。

#### RD495土坑 (第49図、写真図版46)

<位置・検出状況>北側調査区南側の3L17eグリッド付近に位置する。東側の一部を攪乱によって破壊されている。検出面はⅢ層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>隅丸台形を呈し、辺の長さは1.63×1.38mである。

<埋土>Ⅳ層起源の黄褐色土粒や炭粒を含む黒～黒褐色シルトが主体である。埋土下位には焼土粒を含む。堆積状況から自然堆積と思われる。

<底面・壁>底面は平坦でしまっている。壁は内湾気味に立ち上がる。底面西半と西壁、北壁の西よりの一部に焼土が形成されている。焼土は、最も厚いところで4cm程度である。

<遺物>北隅の壁際と埋土中位から145の須恵器が出土した。そのほか埋土から土師器24.6gが出土した。また、北隅と南壁際から炭化材が少量出土している。

<時期・性格>出土遺物と遺構の様相から平安時代の焼成土坑である。

## RD496土坑 (第49図、写真図版47)

- <位置・検出状況>北側調査区南側の3L11mグリッド付近に位置する。検出面はIV層である。
- <重複関係>RA198竪穴住居跡の北西隅を被る。
- <規模・平面形状>楕円形を呈し、径は1.16×0.96mである。
- <埋土>IV層起源の黄褐色土粒や若干の炭を含んだ黒褐色土が主体である。南東の隅に黒褐色土粒を含んだ暗褐色土が堆積する。
- <底面・壁>底面はVI層の礫層上面で、細かい凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がる。壁高は16cmである。
- <遺物>ない。
- <時期・性格>平安時代のRA198竪穴住居跡を被っていることからこれより新しいが、平安以降とするが、埋土の様相から近代以降とは考えられない。

## RD497土坑 (第50図、写真図版47)

- <位置・検出状況>北側調査区南東の3L14sグリッド付近に位置する。周辺はIV層が削られている上に木根により攪乱されており、本遺構も上面をかなり削られている。検出面はIV層である。
- <重複関係>ない。
- <規模・平面形状>隅丸長方形を呈し、辺の長さは1.61×1.14mである。
- <埋土>To-aテフラ粒とIV層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色シルトが主体である。東側の下位には黄褐色土粒と黒褐色土粒が斑に混合するに及び黄褐色土の砂質シルトが堆積する。人為堆積と思われるがはっきりしない。
- <底面・壁>底面は緩やかな凹凸がある。壁は西側は緩やかに、東側は急に外反気味に立ち上がる。
- <遺物>埋土から土師器32.3gが出土した。
- <時期・性格>埋土に含まれるTo-aテフラ粒、出土遺物から平安時代と考えられる。

## RD498土坑 (第50図、写真図版47)

- <位置・検出状況>北側調査区東部の3L6v~7vグリッドに位置する。検出面はIV層中で、黒褐色シルトによる円形プランとして認知した。
- <重複関係>無し。
- <規模・平面形状>円形で、開口部径0.83×0.83m、深さは最深16cmである。
- <埋土>埋土は4つに分層した。埋土上位の1層は黒色シルトによる自然堆積層で、締まりが弱く、炭化物が微量認められる。2~4層は焼成行為に関係する人為堆積層と判断される。2層は焼土層、3・4層には極めて良好な遺存状態にある炭化材が多量に包含されていた。
- <底面・壁>底面はIV層中で、全体的に丸底気味でやや凹みがある。壁は北壁や東壁は緩く外傾気味で、南壁や西壁は直立気味に立ち上がる。
- <遺物>無し。
- <時期・性格>土師器などの出土が無く、時期は不明である。ただし、埋土の様相からは古代と推定される。焼土ブロックや炭化材の在り方から、何らかの焼成行為の後に、それらが廃棄された土坑と捉えられる。
- <その他>底面直上付近から出土した炭化材2点について、炭化材樹種同定を業務委託した。その結果、2点ともにコナラ属コナラ節と同定された。加えてコナラ節は、平安時代の竪穴住居構築材とし

て一般的に利用されていた傾向が窺える旨の考察を得られている。

#### RD499土坑（第50図、写真図版47）

<位置・検出状況>北側調査区南側の3L13fグリッドに位置する。検出面はⅢ～Ⅳ層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>円形を呈するが、輪郭は工具痕のような痕跡が残る。径は1.22×1.06mである。

<埋土>2層に細分される。上層はⅡ層起源の黒褐色土ブロック、Ⅳ層起源の黄褐色土粒を斑に含む黒褐色砂質シルト、下層はⅣ層起源の黄褐色土ブロックを含む黒褐色砂質シルトで、埋土中に骨片を含む。

<底面・壁>底面はⅣ層に形成される。凹凸があり掘削時の工具痕の可能性が高い。壁は内湾気味に立ち上がる。

<遺物>埋土中の細かい骨片のみである。

<時期・性格>埋土の様相から新しいものと考えられるが、時期を決定づけるような遺物がなかったため、報告した。土坑輪郭の凹凸、底面の凹凸は剣先スコップの痕跡の可能性が高い。骨片が出たことから墓塚と思われるが、本遺構が近代のものとなれば家畜の墓塚の可能性が高い。

#### RD500土坑（第50図、写真図版48）

<位置・検出状況>北側調査区南側の3L13iグリッド付近に位置する。検出面はⅣ層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>円形で、径は1.30×1.22mである。輪郭がRD499土坑と同様、工具痕のような痕跡が残る。

<埋土>Ⅳ層起源の黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が主体である。多寡によって2層に細分される。下位には黒褐色土ブロックを少量含む褐色砂礫が堆積する。

<底面・壁>底面は礫層中にあり、中央が凹状に凹む。壁は内湾気味に立ち上がる。

<遺物>埋土から166の陶磁器25.7gが出土した。

<時期・性格>出土遺物から近代以降の墓塚と思われる、家畜の墓塚の可能性が高い。（金子）

#### RD501土坑（第50図、写真図版48）

<位置・検出状況>北側調査区南部の3L14k～15lグリッドに位置する。検出面はⅣ層下位～Ⅴ層で、黒色シルトによる円形プランとして認知した。付近の現況は自動車整備工場の直下で、旧地形は著しく削平され、また産廃物などを廃棄した現代の投乱が多数認められる。本遺構についても東側や中央の一部を攪乱で破壊されている。

<重複関係>無し。

<規模・平面形状>楕円形の土坑2つが合わさったような平面形で、上面観は瓢箪状を呈する。規模は、全長2.28m、幅は最大径で1.05m、深さは7～15cmで平均的には14cm前後である。

<埋土>北側では1層黒色シルトによる単層である。中央から南側は、1・3層黒色シルトに挟まれて、黄褐色砂質粘土が15%程混入する黒褐色シルトの堆積がみられる。全て人為により埋め戻された土層と判断される。

<底面・壁>底面は砂質土層で全般に軟質で脆い。北側は攪乱による破壊が著しく、底面形状は判然としない。南側ではほぼ平坦である。壁は、南東壁は直立気味に、その他の部分では緩く外傾気味に

立ち上がる。

<遺物>無し。

<時期・性格>出土遺物が無く、時期は不明である。土層の様相からも時期推定は言及し難いが、古代よりは新しいと推定しておきたい。(星)

#### RD502a土坑 (第43図、写真図版48)

<位置・検出状況>北側調査区東側の3L5sグリッドに位置する。

<重複関係>RB032掘立柱建物跡、RB033掘立柱建物跡、RD502b土坑と重複する。RB032掘立柱建物跡とは柱配置と本土坑の位置から、建物に本土坑が伴うものと推測される。RB033掘立柱建物との新旧は不明であるが、RD502a土坑の上面に本土坑が載る。本土坑の上面には攪乱層があり、それを除去したところ、IV層で黒褐色土の広がりとして検出した。

<規模・平面形状>楕円形を呈し、径1.31×1.12mである。

<埋土>締りのない灰色味を帯びた黒褐色土で、IV層起源の黄褐色土粒を少量含む。

<底面・壁>底面は礫層上面である。細かな凹凸があり、壁は極緩やかに立ち上がる。

<遺物>埋土中より、土師器10g、193の鉄釘が出土した。

<時期・性格>埋土の様相から、近世以降のものと推測される。また、RB032掘立柱建物跡に伴う可能性が高く、便所の便壺として使用した桶の痕跡の可能性もある。

#### RD502b土坑 (第44図、写真図版48)

<位置・検出状況>北側調査区の東側の3L5sグリッドに位置する。検出はRD502a土坑精査後、V～VI層上で、黒褐色シルト粒を含む汚れた砂質シルト、砂の広がりを検出したことによる。なお、この土壌中の黒褐色シルト粒は、上面にあるRD502a土坑の埋土に類似するものであるが、混合割合から同一の土坑とはとらえられなかったため、より古い土坑とみて報告するものとしたが、RD502a土坑が便壺などの桶を据えていた土坑とすれば、汚れた土壌が下位の砂礫層にしみ出した結果、上記のようなプランとなった可能性もある。

<重複関係>RD502a土坑、RB032掘立柱建物跡、RB033掘立柱建物跡と重複する。RD502a土坑は本土坑の上位にあり、本土坑が旧い。RB032掘立柱建物跡のPP111が本土坑の西壁を載る。また、本土坑のプランはRB033掘立柱建物跡の柱配置の中にちょうど入ることから、共存している可能性が高い。

<規模・平面形状>不整形で、径は2.57×2.04cmである。

<埋土>やや灰色味のある黒褐色シルト粒を含む砂質シルト、砂である。

<底面・壁>底面は凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。壁高は10cmとごく浅い。

<遺物>ない。

<時期・性格>RB033掘立柱建物跡が近世以降の主屋に付属する便所などの附属屋とすれば、便壺を据えた土坑の可能性と、上位のRD502a土坑から染み出た汚れた土坑の広がりの可能性の両方が考えられる。(金子)

#### RD503土坑 (第50図、写真図版49)

<位置・検出状況>北側調査区中央部よりやや東側の3L3u～4vグリッドに位置する。検出面はV層で、黒褐色シルトによる楕円形プランとして認知した。本遺構付近から北に向かっては、水田造成に伴い2m以上の深さで旧地形が改変されているが、本遺構はその縁辺部に位置する。

<重複関係>無し。

<規模・平面形状>平面形は楕円形で、規模は1.57×1.25m、深さは最深33cmである。

<埋土>全体的には黒褐色シルトを主体とするが、黄褐色砂質土の含有の割合などで分層した。1～4層は人為による埋め戻し土と推定される。5層は地山崩落土と判断したが、あるいは誤って掘り過ぎた地山そのものであった可能性もある。

<底面・壁>底面はIV層やV層で凹凸が激しい。壁は全体的には外傾若しくは直立気味に立ち上がるが、南壁は大きくオーバーハングする。

<遺物>土師器が11.0g出土した。

<時期・性格>時期は古代と推定される。性格は不明である。

#### RD504土坑 (第51図、写真図版49)

<位置・検出状況>北側調査区南部の3L170グリッドに位置し、本遺構の南に近接してRA199竪穴住居跡が所在する。検出面はIV層中で、黒褐色シルトの円形プランとして認知した。

<重複関係>無し。

<規模・平面形状>平面形は円形で、規模は1.16×1.12mである。

<埋土>1層黒褐色シルトが埋土の大部分を占め、壁の地山崩落土と捉えた2層褐色砂質土が北壁際を中心に堆積する。余て自然堆積と判断される。

<底面・壁>底面はV層褐色砂質土中で、ほぼ平坦である。壁は外傾気味に立ち上がる。壁高は最深22cmである。

<遺物>土師器が14.5g出土した。

<時期・性格>時期は古代と推定される。RA199竪穴住居跡と近接した関係にあることから、同竪穴住居跡に伴う何らかの付属施設である可能性も考えられよう。  
(黒)

#### RD505土坑 (第51図、写真図版49)

<位置・検出状況>北側調査区南端の3L201グリッドに位置する。検出面はⅢ～Ⅳ層である。南西に隣接してRD506土坑がある。

<重複関係>RG058溝跡を載る。

<規模・平面形状>南西壁がやや扁平であるが、円形を基調とする。径は1.04×0.94mである。

<埋土>V層起源の黄褐色砂を含む黒褐色砂質シルトで埋め戻しである。下層にはやや粘性のある黒色砂質シルトが中央部分が盛り上がるように堆積する。

<底面・壁>底面は平坦であるが、壁はやや内湾気味に立ち上がる。壁高は86cmである。

<遺物>埋土下層から167の京焼風信楽焼陶器の汁次、磁器破片など103.3gのほか骨片が出土した。

<時期・性格>埋土の状況や出土遺物の年代観から幕末～明治時代の墓塚である。

#### RD506土坑 (第51図、写真図版49)

<位置・検出状況>北側調査区南端の3L20kグリッドに位置する。検出面はⅢ～Ⅳ層である。北東に隣接してRD505土坑がある。

<重複関係>RG058溝跡を載る。

<規模・平面形状>楕円形を呈し、径は0.9×0.79mである。

<埋土>壁際にV層起源の黄褐色砂ブロックを多く含む黒褐色砂質シルト、中央に混入物の少ない黒

褐色砂質シルトが堆積する。壁際の土壌は埋め戻しで、中央は桶の痕跡か。

<底面・壁>底面は平坦で壁は内湾気味に立ち上がる。壁高は40cmである。

<遺物>埋土下層から骨片が出土した。

<時期・性格>埋土の状況から、墓塚と考えられる。時期を示すような遺物はないが、RD505土坑と隣接してあること、埋土の状況が類似することからあまり大きな時期差はないものと思われる。

#### RD507土坑（第51図、写真図版50）

<位置・検出状況>北側調査区東側の3L2vグリッド付近に位置する。周辺は調査区北東の水田跡の法面で北に向かって徐々に深く削られている。VI層まで削られた斜面で黒褐色シルトブロックを含む黒褐色砂の広がりを検出したことによる。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>隅丸のやや胴張りの方形を呈する。径は1.12×1.11mである。

<埋土>やや灰色味のある黒褐色シルトブロックを含んだ砂、砂を含んだ黒褐色シルトである。

<底面・壁>底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。斜面上方の壁高は26cmである。

<遺物>ない。

<時期・性格>時期を示すような遺物はないが、周辺の遺構の分布、埋土の様相から近世以降と推定される。

## 6 竪穴状遺構

#### RE013竪穴状遺構（第51図、写真図版50）

<位置・検出状況>北側調査区北端の2K10rグリッド付近に位置する。RG089堀跡に載られて、南辺しか残っていない。堀周辺の黒色土を除去して、遺構検出を行っている際にII層下位で検出したが、黒色土中でわかりにくかったため、実際はより上から掘り込まれていた可能性がある。南辺中央と西辺に擾乱が入る。

<重複関係>RG089堀跡に載られる。

<規模・平面形状>残存している部分の径は4.37mである。平面形は不明であるが、円形もしくは隅丸方形を呈すると考えられる。

<埋土>IV層起源の黄褐色土粒を含む黒色シルトである。

<床面・掘り方・貼り床>床面はIV層下位～礫層上面に形成され、ほぼ平坦で締まっている。掘り方は若干の凹凸があり、黒褐色土粒を含む褐色シルトが堆積するが、貼り床はない。

<壁>外傾して立ち上がる。壁高は15cmである。

<遺物>埋土から土師器8.2gが出土した。

<時期・性格>埋土の様相や出土遺物から古代と推定される。

(金子)

#### RE014竪穴状遺構（第52図、写真図版51）

<位置・検出状況>南側調査区（飛び地）東端部の6K1x～2xグリッドに位置する。検出面はIV層で、表土を除去した段階で黒褐色シルトによる竪穴状のプランが比較的明瞭に認知された。東側は調査区外に続く。カマドや柱穴を認知できなかったことから竪穴状遺構として遺構登録を行った。

<重複関係>無し。

<規模・平面形状>全体の平面形は方形基調でやや楕円形を呈する。規模は、東西方向は1.86m以上、南北方向では3.2mを測る。

<床面・掘り方・貼り床>床面はV層中でほぼ平坦である。硬化面などは認められない。

<壁>外傾気味に立ち上がる。壁高は30cmを測る。

<埋土>1～3層に分層した。埋土上位に堆積する1層は近現代の可能性もある。埋土中位～下位には2層黒色シルトが堆積する。この2層中には暗褐色砂質土が約7%と、To-aテフラの粒状が1%程混入する。3層黒色シルトは北側の底面付近を中心に堆積する。

<付属施設>西壁に長さ約70cm、幅62～92cmの台形状の張り出しが認められる。この張り出し中に柱穴状の小土坑が1個認められる。この小土坑は南西側に向かって斜めに壁立ちし、底もやや凹凸がある(※平坦ではない)。杭などが抜き取られた様相に観てとれる。埋土は竪穴本体と同様に2層黒褐色シルトが堆積する。

<遺物>土師器7.8gと陶磁器類0.8gが出土した。陶磁器は近現代と推定され、異時期の流れ込みと判断される。

<時期・性格>時期は、土器やTo-aテフラの在り方から平安時代と推定される。性格などは不明である。(星)

## 7 焼土遺構

### RF012焼土遺構 (第52図、写真図版51)

<位置・検出状況>北側調査区の南西側3L14aグリッド付近に位置する。検出面はII層下位～III層である。ごく浅い緩やかな凹みに焼土が形成されていた。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>不整形な焼土で、径は80×47cmである。

<焼土の厚さ・特徴>最大で6cm程度である。焼土はあまり赤化していない。IV層が焼土化しており、やや赤みのある黒褐色である。

<遺物>土器などはないが、炭化材が出土している。

<時期>検出面と周辺の状況から古代と推定される。

(金子)

## 8 溝跡・堀跡

### RG058溝跡 (第53図、写真図版52～54)

<位置・検出状況>北側調査区東部の3L3vグリッドから、南の3L2rグリッドに直線的に延びた後、西へ直角気味に方向を変え、3L19gグリッドに向かって延びる。連続性や規模の規格性から、第13・14次調査で検出されたRG058溝跡と同一遺構と捉え、遺構名称も準拠した。検出面は概ねIV層で、黒褐色シルトの溝状プランとして認知した。

<重複関係>RZ022・023遺跡状遺構に裁られる。

<規模・平面形状>北北東から南南西に向かって直線的に延びた後、西へほぼ直角的に曲がる。平面形は逆L字状を呈する。規模は、今回の検出部は約43m、第13・14次調査分と合わせると総全長約56mに及ぶ。溝幅は、開口部径が28～50cm、底部径が22～30cmを測る。深さは5～20cmで、南一北方向部分では平均10cm前後、東一西方向部分では5～10cmである。

<断面形・底・壁>断面形は皿形を基調とする。底面は、地山の土質の違いでやや相違があり、IV層粘土層部分ではほぼ平坦気味、V～VI層砂礫部分ではかなりの凹凸が看取される。底面の標高値をみると、D—D'断面作成地で122.00m、E—E'断面作成地で121.950m、F—F'断面作成地で121.980m、G—G'断面作成地で121.700mである。これらの数値を見る限り、南—北方向においては標高差がほとんど無く、東—西方向では東から西へ僅かに標高を減じる。

<走行方向>N—12'—Eで直線的に南へ延びた後、3L21rグリッド付近では直角に西に走行を変えN—82'—Wに向かう。北端は水田造成に伴い破壊されている。西端はG—G'断面作成地よりやや西側である3L19iグリッド付近で途切れる。ただ、この付近はII層黒色シルト層が比較的厚く堆積することから、遺構プランを認識できなかった可能性もある。また、明確には掴めなかったが、本遺構の西延長線上に相当する調査区境の3K18vグリッドにおいて、本遺構の続き部分の可能性のある黒色シルトのシミが検出されている（※第8・10図の遺構配置図にのみ図化・明示している）。

<埋土>1層黒褐色シルトによるほぼ単層で、黄褐色砂質土が少量（7%前後）混入する。全般に締まりが弱く、自然堆積と推定される。

<遺物>土師器19.1gが出土している。何れも小破片である。

<時期・性格>今回の調査からは帰属時期の推定が難しいが、第13・14次調査時の出土土器から、平安時代9世紀後葉～10世紀前葉に属すると考えられる。性格については、本次調査で検出されたRG083溝跡及び、第13・14次調査検出のRG059溝跡・第16・17次調査検出のRG079溝跡と等間隔を持って並行する様子にあり、これらは規模の観点からも同時性が高いと思われる。いわゆる波板状の圧痕などは認められなかったが、この2条の溝跡が道路跡に伴う道路側溝である可能性も考えられようか。

#### RG083溝跡（第53図、写真図版52・53）

<位置・検出状況>北側調査区東部の3L3x～3L19vグリッドに位置する。第13・14次調査のRG059溝跡及び第16・17次調査のRG079溝跡に続く遺構と判断される。検出面は概ねIV層で、黒褐色シルトの溝状プランとして認知した。また、RG058溝跡とは、等間隔を持ってほぼ並行に走ることからセット関係の遺構と捉えられる。

<重複関係>RZ022・023道路状遺構に裁られる。

<規模・平面形状>平面形は、今回の調査区内では北北東から南南西に向かって直線的に延びる。規模は、総全長約33mに及び、溝幅は開口部径が28～50cm、底部径が18～35cmを測る。深さは5～12cmで平均的には10cm前後である。

<断面形・底・壁>断面形は皿形を基調とする。底面は全体的にかなりの凹凸が看取される。底面の標高値をみると、A—A'断面作成地で122.02m、B—B'断面作成地で122.01m、C—C'断面作成地で122.04mである。標高差はほとんど看取されない。

<走行方向>N—12'—Eで直線的に南—北方向へ延びる。北端は水田造成に伴い破壊されている。南端は、第13・14次調査のRG059溝跡及び第16・17次調査のRG079溝跡に繋がると判断すると、4L1wグリッド付近で西へほぼ直角に走行を変えN—82'—Wに向かい走る。

<埋土>1層黒褐色シルトによるほぼ単層で、黄褐色砂質土が少量（7%前後）混入する。全般に締まりが弱く、自然堆積と推定される。1a層は壁の地山崩壊土と判断される。

<遺物>無し。

<時期・性格>今回の調査では帰属時期を推定する遺物は出土していないが、第13・14次調査のRG059溝跡及び第16・17次調査のRG079溝跡の出土土器から、平安時代に属すると考えられる。性格につい

ては、RG058溝跡と等間隔を持って並行して走ることと、溝幅など規模の観点からも同時性が高い様子が窺える。道路跡に伴う道路側溝である可能性も考えられようか。(星)

#### RG084溝跡 (第53図、写真図版54)

<位置・検出状況>北側調査区北寄りの2L17d～2L17eグリッドに位置する。検出面はIV層であるが、周辺はIV層上面が削られており、本溝跡ももっと東西に延びるものと思われるが、割平され一部の溝底しか残っていない。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>長さ2.08m、幅33～43cmである。

<断面形・底・壁>壁際がやや深く中央が浅い。溝底の工具痕と思われる。壁は内湾する。壁高は6～8cmである。

<走行方向>N-87° -Wである。

<埋土>IV～V層起源の黄褐色砂質シルト、砂の粒を含む黒褐色土である。

<遺物>ない。

<時期・性格>埋土や工具痕の状況から、古代と推定される。

#### RG085溝跡 (第54図、写真図版55)

<位置・検出状況>北側調査区北西の2K15qグリッド～2K20rグリッドに位置する。検出は北半がⅢ～IV層上で、南半は重複するRA189竪穴住居跡の埋土と本溝跡の埋土が似通っており、新旧がはっきりしなかったが、竪穴住居跡の埋土断面と竪穴住居跡の埋土を下層まで下げた段階でプランを把握した。

<重複関係>RA189竪穴住居跡を本溝跡が載っている。

<規模・平面形状>直線的な溝跡で、長さ9.45m、幅22～33cmである。

<断面形・底・壁>断面形は逆台形～長方形で、一部は西側が深い。底は平坦で、壁は急に外傾～直立気味に立ち上がる。

<走行方向>N-10° -Wである。

<埋土>混入物の少ない黒色土であるが、壁際にIV～V層起源の黄褐色土粒を含む。

<遺物>ない。

<時期・性格>重複関係からRA189竪穴住居跡より新しいが、出土遺物がないので時期を特定できない。なお、遺構の形状や直立気味に立ち上がる壁の様相、埋土がRG087溝跡に類似している。方向は若干異なるが、同一の溝の可能性はある。

#### RG086溝跡 (第54図、写真図版55・56)

<位置・検出状況>北側調査区北側の2K13m～2K14r～2K20sグリッドに位置する。ところどころ攪乱で深く破壊されている。検出面はⅢ～IV層である。

<重複関係>RA189竪穴住居跡の2号カマドの煙道～煙出しと重複していると思われるが、重複部分が攪乱によって破壊されており、新旧は不明である。

<規模・平面形状>南側からやや蛇行して北上し、西に向かって屈曲し、直線的に西側の調査区外に延びる。総延長は21.7m、幅29～73cmである。

<断面形・底・壁>断面計は半円形で、南北方向の部分では開口部でやや開く。底面は内湾し、壁も

内湾気味に立ち上がる。

<走行方向>南北方向はN-11°-W、東西方向はN-82°-Wである。

<埋土>Ⅳ～Ⅴ層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色土が主体で、黄褐色土粒の多寡で単層～5層に細分される。

<遺物>ない。

<時期・性格>埋土の層相と形状から古代より新しいと思われるが、出土遺物がなく、時期を特定できない。

#### RG087溝跡（第54図、写真図版54）

<位置・検出状況>北側調査区西側の2K24s～3K1sグリッドに位置する。本溝跡の北端は大きな攪乱で失われている。南端は徐々に浅くなる。東壁の一部は攪乱で失われている。

<重複関係>RB006掘立柱建物跡と重複し、うちPP93と重複するが、重なっている部分が浅いため、新旧を明らかにできなかった。

<規模・平面形状>直線的な溝跡で、長さ7.6m、幅15～50cmである。

<断面形・底・壁>中央部分の西壁に段をもつ。底面は内湾し、壁は直立気味に立ち上がる。段の部分の壁は内湾気味に立ち上がる。壁高は23cmである。

<走行方向>N-1°-Wである。

<埋土>混入物の少ない黒褐色のシルトである。壁際や段の部分には黒褐色土粒を含む褐色砂質シルトが堆積する。

<遺物>ない。

<時期・性格>埋土の層相から古代の可能性も皆無ではないが、出土遺物がないため時期を特定できない。なお、遺構の形状や直立気味に立ち上がる壁の様相、埋土がRG085溝跡に類似している。方向は若干異なるが、同一の溝の可能性はある。

#### RG088溝跡（第54図、写真図版56）

<位置・検出状況>北側調査区西側の2K25u～3K2tグリッドに位置する。北端は攪乱で失われ、南端は徐々に浅くなる。ところどころ攪乱で破壊されている。

<重複関係>ない。

<規模・平面形状>蛇行して北上する溝で、長さは8.10m、幅56～134cmである。

<断面形・底・壁>ごく浅い半月状の断面形で、底面は若干内湾し、壁は極く緩やかに立ち上がる。

<走行方向>蛇行しているが、両端の中央を結んだ線はN-22°-Eである。

<埋土>Ⅳ層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色土で、質感からやや新しい様相である。

<遺物>埋土から194の鉄釘が出土した。

<時期・性格>埋土の層相と出土した鉄釘から近世以降と考えられる。

（金子）

#### RG089堀跡（第55図、写真図版57～59）

<位置・検出状況>北側調査区北端部の2K8n～2L10oグリッドに位置する。向中野館遺跡第10～13次調査でRG012堀跡と命名された堀跡の続きとなる一連の遺構である。検出面はⅡ層黒色シルト中（※このⅡ層はTo-aテフラや土師器片を含む）である。

補足事項として、堀の南壁付近一帯は、地山が南から北に向かって傾斜を示し、To-aテフラを含

むⅡ層の層厚も厚い。このことから古代段階での自然地形は、小河川・沢・沼地など広義の凹地の肩部に相当する地形であったことが想起される。

<重複関係>RE013竪穴状遺構を載る。

<規模・平面形状>今回の調査区内では、全長約50mに亘り東-西方向へ直線的に延びる。堀跡の東端付近は、堀跡に伴う埋土が確実に残存するC-C'断面より東へ約8mまでの範囲を図化対象としたが、それより東側付近は明らかに農業用水路に伴う土層であった。

堀の上幅については、北壁のほとんどが調査地外になるがC-C'断面を作成した付近においてのみ北壁の立ち上がりを確認できた。約5.1mを測るが、堀上部がかなり削平されていることから、堀本来の上幅を反映していない。向中野館遺跡第12・13次調査で検出したRG012堀跡では上幅6.9m前後を測る。深さは、遺存状態の良いA-A'断面付近で1.2mを測る。

<断面形・底・壁>断面形は、上述のとおり北壁が調査地外になることから把握できない。向中野館第12・13次調査部分（※RG012堀跡）では腰部付近に丸みを持つ深皿形を呈する。

堀底面は大部分がⅥ層相当である黒褐色砂礫層にあるが、B-B'断面作成付近のみⅦ層下位相当である暗褐色礫層を底面とする。堀底面の標高値をみると、A-A'断面作成地点では約120.8m、B-B'断面付近で約120.7m、C-C'付近で約120.6mを測る。これらの数値から、堀底面は標高約120.7mを中心とし、東へ向かうほど標高が僅かに低くなる様子で捉えられようか。

壁は緩く外傾に立ち上がる。おおよそその傾斜角度は30~40度である。壁を構成する地層（※地山）は、大部分がⅡ~Ⅵ層で、B-B'断面付近のみⅡ~Ⅶ層上位を壁とする。

<走行方向>本調査区内においてはN-85°-Eで、ほぼ東-西に走る。

<埋土>埋土上位には近現代の盛土層が厚く堆積し、その下位~底面にかけて古い時代の埋土が堆積する。各土層の命名に際しては、近現代と捉えられる盛土層と、それより古い埋土（※堀本来の堆積層と捉えられる）に大別して明示・図化した。

盛土は、施された年代の違いで新しい順に盛土1（平成21~22年）→盛土2（昭和50年代か）→盛土3（近現代）と区分した。盛土1は、平成21年度に実施された向中野館遺跡第12・13次調査終了後に施工されたもので、砕石などを中心とする。盛土2は、現代ゴミの混入が顕著で、ゴミ廃棄を意図して掘られ埋め戻されたゴミ穴で、空き缶などの年代から昭和50年代と推定される。盛土3は、本遺構プランを検出する際の鍵層でもあり、堀跡のプランを利用して構築したとみられる農業用水路に伴う埋め土と考えられる。近現代と推定しておきたいが、土層の様相からは盛土2より確実に古い時代の盛土である。18世紀後半以降の陶磁器片や現代ゴミも少量出土したが、後者は後世の混入と考えられる。農業用水路は、向中野館遺跡第12・13次調査報告書によれば、近世から現在に亘り幾度か改修されているようであるが、この盛土3はコンクリート枠に改修される以前の盛土と判断され、少なくとも近代と推定され、あるいは近世後半まで遡る可能性もある。

堀本来の堆積層と捉えた古い時代の埋土は、土色・土質などの違いで1~8層に分層した。全て自然堆積層と判断される。1層はⅢ層を母体とする暗褐色砂土を主体に、Ⅶ層起源と推定される亜円礫（粒径10~50mm）を多量に含む。2層は黒色シルト質粘土で、1層より全体的に粒径の大きな亜円礫（粒径30~100mm）を有意に含み、特徴として酸化鉄の集積が各所に認められることから、水成作用の影響を受けた堆積層と判断される。3層はⅡ層が母体と推定される黒色シルトを主体とし、亜円礫（粒径10~30mm）を有意に含む。4層は黒色泥質土で、亜円礫（粒径30~100mm）を有意に含む。混入する亜円礫の粒径は2層と類似することから、2層と起源を同じくする母体土が水成作用により泥土化した土層と推定される。5層は黒色泥質シルトで亜円礫（粒径10~30mm）を少量含む。6層は黒褐

色砂礫層で、Ⅵ層を母体とする土層と推定される。7層黄褐色粘土は、壁際に堀底面よりやや上部に堆積が認められる。土質の様相からは、Ⅳ層若しくはⅦ層上位を母体とする土層と推定される。8層は黒色泥質土で、黒円礫（粒径30～50mm）を多量に含む。4層と土色や土質は類似するが、混入する礫は粒径がやや小さく、Ⅶ層を母体とする可能性が考えられる。

これら1～8層の全体的な傾向や特徴を記述すると、色調・土質は暗褐色砂土系（1層）、黒色シルト系（3層）、黒色泥質土系（2・4・8層）、黒褐色砂礫土系（6層）、泥質土と砂礫の混合土（5層）の5種類に大別される。1～3層は、堀跡ほぼ全域に堆積が認められ、それらの堆積順も規則性が看取される。4・5・8層など泥質土は、堀の埋没過程の初期若しくは掘機能時の堆積層の可能性が高いと考えられる。

層位毎の遺物出土状況は、1層から土師器・須恵器・陶磁器が、2層から土師器・須恵器、3層から土師器・須恵器が出土し、4～8層からは遺物は出土していない。遺物の出土状況から土層堆積の年代と推定すると、1層は近世頃の可能性がある（近世の用水路が構築された時期前後か）、2～8層は近世の陶磁器などが出土しないことから近世より古い年代の埋没土と考えられる。

<土橋>A-A'断面とB-B'断面作成地の中間付近において、中端が北側に張り出す様子を示す、地山が掘り残された空間が認められた。土橋と推定される。平面形は角が丸みを帯びる台形状で、規模は、幅（東一西）が2.1～2.9m、平均的な中端ラインより1.1m程北に張り出る。周辺からは柱穴などは未検出にある。

<遺物>（第81・83図153・154・168～171写真図版73・75）土師器456.0g、須恵器173.4g、陶磁器類2450.4gが出土している。153・154の須恵器片と168～171の陶磁器類を掲載した。土師器や須恵器は上述のとおり1～3層より出土している。陶磁器類は、盛土2・3を中心に1層から出土している。その中で1層出土の171は肥前産Ⅳ期（1690～1780年）である。

<時期・性格>今回の調査では近世以降の陶磁器や古代の土師器片以外出土していない。堀の構築年代や機能時の年代が中世まで遡るか否かは不明にあり、向中野館が中世城館なのか否かを推定する手がかりと成る成果は得られなかった。堀の埋没年代については、向中野館遺跡第12・13次調査で本遺構が農業用水路である「才川溝」に転用された年代を18世紀代以降と推定しており、時期の下限は18世紀代以前の可能性が浮上する。今回の調査で1層と命名した埋土からは肥前産Ⅳ期の磁器が出土している。上述の年代観に整合することから、「才川溝」への転用期の堆積層の可能性が十分考えられる。さらに、1層より古いと判断される2～8層は18世紀代より以前（あるいは17世紀後半以前と考えることもできる）まで遡ると捉えられる。

性格としては、向中野館を囲う堀南辺に相当する。堀南辺の様子がより具体的に明らかになったと言えるが、東辺との接点部分の様子が分からなかったことで、東辺に堀が築かれていたかは今回の調査成果からは言及できない。（里）

## 9 畝間状遺構

### RZ019畝間状遺構（第56図4、写真図版60）

<位置・検出状況>北側調査区北端の低地に堆積するⅡ層上面から検出された。2K12p～2K12xグリッド付近で、低地に沿って東西に長い範囲である。周辺はRG089堀跡南側で、Ⅱ層の黒色土が広がっており、上面（Ⅱa層）にTo-aテフラが分布することが確認された。テフラは上面全体に混入するものと思われたが、Ⅱa層を若干掘り下げていくと、テフラが溝状に平行して小粒～ブロック状に分

布することがかすかに認められた。本遺構の位置する低地では、西側の第16次調査においても畝間状遺構が検出されており（RZ013、RZ014）、それらに類似するものとして、精査を行うことにした。本遺跡の過去の調査例では、このような平行する溝状の畝間状遺構もしくは畝状遺構と呼ばれるプランは、往々にして不明瞭で、掘り込みとは言えないのではないかと多い。本遺構の場合、第16次調査のRZ013～015、今回の他の畝間状遺構（RZ020、021）に比して、プランがさらに不明瞭で、溝状のプランを掘り上げようにも、周辺のTo-aテフラの混入するIIa層と見分けがつきにくいことが多かった。従って、本遺構については検出面でのTo-aテフラの集積する範囲と適宜断面を記録し、報告することにした。なお、遺構の周辺には現代の建物の基礎など攪乱が多く入り、プランはとどころ分断されている。

<重複関係>RG089堀跡に裁られる。

<面積・規模・形状>溝状にTo-aテフラの集積が認められる部分の面積は約40㎡である。条の方向はおおむね2方向に分かれている。西側～中央がN-68～74°-Wで、西端にはほぼ平行して10条、中央に7条である。東側は方向が異なりN-5～6°-Eで、3条である。

<埋土>IIa層で確認されており、To-aテフラの微細粒～極大粒が3～15%含まれるが、量の少ない箇所はIIa層と明瞭に分層できない。凹面にやや多い。また、平面で捉えられるプランが断面に一致していない箇所がある。

<遺物>ない。

<時期>To-aテフラの堆積から平安時代である。

#### RZ020畝間状遺構（第57・58図、写真図版61・62）

<位置・検出状況>北側調査区の中央、3L4j～3L5mグリッド付近に位置する。RA196竪穴住居跡の検出作業をおこなっていたところ、住居跡の埋土上層にTo-aテフラの粒が集中する黒～黒褐色土が平行する溝状のプランとして検出された。住居跡の北西から南東にかけて検出された。

<重複関係>RA196竪穴住居跡を載る。

<面積・規模・形状>検出した範囲の面積は14.4㎡で、RA196竪穴住居跡の範囲内である。幅20～50cm、長さ0.45～3.28mの平行する16条の溝状のプランである。埋土を掘り上げると、1条と5条、12条と13条は一つの溝となり、13条の溝となった。深さは4～15cm程で、底面は内湾し、壁も内湾気味に立ち上がる。

<埋土>To-aテフラの小～極大粒を2～30%含む黒～黒褐色土である。条により混入割合が異なり、ほとんど粒状の混入であるが、畝14の6b層はレンズ状の堆積である。また、平面のプランと断面が一致しない箇所もある。

<遺物>148の内黒土師器の坏31.9gが16条の埋土から出土した。

<時期>To-aテフラの混入から平安時代である。

(金子)

#### RZ021畝間状遺構（第58図、写真図版63）

<位置・検出状況>北側調査区南端部の3L17n～18nグリッドに位置する。検出状況は、II層を掘り下げている途中段階で検出したRA199竪穴住居跡のプラン上において、To-aテフラブロックを含む複数の溝状のプランが並走する様子で認められたことにより畝間状遺構と認知した。

<重複関係>RA199竪穴住居跡の埋土中に構築されている。

<面積・規模・形状>溝状のプランは、To-aテフラブロックの混入する広がりて4条を認知した。溝

状のプランの完掘段階での規模は、長さ250～275cm、幅20～40cm、深さ3～8cmで、15～30cmの間隔で並行する。本遺構の全体面積は約5.7㎡で、RA199竪穴住居跡の規模に依存した空間に広がりをみる。

＜埋土＞黒褐色シルト中において、To-aテフラがブロック状に約7%の割合で混入する。テフラの産状は、10YR6/4にぶい黄橙色の粉末状で、自然堆積による。補足として、本遺構下位のRA199竪穴住居跡の埋土にはTo-aテフラが認められない。

＜遺物＞無し。

＜時期＞To-aテフラ降下期より古く、従って平安時代10世紀前葉よりは古いと捉えられる。時期の上限はRA199竪穴住居跡の埋没後であることは確実である。

## 10 道路状遺構

### RZ022道路状遺構（第59・60図、写真図版64）

＜位置・検出状況＞北側調査区東部の3L4t～16xグリッドに延びる。検出面はIV層である。細谷地遺跡第10次調査RG038・039溝跡及び、第13次調査RG070・073溝跡とは一連の遺構と判断される。

＜重複関係＞RC066・058、RG083溝跡及びPP4～9・25・26・31・32柱穴状土坑を載る（※本遺構がそれらより新しい）。

＜規模・平面形状＞長さ約25.3m、幅200～360cm、深さは10～30cmである。

＜断面形・底・壁＞溝底が二つに分かれる様相を示し、中央は中州状にやや高まる。断面形は「W字状」に近い形態を呈する。底面はV層若しくはVI層中で、凹凸が激しい。壁は基本的に緩く外傾して立ちがある。底面の標高値をみると、A-A'断面作成地点では約121.1～121.2m、B-B'断面付近で約121.3m、C-C'付近で約120.7～120.8mを測る。これらの数値から、底面は北へ向かうほど標高が僅かに低くなる。

＜走行方向＞方向は、南側から北側に向かってN-15°-Wに延びる。北端は水田造成に伴い破壊されている。

＜埋土＞黒褐色シルトを主体とし、径30～200mmの珪円礫を少量含む。

＜遺物＞（第83頁172～177、写真図版75）土師器138.1g、須恵器83.3g、陶磁器類152.3gが出土した。172～177の陶磁器類を掲載した。陶磁器類の中である程度年代が特定できるものとしては、172・174が肥前IV期、173が肥前V期、176が18世紀以降、177が19世紀代と捉えられる。

＜時期＞出土陶磁器から近世と推定される。遺構同士の重複関係からは、古代の溝跡より新しい。過年度調査では近世と推定されている。本遺構の性格は不明にあるものの、断面形のあり方や溝幅などからは、道路跡などの可能性が考えられよう。

### RZ023道路状遺構（第60図、写真図版65）

＜位置・検出状況＞北側調査区南端部の3L19m～20wグリッドに位置する。検出面はIV層で、黒褐色シルトによる帯状のプランを検出した。

＜重複関係＞RA200竪穴住居跡、RG058溝跡を載る。

＜規模・平面形状＞長さ約19.6m、幅110cm前後、深さは5～16cmである。

＜断面形・底・壁＞断面形は全体的には浅皿状にある。底面は、A-A'・B-B'断面を作成した付近では丸底に近いが、C-C'断面を作成した付近では凹凸が激しく不規則的に掘られている様相で

ある。壁はわずかに検出したに留まる。底面の標高値は121.5～121.6mで標高差はほとんど無い。

<走行方向>ほぼ東一西方向を示し、N-95°-Eで直線的に延びる。西端は3L19aグリッド付近で途切れる。東端について、調査区外(第13・14次調査地)に延びる様相であるが、第13・14次調査では、本遺構の続きと判断される遺構は検出されていない。

<埋土>黒褐色シルトを主体とする。

<遺物>無し。

<時期・性格>今回の調査では帰属時期を推定する出土遺物が無い。遺構同士の重複関係からは、古代の遺構より新しい。過年度調査では、上述のとおり続き部分が検出されていない。本遺構の性格は不明にあるものの、底面掘り方の不規則な様子から、道路跡などの可能性が示唆される。仮に、RZ022道路状遺構のように溝底が2つに分かれる構造であったと推定した場合、北側には展開しないので、過年度調査区である南側に存在した可能性は残る。(星)

## 11 柱穴状土坑

柱穴状の土坑で、建物、柱穴列とならなかったものである。出土遺物などから明らかに近代以降と思われるものは除外した。なお、To-aテフラ粒を含むものでも木根等によるものではないかと思われるものもあり、表中に記している。

### PP1～PP3 (第61図)

<位置・検出状況>北側調査区南側の3L17fグリッド付近に位置する。検出面はⅢ～Ⅳ層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形>楕円形で、最大径32～37cm、深さ28～32cmである。

<埋土>Ⅳ層起源の黄褐色土粒を25～40%含む黒褐色シルトで、PP1とPP2にはTo-aテフラの粒を含む。柱痕跡があり、径は10～14cmである。

<遺物>ない。

<時期>To-aテフラの混入から平安時代と考えられる。

(金子)

### PP4～9・25・26・29・31・32柱穴状土坑 (第61図)

<位置・検出状況>北側調査区南東部の3L9t～15wグリッドに位置する。検出面はⅣ～Ⅵ層である。RZ022道路状遺構と重複関係にあるものを一括して集め記述する。

<重複関係>全てRZ022道路状遺構より古い。また、PP25・26・29を除くとRG058溝跡とRG083溝跡に挟まれた空間に位置する。

<規模・平面形状>円形や楕円形を基調とする。規模は、長径25～51cm、深さ16～46cmまで認められる。

<埋土>埋土は黒～黒褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土質砂質土が混じる。炭化物が微量認められるものもある。人為堆積と推定される。

<遺物>無し。

<時期・性格>上述のとおり、全てRZ022道路状遺構(近世)より古い。ただし、土師器などの出土遺物が無く、詳細な時期は特定できない。埋土の様相からは古代と推定される。(星)

PP10～PP13 (第61図)

<位置・検出状況>北側調査区南西側の3L11bグリッド付近に位置する。検出面はⅢ～Ⅳ層である。

<重複関係>ない。

<規模・平面形>円形～楕円形で、最大径25～38cm、深さ18～36cmである。

<埋土>Ⅳ層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色シルトである。PP11～13には柱痕跡があり、径は13～18cmである。

<遺物>ない。

<時期>時期は特定できないが、古代の埋土に類似する。

(金子)

PP17・19～21・41・44～48柱穴状土坑 (第61・62図)

<位置・検出状況>北側調査区東部の3L1yグリッド～南東部の3L19tグリッドに位置する柱穴状土坑を集めた。検出面はⅣ～Ⅵ層である。

<重複関係>重複関係は持たないが、PP45を除くとRG058溝跡とRG083溝跡に挟まれた空間に位置する。

<規模・平面形状>規模は、長径26～51cm、深さ20～36cmまで認められる。

<埋土>埋土は、PP21は黒色シルトの単層で締まりが弱い。その他は、黒～黒褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土質砂質土が混じり、やや締まる土質にある。また、炭化物が微量認められるものもある。全て人為堆積と推定される。

<遺物>無し。

<時期・性格>土器などの出土遺物が無く、時期は特定できない。埋土の様子からは、PP21は近世頃、その他は古代と推定される。

(星)

PP55～PP58 (第45図)

<位置・検出状況>北側調査区東側の2L25v、3L2u～3L1wグリッド付近に位置する。周辺は調査区北東の水田跡に至る法面で、北西方向に向かって徐々に深く削平されている。本柱穴状土坑群は法面のⅥ層中に黒褐色の砂質シルトや黒褐色砂の広がりを検出した。

<重複関係>ない。南側のRC006柱穴列の柱穴と掘立建物跡を構成するかも思われたが、柱筋がうまく組み合わなかった。

<規模・平面形>楕円形で、最大径43～75cm、深さ36～64cmである。

<埋土>黒褐色の砂質シルトや黒褐色砂が主体である。周辺遺構の埋土のような粘性のある灰色味を帯びたシルトではなく、真に柱穴状土坑かどうか迷うものも多かったが、明らかに周辺の砂礫層と異なっていたので柱穴状土坑として調査した。

<遺物>ない。

<時期>不明である。

PP59～PP63 (第62図)

<位置・検出状況>北側調査区の南寄り3L9n～3L11oグリッド付近に位置する。

<重複関係>PP62がRAI98竪穴住居跡に載られる。他はPP63が攪乱に載られている。

<規模・平面形>楕円～円形で、最大径28～34cm、深さ16～27cmである。

<埋土>Ⅳ層起源の黄褐色土粒を斑に含む黒褐色土で、PP62を除き、To-aテフラ粒を含む。PP59は

To-aテフラ粒を含んでいるが、下場がオーバーハングしており、根の可能性はある。

<遺物>PP59から土師器47.1g、須恵器18.5gが、PP60から見頭人の角礫が出土した。

<時期>To-aテフラの混入から平安時代と考えられる。

#### PP70～PP73、PP87、PP88 (第62図)

<位置・検出状況>調査区南西の3K7w、3K9u～3K11xグリッド付近に位置する。

<重複関係>ない。

<規模・平面形>円形を基調とし、最大径27～53cm、深さ19～42cmである。

<埋土>PP73を除いて柱痕跡と思われる層があり、径は9～26cmである。PP87にはTo-aテフラ粒が混入するが、断面の状況から木根等の可能性がある。PP72も根の可能性はある。埋土はIV層起源の黄褐色土粒を斑に含む黒褐色シルト、砂質シルトが主であるが、PP73は混入物のない黒色シルトである。

<遺物>PP73から150の土師器甕破片ほか土師器126.4gが、PP87から土師器14.2gが出土した。

<時期>埋土の状況からPP71を除いて平安時代か。PP71は柱痕跡、裏込めも明瞭でやや新しい様相である。

#### PP127、PP129～PP131、PP135、PP143 (第42図)

<位置・検出状況>北側調査区中央の2K22k～2L25lグリッド付近に位置する。周辺は調査区北東の水田跡に向かい徐々に削平されている箇所、遺構が失われていると思われ、本来は本柱穴状土坑群も建物を構成するものであった可能性が高い。PP131は断面形が漏斗型で、柱穴かどうか疑問が残る。

<重複関係>RB031掘立柱建物跡と重複しているが、PP135のみが同建物跡のPP139を載っている。

<規模・平面形>楕円形～円形で、最大径が17～73cm、深さ17～43cmである。

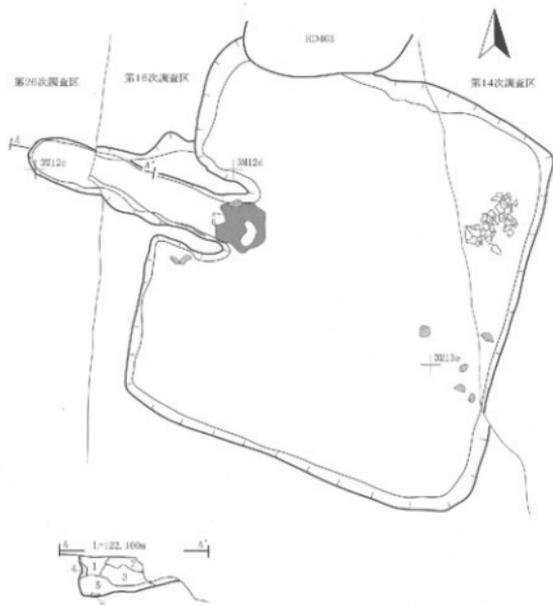
<埋土>IV層起源の黄褐色土粒を含む黒褐色シルトである。柱痕跡はない。

<遺物>PP135から178のすり鉢破片が出土している。

<時期>PP135は近世以降、その他も同様の時期と思われる。

(金子)

RA128



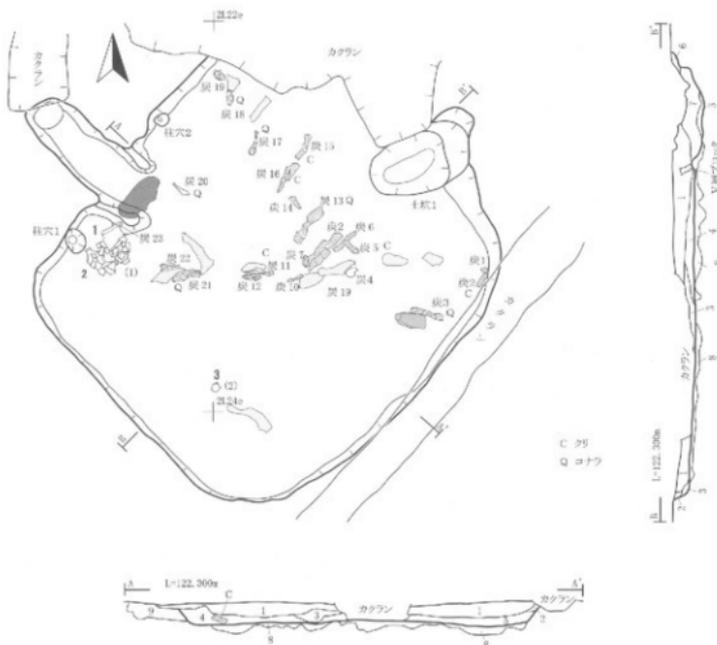
RA128 検出

- 1 10YR3/4 暗褐 砂質シルト 粘性なし 網りあり 深い  
黒褐色土小-大粒10% IV層上部の黄褐色土ブロック径3cm 10%  
炭土ブロック径2cm 3%
- 2 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性、網りあり  
IV層下部の黄褐色土小-細粒7% II層厚層土
- 3 10YR3/4 暗褐 砂質シルト 粘性なし 深い  
黒褐色土小-大粒5% 崩壊した天井か
- 4 10YR4/4 暗 砂質シルト 粘性あり 網りなし  
黄褐色土 黒褐色土大粒5%
- 5 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性あり 網りなし  
カーボン粉を全伴に含む 炭土小粒-ブロック径5cm 3%  
IV層下部の黄褐色土小-大粒7%

0 1:50 2m

第12図 RA128壁穴住居跡

RA187



## RA187

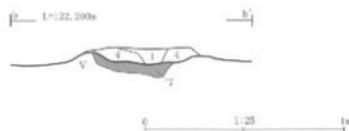
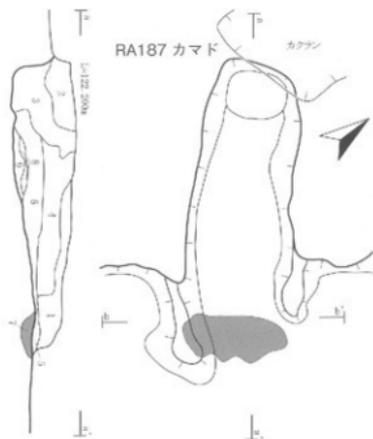
- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性あり 締りあり  
IV遊起部の黄褐色土小-大粒3% Toro大粒1%
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性あり 締りあり  
IV遊起部の黄褐色土小-大粒15%
- 3 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性あり 締りあり  
V遊起部の黄褐色砂小粒-ブロック(径10cm)22%
- 4 7.5YR2/2 黒褐 砂質シルト 粘性あり 締りややあり  
黄土小-ブロック(径5cm)25% 炭小粒、炭化材15%  
6層に類似するが、粘土等含む
- 5 10YR3/4 暗褐 砂質シルト 粘性なし 締りあり  
褐色土小-大粒7% 黒色土小-大粒3%
- 6 10YR3/3 暗褐 砂質シルト 粘性ややあり 締りあり  
IV層の黄褐色土が混っている 黒褐色土小-大粒7%
- 7 10YR3/4 暗褐 砂質シルト 粘性なし 締りあり  
褐色土小-大粒7% 褐色土小-大粒3% 炭小-大粒1%
- 8 10YR3/3 暗褐 シルト 小粒-径3cm±10YR4/6暗  
シルト 小粒-径5cmが現に直合 炭あり
- 9 10YR3/3 暗褐 シルト V遊起部の黄褐色砂小-径10cm30%  
カマドの構築土

## 柱穴土坑計測表

RA187	柱穴1	柱穴2	土坑1
径(cm)	24×20	14×13	12.2×6.2
深さ(cm)	19	15	12

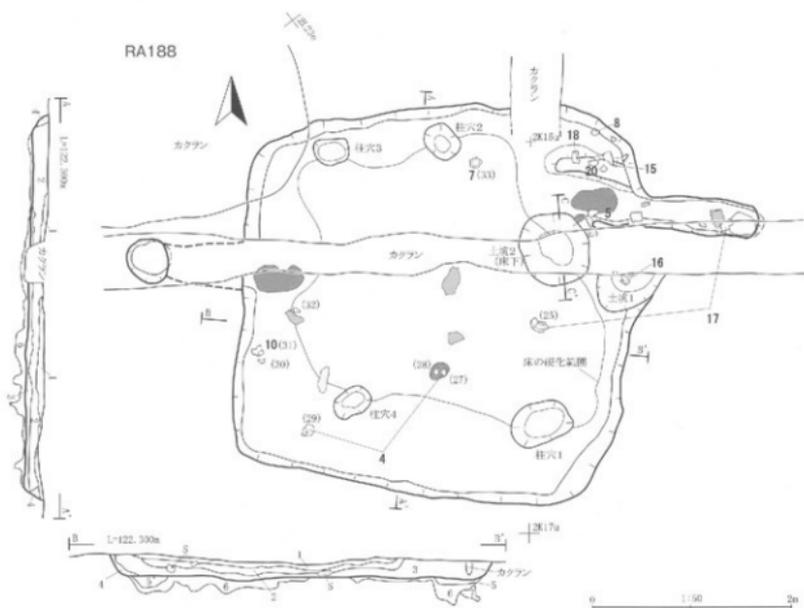
0 1:50 3m

第13図 RA187竪穴住居跡(1)



#### RA187カマド

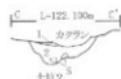
- 1 10YR22 黒焼 シルト 粘性、縮りあり IV層起源の黄褐色土小-大粒5% 粘土小-大粒2% 黒色土小-ブロック径5cm2%
- 2 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性、縮りあり IV層起源の黄褐色土小粒2%
- 3 10YR5/3 砂焼 砂質シルト 粘性、縮りなし 黒色土ブロック径7cm30% V層起源の黄褐色土小-ブロック径7cm25%
- 4 10YR2/2 黒焼 砂質シルト 粘性、縮りあり IV層起源の黄褐色土小-ブロック径5cm10%
- 5 5YR4/3 におい赤焼 シルト 黄土粒30%
- 6 10YR4/6 赤 砂質シルト V層粘土
- 7 5YR4/4 におい赤焼 砂質シルト黄土 V層の黄土
- 8 10YR4/4 赤 砂質シルト 黄褐色土小-大粒3% 粘着したV層
- 9 10YR4/3 におい赤焼 砂質シルト 粘性、縮りなし 黄土粒4粒3% V層起源の黄褐色土小-大粒15%



#### RA188

- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性、縮りなし 小粒 10% IV層起源の黄褐色土小-中粒 6%
- 2 10YR2/2 黒焼 シルト 粘性、縮りあり IV-V層起源の黄褐色土小-粒大 15% 黒地土小-粒大粒 7% 埋め戻し
- 3 10YR2/1 黒 シルト 粘性、縮りあり IV層起源の黄褐色土小-粒大 4-5% 埋め戻し
- 4 10YR2/2 黒焼 シルト 粘性、縮りあり IV層起源の黄褐色土小-粒大粒 20%
- 5 10YR5/4 におい赤焼 砂質シルト 粘性あり 黄く縮まる IV層起源の黄褐色土による埋り床
- 6 10YR4/4 におい赤焼 砂質シルト 粘性なし 黄く縮まる V層起源の黄褐色砂質シルトによる埋り床
- 7 10YR2/3 黒焼 シルト 小粒-ブロック径5cmと10YR5/4におい赤焼 砂質シルト 小粒-ブロック径5cmが硬に混合 黄く縮まる 粘り床
- 8 10YR4/6 赤 砂質シルト 粘性なし 縮りあり 黒褐色土ブロック径5cm30%

第14図 RA187竪穴住居跡(2)・RA188竪穴住居跡(1)



## RA188土坑2

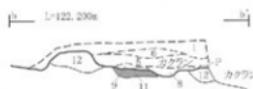
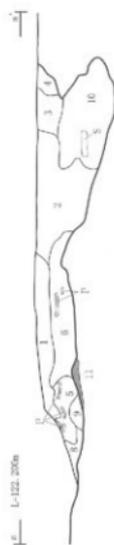
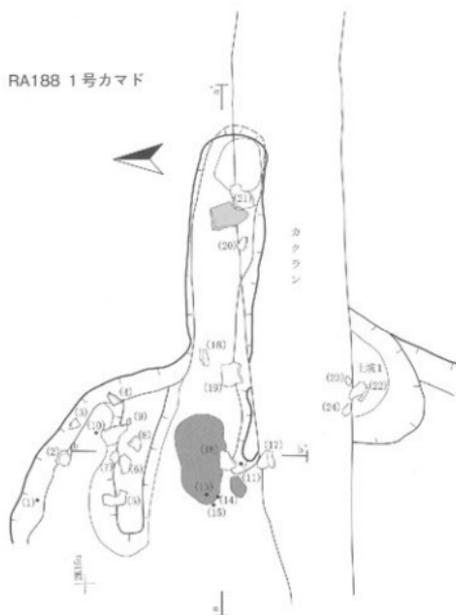
- 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性、締まりあり  
V層底面の黄褐色土小一椀大粒30%  
黒色土小一中粒10%底に含む程度
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 締まりややあり  
V層底面の黄褐色土小一椀大粒20% 焼土粒2%

## 住穴土坑計測表

RA188	住穴1	住穴2	住穴3	住穴4	土坑1	土坑2
径(cm)	61×41	41×29	38×39	43×28	56×77	61×68
深さ(cm)	20	14	16	12	22	35



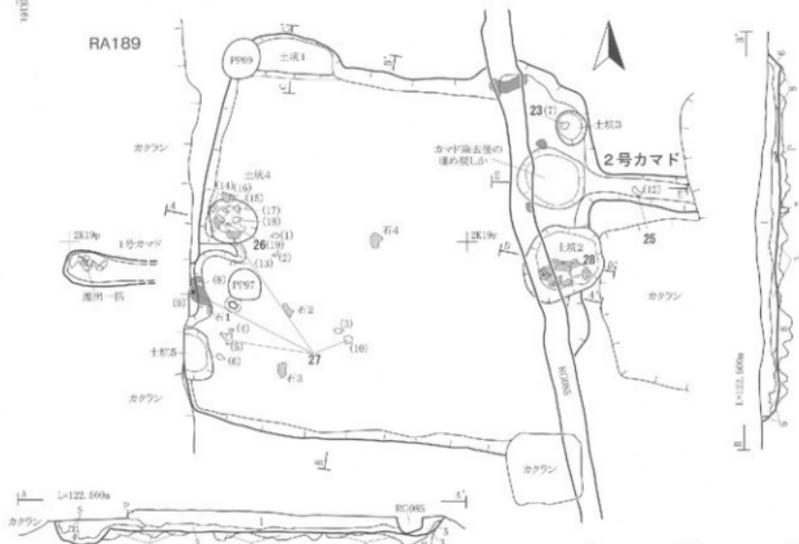
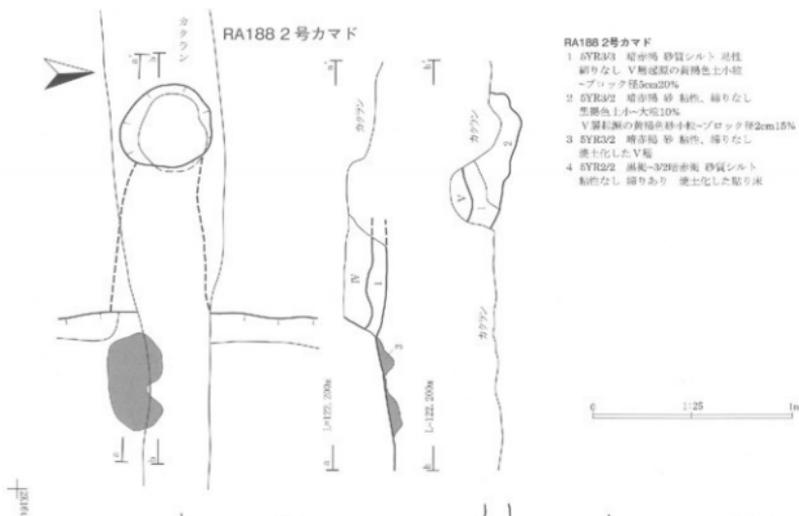
## RA188 1号カマド



## RA188 1号カマド

- 7.5YR/1 黒褐色シルト 粘性あり 締まりややあり 焼土小一椀大 7%
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし、締まりあり V層底面の黄褐色土小一椀大 15%
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性、締まりあり V層底面の黄褐色土小一椀大 7%
- 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なし 締まりあり V層底面の黄褐色土小一椀大 25%
- 5YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり 締まりあり 二次堆積の焼土
- 7.5YR/2 黒褐色シルト 粘性あり 締まりあり V層底面の黄褐色土小一椀大 7% 焼土小粒+ブロック径 3cm15%
- 5YR4/4 赤褐色シルト 粘性、締まりあり 焼土 二次堆積
- 5YR3/1 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まりなし 焼土小粒 7%
- 5YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 締まりなし 焼土小粒 6%
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 締まりややあり V層底面の黄褐色土小一中粒 6%
- 5YR3/4 赤褐色シルト 粘性、締まりあり 焼土
- 10YR3/3 赤褐色シルト 粘性なし 締まりあり V層底面の黄褐色土を張り付けている 上面は比較的同様なV層底面の砂質シルト 種の構築土

第15図 RA188 住穴住居跡 (2)



**RA189**

- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性、弱りややあり IV層底層の黄褐色土小粒 1% To a小粒 2%
- 2 10YR2/1 黒 シルト 粘性あり 弱りなし IV層底層の黄褐色土小粒 3% 黒土小粒 2% 黒土粒 2%
- 3 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性に富む 弱りややあり IV層底層の黄褐色土小~中粒 2%
- 4 10YR2/1 黒 シルト 粘性ややあり 弱りなし IV層底層の黄褐色土小~中粒 3%
- 5 10YR3/4 暗雫 砂質シルト 粘性なし 弱りあり 黒褐色土小粒 15%
- 6 10YR2/2 黒雫 シルト 粘性、弱りあり IV層底層の黄褐色土小~中粒 5% 黒土小~中粒 3%
- 7 10YR2/2 黒雫 シルト 粘性、弱りあり 煤の混入
- 8 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト 粘性、弱りあり 黒褐色土小粒~ブロック径 5cm 大 30%程に含む 詰り床
- 9 10YR2/2 黒雫 シルト 粘性あり 弱りなし IV層底層の黄褐色土小~大粒 10%

第16図 RA188竪穴住居跡(3)・RA189竪穴住居跡(1)



## RA189 土坑1

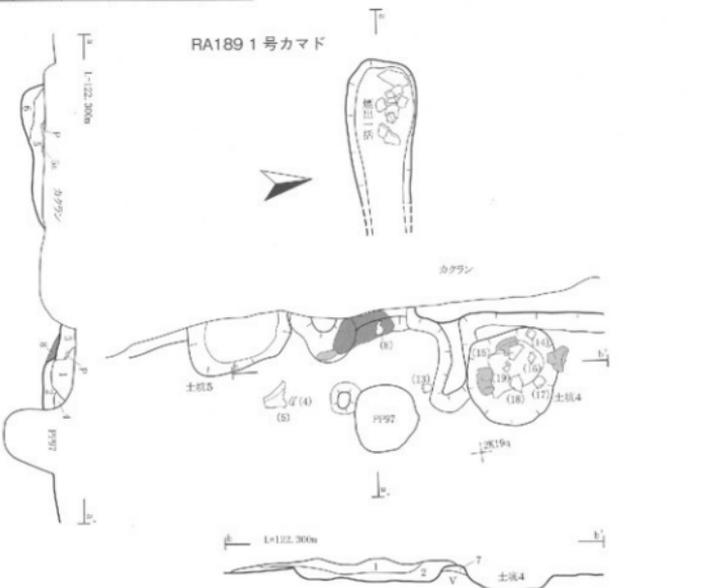
- 1 10YR1/71 黒 シルト 粘性あり 埴りなし  
IV層起源の黄褐色土小一様大3% 土小一平均1%

## RA189 土坑2

- 1 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり 埴りややあり  
V層起源の黄褐色土小一様大15% 土小一 (5YR4/8 赤褐色)  
土小一厚さ2cmの硬状塊歯40% 土小一平均3%  
2 7.5YR2/1 黒 シルト 粘性、埴りあり V層起源の黄褐色土小一平均10%  
3 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性、埴りあり V層起源の黄褐色土小一を含む

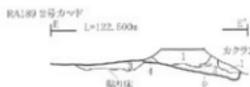
## 柱穴土坑計測表

柱穴ID	土坑1	土坑2	土坑3	土坑4	土坑5
幅(cm)	94×41	83×60	35×34	53×51	54×28
幅(cm)	21	18	8	15	13



## RA189 1号カマド

- 1 7.5YR3/1 黒褐色 シルト 粘性あり 埴りなし V層起源の黄褐色土小一平均5% 土小一平均2%  
2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり 埴りなし V層起源の黄褐色土小一平均7%  
3 5YR3/3 暗褐色 シルト 粘性あり 埴りなし V層起源の黄褐色土小一平均2% 二次休積の土  
4 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり 埴りなし 土小一を全体に含む 土小一平均2%  
5 10YR2/2 黒褐色 シルト 埴りあり 土小一平均2-5% 土小一平均2% V層起源の黄褐色土小一平均7%  
6 10YR3/3 暗褐色 シルト 埴りなし 埴りあり V層起源の土小一を全体に多く含む 土小一平均2%  
7 10YR3/2 暗褐色 シルト 埴り、埴りあり IV層起源の黄褐色土小一様大20% 土小一平均1%  
8 5YR3/2 暗褐色 シルト 粘性なし 埴りあり 土小一化したV層



## RA189 2号カマド

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり 埴りあり IV層起源の黄褐色土小一様大15% 土小一平均10%  
2 10YR2/3 暗褐色 砂質シルト 粘性なし 埴りあり V層起源の黄褐色土小一平均5cm30%  
3 10YR3/3 暗褐色 シルト 埴り、埴りあり 土小一平均7%、IV層起源の黄褐色土小一平均大10% 土小一平均大10%  
4 5YR3/2 暗褐色 シルト 埴りあり 埴りあり 土小一平均20% 黄褐色土小一平均5%

第17図 RA189 竈穴住居跡 (2)

### RA190



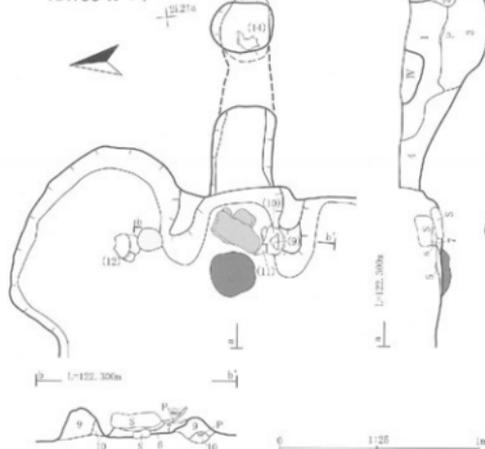
#### RA190土坑1

- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘りあり 締まりなし  
IV層底面の黄褐色土小-穴20%
- 2 5YR2/2 暗褐 シルト 粘りあり 締まりなし  
赤褐色土小-穴+ブロック層2cm20% 二次堆積の黄土
- 3 10YR3/2 黒 砂質シルト 粘りあり 締まりややあり  
V層底面の黄褐色土小-穴大粒10% 炭化材含む

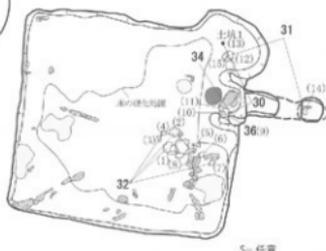
#### RA190

- 1 10YR2/2 黒 シルト 粘りあり 締まりなし IV層底面の黄褐色土小-穴大粒 20%
- 2 5YR2/2 暗褐 シルト 粘りなし 黄土層を多く含む
- 3 5YR1.7/1 黒 シルト 粘りなし 締まりあり
- 4 10YR3/4 暗褐 砂質シルト 粘りなし 締りあり 赤褐色土小-穴大粒 10% 砂質黄土
- 5 10YR4/6 黒 砂質シルト 粘りなし 締りあり 黒褐色土小-穴+ブロック層 7cm 30% 潮り方黄土

### RA190 カマド



### 土器の出土状況



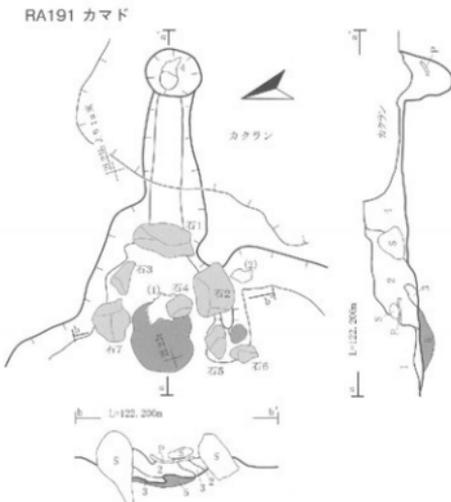
#### 柱穴土坑計測表

RA190	土坑1
径(m)	1.02
深3(m)	深部と同一

#### RA190カマド

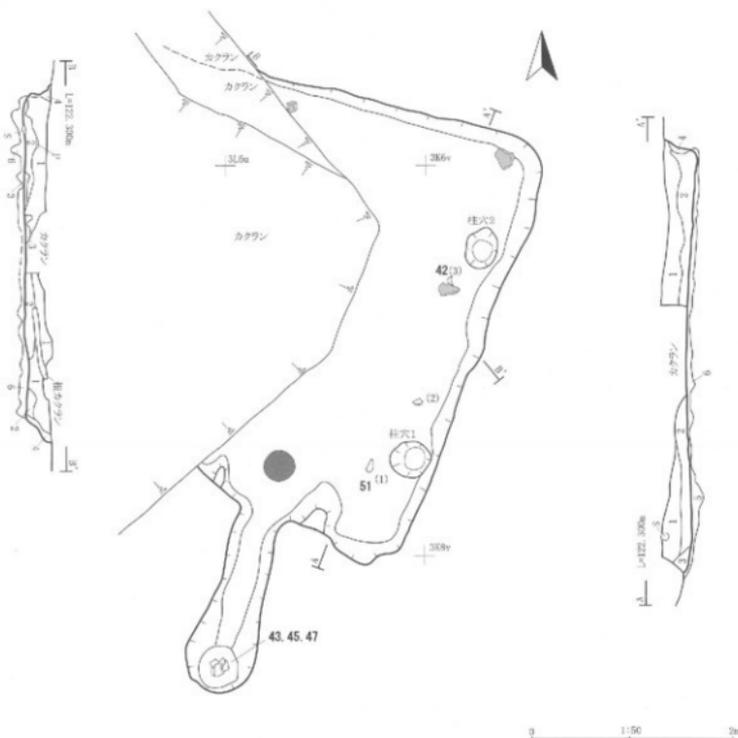
- 1 10YR2/2 暗褐 シルト 粘りあり 締まりなし V層底面の黄褐色土小-穴+ブロック層 7cm 15%
- 2 10YR4/6 黒 砂質シルト 粘り、締まりなし 黒褐色土小-穴大粒 3%
- 3 10YR3/2 暗褐 砂質シルト 粘り、締りなし 表層に黒炭な土小-穴 V層底面の黄褐色土小-穴+ブロック層 5cm10%
- 4 10YR2/2 暗褐 砂質シルト 粘りあり 締りなし V層底面の黄褐色土小-穴を全て含む
- 5 7.5YR2/2 暗褐 シルト 粘りあり 締りなし 黒小-穴大粒 2% 赤褐色土小-穴中粒 10%
- 6 10YR2/3 暗褐 シルト 粘り、締りなし IV層底面の黄褐色土小-穴中粒 2%
- 7 10YR3/4 暗褐 砂質シルト 粘り、締りなし 黒褐色土小-穴大粒 20%
- 8 5YR4/3 に近い赤褐 砂 粘り、締りなし V層の黄土
- 9 10Y 4/2 に近い黄褐 砂 粘りなし 締りあり IV層底面の黄褐色土小-穴大粒 3-5% 潮の暗黄土
- 10 10YR3/2 暗褐 砂質シルト 粘り、締りなし V層底面の黄褐色土小-穴大粒 30% 炭化材の層と互方

第18図 RA190竪穴住居跡



第19図 RA191竪穴住居跡

RA192



RA192

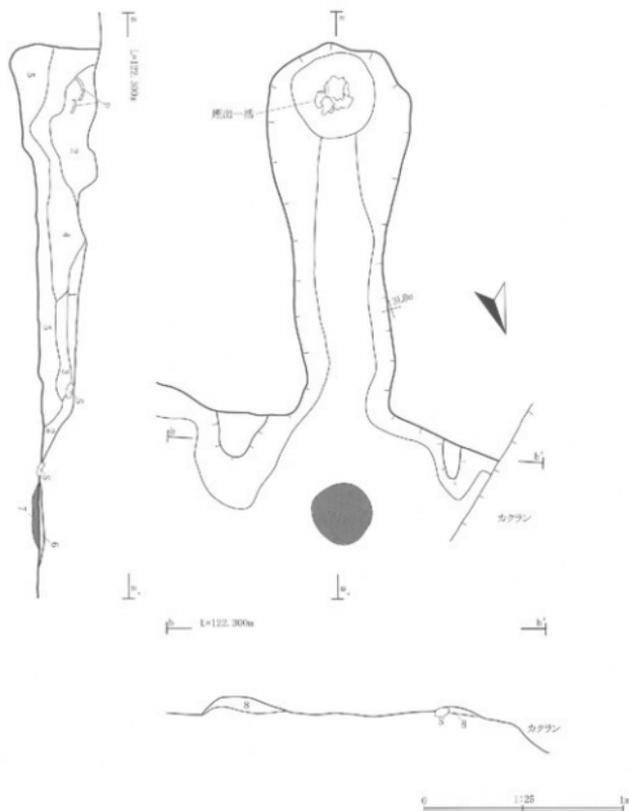
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性、締りなし 炭化物なし
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 締りなし 炭化物なし
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 締りなし
- 4 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 粘性なし 締りややあり  
V層深部の砂小塊大粒20%
- 5 10YR3/4 暗褐色粘土 粘性なし 締りややあり  
黒褐色土小塊大粒10% 炭化物
- 6 10YR4/4 黒褐色シルト 粘性あり 締りあり 炭化物  
黒褐色土小塊大粒20%

柱穴土坑計測表

RA192	柱穴1	柱穴2
径(mm)	42×36	43×33
深さ(cm)	38	34
柱底	10	13

第20図 RA192竪穴住居跡(1)

## RA192 カマド

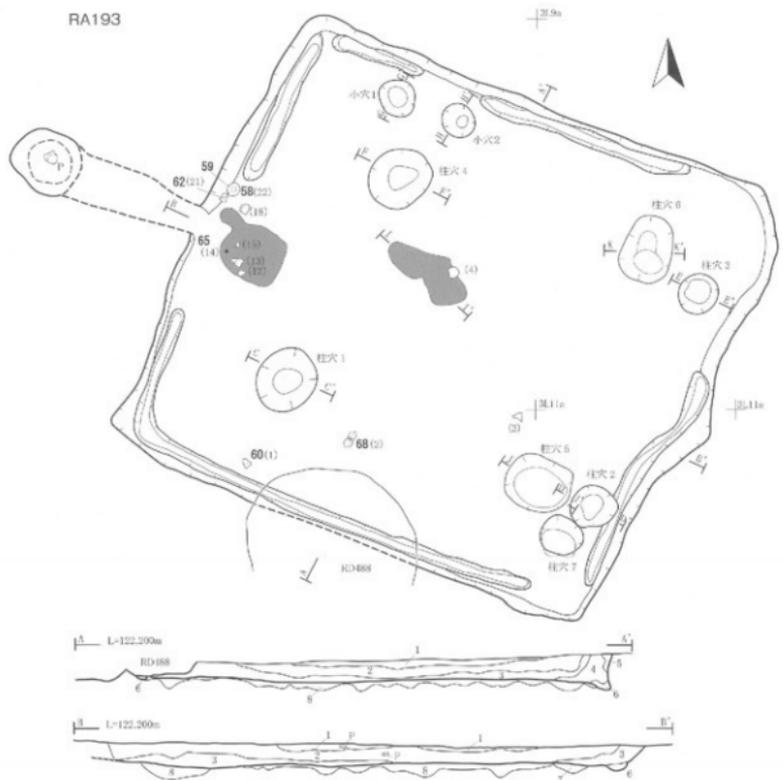


## RA192 カマド

- 1 10YR22 黒炭 シルト 粘粒ややあり 埴りなし  
IV層小一中粒3%
- 2 10YR22 黒炭 シルト 粘粒ややあり 埴りなし  
Tpa小粒-ブロック径2.5cm1%
- 3 10YR37 暗黄 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
天部(Ⅴ層) 尚礫上
- 4 10YR25 黒炭 砂質シルト 粘粒に富む 埴りなし
- 5 10YR22 黒炭 砂質 粘性、埴りなし、カーボン粒を全体に含む
- 6 7.5YR22 黒炭 砂 粘性、埴りなし、火熱を受けやや変化した砂の層残層
- 7 5YR36 暗赤褐 砂 粘粒、埴りなし、黄土化した砂
- 8 7.5YR1.7/1 黒 シルト 粘粒、埴りあり V層起源の砂質土小-大1% 埴り高土

第21図 RA192竪穴住居跡(2)

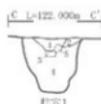
RA193



RA193

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性あり 埴りなし IV層小粒 2-3%, 炭小粒 1%
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性あり 埴りなし IV層小粒+ブロック径 3cm07%, 炭小+中粒 2%, Toa 小+大粒部分的に 2%
- 3 10YR1/1 黒 シルト 粘性ややあり 埴りややあり IV層小+大粒 5%, Toa 小+大粒部分的に 2%
- 4 10YR2/1 黒褐色 シルト 粘性ややあり 埴りなし IV層粘土の黄褐色土小粒 2%, Toa 小+中粒 2%
- 5 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり 埴りややあり IV層粘土の黄褐色土+ブロック径 3cm140% 炭黒土
- 6 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性あり 埴りなし IV層粘土の黄褐色土を全体に含む 炭黒土 ほぼ全
- 7 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性 埴りあり IV層粘土の黄褐色土小+大粒 6%
- 8 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし 埴りする IV層粘土の黄褐色土小+大粒 10% 炭を含む

0 1:50 2m



柱穴 1

- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性あり 埴りなし
- 2 10YR2/2 黒褐色 粘質シルト 粘性あり 埴りなし IV層粘土の黄褐色土+大粒5%
- 3 10YR2/3 黒褐色 粘質シルト 粘性あり 埴りなし
- 4 10YR2/3 黒褐色 粘質 粘性ややあり 埴りなし 黒褐色シルト+大粒を含む



柱穴 2

- 1 10YR2/2 黒褐色 粘性あり 埴りなし
- 2 10YR2/3 黒褐色 粘性あり 埴りなし V層粘土の砂を含む
- 3 10YR2/3 黒褐色 粘性ややあり 埴りなし 黒褐色シルト+大粒を含む



柱穴 3

- 1 10YR1.7/1 黒 粘性あり 埴りなし
- 2 10YR2/2 黒褐色 粘性あり 埴りなし V層粘土の砂を多く含む
- 3 10YR2/3 黒褐色 粘性ややあり 埴りなし 黒褐色シルト+大粒を含む



柱穴 4

- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性 埴りなし
- 2 10YR2/3 黒褐色 粘性 埴りなし
- 3 10YR2/3 黒褐色 粘性ややあり 埴りなし 黒褐色シルト+大粒を含む

第22図 RA193竪穴住居跡 (1)



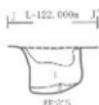
## 小穴1・2共通

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性、埴りあり  
IV群起源の黄褐色土小一平均3% To a小粒2%



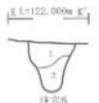
## RA193

- 1 7.5YR4/3 褐 粘状なし 固く締まる 機土  
表面に砂赤褐一帯同の機土小一穴六を含む



## 柱穴5

- 1 10YR2/3 黒褐 砂 黒褐色シルト 径3cm10%  
2 10YR3/4 黒褐 砂



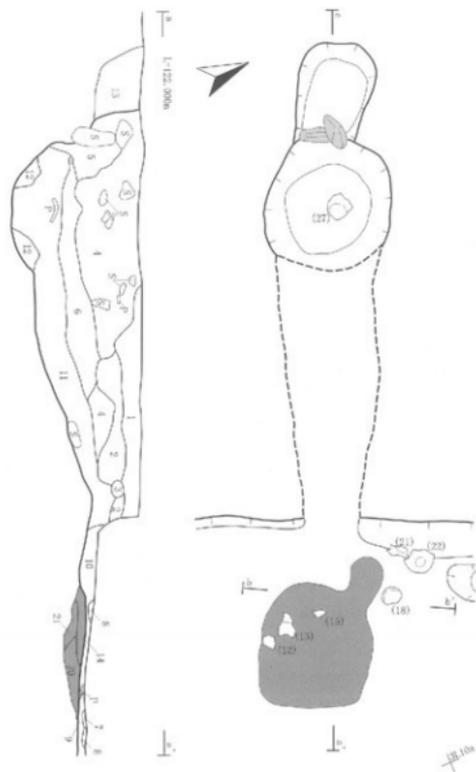
## 柱穴6

- 1 10YR2/3 黒褐 砂 黒褐色シルト  
25%と砂ブロック径3-5cmが混入  
2 10YR2/3 黒褐 シルト 砂ブロック径2cm  
45% 下層は砂が少ない

RA193	柱穴1	柱穴2	柱穴3	柱穴4	柱穴5	柱穴6	柱穴7	小穴1	小穴2
径(cm)	67×68	46×45	42×39	64×56	56×55	68×61	45×42	49×39	36×35
深さ(cm)	54	46	54	57	46	50	49	7	11
柱礎	10	12	14	21					

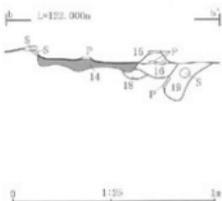


## RA193 カマド

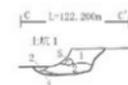
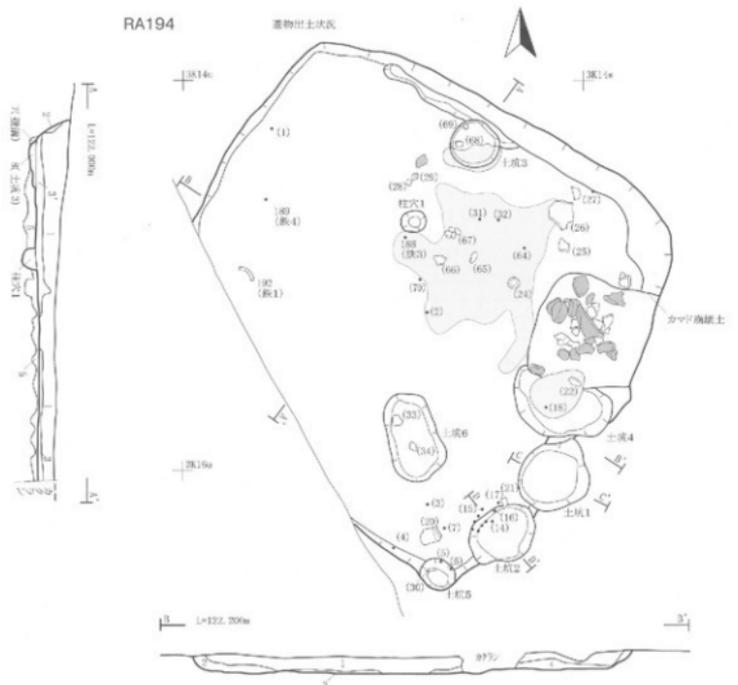


## RA193 カマド

- 1 10YR1/2/1 黒 シルト 粘状ややあり 埴りなし  
2 10YR2/1 黒褐 シルト 粘性ややあり 埴りなし  
IV群起源の黄褐色土小一平均3%  
3 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性ややあり 埴りなし  
4 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性なし 埴りなし  
IV群起源の黄褐色土小一径大粒7-15%、To a小一平均3%  
5 10YR2/3 黒褐 砂質シルト 粘性あり 埴りなし  
IV群起源の黄褐色土ブロック径2-4cm20%  
6 10YR4/4 灰 砂質シルト 粘状あり 埴りなし  
IV群の灰井焼土  
7 5YR2/2 暗赤褐 砂質シルト 粘性なし 埴りなし  
機土 (天津崎線 上)  
8 10YR3/3 黒褐 砂質シルト 粘性なし 埴りなし  
黄褐色土小一径大粒20% 天津崎線 上  
9 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性、埴りなし  
カーボンが多く含む  
10 7.5YR2/2 黒褐 シルト 粘性、埴りなし  
固化した機土を含む  
11 10YR2/3 黒褐 砂質シルト 粘性、埴りなし  
カーボンを全体に多く含む 筋に底部に多い  
12 10YR5/4 土 灰黄褐 砂 粘性、埴りなし  
黄褐色土小一径を10%含む  
13 10YR2/2 黒褐 粘性ややあり 埴りなし  
IV群起源の黄褐色土小一径大粒を10% 径小粒3%  
To a小一平均2% 突出部僅二箇所あり  
14 7.5YR2/3 暗褐 シルト 粘性あり 埴りあり 機土  
15 7.5YR2/3 暗褐 砂質シルト 粘性なし 埴りあり 機土  
16 7.5YR2/3 暗褐 砂質シルト 粘性あり 埴りあり 機土  
17 7.5YR2/3 暗褐 砂質シルト 粘性なし 埴りあり 機土  
18 7.5YR2/2 暗褐 砂  
19 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性あり 埴りあり V溝砂を含む  
20 5YR3/4 暗赤褐 砂質シルト 粘性なし 埴りあり 機土  
21 7.5YR2/2 暗褐 砂質シルト 粘性なし 埴りあり 機土

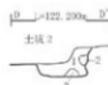


第23図 RA193竪穴住居跡 (2)



RA194 土坑1

- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 埴りなし。  
IV層底面の黄褐色土小～中粒7%
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり 埴りなし。  
IV層底面の黄褐色土小粒2% 灰1中粒2%
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 埴りなし。  
IV層底面の黄褐色土小粒10% 焼土中粒～大粒3%
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 埴りなし。



RA194 土坑2

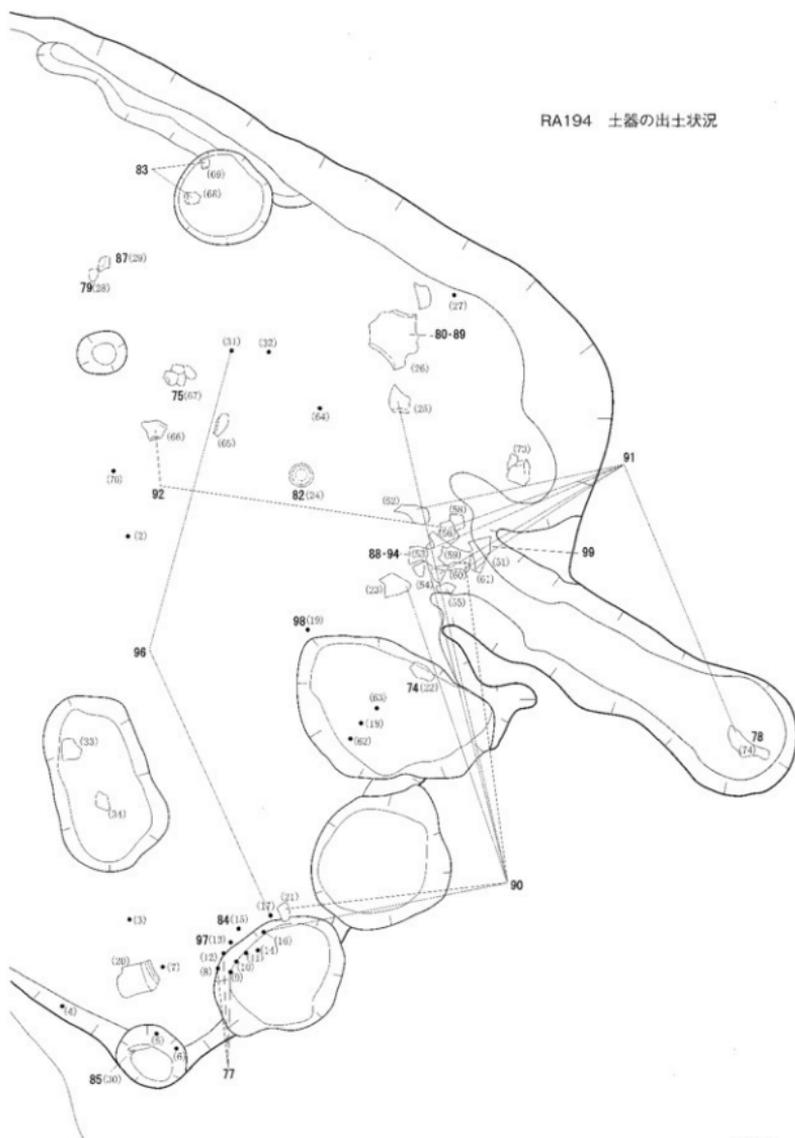
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 埴りややあり  
IV層底面の小～中粒7% 焼土小～中粒2% 灰中粒2%
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 埴りややあり  
IV層ブロック(52×5cm)20% 壁面積上。
- 10YR3/2 黒褐色砂質シルト  
IV層底面の黄褐色土を全体に含む

柱穴土坑計測値

RA194	柱穴1	土坑1	土坑2	土坑3	土坑4	土坑5	土坑6
径5cm)	27×21	80×73	80×58	50×51	106×87	34×29	91×55
深25cm)	16	6	13	6	11	9	14

0 1:50 2m

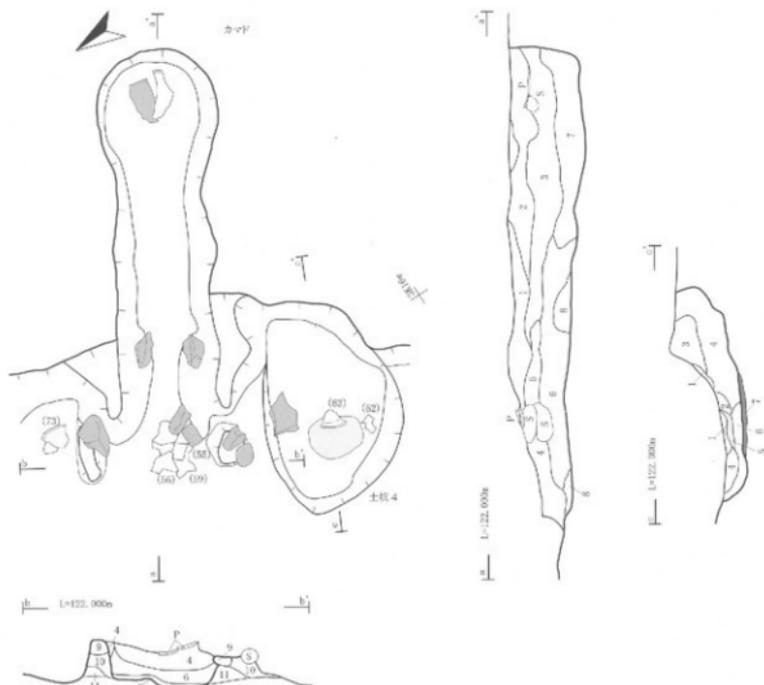
第24図 RA194竪穴住居跡(1)



S=任意

第25図 RA194竪穴住居跡(2)

RA194 カマド



RA194 カマド

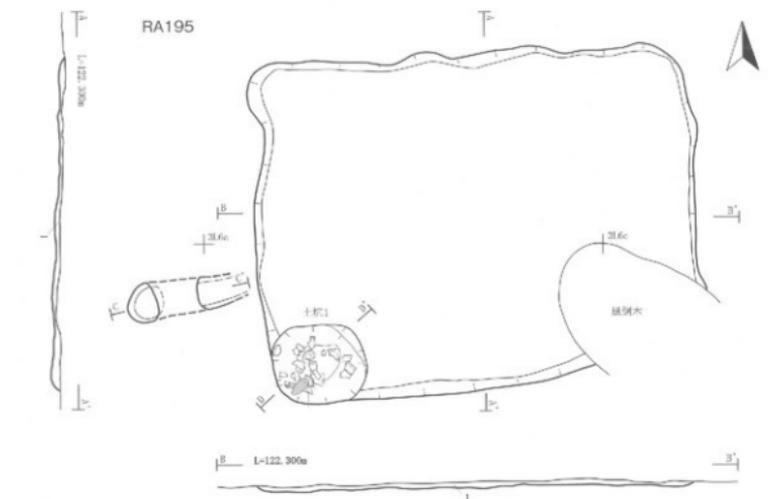
- 1 7.5YR2/3 燻硝珪 シルト 粘性あり 腐りなし  
黄褐色粘土ブロック(径5cm)9% 灰土小粒-ブロック(径5cm)10%
- 2 7.5YR2/2 燻硝珪 シルト 粘性ややあり 腐りなし  
灰土小粒 粘土ブロック(径5cm)大33%
- 3 10YR2/3 燻硝珪 シルト 粘性あり 腐りなし  
IV層起源の黄褐色土小-大粒15% 灰土小-大粒10% 炭粒大粒3%
- 4 10YR2/2 燻硝珪 シルト 粘性あり 腐りなし  
IV層起源の黄褐色土小-大粒6% 灰土小粒-ブロック(径5cm)7% 炭粒大粒3%
- 5 2.5YR2/2 燻硝珪 シルトの粘土ブロック  
と7.5YR2/2黄褐色土ブロックが境に侵入
- 6 10YR2/3 燻硝珪 シルト 粘性あり 腐りなし  
IV層起源の黄褐色土小-大粒15% 灰土小-大粒10% 炭粒大粒3%
- 7 10YR2/2 燻硝珪 シルト 粘性あり 腐りなしカーボンを含み  
炭粒大粒3%
- 8 10YR2/3 燻硝珪 シルト 粘性に乏し 腐りなし  
粘性な黄土状、IV層起源の黄褐色土の燻硝珪含む
- 9 10YR4/4 黄砂質シルト 粘性ややあり 腐りややあり 燻硝珪土?
- 10 10YR3/4 燻硝珪 砂質シルト 粘性ややあり 腐りややあり 燻硝珪土?
- 11 10YR2/3 燻硝珪 砂質シルト 粘性なし 腐り縮まる 燻

RA194 土坑4

- 1 10YR2/2 燻硝珪 シルト 粘性あり 腐りなし  
灰土小-ブロック(径3cm)20% IV層起源の黄褐色土小-大粒10%
- 2 10YR2/3 燻硝珪 シルト 粘性あり 腐りややあり  
IV層起源の黄褐色土小-大粒25% 灰土小-大粒15%
- 3 7.5YR2/1 黒 シルト 粘性、腐りあり  
IV層小粒 3% 白色土小粒 2%
- 4 10YR2/1 黒 シルト 粘性あり 腐りややあり  
IV層小-大粒10%、灰土小-大粒2%
- 5 5YR2/3 緑赤黄 シルト 粘性、腐りなし 二次堆積の黄土  
5YR4/8 赤褐色土小-大粒23%
- 6 5YR2/2 緑赤黄 シルト 粘性あり 腐りなし 粘土を全球に含む
- 7 5YR4/1 に近い赤褐 砂 V層の粘土

0 1:25 1m

第26図 RA194竪穴住居跡 (3)



## RA195

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性 粘りあり  
 砂礫を多く含む 上面が磁器片散在にみられる



0 1:50 2m

## RA195 カマド

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性あり 粘りややあり  
 IV層小〜中大1-3%  
 2 10YR2/2 黒炭 粘性、粘りあり  
 IV層底層の黄白色土小〜中ブロック(径5cm)25%  
 3 10YR2/3 黒炭 粘性なし 粘りあり  
 V層黄褐色土小〜中ブロック(径5cm)25%  
 4 10YR2/1 黒 シルト 粘性あり 粘りなし  
 IV層ブロック(径5cm)10%

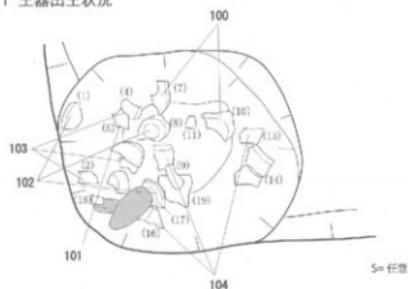
## RA195 土坑1

- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性あり 粘りなし  
 IV層小粒3-4%  
 2 10YR3/3 暗黒 シルト 粘性ややあり 粘りなし  
 層小〜中粒3% カマド附随上  
 3 10YR2/3 黒炭 粘質シルト 粘性あり 粘りややあり  
 V層底層の砂を全体に含む

## 柱穴土坑計測表

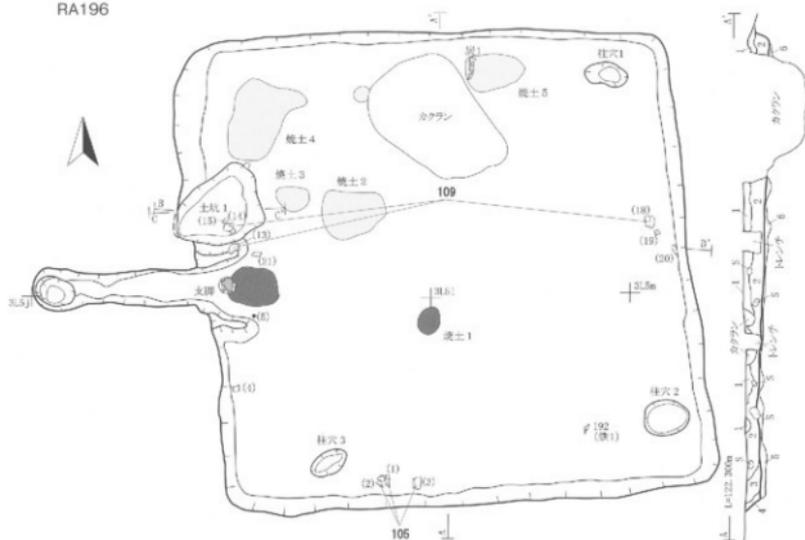
RA195	土坑1
径(cm)	34×9±
深さ(cm)	15

## 土坑1 土器出土状況



第27図 RA195竪穴住居跡

RA196



## RA196

- 1 10YR2/2 赤褐色 シルト 黏性、締りなし  
Tea小説を全体に少量含む
- 2 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 黏性なし、締りややあり  
IV層底面の黄褐色土小塊大10~15%と黒色土中粒-ブロック径5cm10%程に混在  
埋め戻しか
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性、締りややあり  
IV層底面の黄褐色土小塊2%
- 4 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 黏性なし、締りややあり  
全体にIV-V層の砂質シルトを含む、硬相土か
- 5 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 黏性なし、締りあり、深い掘り方部分の締り床
- 6 10YR4/6 黒 砂質シルト 粘性なし、固く硬まる、黄褐色土小塊-ブロック径10cm25%、掘り方

## RA196 土塚1

- 1 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト 粘性あり、締りなし、二次堆積の焼土
- 2 7.5YR2/3 暗褐色 シルト 粘性、締りなし、焼土小粒2%、炭小粒3%

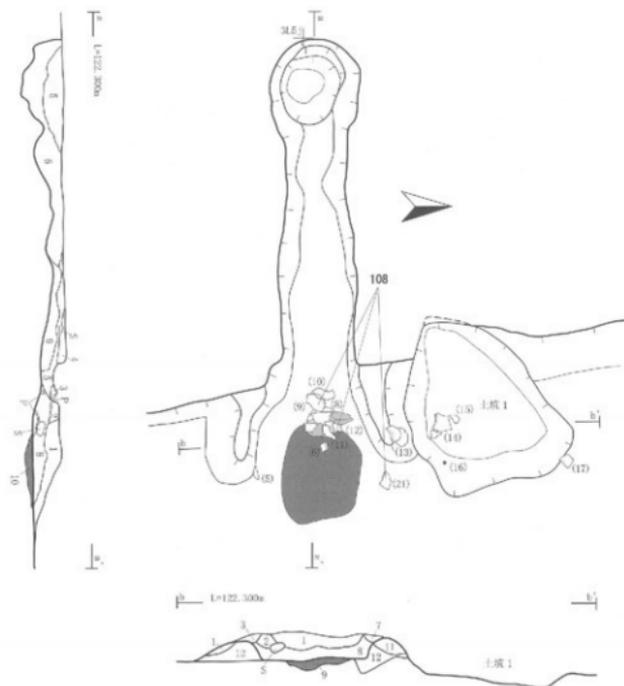
## 柱穴土坑計測表

RA196	柱穴1	柱穴2	柱穴3	土塚1
径(cm)	17×25	16×38	16×22	59×71
深(cm)	11	12	13	15

0 1:50 2m

第28図 RA196竪穴住居跡(1)

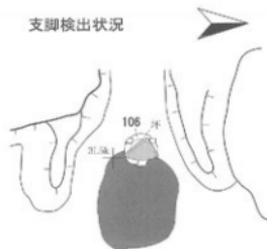
## RA196 カマド



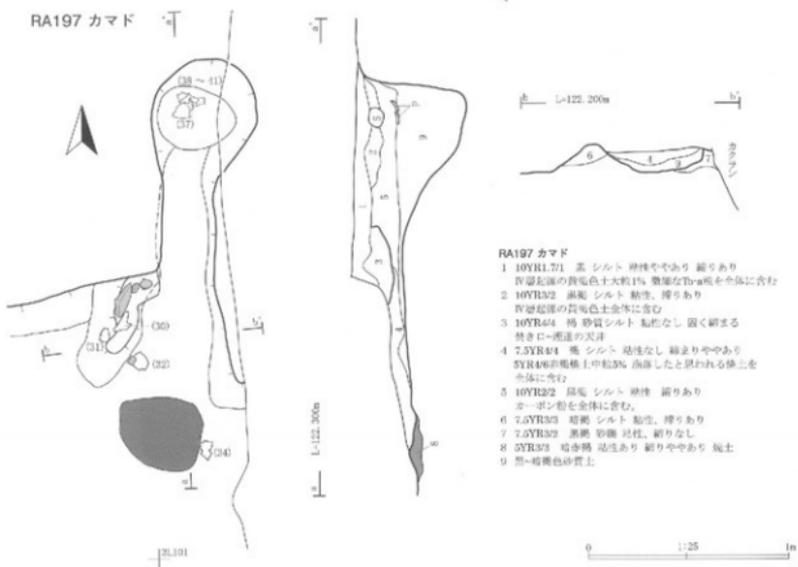
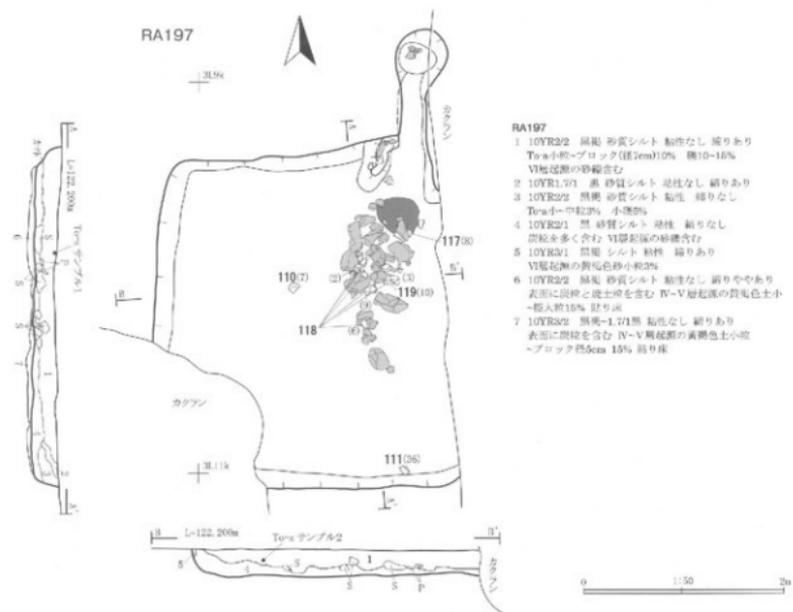
## RA196 カマド

- 1 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし 埴りややあり  
炭土含有率7% IV層底面の黄褐色土小-中90%
- 2 7.5YR4/3 褐色 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
天井 葎の角縁上
- 3 7.5YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性なし 埴りややあり  
壁土付した天井
- 4 6YR2/2 黒褐色 シルト 粘性ややあり 埴りあり
- 5 6YR3/2 暗赤褐色 シルト 粘性ややあり 埴りあり  
炭土小粒10%
- 6 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 小粒-ブロック径5cmと10YR4/4暗  
砂質シルト小粒-ブロック径5cmが混在する
- 7 7.5YR2/3 暗褐色 シルト 粘性なし 埴りあり 全体に炭土を含む
- 8 5YR4/4 濃い黄褐色 シルト 粘性あり 埴り弱  
明赤色の土小-中程度5% 混在した炭土
- 9 6YR3/2 暗赤褐色 シルト 粘性ややあり 埴りあり 粘土
- 10 6YR3/2 暗赤褐色 シルト 粘性、埴りあり 粘土
- 11 7.5YR4/3 褐色 シルト 粘性、埴りあり V層私塾の神居層土 熱で酸化
- 12 7.5YR3/2 黒褐色 シルト 粘性あり 炭く埴まる 神居層土

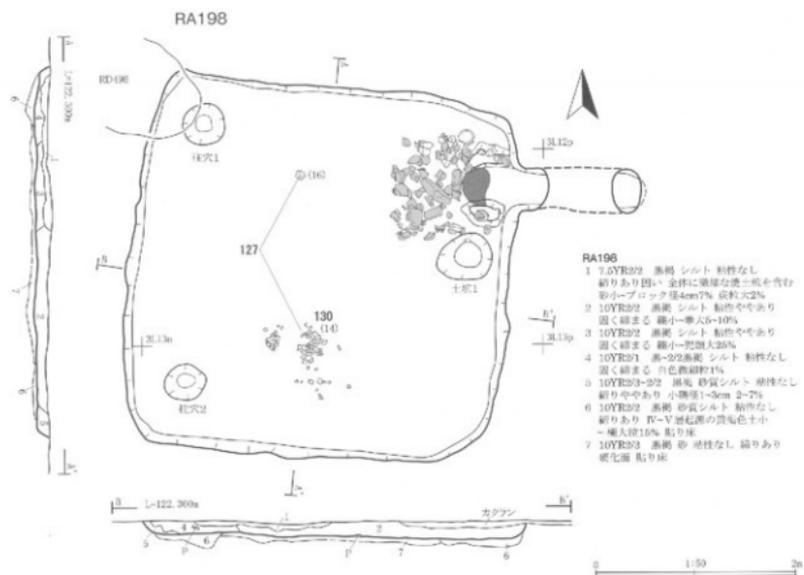
## 支脚検出状況



第29図 RA196竈穴住居跡 (2)



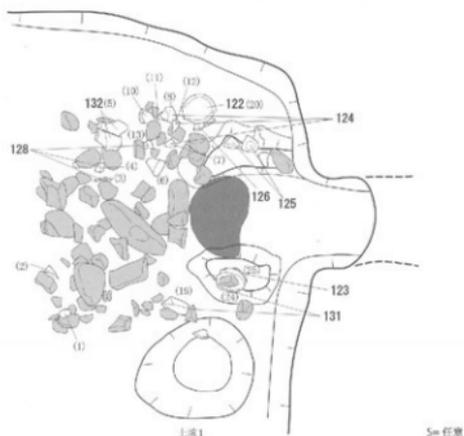
第30図 RA197竪穴住居跡



住穴土坑計測表

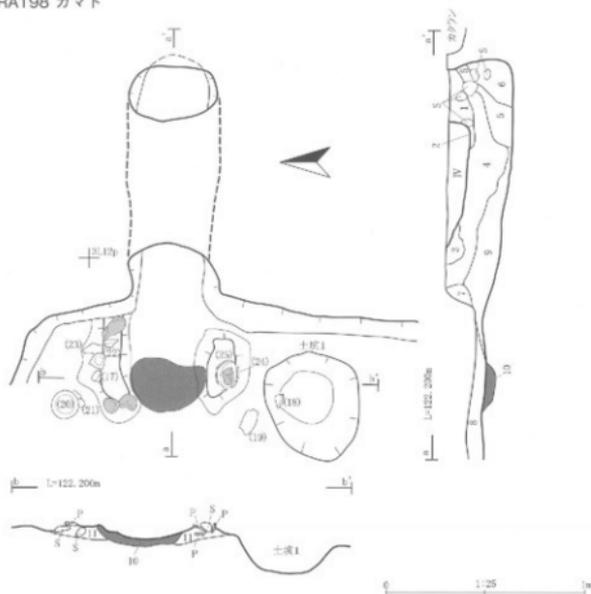
RA198	住穴1	住穴2	土坑1
径(cm)	46.6×43.7	43.7×37.3	37.4×45.8
深さ(cm)	15	25	19

## カマド前遺物出土状況



第31図 RA198住穴住居跡(1)

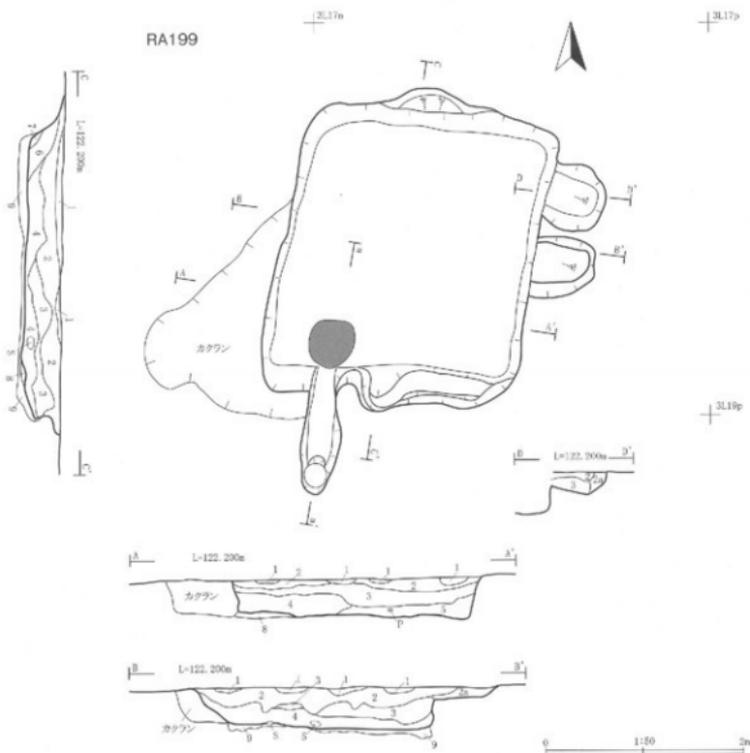
RA198 カマド



RA198 カマド

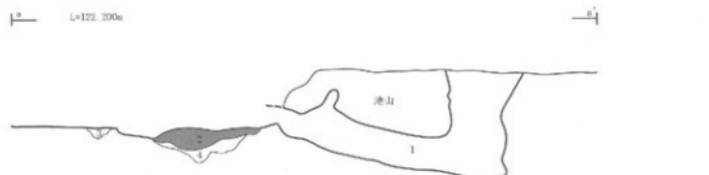
- 1 10YR20 黒褐色シルト 黏性あり 網りなし
  - IV層底面の土-大5%
  - 2 10YR44 黄 砂質シルト 黏性、網りなし
  - 黒褐色シルト大粒5%
  - 3 7.5YR23 黒緑 シルト 黏性なし 網りあり
  - 黄色シルト大粒3% IV層底面の砂質シルト全体を含む
  - 4 7.5YR32 黒緑 シルト 黏性、網りなし
  - 黄土小粒3%
  - 5 10YR22 黒褐色シルト 粘性あり 網りなし
  - 全体にカーボン含む
  - 6 10YR23 黒褐色 砂質シルト 粘性、網りなし
  - V層底面の暗褐色砂土-大15% 赤大の網40%
  - 7 7.5YR32 黒緑 シルト 黏性なし 網りややあり
  - 黄土小-大大粒7%
  - 8 5YR52 暗赤褐色シルト 黏性あり 網りなし
  - 黄土を全体に多く含む
  - 9 5YR22 黒褐色シルト 粘性ややあり 網りなし
  - 黄土を全体に含む
  - 10 5YR32 暗赤褐色 砂質シルト 黏性、網りなし
  - 黄土
  - 11 7.5YR22 黒緑 シルト 粘性、網りあり
  - IV層底面の黄褐色シルト
- 標により構築されたカマド跡 蒸により赤化

第32図 RA198竪穴住居跡(2)



## RA199

- 1 10YR222 黒褐色 シルト 粘液中 縮まり中 Traアブラ (10YR694に多い黄褐色砂状物) 7%混入
- 2 10YR203 黒褐色 シルト 粘液中や粘 縮まり中 黄褐色砂質土の混入
- 3 10YR203 黒褐色 シルト 粘液中 縮まり中 黄褐色砂質土7%混入
- 4 10YR204 暗褐色 シルト 粘液中 縮まりやや硬 粘土ブロック15・炭化物25%混入
- 5 10YR203 暗褐色 シルト 粘液中 縮まりやや硬 粘土ブロック35・炭化物25%混入
- 6 10YR202 黒褐色 シルト 粘液中や粘 縮まり中
- 7 10YR202 黒褐色 シルト 粘液中 縮まりやや硬 黄褐色砂質土10%混入(粘質の地山塊状土を含んだ土塊)
- 8 10YR206 黄褐色 粘土 粘液中や粘 縮まり中 黒色シルト5~10%混入(粘り床)
- 9 10YR203 黒褐色 シルト 粘液中 縮まりやや硬 黄褐色粘土質砂質土10%混入(粘り床)

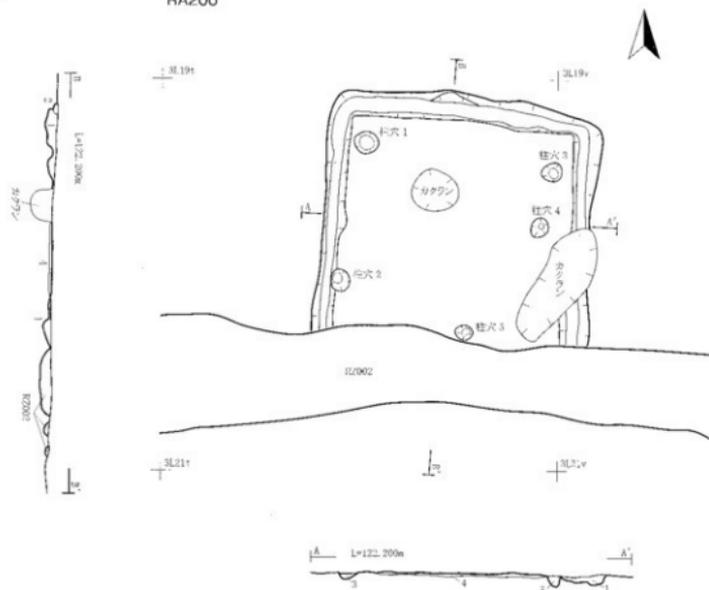


## RA199 カマド

- 1 10YR203 黒褐色 シルト質の質土 粘液中 縮まりやや硬 黄褐色砂質土5%混入
- 2 10YR204 暗褐色 粘土 粘液中 縮まりやや硬 炭化物1%混入
- 3 10YR203 黒褐色 シルト 粘液中 縮まりやや硬 (粘り床)
- 4 10YR204 暗褐色 砂質シルト 粘液中 縮まりやや硬 黒色シルト5%混入

第33図 RA199竪穴住居跡

RA200



RA200

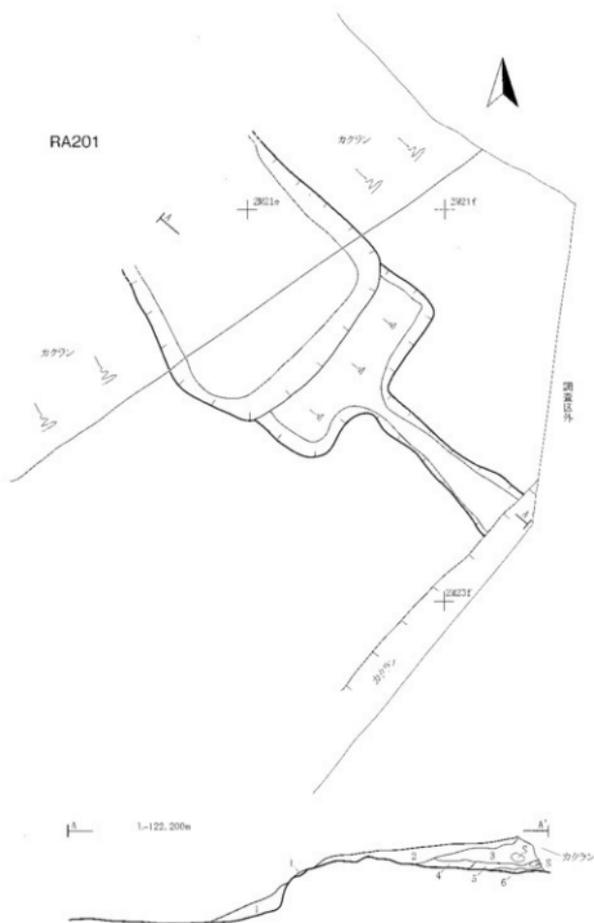
- 1 10YR2/1 黒色 シルト 珪砂中 細まりやや堅
- 2 10YR3/4 暗褐色 粘土質砂質土 粘性中 細まりやや堅
- 3 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性中 細まりや
- 4 10YR3/3 暗褐色 シルト質砂質土 珪砂中 細まりや 黒褐色シルト10%・褐色砂質粘土30%混入 (赤土入り)
- 5 10YR2/2 黒褐色 シルト 珪砂中 細まりやや堅 (赤土入り)

柱穴土統計調査

RA200	柱穴1	柱穴2	柱穴3	柱穴4	柱穴5
径(cm)	25×23	24×18	22×19	22×19	18×15
深さ(cm)	9	12	11	29	14



第34図 RA200竪穴住居跡



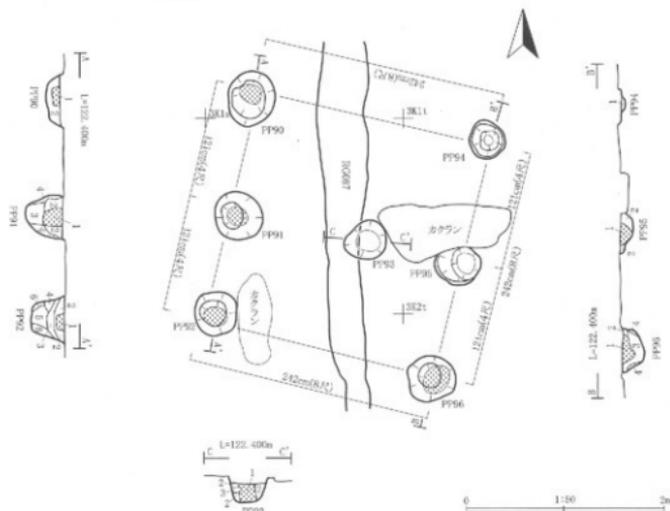
## RA201

- 1 10YR28/1 赤褐色 シルト質砂質土 粘土質 緑泥質や黄褐色砂質土の混入
- 2 10YR3/8 暗褐色 砂質シルト 粘土質 緑泥質
- 3 10YR4/4 褐色 砂質シルト 粘土質 緑泥質や黄
- 4 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘土質や黄 緑泥質 黄褐色砂質土の混入
- 5 10YR2/8 赤褐色 シルト 粘土質や黄 緑泥質 土質-砂多量混入 (空人高にこの土)
- 6 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘土質 緑泥質や黄 小量10YR2/8混入

0 1:50 2m

第35図 RA201竪穴住居跡

RB026



PP90

- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性 締まりあり  
V層起源の黄褐色砂小-大粒2% 柱状
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性 締まりあり  
IV-V層起源の黄褐色小-大粒20%

PP91

- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性 締まりなし  
IV層起源の黄褐色土ブロック径5cm 2% 柱状
- 2 10YR2/1 黒 シルト 粘性あり 締まりなし  
V層起源の黄褐色砂小-大粒2%
- 3 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性、締まりなし  
V層起源の砂を全体に含む
- 4 10YR3/4 緑褐 砂質シルト 粘性、締まりなし  
黒褐色土小-大粒20%

PP92

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性 締まりなし  
V層起源の黄褐色砂小粒2%
- 2 10YR2/3 黒褐 シルト 粘性あり 締まりなし  
V層起源の黄褐色砂小-大粒10%
- 3 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性あり 締まりなし
- 4 10YR3/2 黒褐 砂質シルト 粘性、締まりなし  
AV層起源の砂を多く含む

PP93

- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性あり 締まりなし  
V層起源の黄褐色砂小-大粒7%
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性あり 締まりややあり  
V層起源の黄褐色砂小-大粒10%
- 3 10YR4/4 暗 砂質シルト 粘性、締まりなし  
黒褐色土小-大粒5%

PP94

- 1 10YR2/3 黒褐 砂質シルト 粘性なし 締まりややあり  
黒褐色土ブロック径3cmとV層起源の黄褐色砂ブロック径3cmが頃に混合する

PP95

- 1 10YR2/3 暗褐 砂質シルト 粘性、締まりなし  
V層起源の黄褐色砂小-大粒10% 柱状
- 2 10YR2/3 暗褐 砂質シルト 粘性なし 締まりあり  
V層起源の黄褐色砂小粒-ブロック径3cm 20%

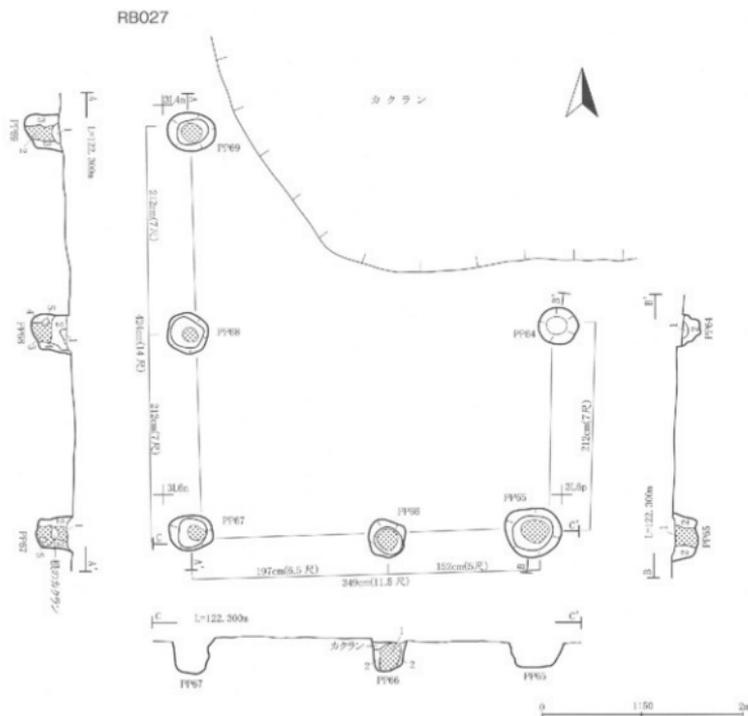
PP96

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性なし 締まりややあり  
IV層起源の黄褐色土ブロック径5cm 5%
- 2 10YR2/2 黒褐 砂質シルト 粘性、締まりなし  
V層起源の黄褐色砂径2~3cm 40%
- 3 10YR2/2 黒褐 砂質シルト 粘性なし 締まりややあり  
V層起源の黄褐色砂小-大粒7%
- 4 10YR3/4 暗褐 砂質シルト 粘性、締まりなし  
黒褐色土小-大粒10%

柱穴計測表

	90	91	92	93	94	95	96
径(cm)	56×47	53×48	47×43	45×38	41×37	46××	51×49
深(cm)	17	41	34	27	7	15	24
柱径	25×19	22×19	24×20	16		23	32×24

第36図 RB026掘立柱建物跡



## PP64

- 1 10YR2/3 黒褐 彩黄シルト 粘性、埴りなし  
IV層底部の黄褐色土小-層大7% 柱状?
- 2 10YR2/3 黒褐 彩黄シルト 粘性なし 埴りあり  
V層底部の黄褐色土小-層ブロック径3cm 15%

## PP65

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性なし 埴りややあり  
IV層底部の黄褐色土小-層3% 柱状
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性、埴りややあり  
IV層底部の黄褐色土小-層大15%

## PP66

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性あり 埴りややあり  
IV層底部の黄褐色土小-層2% 柱状
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性ややあり 埴りあり  
IV層底部の黄褐色土小-層大20%

## PP67

- 1 10YR2/3 黒褐 シルト 粘性あり 埴りなし  
IV層底部の黄褐色土小-層中粒2% 柱状
- 2 10YR2/3 黒褐 砂質シルト 粘性ややあり 埴りなし  
IV層底部の黄褐色土小-層大10%

## PP68

- 1 10YR2/3 黒褐 シルト 粘性あり 埴り無くロボロ  
IV層底部の黄褐色土小-層7%
- 2 10YR2/3 黒褐 シルト 粘性あり 埴り無くロボロ  
IV層底部の黄褐色土小-層大15%
- 3 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性あり 埴りなし  
IV層底部の黄褐色土小-層3% 柱状
- 4 10YR2/3 黒褐 シルト 粘性あり 埴りややあり  
IV層底部の黄褐色土小-層15%

## PP69

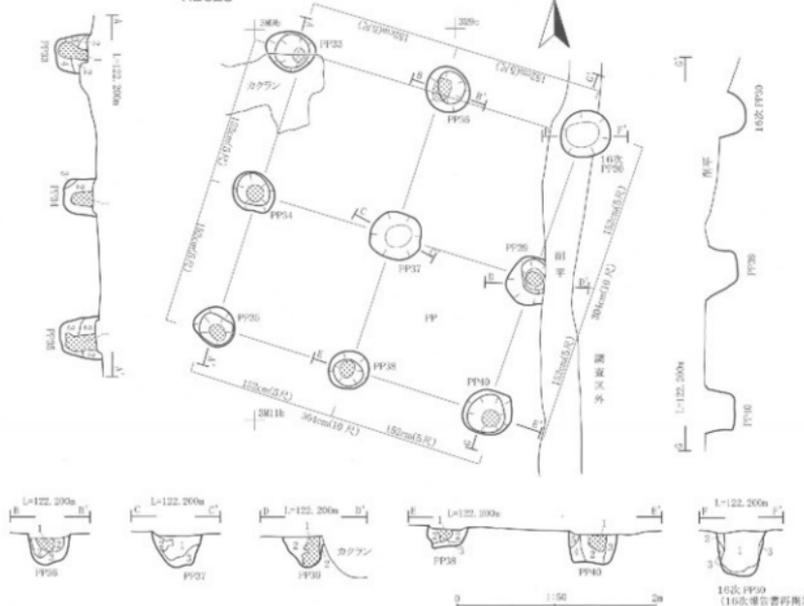
- 1 10YR2/3 黒褐 シルト 粘性あり 埴りなし  
IV層底部の黄褐色土小-層7%
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性あり 埴りなし  
IV層底部の黄褐色土小-層3%
- 3 10YR2/3 黒褐 砂質シルト 粘性なし 埴りややあり  
IV層底部の黄褐色土小-層大20%

## 柱状計測表

RB027	61	65	66	67	68	69
径(cm)	38×27	57×35	42×41	46×35	43×43	48×39
径26cm)	24	25	35	38	38	36
柱径	28×24	22×21	20×14	16×15	22×21	
備考	土層崩片 18.2g		灰黒崩片 22.0g			

第37図 RB027掘立柱建物跡

RB028



PP33

- 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性、埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-粒1% 柱状
- 10YR2/2 黒 珪 シルト 粘性、埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-中粒5%
- 10YR2/2 黒 珪 シルト 粘性、埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-粗大5%
- 10YR2/1 黒 シルト 粘性に富む 埴りややあり  
IV層起源の黄褐色土小-大粒5% 炭粒1%

PP34

- 10YR1.7/1 黒 粘性に富む 埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-粒1% 柱状
- 10YR2/2 黒 珪 粘性、埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-大粒10%炭に含む
- 10YR4/4 黒 砂質シルト 粘性、埴りなし  
黒褐色土小-大粒15%炭を含む

PP35

- 10YR2/2 黒 珪 シルト 粘性、埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-粒2% 柱状
- 10YR2/2 黒 珪 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-大粒20% Toaとと思われる白色土小-粒3%
- 10YR2/3 黒 珪 砂質シルト 粘性なし 埴りややあり  
黒褐色土小-大粒10%

PP36

- 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性あり 埴りややあり  
IV層起源の黄褐色土小-中粒2% 柱状
- 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性あり 埴りなし  
IV層起源の黄褐色土小-大粒7%
- 10YR2/2 黒 珪 シルト 粘性あり 埴りなし  
IV層起源の黄褐色土小-粗大粒10+15%

PP37

- 10YR2/2 黒 珪 シルト 粘性ややあり 埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-大粒7% 黒色土小-粗大10% 炭を含む
- 10YR3/3 黒 珪 砂質シルト 粘性なし 埴りややあり  
IV層起源の黄褐色土小-粗大粒20% 黒色土小-大粒15%
- 10YR2/2 黒 珪 シルト IV層起源の黄褐色土小-粗大粒9cm 15%

PP38

- 10YR2/2 黒 珪 シルト 粘性ややあり 固く埴まる  
IV層起源の黄褐色土小-粒2% 柱状
- 10YR2/1 黒 珪 シルト 粘性ややあり 固く埴まる  
IV層起源の黄褐色土小-粗大 1.5% Toaと思われる白色土小-粒21%
- 10YR2/4 黒 珪 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
砂粒21% 黒褐色土小-粗大粒ロケット色 15%

PP39

- 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性あり 固く埴まる  
IV層起源の黄褐色土小-粗大粒7%
- 10YR2/3 黒 珪 砂質シルト 粘性なし 固く埴まる  
黒色土小-粗大粒10%

PP40

- 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性ややあり 埴りあり 柱状
- 10YR2/2 黒 珪 シルト 粘性ややあり 埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-中粒5%
- 10YR2/2 黒 珪 シルト 粘性ややあり 埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-粗大10% Toaとと思われる白色粒小-粒1%
- 10YR3/3 黒 珪 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
黒褐色土小-粗大10%
- 10YR2/2 黒 珪 シルト 粘性あり 埴りあり  
IV層起源の黄褐色土小-粗大7+10%

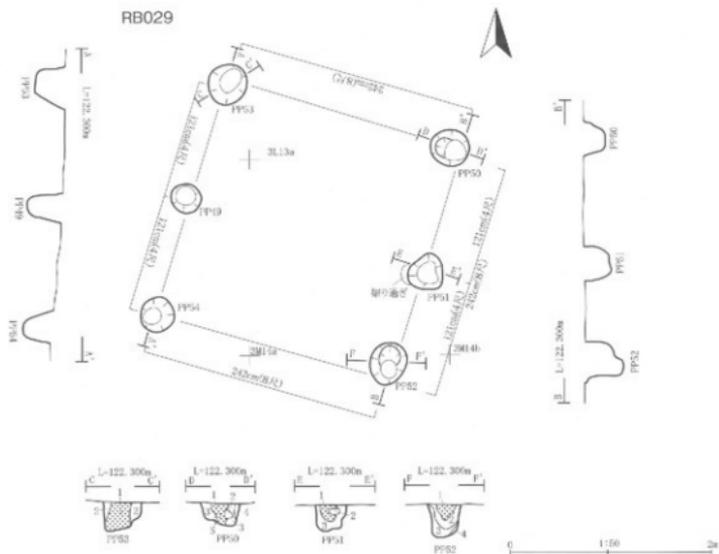
16次 PP30

- 10YR2/1 黒 シルト 粘性ややあり 埴りややあり  
IV層起源 2~3%
- 10YR2/1 黒 シルト 粘性あり 埴りややあり  
IV層起源 10%
- 10YR2/2 黒 珪 シルト 粘性あり 埴りなし  
IV層大粒7%

柱状計測表

RB028	33	34	35	36	37	38	39	40
径(mm)	56×42	47×39	44×39	47×44	53×59	39×39	49×9	53×48
深さ(mm)	70	37	42	32	36	24	31	34
柱径	18×13	18×16	17×14	24×17		18×13	17×12	18×17
備考								

第38図 RB028掘立柱建物跡



## PP50

- 1 10YR2/5 基層 シルト 粘りあり 埴りなし  
IV層小→中粒3% 柱痕
- 2 10YR4/4 黄 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
IV層底層の褐色土ブロック
- 3 10YR2/3 紅褐色 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
IV層底層の黄褐色土小→極大粒20%
- 4 10YR4/5 緑→黄褐色 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
黒褐色土小→大粒5%

## PP51

- 1 10YR2/2 基層 シルト 粘性なし 埴りややあり  
IV層底層の黄褐色土小→大粒3% 柱痕
- 2 10YR4/4 黄 砂質シルト 粘性なし 埴りあり
- 3 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
IV層底層の黄褐色土小粒→粒30%

## PP52

- 1 10YR2/2 基層 シルト 粘性なし 埴りややあり  
IV層底層の黄褐色土小→大粒3%
- 2 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性なし 埴りややあり  
IV層底層の黄褐色土小→極大粒10%
- 3 10YR4/4 紅褐色 砂質シルト 粘性なし 埴りなし  
IV層底層の黄褐色土小→極大粒25%
- 4 10YR4/4 黄 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
黒褐色土小→大粒10%

## PP53

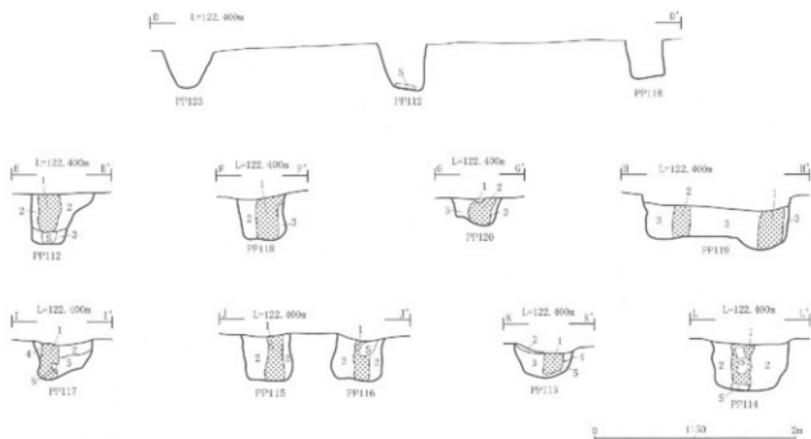
- 1 10YR1.7/1 黒 シルト 粘性なし 埴り既 柱痕
- 2 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性なし 埴りあり  
V層底層の黄褐色ブロック中→極大粒30%

## 柱穴計測表

RB029	49	50	51	52	53	54
径(cm)	31×31	38×38	37×33	45×35	43×40	36×34
深さ(cm)	37	24	27	36	30	32
柱速		18	17	19	22	
備考						

第39回 RB029掘立柱建物跡





## PP112

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 柱痕
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト IV-V層底面の黄褐色土小→粒大粒25%
- 3 10YR3/4 褐砂 V層底面の黄褐色が顕る

## PP113

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 炭粒含む
- 2 酸化層 厚3cm
- 3 10YR2/2 黒褐色シルト IV-V層底面の黄褐色土小粒→ブロック径3cm25%含む
- 4 10YR2/2 黒褐色シルト IV-V層底面の黄褐色土屑2cm10%
- 5 V層底面の黄褐色に黒褐色シルト小→粒大15%

## PP114

- 1 10YR2/2 黒褐色 柱痕
- 2 10YR2/2 黒褐色シルトとIV-V層底面の黄褐色土との混層

## PP115

- 1 10YR2/2 黒褐色 粘性なし 埴りあり 柱痕
- 2 10YR2/2 黒褐色シルトの小粒→径5cmとV層底面の黄褐色砂小→ブロック径5cmを50%ついで含む 濃小→粒大を含む

## PP116

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし 埴りあり 柱痕
- 2 10YR2/2 黒褐色シルトの小粒→径5cmとV層底面の黄褐色砂小→径5cmを殆ど含む、礫を多く含む

## PP117

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし 埴りなし 柱痕
- 2 V層底面の黄褐色に灰状構造 (厚35cm) の10YR2/2黒褐色シルトを30%含む
- 3 V層底面の黄褐色細粒色シルト径5cmを9%含む 4 10YR2/2黒褐色シルトに細小→粒大15%

## PP118

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 柱痕
- 2 V層底面の黄褐色に黒褐色シルトブロック径10cm20%
- 3 V層底面の黄褐色に黒褐色シルトブロック径5cm30%

## PP119

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性、しまりなし IV層底面の黄褐色土小→中粒2% 柱痕
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性、しまりなし V層底面の黄褐色砂小→粒大3% 柱痕
- 3 10YR2/2 黒褐色とV層底面の黄褐色砂小→径5cmが底に侵入した黄褐色の土

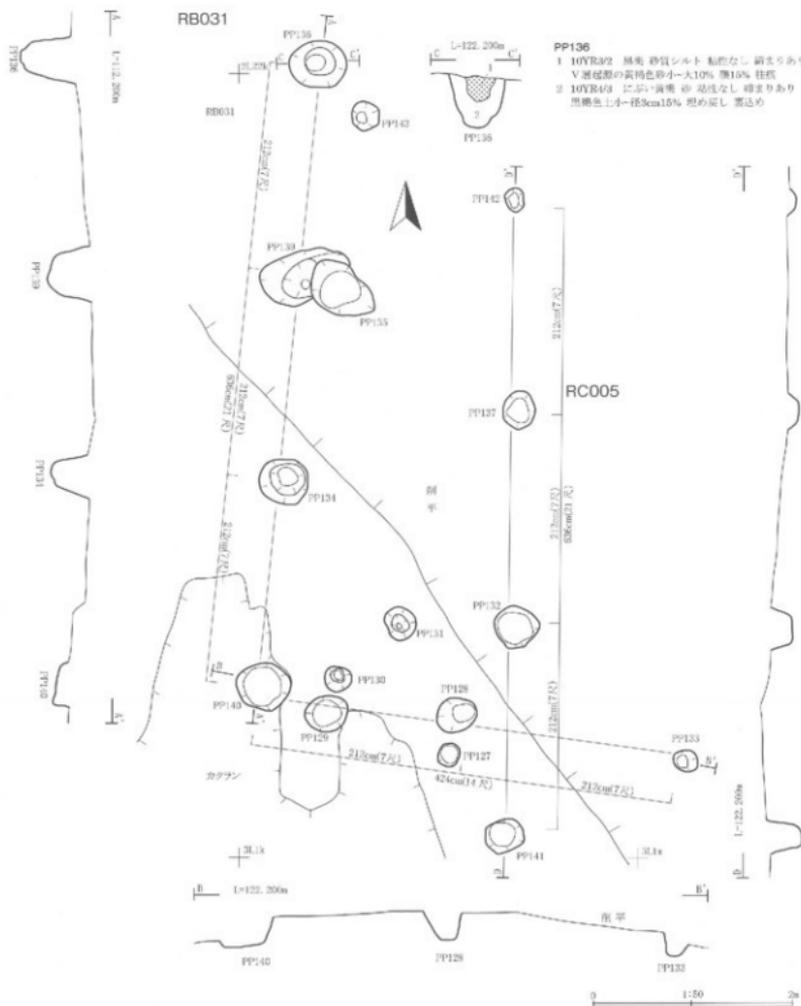
## PP120

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 固く埴まる 柱痕
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり 固く埴まる 柱痕
- 3 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 粘性なし 固く埴まる IV-V層底面の黄褐色土小→粒大20% 黄15%

## 柱穴計測表

	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	123
径5cm)	60×63	60×63	84×77	48×45	48×43	58×52	49×45	147×68	50×40	47×45	53×?
径3cm)	51	36	53	48	49	42	40	57	28	22	40
柱痕	22	20	22	16	19	23	21 直径	20×14			
備考									黒シルト V層粒	1層底シルトV層粒 5%層V層粒10% 層底シルト黒粒粒15%	

第41図 RB030掘立柱建物跡(2)



PP136  
 1 10YR3/2 黒黄 砂質シルト 粘りなし 硝りあり  
 V層位部の黄褐色砂小-大10% 微10% 柱状  
 2 10YR4/3 に近い黄褐 粘りなし 硝りあり  
 黒褐色土小-径5cm15% 認められ 蓋込み

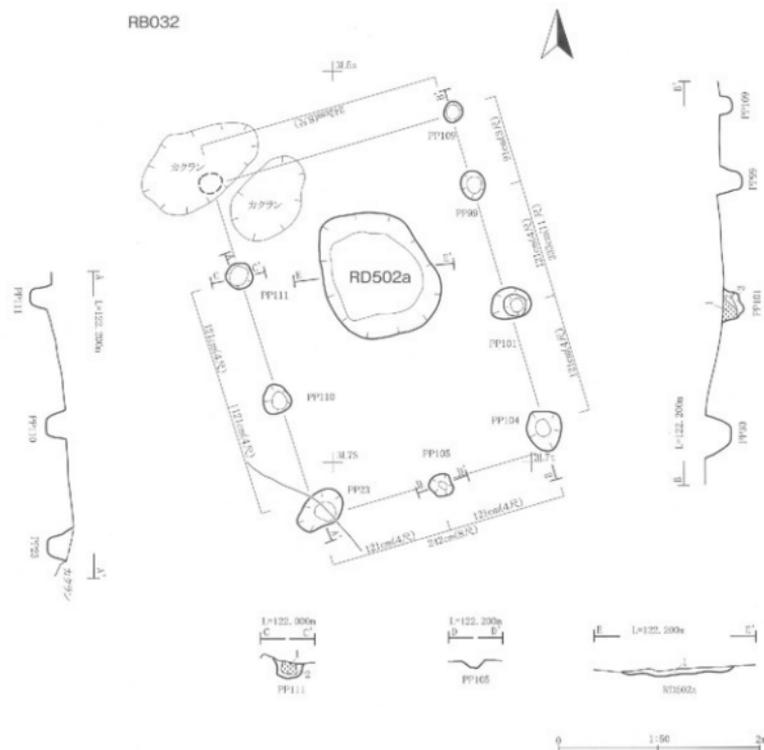
柱穴計測表

柱穴	128	132	134	136	139	140
径(cm)	42×24	37×22	48×46	57×45	92×52	53×49
深(cm)	28	22	39	51	44	32
柱状						
備考	黒黄シルト V層位 約20%	黒黄シルト V層位 約15%	黒黄シルト V層位 約16%、2層 V層位 約20%	黒黄シルト V層位 約10%		

柱穴計測表

柱穴	132	137	141	142
径(cm)	45×43	35×32	35×32	34×18
深(cm)	23	11	35	9
柱状	有			
備考	黒黄シルト V層位 約7%	黒黄シルト V層位 約15%	黒黄シルト V層位 約20%	黒黄シルト V層位 約15%

第42図 RB031掘立柱建物跡・RC005柱穴列



## PP101

- 1 10YR1.7/1 Ⅲ 2層より灰色地層びる シルト 粘性あり 締まりなし
- 2 10YR1.7/1 Ⅲ シルト 粘性あり 締まりなし V層底層の黄褐色の小-中粒砂%
- 3 10YR1.7/1 Ⅲ シルト 粘性あり 締まりやであり V層底層の黄褐色の小-中粒大粒10%

## PP111

- 1 10YR2/1 Ⅲ シルト 粘性に富む 締まりなし V層底層の黄褐色の小粒1% 粒質
- 2 10YR2/2 Ⅲ Ⅲ シルト 粘性やであり 締まりなし 全体にV層底層の黄褐色のIV層底層の黄褐色土ブロック種3cmを含む

## RD502a

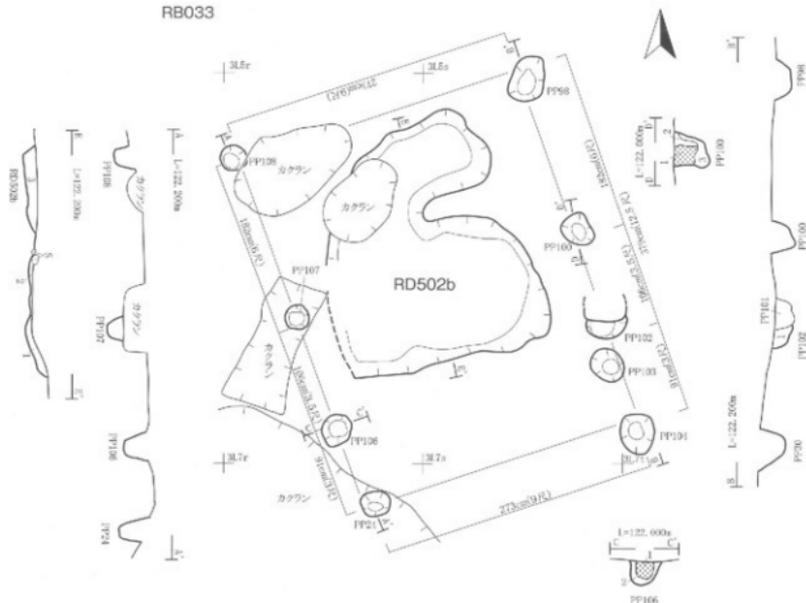
- 1 10YR2/2 Ⅲ Ⅲ シルト 粘性やであり 締まりなし  
IV層底層の黄褐色土小砂3-6%

## 柱穴計測表

	21	99	101	104	105	106	110	111
径(cm)	50×35	31×25	41×32	43×35	24×21	22×20	31×28	29×28
深さ(cm)	27	25	23	26	9	15	22	25
柱状	10							
備考	黄褐色シルト V層 砂210%		RD032- 313使用		黄褐色シルト IV層 砂25%		黄褐色シルト I, II層 IV層砂 30% 下 層IV層 2%	

第43図 RB032掘立柱建物跡・RD502a土坑

RB033



PP100

- 1 10YR2/2 蒸焼 シルト 粘性あり 締まりややあり  
IV層底面の黄褐色土小-層大7%
- 2 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性なし 締まりあり  
黄褐色土小-層大20%
- 3 10YR2/2 暗褐色 粘土 粘性あり  
VI層底面の砂質に蒸褐色土小-層大5%

PP102

- 1 10YR2/2 蒸焼 シルト 粘性あり 締まりなし  
V層底面の黄褐色砂小-層大7%

PP106

- 1 10YR2/2 蒸焼 シルト 粘性あり 締まりなし  
V層底面の黄褐色砂小-層大1%
- 2 10YR2/2 蒸焼 シルト 粘性あり 締まりややあり  
V層底面の黄褐色砂小-層大7%

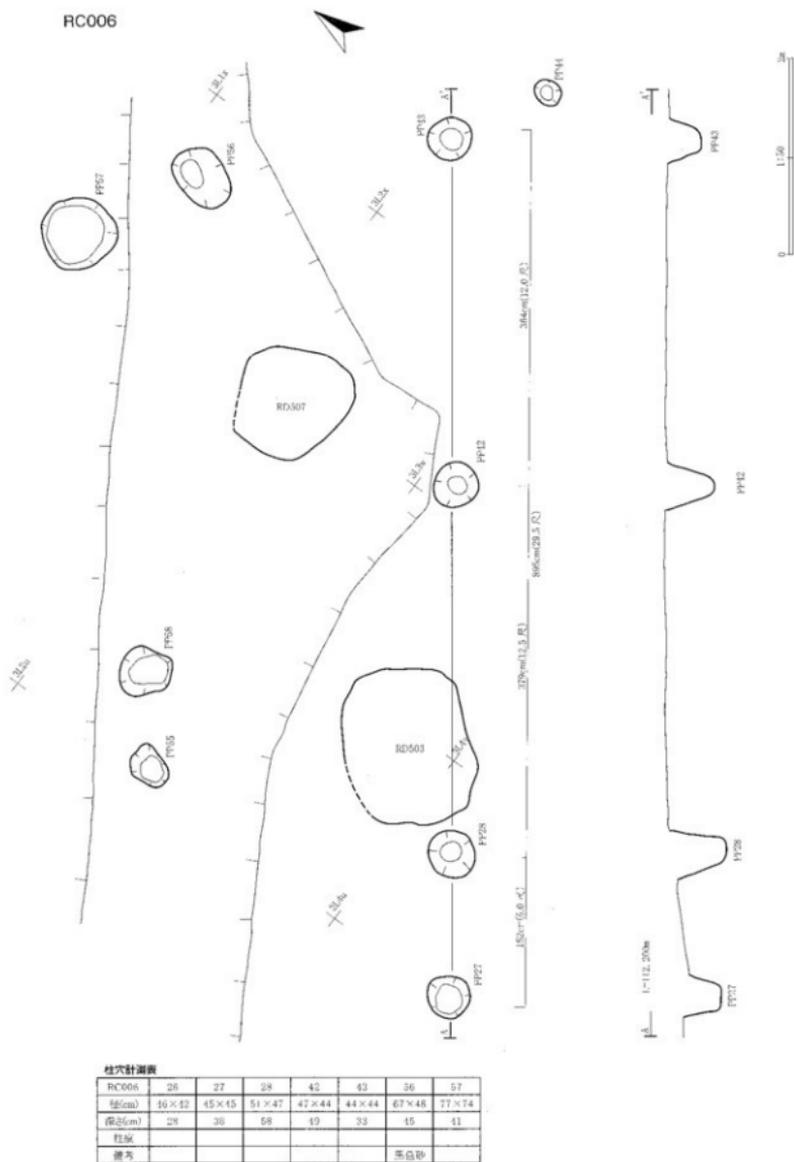
RD502b

- 1 10YR2/2 蒸焼 砂質シルト 粘性なし 締まりややあり  
蒸褐色シルトとV層底面の砂の混合土。もやもやしてはつきりしない。
- 2 10YR2/2 蒸焼 砂 粘性なし 締まりあり  
ところどころに蒸褐色土ブロック径3~7cmが混入する
- 3 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性なし 締まりあり  
蒸褐色シルト小粒-ブロック径5cm20%

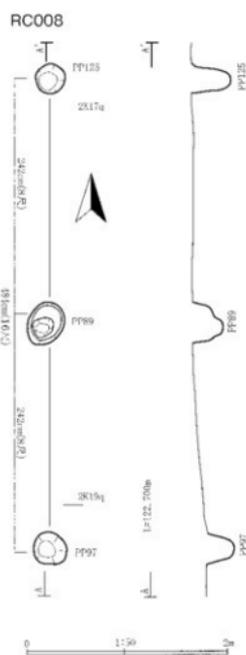
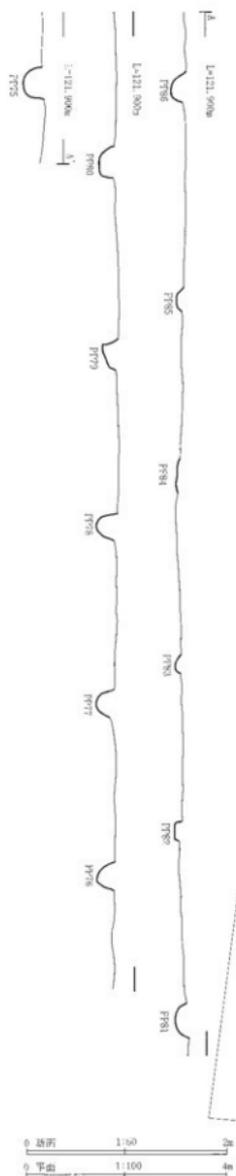
柱穴計測値

	RD023	24	98	100	102	104	106	107	108
径(5cm)	39×25	48×34	34×28	42×7	43×35	33×29	25×25	27×27	
深(5cm)	35	18	26	22	26	28	41	30	
柱底			20			18			
備考		1局蒸焼 シルト 2 層焼塊 シルトV層 粗10%				RD032・ 033兼用	蒸褐色シル ト V層 粗2%	二層 蒸 褐色シル ト V層 粘りあり 下層 蒸 褐色 砂質 土粗5%	蒸褐色シル ト V層 粘り7%

第44図 RB033掘立柱建物跡・RD502b土坑



第45図 RC006柱穴列



柱穴計測表

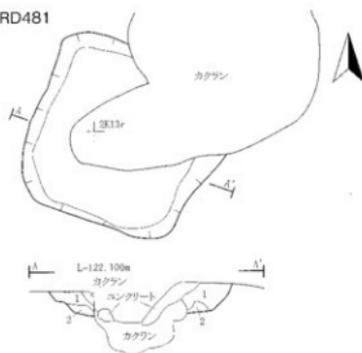
	89	97	125
径(cm)	46×36	36×33	33×30
高さ(cm)	31	32	40
柱種	23	4	4
備考	黒色シタ トIV種 短10% RA189の 前1合縁 有	黒色シタ トIV種 短2% RA189の 1号カマ 有	黒色シタ トIV種 短2%

柱穴計測表

	75	76	77	78	79	80
径(cm)	49×36	37×31	35×32	38×31	38×33	40×38
高さ(cm)	26	16	18	19	14	19
柱種						
備考						
径(cm)	81	82	83	84	85	86
高さ(cm)	37×31	31×22	28×17	37×32	28×24	30×26
柱種	14	10	4	船橋のみ	9	14
備考						

第46図 RC007・008柱穴列

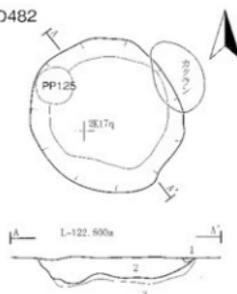
RD481



RD481

- 10YR2/1 黒 シルト 厚みあり 縞まじりややあり  
IV層底面の黄褐色土小-幅大約5~7%  
IV層上部の黄褐色土小-幅大約2%
- 10YR2/2 黒褐色 シルト 厚地に含む 縞まじりなし  
IV層底面の黄褐色土小-幅大約10%  
IV層上部の黄褐色土小-幅大約10%含む

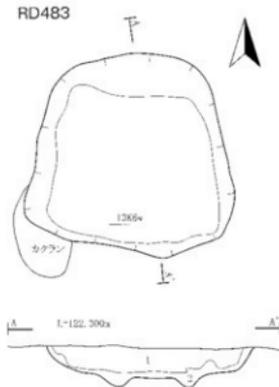
RD482



RD482

- 10YR1/7/1 黒 シルト 粘性あり 縞まじりなし  
IV層底面の黄褐色土小-幅大約10%
- 10YR1/7/1 黒 シルト 粘性あり 縞まじりややあり  
IV層底面の黄褐色土小-幅大約2%
- 10YR3/4 暗褐 シルト 粘性あり 縞く縞まる  
黒褐色土小-幅大約15% 縞り方

RD483

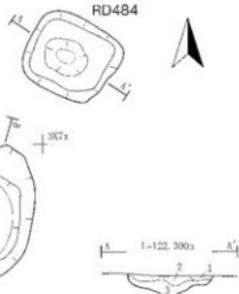


RD483

- 10YR2/1 黒 シルト 厚地、縞りなし  
IV層底面の黄褐色土小-幅大約10mm幅
- 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性、縞りあり  
黒褐色土小-幅大約ブロック幅30%

0 1:40 2m

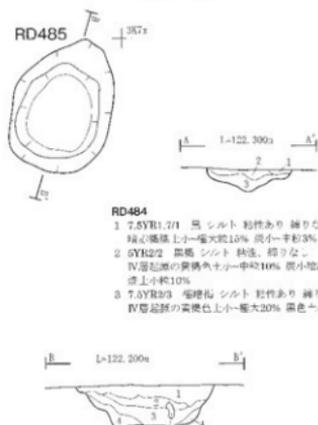
RD484



RD484

- 7.5YR1/7/1 黒 シルト 粘性あり 縞りなし  
塊状塊土小-幅大約10% 底小-幅約3%
- 6YR2/2 暗褐 シルト 粘性、縞りなし  
IV層底面の黄褐色土小-幅大約10% 底小-幅約20%  
底小-幅約10%
- 7.0YR3/3 暗褐色 シルト 粘性あり 縞りややあり  
IV層底面の黄褐色土小-幅大約20% 黒色土小-幅大約15%

RD485

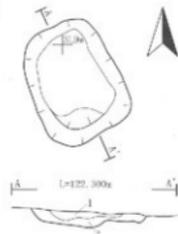


RD485

- 10YR2/3 黒褐色 シルト 厚地あり 縞りあり  
IV層底面の黄褐色土小-幅大約10% 黒色土小-幅大約ブロック幅5cm 5%
- 10YR3/3 暗褐 シルト 粘性あり 縞りあり  
IV層底面の黄褐色土小-幅大約ブロック幅3cm 20%  
黒色土小-幅大約7% 7%
- 10YR2/2 暗褐 シルト 粘性あり 縞りややあり  
IV層底面の黄褐色土小-幅大約5%
- 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性ややあり 縞りややあり  
黒色土小-幅大約10~15%

第47図 RD481~485土坑

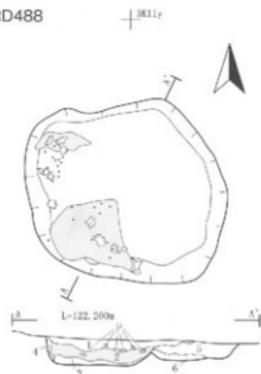
RD486



RD486

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 粘粒、綿りややあり  
IV層起源の黄褐色土小～大粒7%
- 2 10YR2/3 黒褐 シルト 粘粒あり 綿りややあり  
IV層起源の黄褐色土小～大粒15%

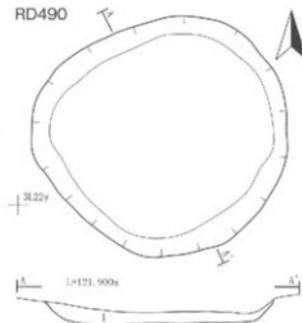
RD488



RD488

- 1 10YR2/3 黒褐 シルト 粘粒なし 綿りなし  
焼土粒小～中15% 炭粒2% IV層起源の黄褐色土小～大粒5%
- 2 7.5YR4/3 暗～5YR4/4 におひ赤褐 シルト 粘粒ややあり 綿りなし 焼土粒  
3 10YR2/3 暗褐 シルト 粘粒あり 綿りなし 介層にカーボン含む
- 4 10YR2/3 黒褐 砂質シルト 粘粒あり 綿りなし 炭のIV層起源焼土粒大15%含む
- 5 10YR2/2 黒褐 シルト 粘粒、綿りなし IV層起源の黄褐色土小粒～径4cm 5%
- 6 10YR2/3 黒褐 シルト 粘粒、綿りなし IV層起源の黄褐色土小粒を全体に含む

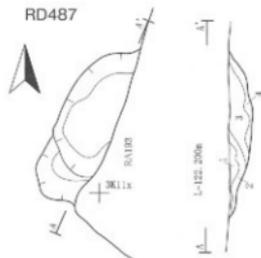
RD490



RD490

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘粒あり 綿りなし  
赤褐色の焼土小～大粒3% IV層起源の黄褐色土中～大粒5%

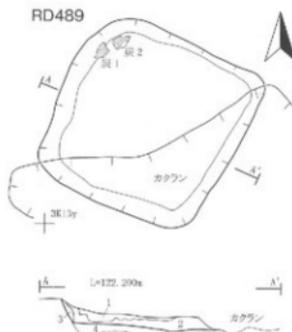
RD487



RD487

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘粒、綿りなし  
IV層起源の黄褐色土小～大粒10%
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘粒あり 綿りあり  
IV層起源の黄褐色土小粒～ブロック径3cm30%
- 3 10YR11/7H 赤 シルト 粘粒あり 綿りややあり  
IV層起源の黄褐色土小～中粒2%
- 4 10YR2/3 暗褐 砂質シルト 粘粒あり 綿りややあり  
黒色土小粒～径5cm30%

RD489

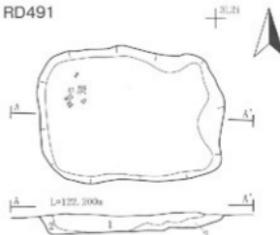


RD489

- 1 7.5YR2/2 暗褐 シルト 粘粒ややあり 綿りあり IV層起源の黄褐色土小粒5%  
焼土粒小～中15%
- 2 10YR2/3 暗褐 砂質シルト 粘粒なし 綿りあり 焼土粒小～中10%  
黄褐色土と暗褐色土が混じり合い 炭粒少量
- 3 10YR4/4 黄 砂質シルト IV層起源の黒褐土 焼褐色土大粒5%
- 4 10YR4/4 黄 砂質シルト 暗褐色土粒小～大粒を全体に含む 綿り方焼土

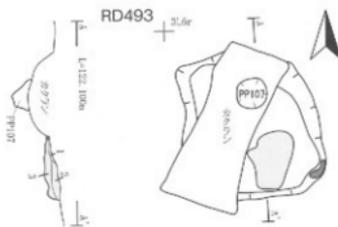
第48図 RD486～490土坑

RD491



RD491

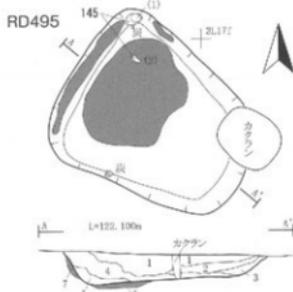
- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性なし、締りややあり
- IV層底面の黄褐色土小粒2%、灰小粒2-3%
- 2 10YR3/3 暗赤 砂質シルト 粘性ややあり 固く締まる  
黒色土小粒大粒15%



RD493

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性なし、締りあり  
黄土小粒5% 白色小粒3% 灰小粒3%
- 2 5YR3/2 暗赤褐 砂質シルト 粘性なし、締りあり  
白色土小粒5%
- 3 5YR2/2 黒褐 砂質シルト 粘性あり、締りなし
- 5YR3/4 暗赤褐土を全体に多く含む
- 5YR4/8 赤褐色土小粒大粒10%

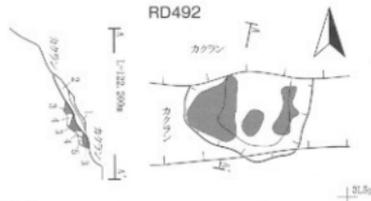
RD495



RD495

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性あり、締りややあり  
IV層黄褐色土小粒3%、灰粒2%
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性あり、締りややあり  
IV層黄褐色土粒小〜中粒5%
- 3 10YR1/7 黒 粘質シルト 粘性なし、締りあり  
IV層黄褐色土小〜中粒2%
- 2.5Y3/1 暗赤 砂質シルト 粘性なし、締りややあり  
IV層粘褐色土小〜大粒10%
- 7.5YR3/1 黒褐 砂質シルト 粘性なし、締りあり  
IV層大粒7%、黄土褐色を全体に含む
- 5YR4/4 に近い赤褐 粘質なし、固く締まる 黄土 (V層が黄土化)
- 5YR3/3 暗赤褐 砂質シルト 粘性なし、締りややあり 黄土 (IV層が黄土化)
- 1-5は自然層

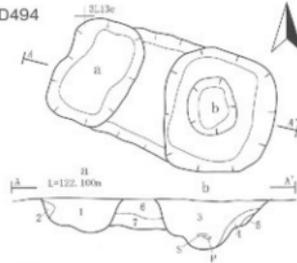
RD492



RD492

- 1 7.5YR3/1 黒褐 シルト 粘性なし、締りあり  
暗褐色土小粒-ブロック径6cm15% 白色土小〜中粒3% 覆土?
- 2 7.5YR1/7 黒 シルト 粘性なし、締りあり  
土小粒5% 土上小粒大粒3%
- 3 5YR3/6 暗赤褐-5YR3/4 暗赤褐 砂質シルト 粘性なし、締りあり 黄土
- 4 7.5YR2/3 暗赤褐 砂質シルト 粘性、締りなし V層底面の黄褐色土小粒大粒10%  
黄土力黄土
- 5 5YR3/2 暗赤褐 砂質シルト 粘性なし、締りややあり

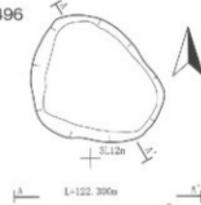
RD494



RD494

- 1 10YR2/3 黒褐 砂質シルト 粘性なし、締りあり  
IV層底面の黄褐色土小粒小〜大15% 土大粒中〜大3%
- 2 10YR3/4 暗赤 砂質シルト 粘性なし、締りあり 凝結黄土
- 3 10YR2/2 黒褐 砂質シルト 粘性ややあり、締りあり  
黄褐色土小〜大粒18% 土大粒2%
- 4 10YR2/2 黒褐 砂質シルト 粘性、締りややあり  
IV層底面の黄褐色土小〜大粒30%
- 5 10YR4/4 暗赤 砂質シルト 暗褐色土小〜大粒7%
- 6 10YR2/2 黒褐 砂質シルト 粘性なし、締りややあり  
IV層底面の黄褐色土小粒〜径5cmブロック10%
- 7 10YR4/4 暗赤 砂質シルト 粘性なし、締りややあり  
暗褐色土小粒〜板状塊の長さ8cmブロック20%

RD496



RD496

- 1 10YR2/2 黒褐 砂質シルト 粘性ややあり、固く締まる  
IV層粘褐色土小粒大粒15% 灰小粒2%
- 2 10YR3/3 暗赤 砂質シルト 粘性なし、固く締まる  
黒褐色土小〜大粒大20%

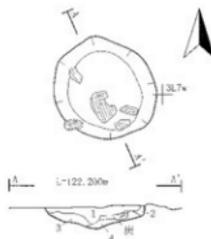
RD497



RD497

- 10YR242 黒粘 シルト 丸形なし 縁りあり IV層底部の黄褐色土小へ種大粒10%  
細小へ混入7%
- 10YR433 に近い黄粘 砂質シルト 縁生やあり しまりあり  
IV層底部の黄褐色土小へ種大粒が層に混入

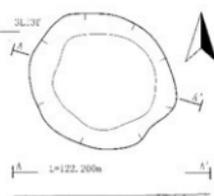
RD498



RD498

- 10YR223 黒色 シルト 粘粒や中粒 粘まりや中粒 黄褐色土混入
- 5YR234 暗黒・黒褐色流土 粘粒や中粒 粘まり中
- 10YR223 黒褐色 シルト 粘粒や中粒 粘まり中 黄褐色土混入砂質土1%混入
- 10YR34 粘褐色 シルト 粘粒や中粒 粘まり中 黄褐色土混入砂質土10%混入

RD499

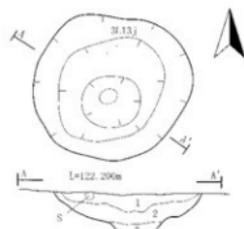


RD499

- 10YR222 黒色 砂質シルト 丸形、縁りなし
- 10YR271 黒色土ブロック(径10cm)20%、IV層底部の黄褐色土小へ種大粒5%
- 10YR222 黒褐色 砂質シルト 縁生あり、縁りなし
- IV層底部の黄褐色土小へブロック(径10cm)25%

1, 2は坑の裏し

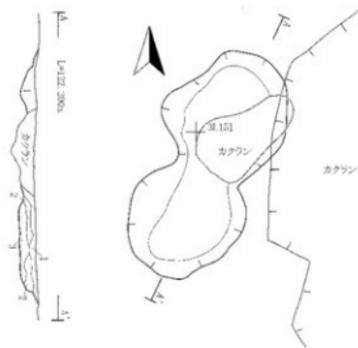
RD500



RD500

- 10YR222 黒褐色 砂質シルト 縁生や中あり 縁りあり  
IV層黄褐色土小へブロック(径5cm)5%、細小へブロック(径10cm)5%
- 10YR222 黒色 砂質シルト 丸形や中あり 縁りなし  
IV層小へブロック(径10cm)25%、砂ブロック(径10cm)2%
- 10YR406 褐色 粘粒なし、縁りなし  
黄褐色土へブロック6%

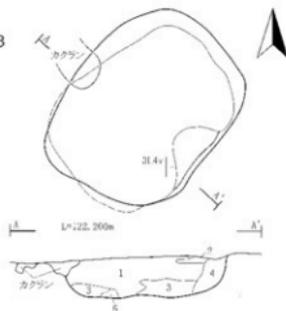
RD501



RD501

- 10YR221 黒色 シルト 粘粒や中粒 粘まり中
- 10YR221 黒褐色 シルト 丸形や中粒 粘まりや中粒 黄褐色土質粘土1%混入のシダ(ハス)の根子
- 10YR271 黒色 シルト 粘粒や中粒 粘まりや中粒 (※1層と2層の中間土)

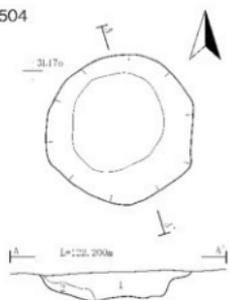
RD503



RD503

- 10YR221 黒褐色 シルト 粘粒や中粒 粘まり中
- 10YR221 黒褐色 シルト 粘粒や中粒 粘まり中 黄褐色土質土10%混入
- 10YR222 黒褐色 シルト 粘粒や中粒 粘まり中 黄褐色土質土20%混入
- 10YR222 黒褐色 シルト 粘粒や中粒 粘まり中 黄褐色土質土40%混入
- 10YR444 褐色 シルト 粘粒や中粒 粘まり中  
黄褐色土質土10%・黒褐色シルト10%混入

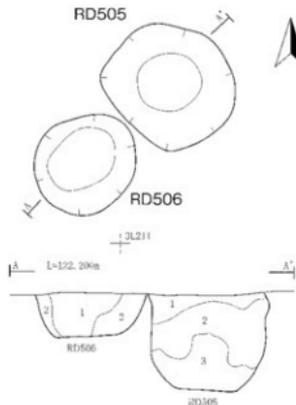
RD504



RD504

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘りなし 締りなし
- 2 10YR4/4 褐色 砂質土 粘りなし 締りなし 黒褐色シルトの混入 (赤褐色の遺物の可能性あり)

RD505



RD505

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘りなし 締りなし  
V層底面の黒褐色小〜大粒5%
  - 2 10YR2/2 黒褐色 粘りなし 締りなし  
V層底面の黒褐色小〜大粒5%
  - 3 10YR2/1 黒褐色 シルト 粘りなし 締りなし  
V層底面の黒褐色小〜大粒5%
- 1〜3は詰め戻し

RD506

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘りなし 締りなし  
V層底面の黒褐色小〜大粒2〜5%
  - 2 10YR2/2 黒褐色 粘りなし 締りなし  
V層底面の黒褐色小〜大粒20% 埋め戻し
- 1、2は詰め戻し

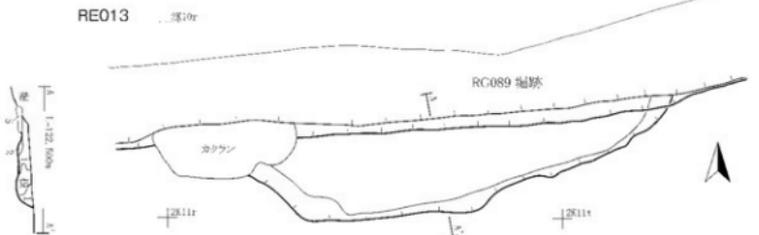
RD507

- 1 10YR2/2 黒褐色 粘りなし 締りなし  
黒褐色シルトブロックを含む、締りなし
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘りなし 締りなし  
V層底面の黒褐色小〜大粒10%

RD507



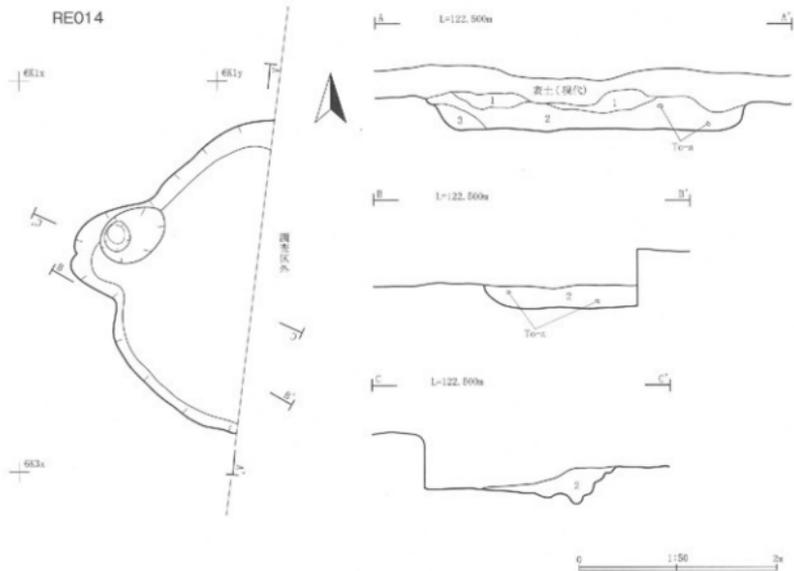
RE013



RE013

- 1 10YR2/1 黒褐色 シルト 粘りなし 締りなし  
V層底面の黒褐色小〜大粒5%
- 2 10YR4/4 褐色 シルト 粘りなし 締りなし  
黒褐色小〜大粒10% 埋り方

第51図 RD504～507土坑・RE013竪穴状遺構



RF014

1 10YR22 黒褐色 シルト 粘液中 凝結中

2 10YR21 黒色 シルト 粘液中 凝結中 輝褐色砂質土7% (土の5%に混入)・Toraデフラ(10YR6/4)に4% 炭褐色粉末状、点状に混入1%前後混入

3 10YR20 黒色 シルト 粘液中 凝結中 輝褐色砂質土10%

RF012

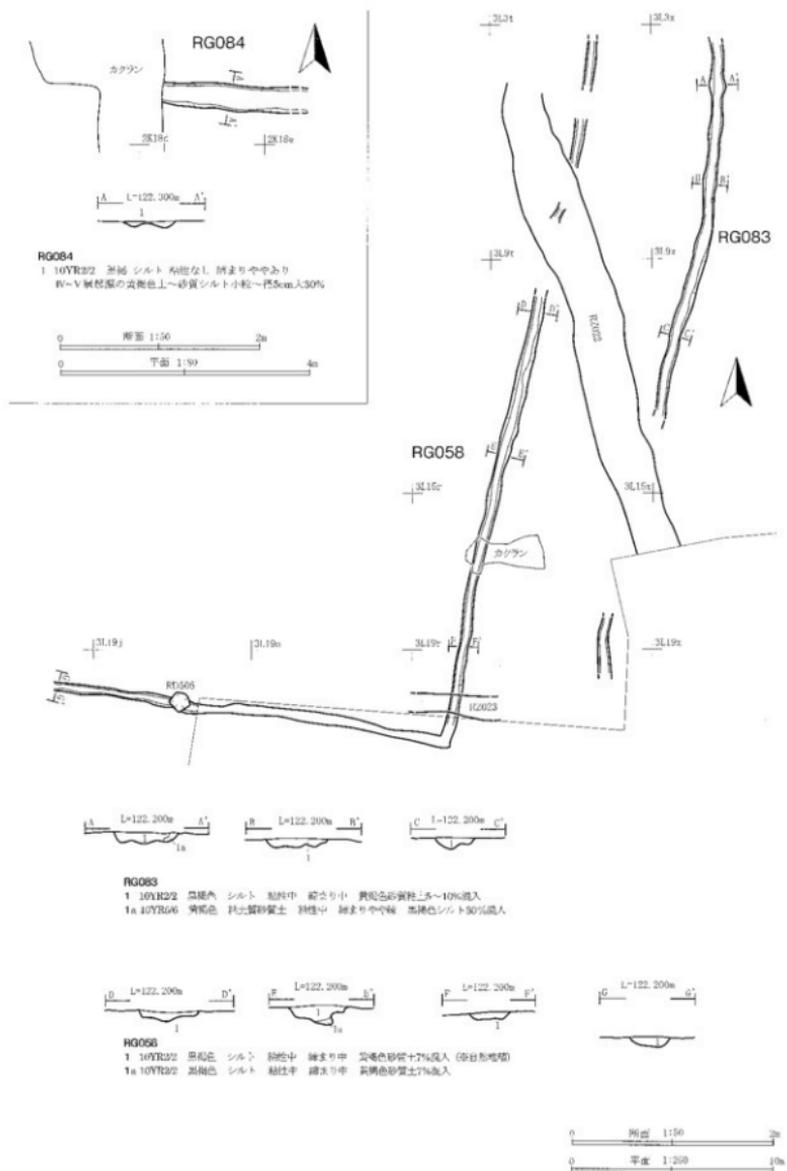
RF012

1 10YR1.2/1 黒 シルト 粘性、輝りあり

混入物なし

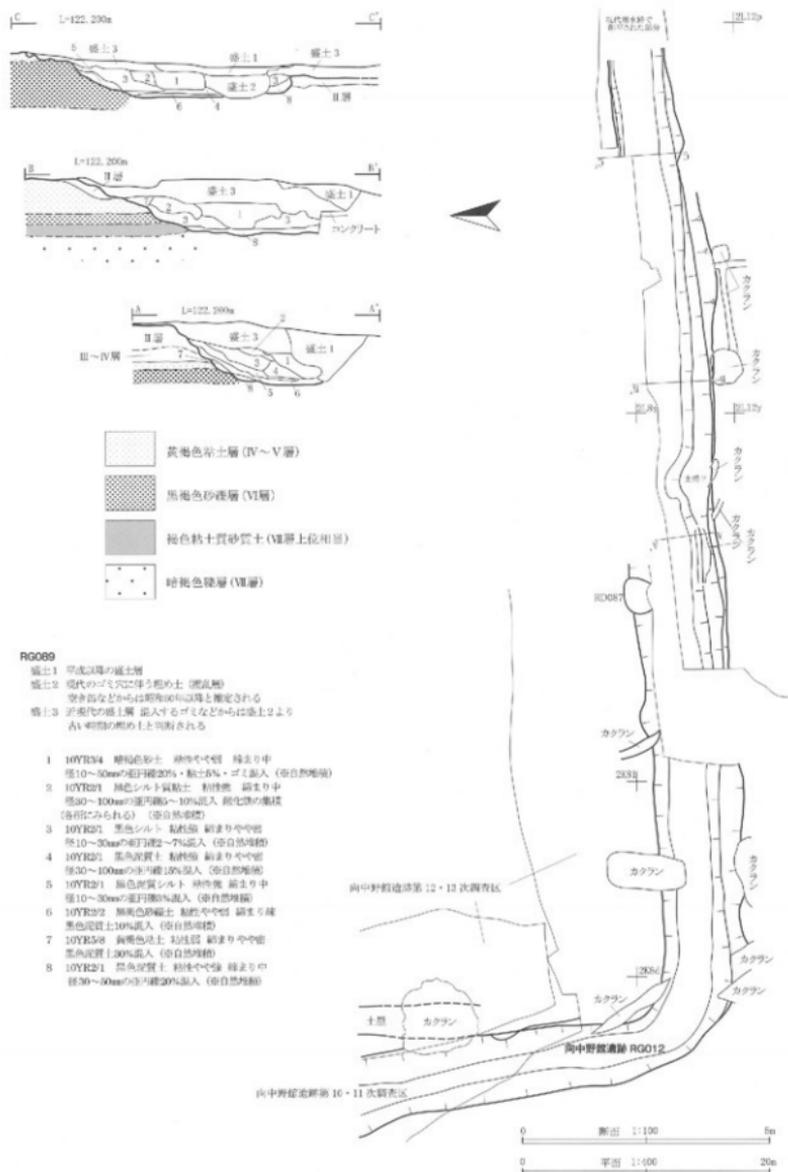
2 7.5YR3/2 黒褐色 粘性なし 輝りあり 焼土化したV層

第52図 RE014竪穴状遺構・RF012焼土遺構

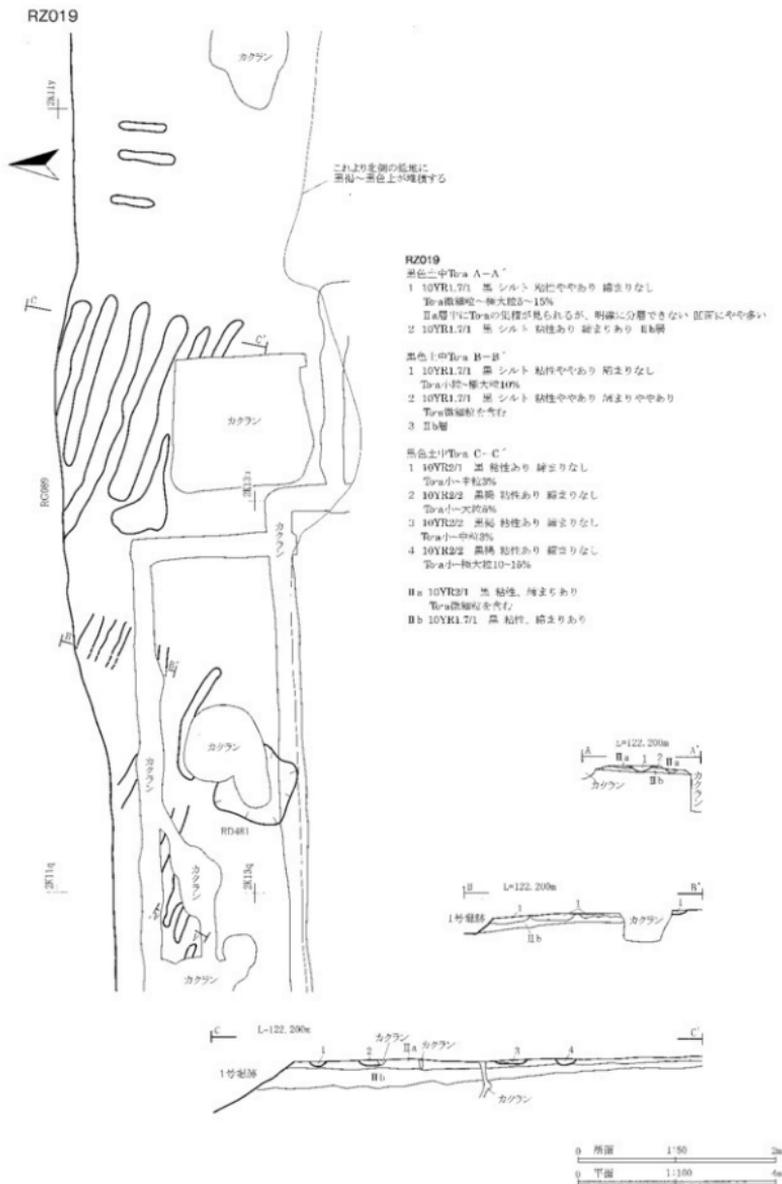


第53図 RG058・083・084溝跡



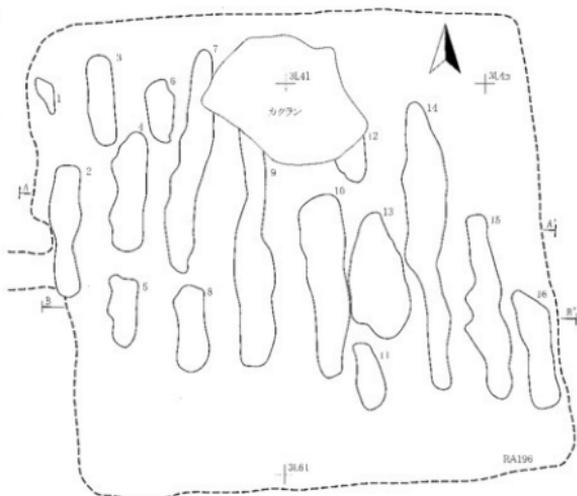


第55図 RG089遺跡

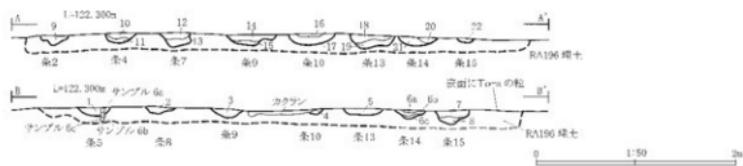
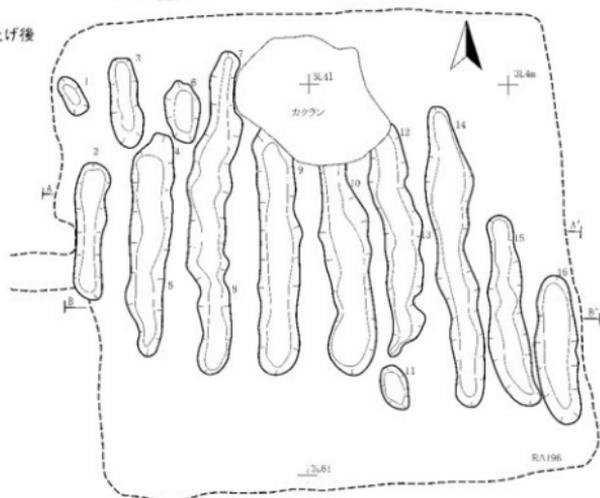


第56図 RZ019政間状遺構

RZ020 検出状況



RZ020 掘り上げ後



第57図 RZ020畝間状遺構(1)

### RZ020土層

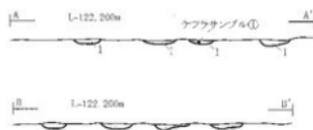
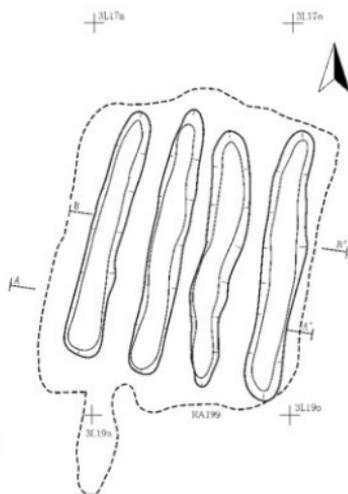
すべて10YR2/1色-2/2濃弱 シルト 粘性なし 粘りやであり  
 表により以下の通りToa等の含有物割合が高くなる

- 1 (表5) Toa小-極大粒10-13%
- 2 (表6) Toa小-極大粒3%
- 3 (表9) Toa小粒-ブロック粒3cm 5%
- 4 (表10) Toa小ブロック粒2cm 30%
- 5 (表13) Toa小-極大粒2%
- 6 (表14) a Toa小10%  
 b Toa 1-2cmの粒状が稀種  
 c 高嶺 シルト
- 7 (表15) Toa小-1粒
- 8 (表15) Toa小-極大粒3%
- 9 (表2) 10YR2/1 色 シルト 粘性なし 粘りなし  
 IV層底面の黄褐色土小-中粒3% Toa小-大粒2%
- 10 (表4) Toa小-中粒2-3%
- 11 (表4) Toa小-極大粒20%
- 12 (表5) Toa小-1粒2%
- 13 (表5) Toa小-極大粒20-30%
- 14 (表6) Toa小粒2%
- 15 (表6) Toa小-極大粒10%
- 16 (表10) Toa小-1粒2%
- 17 (表10) Toa小-極大粒10%
- 18 (表13) Toa小-中粒2% IV層底面の黄褐色土小-1粒2%
- 19 (表13) Toa小-極大粒30% 粘長さ7cm厚さ2cmの層状
- 20 (表14) Toa小-1粒2%
- 21 (表14) Toa小-極大粒7%
- 22 (表15) Toa小-極大粒10%

### RZ021 検出状況



### RZ021 掘り上げ後

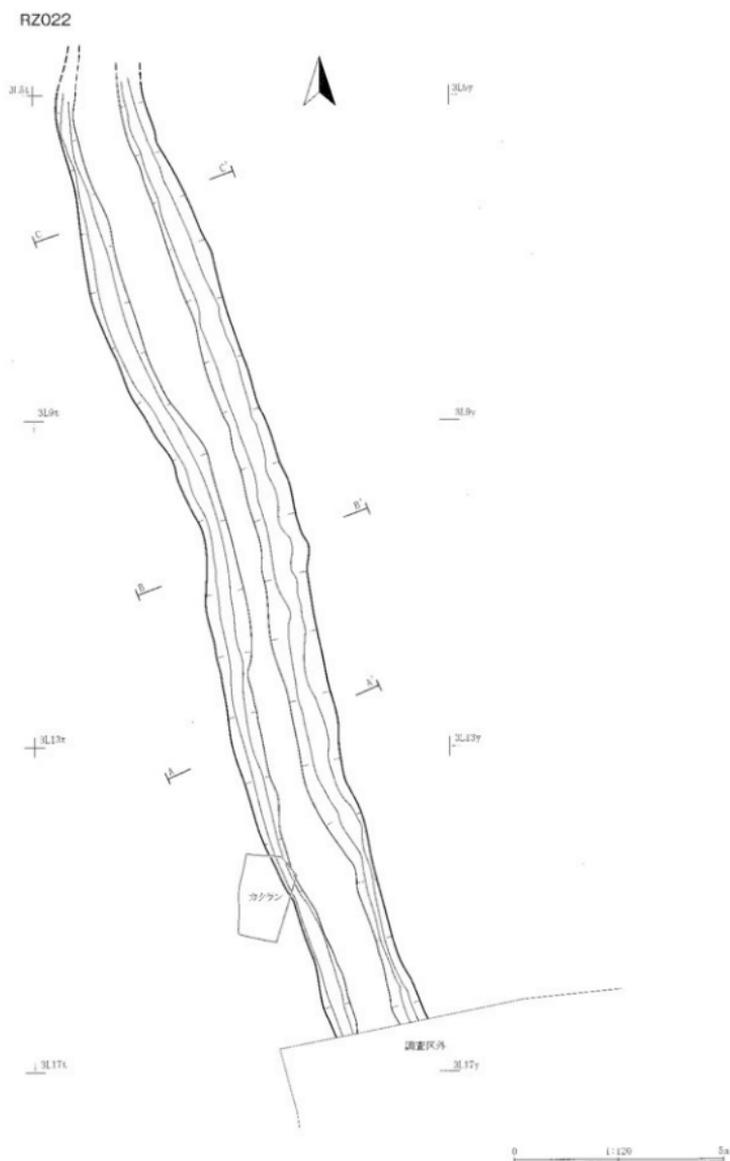


### RZ021

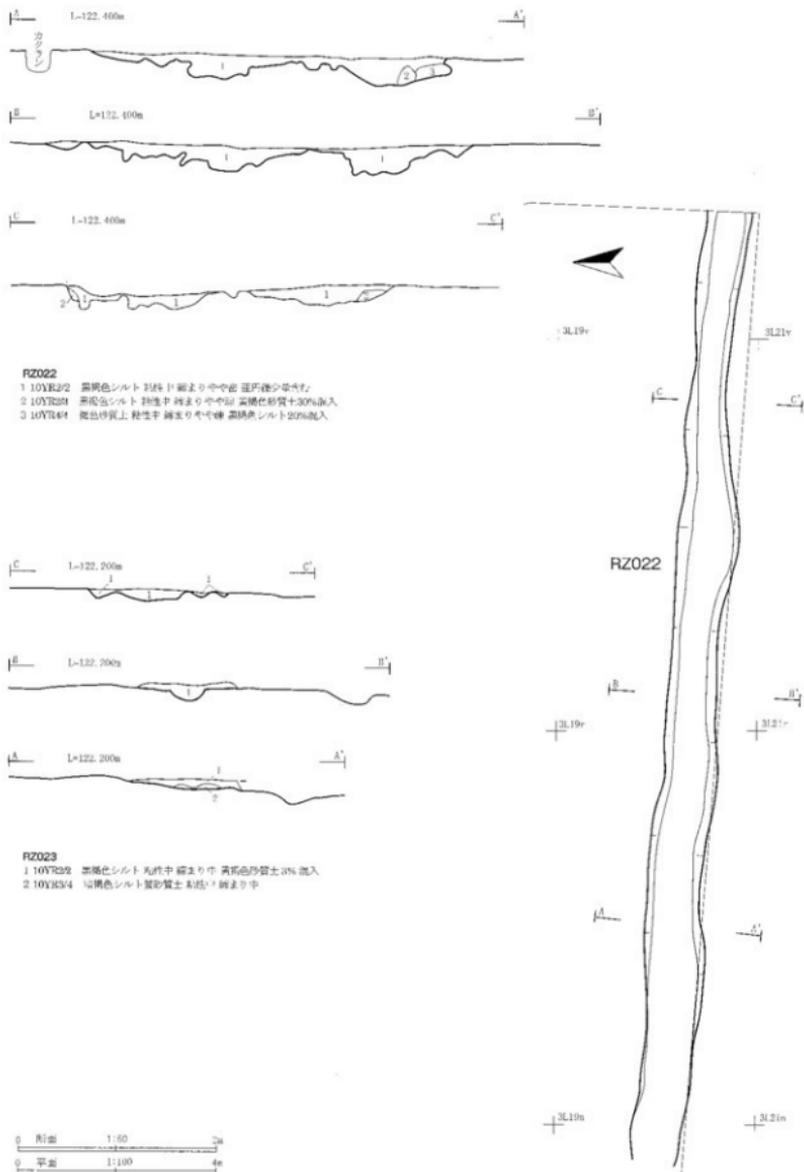
- 1 10YR2/2 黄褐色シルト 粘性なし 粘りあり  
 Toaアフラ (10YR2/1に比、黄褐色土小粒0.7%混入)

0 1:50 2m

第58図 RZ020 (2)・RZ021畝間状遺構



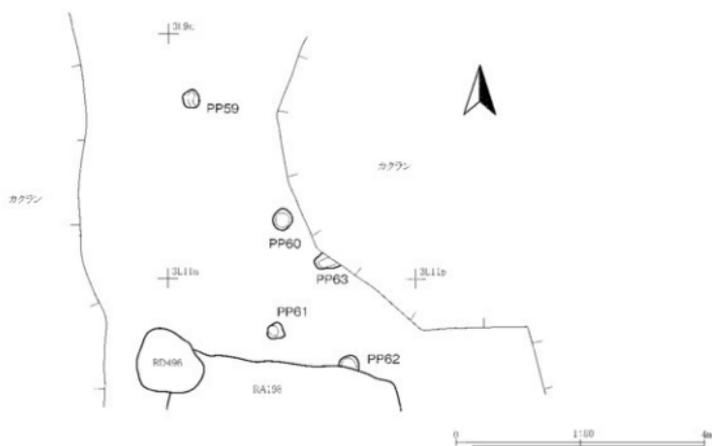
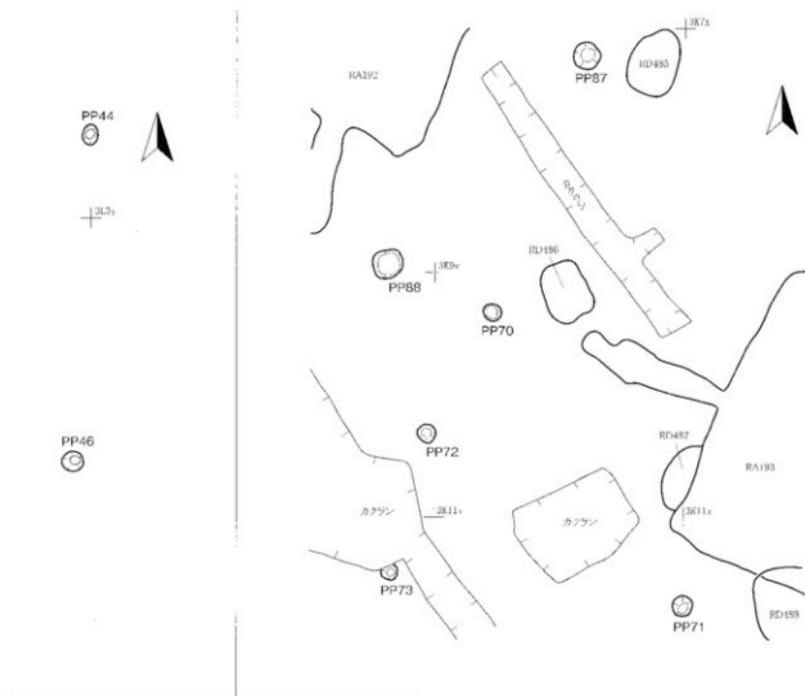
第59図 RZ022道路状遺構（1）



第60図 RZ022 (2)・RZ023道路状遺構



第61図 柱状土坑 (1)



第62図 柱穴状土坑 (2)

第5表 壁穴住居跡一覧表

新築番号	旧築番号	グリッド	時期	規模(m)	壁跡(m)	圧室(m)	主軸方向	コマド位置	特徴・備考	
1	RA128	3M11c	奈良	4.16×3.76	26	124	N-70°-W	西北側中央	今次調査では取り出しのみ	
2	RA187	15号住	2L23a	奈良	3.94×3.98	22	<13.0>	N-48°-W	北側壁やかわり	消失注意、炭化材出土
3	RA188	14号住	2X15a	平安	3.91×4.10	23	133	N-88°-W	下階壁北寄り前室壁北寄り	検出前に焼入る
4	RA189	13号住	2K18p	平安	3.82×4.03	20	132	N-97°-E	日東壁北寄り前室壁北寄り	1号コマドに焼入る
5	RA190	12号住	2R20a	平安	2.80×2.86	30	6.9	N-96°-E	東壁北寄り	炭化材、炭化材出土
6	RA191	16号住	3L22a	平安	2.17×1.96	52	2.9	N-109°-E	東側壁北寄り	小室、床中央に柱穴
7	RA192	7号住	3K2a	平安	4.63×4.025上	29	<7.4>	N-163°-W	南側壁寄り	柱底によって北西部分を欠角
8	RA198	1号住	3K9a	平安	5.59×4.90	30	2.5	N-67°-W	北西側中央	古い柱穴あり
9	RA191	3号住	3K15a	平安	4.53×4.54	46	<15.0>	N-121°-E	東側壁北寄り	消失注意
10	RA196	4号住	3L5a	平安	2.52×4.50	11	13.3	K-100°-W	西側壁寄り	ほとんど取り残されている
11	RA196	10号住	3L3j	平安	4.95×4.92	22	21.2	K-91°-W	西壁中央	壁中にR2020鉄釘状遺構
12	RA197	6号住	3L0j	平安	3.00×?	33	<7.7>	N-6°-E	北壁	骨片や骨髄によって欠角
13	RA198	6号住	3L1n	平安	3.85×3.90	17	12.5	N-92°-E	東壁北寄り	R7496に北壁跡を載らる
14	RA199	2号住	3J12c	平安	3.34×2.54	42	5.5	N-175°-W	南壁西寄り	木遺構、R2702に載らる
15	RA200	9号住	3L1K	平安	2.66×2.55>	-	<4.8>	N-5°-E	北壁	柱穴2個、R2702に載らる
16	RA201	8号住	2M20d	平安	<2.75>×2.34	35	<3.41>	N-130°-E	南壁南寄り	壁面及び穴穴の柱目はクランクで壊破されている

第6表 掘立柱建物跡一覧表

新築番号	旧築番号	グリッド	構成柱穴	方位	掘行(間・cm)	壁行(間・cm)	掘行方向	遺物・その他
RB026	4号掘立	3K1a	P190-96	平安	2間・212	1間・212	N-76°-W	
RB027	3号掘立	3L4a	PF64-69	平安	2間以上・424	2間・349	N-90°-W	PF64土器割18.2g、PF66須恵器22.0g
RB028	1号掘立	3M9b	PF93-10	平安	2間・304	2間・304	N-72°-W	
RB029	2号掘立	3L12y	PF49-54	平安	2間・212	1間・212	N-72°-W	
RB030	7号掘立	2K15m	PF123-112・118・120・119・117・116・115・114・113・122	中世以降	4間・803	2間・439	K-84°-W	
RB031	9号掘立	3L23k	PF136・129・134・130・128・133	中世以降?	2間?・424	3間?・636	N-82°-W	
RB032	6号掘立	3L5r	PF109・109・101・104・106・23・110・111	近世以降	2間・242	3間・333	N-73°-E	
RB033	5号掘立	3L5r	PF98・100・102・104・24・106・107・108	近世以降	1間・273	3間・379	N-71°-E	

\*グリッドは遺構北西角である

第7表 柱穴列一覧表

新築番号	旧築番号	グリッド	構成柱穴列	時期	規模(間・m)	掘方向	特徴・備考
RB006	2号柱穴列	2L23	P1142・137・132・141	近世以降	3間・636	N-1°-E	RB031と直交、跡部不明
RB006	8号掘立	3L2n	PF43・42・28・27	近世以降	8.95	N-53°-E	
RB007	1号柱穴列	3K22a	PF73-86	近世~現代	11間・265	K-7°-E	柱穴2個、跡部不明
RB008		3K16p	PF125・89・97	中世以降	2間・484	真北方向	RD482、RA189を切る

第8表 土坑一覧表

遺構名	新築番号	グリッド	時期	平面形	開口部(m)	深さ(m)	用途・遺物	特徴・備考
RD481	26号土坑	2K12q	平安	楕円形	1.50×1.48	1.8		掘中にToa
RD482	25号土坑	2K16p	平安	円形	1.30×1.28	20		
RD483	23号土坑	3K5v	平安	楕円形?	1.70×1.67	30		
RD484	22号土坑	3K5v	平安	楕円形	0.74×0.65	1.8		
RD485	21号土坑	3K7w	平安	楕円形	1.12×0.81	36		

遺構名	計画図名	グリッド	平面形	開口幅(m)	深さ(cm)	遺構・遺物	特徴・備考	時期
RD486	20号土坑	3I39w	隅丸長方形	0.97×0.73	23			平安
RD487	19号土坑	3I30w	楕円形	1.43×?	15		壁の片面性もあり	平安?
RD488	7号土坑	3K11x	楕円形	1.79×1.53	24	RA193を切る 上層多量	焼成土坑 焼土層積	平安
RD489	8号土坑	3K12y	隅丸方形	1.30×1.50	27	壁面に面られる	焼成土坑? 木炭	平安
RD490	12号土坑	3K21y	楕円形	1.99×1.93	27			平安?
RD491	15号土坑	3L2b	隅丸長方形	1.52×1.10	16			平安?
RD502	(2号成土)	3I4a	隅丸長方形?	0.98×?	16			平安
RD493	18号土坑	3L6c	隅丸長方形?	1.28×1.12	16		焼成土坑 焼土の浮層	平安
RD491	6号土坑	3I13c	長方形?	1.81×1.02	36		木組による焼入心?	平安?
RD495	5号土坑	3L17c	隅丸内形	1.63×1.28	22		焼成土坑 壁と壁に焼土形成	平安
RD496	13号土坑	3L11m	楕円形	2.16×0.96	16			平安
RD497	9号土坑	3I14w	隅丸長方形	1.61×1.14	15	出溝、土留木組に区別される	列+中にTo-a壁	平安?
3D488	11号土坑	3L6v	円形	0.83×0.89	16		壁面付土に多量の炭化材、丸瓦片	平安
RD499	3号土坑	3L13c	円形	1.22×1.06	13		遺構	近世以降
RD600	4号土坑	3L18	円形	1.30×1.22	38	出溝	遺構	近世以降
RD501	24号土坑	3L14k	隅丸方形	2.28×1.05	14		カクランによる焼成が強い	近世以降?
RD502a	17号土坑a	3L5a	楕円形	1.31×1.12	17		RD502cに伴う?	近世以降
RD502b	17号土坑b	3L5b	不整形	2.57×2.04	10		RD502cに伴う?	近世以降
RD603	14号土坑	3L3a	隅丸方形	1.57×1.23	33		遺構はオーバーハンダ	近世以降?
RD504	10号土坑	3I47a	円形	1.16×1.12	22			平安
RD505	2号土坑	3L3C	円形	1.04×0.84	86	京・豊築の付次 舟井	遺構	18世紀
RD606	1号土坑	3I30k	円形	0.90×0.79	40	舟井	遺構	近世
RD607	16号土坑	3L2v	不整形	1.12×1.11	26			近世以降

第9表 壁穴状遺構一覧表

遺構名	計画図名	グリッド	時期	壁幅(m)	深さ(cm)	備考・特徴
RB013	2号穴状遺構	2K10r	古代	4.37以上	15	出溝に切りかたで埋置のみ
RB014	(11号住)	6K1a	平安	<1.86>×3.2	30	円土にTo-a貯器入

第10表 溝跡・堀跡一覧表

遺構名	計画図名	グリッド	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	備考
RG058	2号溝跡	2I39w-3I19i	古代	<42>	0.28-0.50	5.0-20.0	地溝状以外で溝内には遺構・RG083と平行、R2022-023に横切られる
RG083	1号溝跡	3L3a-3L19v	古代	<32.5>	0.28-0.50	5.0-12.0	RG088溝と平行、R2022に横切られる
RG084	7号溝跡	2L17d-2L17e	古代	2.08	0.33-0.43	6.4-8.0	
RG085	3号溝跡	2K15g-2K20c	古代?	9.15	0.22-0.33	15.0	
RG096	4号溝跡	2K13a-2K14f-2K20a	近世以降	21.67	0.29-0.73	23.0	溝から溝内に面出して溝へ。途中埋没で破壊
RG087	5号溝跡	2K26a-3K1a	古代?	7.60	0.15-0.50	23.0	
RG088	6号溝跡	2K25a-3K2a	近世以降	8.10	0.56-1.34	10.0	
3W029	1号堀跡	2K26a-2L10a	小塚?	<50.3>	5.20	115.0	2F3wグッド付付に土壁と築造される凸部あり、向中野出、RG012と同一溝

第11表 柱穴状土坑一覧表

No.	グリッド	径(cm)	深さ(cm)	土質	遺物	時期	層土	その他
1	3L17i	37×25	32	古			黒色シルト To-a約7% 有機物23%	
2	3L16i	32×22	28	10			同上	
3	3L17i	37×29	32	14			黒色シルト IV層約40%	
4	3I14w	33×25	22					
5	3L19w	51×44	36					
6	3L12w	34×32	28					
7	3L11w	33×47	46					
8	3L10v	25×20	22					
9	3I9v	39×31	40					
10	3L12c	25×25	20				黒色シルトと有機物ブロック多	
11	3L11b	38×29	36	18			黒色シルト IV層約15%	
12	3L11b	34×33	18	13			黒色シルト IV層約15%	

No.	グッド	規模(cm)	深さ(cm)	柱成	遺物	時代	遺り	その他
13	3L11b	36×32	30	15			黒色シルト V層粒10%	
14	3L15c	32×27	38				黒色シルト 1層 V層粒2% 2層V層粒20%	
15	3L11c	32×32	16	有			黒色シルト V層粒7%	
16	欠					古代		
17	3L19c	51×36	34					
18	欠				陶磁器79g	近代		
19	3L15e	39×39	26					
20	3L14c	26×22	28					
21	3L13b	37×34	36			古代		
22	欠					近代		
25	3L4t	42×29	18					
26	3K5s	47×42	28					
29	3F5u	42×40	34					
31	3L15s	42×41	22					
32	3L15x	43×38	16					
41	3L9a	38×33	26					
44	3I2x	28×25	31					
43	3M1a	30×28	32					
46	3L4e	35×31	20					
47	3L10w	28×25	30					
48	3L12x	31×33	30					
50	3L2u	43×31	49		土師器27g		赤褐色質シルト	
56	2L25v	67×48	40				黒色砂	
57	3L1w	77×74	36					
58	3L2u	51×53	64					
59	3I8n	28×27	13		土師器471g・ 磁器片185g	平安	黒色シルトとV層粒丸 Toa粒2%	下地オーバーハング 根の可蝕性有
60	3L10n	34×29	16	有	瓦部大の角縁	平安	黒色シルトにV層粒1% Toa粒5%	
61	3L11n	30×28	23			平安	黒色シルトとV層粒丸 Toa粒2%	
62	3L11o	34×?	19					
63	2L10o	29×?	27			平安	黒色シルトとV層粒丸 Toa粒1%	
70	3C9v	33×28	24	12			黒色シルト V層粒20%	
71	3K11w	34×31	19	17			黒褐色質シルト V層粒30%	
72	3K10a	31×30	42				1層 黒色シルト 2層褐色砂質シルト 褐色土粒20%	根の埋没?
73	3S11b	27×?	25		No.150 船上総量126.4g		黒色シルト	
74	欠							根の埋没
87	3K7w	45×43	36		土師器112g		1層 黒色シルト Toa粒23% 2層 黒褐色砂質シルト粒7%	根の可蝕性有
88	3C8u	53×49	18				1層 黒色シルト V層粒5% 2層同層シルト 褐色土粒10%	
100	3L6e	43×35	22			近世	黒色シルト V層粒15%	
121	2K17e	27×24	28	有			黒色シルト 下V層粒13%	
124	2K16n	49×38	31				1層 黒色シルト V層粒5% 2層V層粒10% 3層黒色V層粒%	
126	欠							
127	2L25f	24×20	23				黒色シルト V層粒7%	
129	2I25k	43×36	37				黒色シルト V層粒20%	
130	2L25k	27×27	23				黒色シルト V層粒10%	
131	2L24c	35×30	25				黒色シルト V層粒20%	新築形 釘等埋
135	2L23k	73×49	43		陶磁器801g		黒色シルト V層粒10%	
138	欠							
143	2L22c	29×28	17					

## V 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器48.0kg、須恵器6.1kg、石器8.6kg、土製品4.9g、陶磁器4.9kg、鉄製品194.1g、古銭1.5g、縄文土器30gである。うち土師器・須恵器は23.1kg、石器8.6kg、土製品4.9g、陶磁器505.8g、鉄製品154.7g、古銭1.5g、縄文土器27.5gを掲載した。

### 1 土師器 (第63～79・83・84図、写真図版66～73)

酸化焼成した土器を一括したが、酸化色であっても、胎土等から須恵器と判断できるもの(10、19、128)は除いた。

口縁部～底部まで器形の復元できるものを掲載したが、遺構内から出土した遺物については、この限りではない。小片であっても口縁部など器形の特徴のわかるものなども掲載した。また、墨書土器、刻書土器は小片であっても掲載した。

器種は、土師器が坏、高台付坏、鉢、甕(大小)、甔がある。

坏、高台付坏には、内面を黒色処理して磨いたもの(所謂内黒土師器)、内外面を黒色処理して磨いたものほか、黒色処理を施さないものがある。今回は観察表及び本文中では、便宜的に内面黒色処理したものを内黒土師器、内外面黒色処理したものを両黒土師器、黒色処理のないものを土師器と表記した。

出土位置は、堅穴住居跡が最も多く、全体の82%の39.5kgである。特にRA194堅穴住居跡からの出土量が突出しており、10.6kgが出土した。次いで、土坑からの出土が2.7kgで、特にRD488土坑が2.3kgでほとんどを占める。そのほか、北側調査区北端の低地から1.6kg、南西側、東側、南側のⅡ層から1.7kgが出土した。遺構外からは全体で5.0kgが出土した。

#### (1) 坏

内黒土師器35点、両黒土師器1点、土師器27点を掲載した。

##### ア 内黒土師器

再調整のあるものとないものがある。

- a 体部下端及び底部に回転ヘラケズリ調整があるもの  
6、30、40、110、122、123
- b 体部下端及び底部あるいは体部下端のみに手持ちヘラケズリ調整のあるもの  
4、5、105
- c 再調整のないもの  
7、8、52、53、54、55、56、57、74、75、76、78、79、80、100、101、102、111、124、146、148
- d 再調整の有無が不明なもの  
21、41、77、81、137

##### イ 両黒土師器

口縁部～体部破片である。内外面に横方向のミガキが施される。

12

##### ウ 土師器

再調整のあるものは1点のみで、他は再調整はない。

- a 体部下端に回転ヘラケズリ調整があるもの(破片のため、底部に再調整があるかどうかは不明)  
42
- b 無調整のもの  
22、113、125、133、134、138
- c 小片で調整の有無が不明のもの  
64、85、115、144

## (2) 高台付 坏

内黒土師器、両黒土師器、土師器がある。

### A 内黒土師器

2点あり、高台は低くハの字形に開く。

9、129

### イ 両黒土師器

2点ある。高台がごく低く、直立気味のもの(65)と、高台が低めで、ハの字形に開くもの(107)がある。

### ウ 土師器

2点ある。高台は高く、ハの字型に開く。

86、87

## (3) 甕

ロクロを使用しないものと、ロクロ使用のものがあり、それぞれ小型と中～大型がある。

### A ロクロを使用しないもの

#### a 小型

器高7～15cm程度である。器形は底部が開き、口縁部は短く外反する。内面の調整はヘラナデ、ハケメ、外面はヘラナデやヘラケズリである。

31、35、66、103

#### b 大型

器高25cm以上あるもの又はあると推定できるものである。

底部が直立して立ち上がり、緩やかに湾曲して、口縁部に至り、外反するもの。口縁部は長い。内面はハケメ、外面はヘラナデ、ハケメである。

1、2

底部が開き、体部は直立気味に立ち上がって口縁部は外傾するもの。内面はハケメ、外面はヘラナデである。

32

底部の形状は不明。直立気味に体部が立ち上がり、口縁部で外傾するもの。口縁部はやや長めである。

15

底部の形状は不明。体部は緩やかに湾曲し、口縁部はやや長めで直立気味～若干外反するもの。内面はハケメ、ヘラナデ、外面はヘラナデ、ミガキ、ケズリ等が施される。

## 1 土師器

34、44、68、104、109、139、150

底部の形状は不明。体部上半は直立気味あるいは若干湾曲して立ち上がり、口縁部は短く外反するもの。

13、24、25、27、33、43、45、67、69、108、116、135、140、141、142

### c 体部または、底部破片

23、36、88、117、118、149

## イ ロクロを使用するもの

### a 小型

器高が15cm程度のもの、それと推定できるもの。調整は内外面ともロクロ痕のみ。

38、114

### b 中型

器高が20cm前後、またはその程度と推定できるもの。外面にケズリが入る。

89、91、130

### c 大型

器高がおおむね25cm以上、またはその程度と推定できるもの。外面にケズリ又はナデが入る場合がある。また、内外面ともカキメが施されるものもある。

14、16、26、28、39、90、92、93、94

### d 大きさが推定できない破片等

46、47、119

## (4) 甌

1点のみ出土した(48)。体部下半の破片で、ハの字型に底部が開く器形である。ロクロ痕はなく、4分の1周程度の破片で、内面に窪みが4個ある。内面はナデ、外面はナデで、底部下端はヘラケズリが施される。

## 2 須恵器(第63～79図、写真図版66～73)

須恵器は坏、壺類(長頸瓶、広口壺)、甕類がある。

出土位置は、土師器と同様竪穴住居跡が最も多く、全体の70%の4.3kgである。うちRA194竪穴住居跡からの出土量は1.4kgである。土坑からの出土は0.3kgで、RD488土坑とRD495土坑からほぼ同量ずつ出土した。そのほか、北側調査区北端の低地から0.2kg、南西側、東側、南側のⅡ層から0.5kgが出土した。遺構外からはトータルで1.3kgが出土した。

### (1) 坏

4点出土した。すべてロクロ成形の平底である。切り離しは回転糸切りで、再調整はない。体部から底部にかけてなめらかに移行するもの。器高は比較的高い。

10、128、145

体部から底部に明瞭に移行するもの。

11

## (2) 壺 類

破片のものが多い。器種のわかるものとしては長頸瓶、広口壺がある。

## ア 長頸瓶

- a 口縁部の残るもの。開口部がやや大きく開く。

29、131

- b 体部破片。ロクロ成形の体部に下半から手持ちヘラケズリが施される。

やや肩がはり、頸部にリング状の突帯があるもの(60)と肩がややなで肩なもの(17、132)がある。

そのほか、体部上半の破片71、72、体部下半の破片20、49、120、121

なお、151は体部上半の破片だが、ヘラケズリ調整の有無は不明である。

## イ 広口壺

口縁部～体部破片。口縁部は外反し、体部下半には手持ちヘラケズリ調整が施される。

18、50

口縁部破片19

## ウ 壺類

頸部～体部上端の破片、内外面ともにカキメが施される 147

底部破片で、器種の細分はできないが、壺の類と思われるもの。

低い高台のつくもの 152

高台のないもの 3

高台がなく、体部下端まで手持ちヘラケズリが施されるもの 51

高台がなく、体部下端までタタキ目が施されるもの 155

## (3) 甕 類

すべて破片である。器種のわかるものは大甕がある。そのほか、甕類と思われるものを掲載した。この類のタタキ目は平行タタキ目を平行に施すもの(大甕97、99、136、96、甕類154)平行タタキ目を方向を違えて施すもの(大甕98、甕類73、143)とがある。当て具は平行のもの(大甕97、99、98)と青海波(大甕136)、無文のもの(甕類73、143、154)がある。

## ア 大甕

器厚、径などから大甕と思われるものである。

95、96、97、98、99、136、153

これらのうち97、99、153は共通の胎土(黒色粒が含まれること)、外面に自然釉のみられること、内面が赤褐色を帯びていること、97と99のタタキ目、当て具痕が共通であることなどから同一個体と思われる。

また、95と96は白味がかった共通の胎土から同一個体と思われる。

## イ 甕類

以上の他、甕類と思われる破片である。

73、154

## 3 石器 (第79・80図156~162、写真図版74)

今回の調査で出土した礫の中で、加工痕若しくは使用痕と判断される痕跡を持つものを石器として認知し、掲載した。内訳はカマド構築礫2点、磨り石4点、加工痕のある礫1点の7点である。

156・157はRA189堅穴住居跡から出土した板状の扁平礫で、カマド構築礫と推定される。2点ともに石材は凝灰岩である。表面には、黒色タール状の物質が付着し、その周囲には焼成痕が認められる。なお、156は3つの破片が接合した。158~160はRA194堅穴住居跡から出土した磨り痕が認められる礫で、磨り石として認知する。158は扁平な形状の礫で、左側面や表面にわずかに磨り痕が認められる。石材は安山岩である。159は、楕円形礫のほぼ全面に弱い磨り痕が認められ、表裏の中央付近や右側面に光沢あるツルツルした磨り面が形成されている(※トーンで図示した範囲)。石材はデイサイトである。160は、右側面に細長い範囲で磨り面が形成され、裏面とした平坦気味の面を中心に加工痕と考えられる粗い擦痕が認められる。石材は安山岩で黒色を呈するマンガン様である。161は、RA197堅穴住居跡から出土した加工痕のある礫で、3片の部位が接合した。石材は160と同様の黒色を呈する安山岩である。表裏面には粗い磨り痕が認められ、右側面は面取りされた平坦面が形成されている。形状などからは、台石的な使用・用途である可能性が窺える。162は、出土地不明の磨り石で、裏面に広く磨り面が形成されている。石材はデイサイトである。縄文時代の産物である可能性も考えられるが、一般的磨器類と比較した場合、手に持って動作するには重量が重く、別の用途が想起されようか。

## 4 土製品 (第81図163・164、写真図版75)

2点出土し、どちらも掲載した。

163は土人形の破片と思われる。型おこしで成形しているとみられる。外面に直径6mmの輪の陰刻、棒状の陽刻がある。胴乗り、銅抱きなどの土人形の胴の顔の部分か。

164は泥面子である。豊満な腹部、右手にもつ小槌、左手に袋の口を持っていることから大黒立像と思われる。頭右側面から右肩の一部を欠く。裏は指ナデと思われる。

## 5 陶磁器 (第81図165~179、写真図版75)

遺構、攪乱から4.8567g出土した。ほとんどが近世以降、近現代に至るまでの陶磁器である。最も多く出土したのはRG089掘跡の埋土を裁る攪乱層で、2.4504gの出土である。次いでRZ022道路状遺構の埋土で、152.3g出土した。他は、大きな攪乱に入っていたもの、住居跡や土坑の埋土中に攪乱で入り込んでいたものが多く、遺構の年代を反映している可能性があるものはRD500やRD505、PP135などわずかにすぎない。なお、現場で近代以降と判断できたものは取り上げていないが、わからなかったものについては持ち帰っており、上記の総出土量に含まれている。掲載したものは15点で、505.8gである。

特筆すべき遺物は、165である。唯一古代の陶器片で、緑釉陶器の皿の口縁部破片と思われる。若干外反しており、胎土は青灰色で、釉色は灰オリーブ色である。胎土や器形の特徴から東海地方産とみられ、9世紀後半代のもものと推定される。

167はRD505出土の信楽産の京焼風小物陶器で、汁次である。口の先端を欠く。体部下端及び高台には施釉されない。上面に菊の花の陽刻がある。18世紀後半~19世紀のものとして推定される。

168~171はRG089から出土した磁器破片である。肥前と思われる168、171のほか、産地不明のもの

が2点ある。時期はIV期～19世紀と思われる。170の碗は産地不明であるが、見込みの山水の模様や端反りの器形からV期に平行するものと考えられる。高台内に朱書きがあり「具之」ではないかと、ご教示いただいた。「これをそなえる」、「これをそろえる」といった意味ではないかとのことである。

172～175はRZ022から出土した磁器、176、177は陶器である。磁器は肥前産と考えられ、IV期～V期に属する。陶器の176は大堀相馬産の碗で、18世紀以降、177は産地不明の鉢の口縁部破片と思われる、19世紀以降と考えられる。

178は産地不明の掃り鉢破片、179は産地不明の磁器碗である。

## 6 縄文土器 (第81図180、写真図版75)

RA193竪穴住居跡の埋土下層より縄文土器の体部片が1点出土した。地文はRLの横回転が施文され、器厚5mmとやや薄手にある。内面の調整は縦方向のナデ痕が僅かに認められるが明瞭ではない。胎土中には砂粒が微量混入する。時期を特定する文様を持たないが、器厚や胎土の様子から、晩期の深鉢型土器の体部破片と推定される。

## 7 鉄製品 (第82図181～194、写真図版76)

14点、194.1g出土した。うち、一見して極新しいと思われる2点を除く、14点154.7gを掲載した。他にも182、185は竪穴住居跡の検出面や埋土上層など攪乱の入る可能性の高い場所から出土したもので、形状から新しいものの可能性がある。

器種不明のものが多く、RA194竪穴住居跡から出土した188、189は穂摘具と思われる。いずれも日釘状の金具がある。特に189は完形に近く、端部に穿孔、刃部は緩いカーブがある。また、190は曲刃鎌で完形である。基部を折り曲げている。

191は円柱状の鉄製品で、貫通しない孔がある。192はRA196の埋土下層から出土した。鏃の一部か。186、193、194は断面が方形で、釘の可能性もある。

## 8 銭貨 (第82図195、写真図版76)

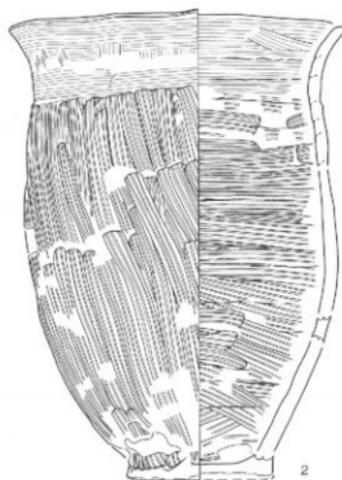
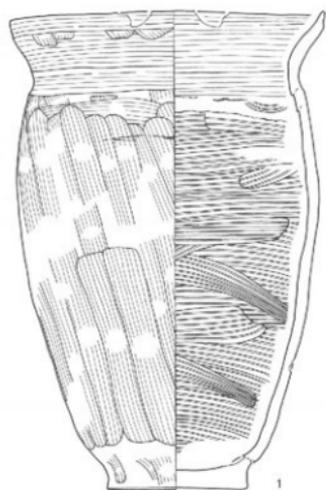
RA188竪穴住居跡を載る攪乱から1点出土した。「永」と「寶」の字の部分、全体の半分ほどを欠く。一文銭の銅銭で、古寛永（製造年代1636～1659年）である。

## 9 その他 (196・197、写真図版76)

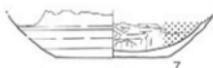
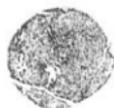
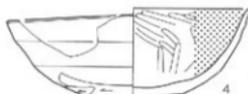
その他として、196の還元された粘土塊と、197の鉄滓について写真・表で掲載した。

還元された粘土塊と呼称した196は、表面が還元によるややつやのある黒～暗灰黄色を呈し、裏面は溶解したつやなしの灰黄色を呈する粘土塊である。パブル状で軽い。

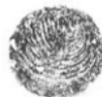
197の鉄滓はRA192竪穴住居跡の埋土上層より出土した。表面と捉えた面は、赤みを帯びた褐灰～灰褐色で、細かい気泡が看取される。裏面は、赤みを帯びた灰褐色で、やや大きめの気泡が若干認められる。メタルチェッカーでは無反応を示し磁着は認められない。観察所見としては、裏面とした面を側面から見るとやや弧状の形状を呈することから、底に相当する部位と推定すると、鍛冶炉炉底の可能性もある。



RA187



RA188



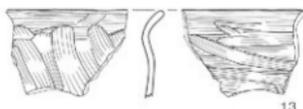
第63圖 土師器・須惠器 (1)



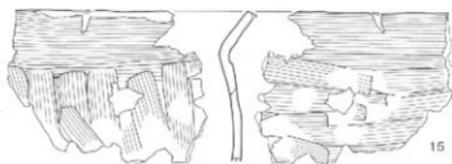
11



12



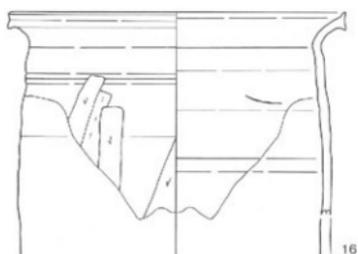
13



15



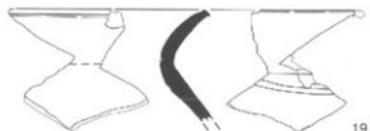
14



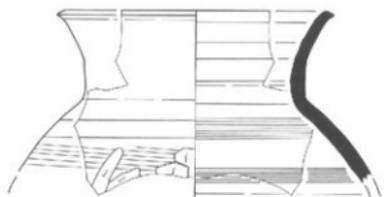
16



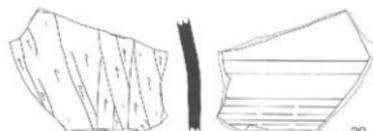
17



19



18



20

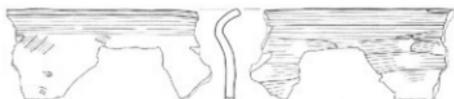
RA188



第64圖 土師器・須恵器(2)



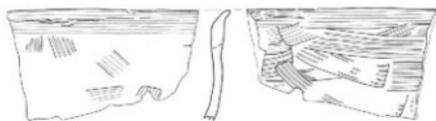
21



24



22



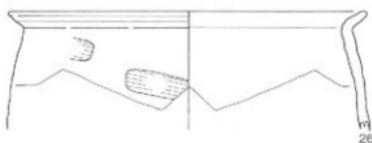
25



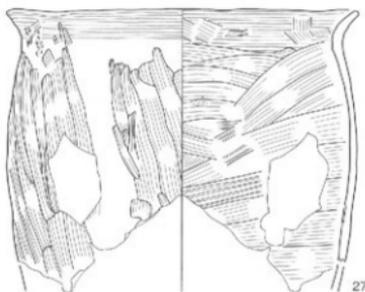
23



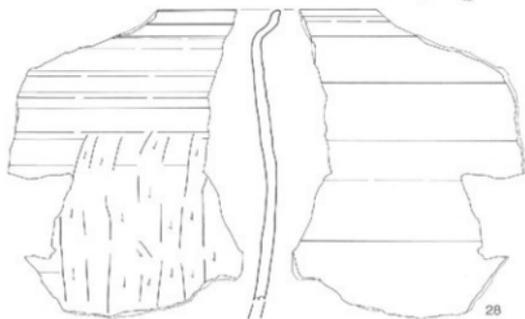
29



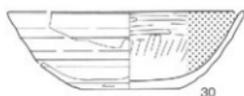
26



27



28



30

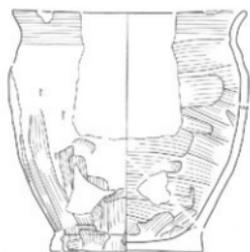


RA190

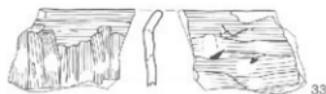


RA189

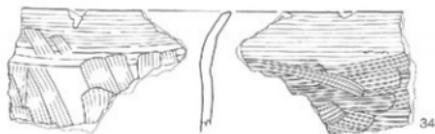
第65図 土師器・須恵器 (3)



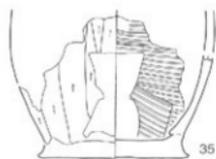
31



33



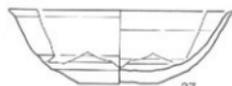
34



35



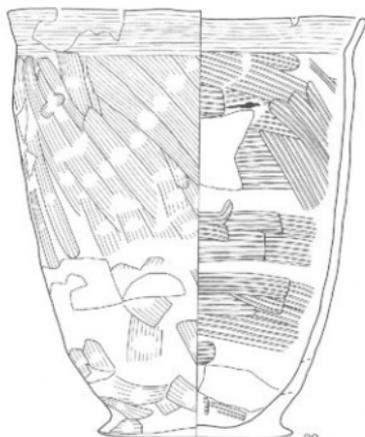
36



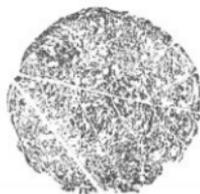
37



RA191



32



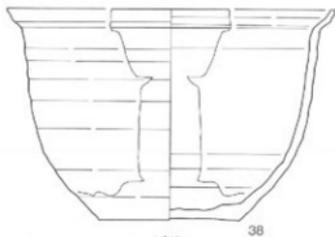
36



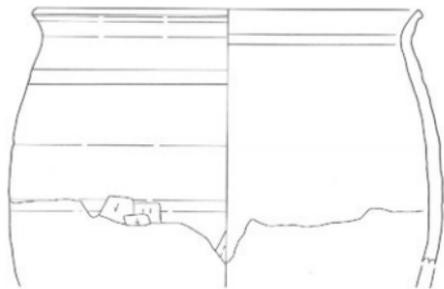
RA190



第66圖 土師器・須恵器(4)



38



39



RA191



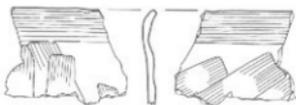
40



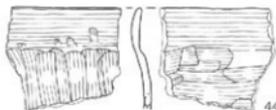
41



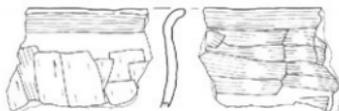
42



43



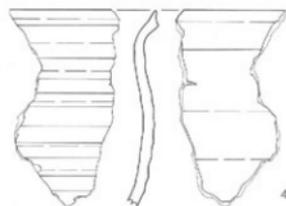
44



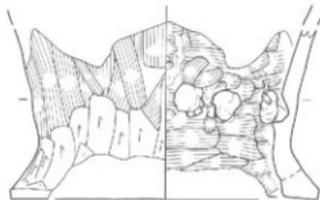
45



46



47

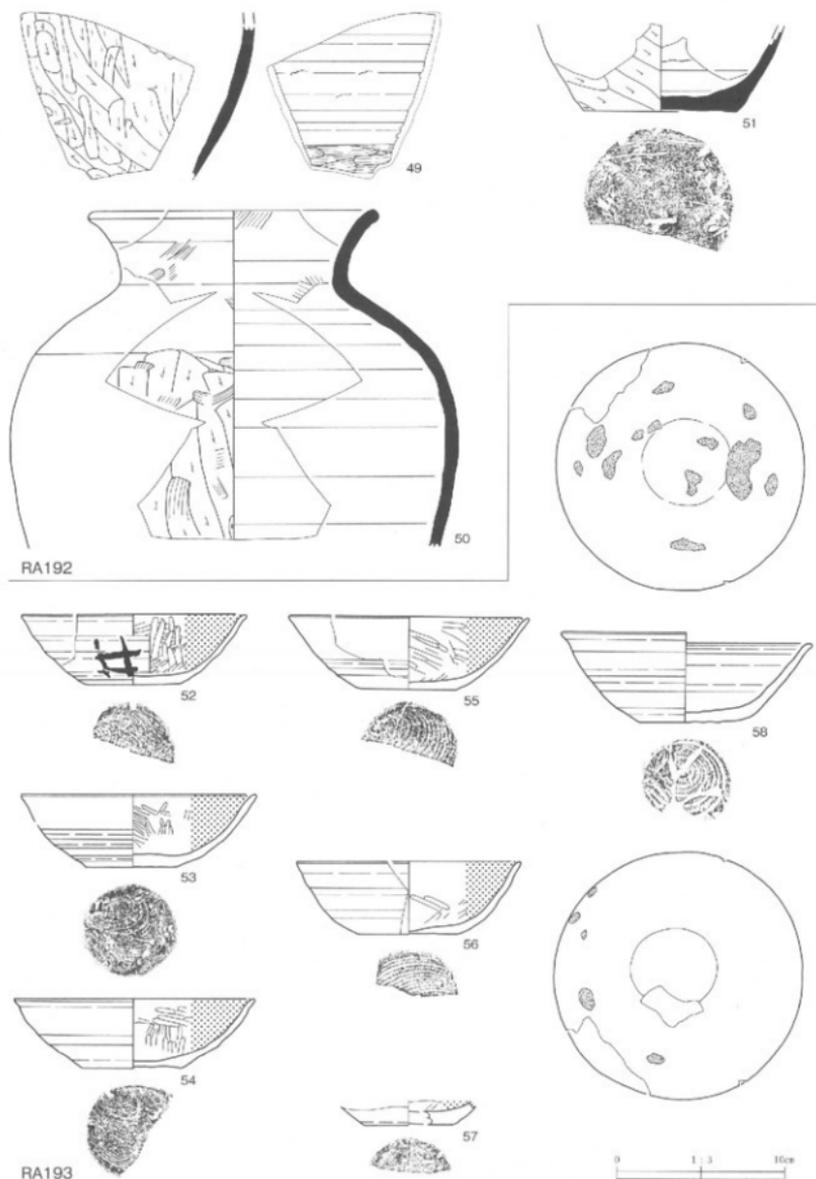


48

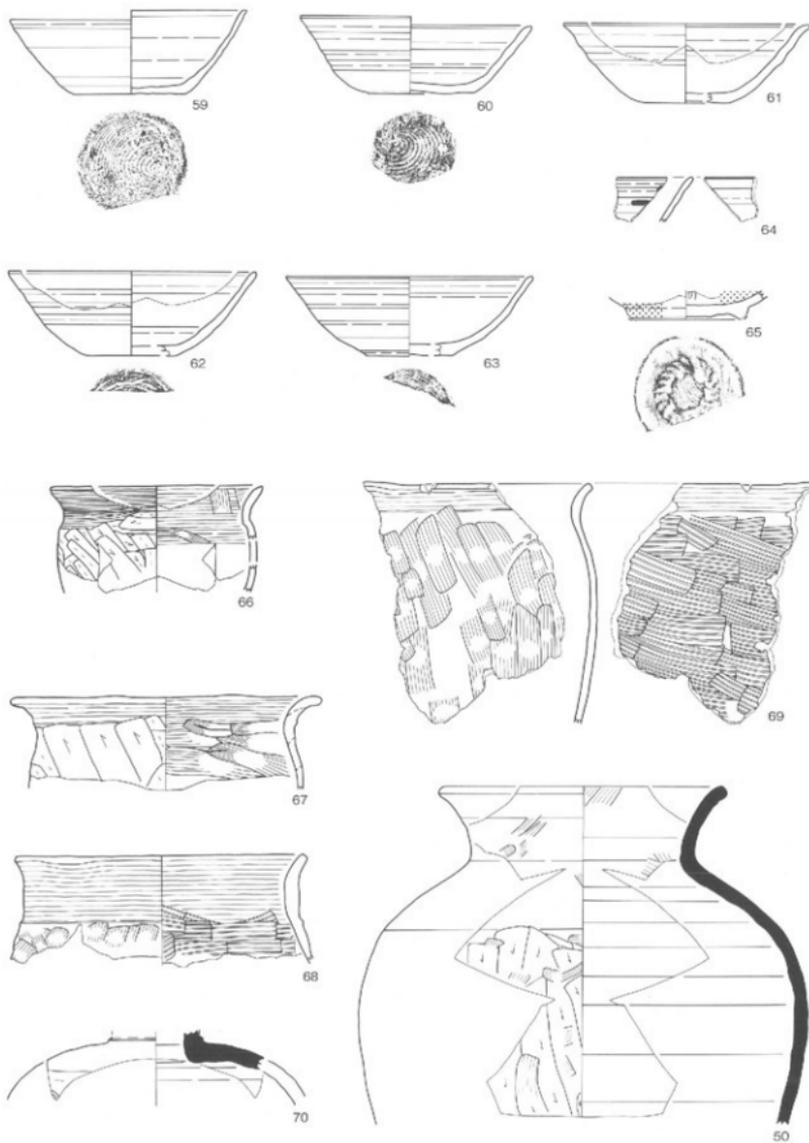
RA192



第67図 土師器・須恵器 (5)



第68回 土師器・須恵器 (6)



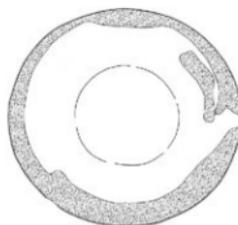
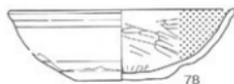
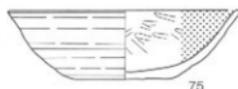
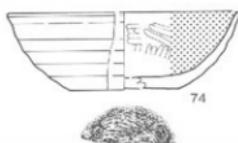
RA193

0 1:3 10cm

第69図 土師器・須恵器 (7)

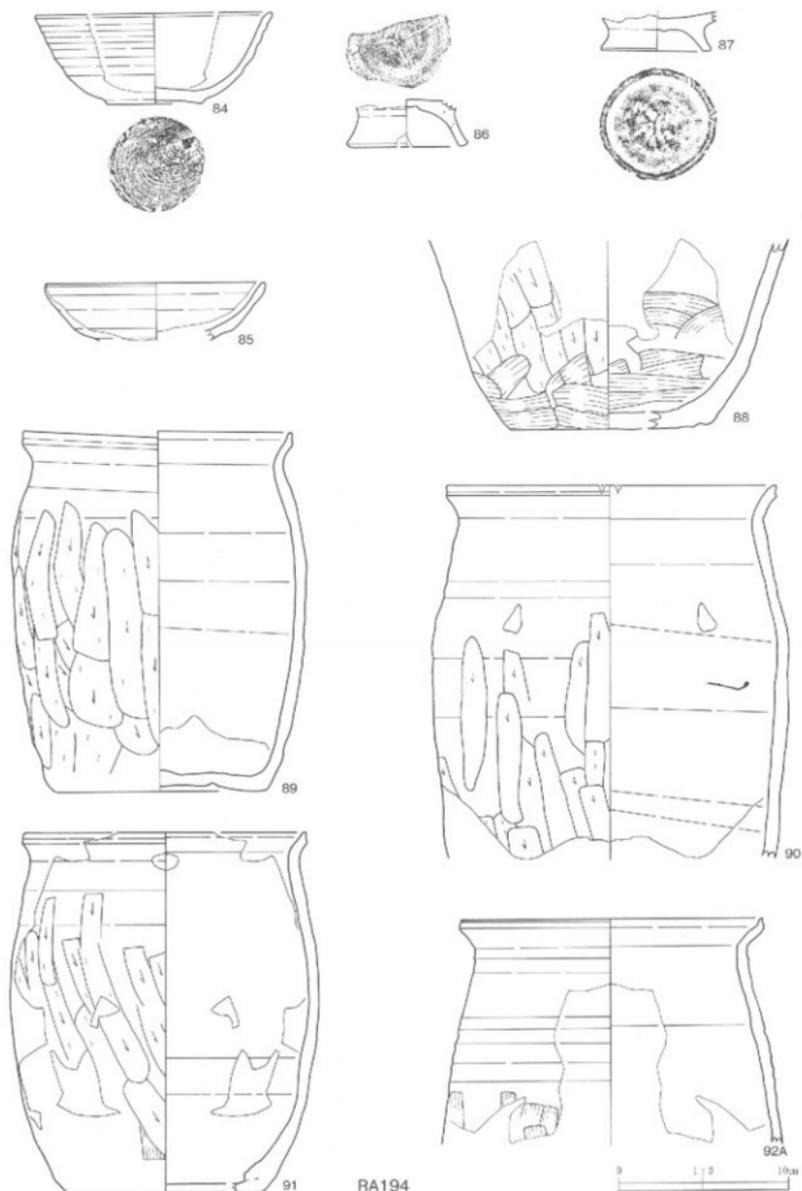


RA193



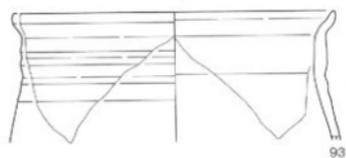
RA194

第70図 土師器・須恵器(8)

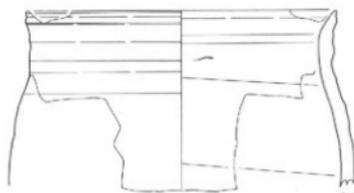


RA194

第71図 土師器・須恵器(9)



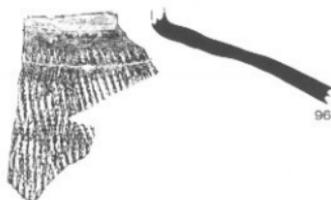
93



94



95



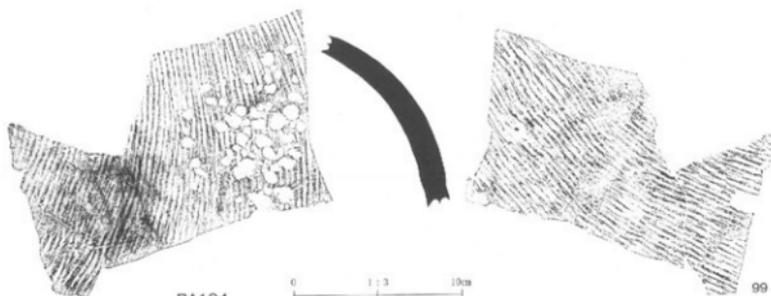
96



97



98

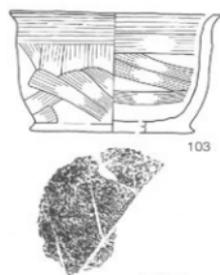
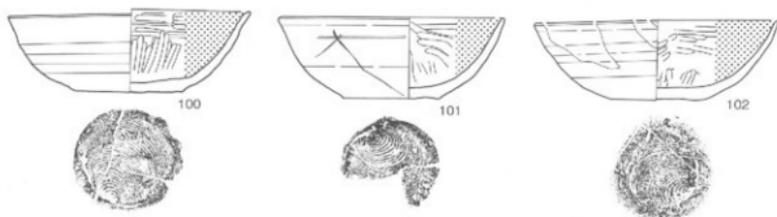


99

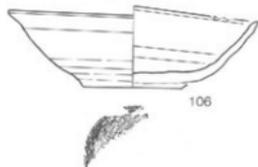
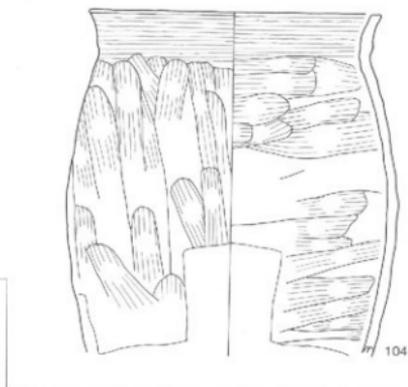
RA194



第72図 土師器・須恵器 (10)



RA195



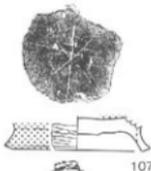
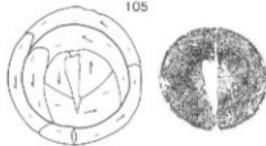
106



RA196



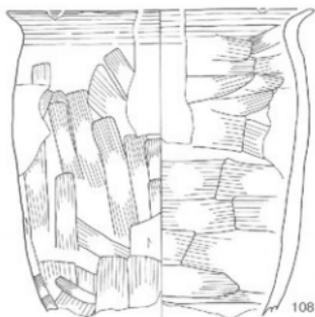
105



107



第73図 土師器・須恵器 (11)

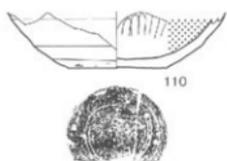


108



109

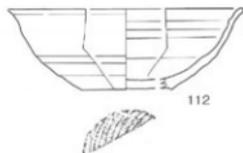
RA196



110



111

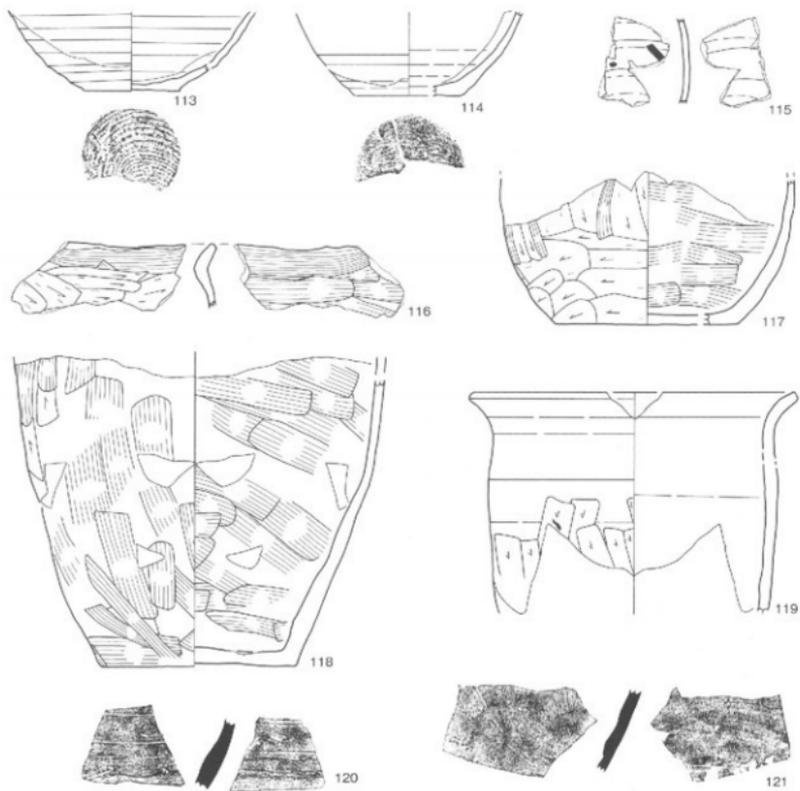


112

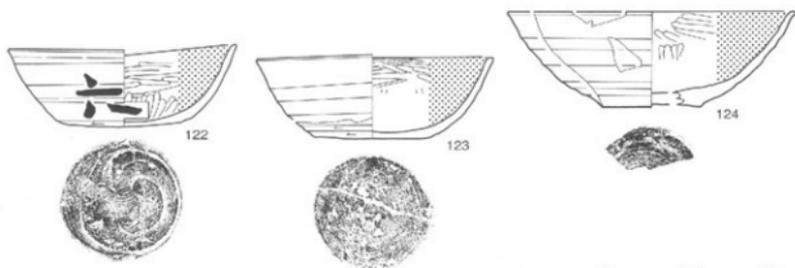
RA197



第74回 土師器・須恵器 (12)



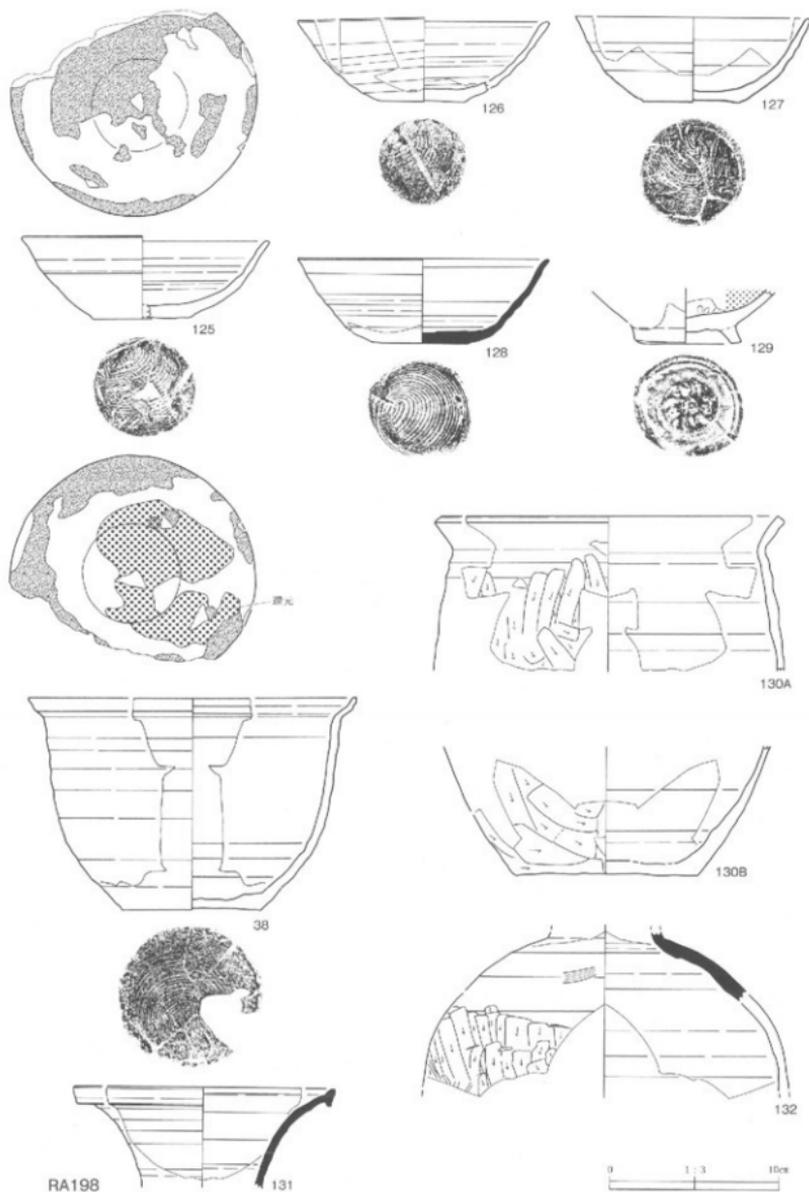
RA197



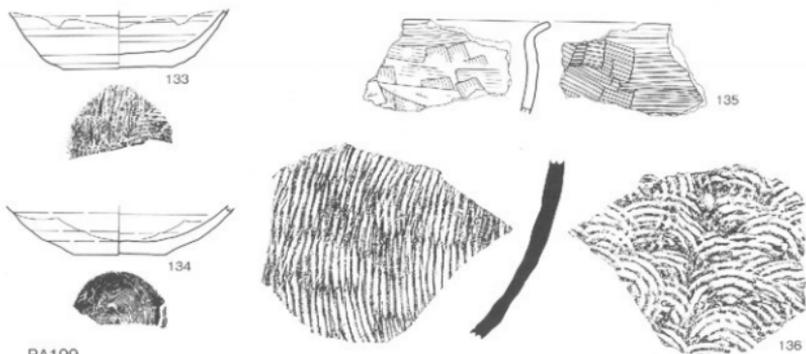
RA198



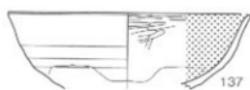
第75回 土師器・須恵器 (13)



第76図 土師器・須恵器 (14)



RA199



137



138

RA201

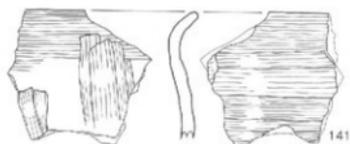


140

RD485

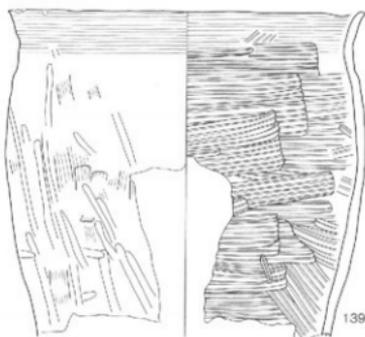


52

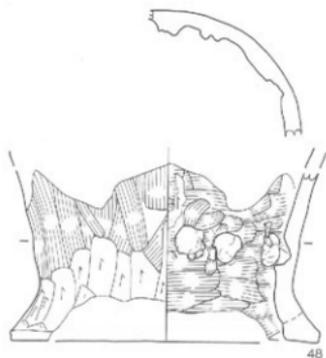


141

RD488



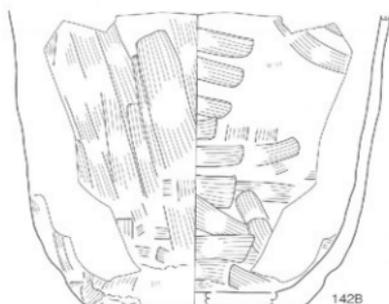
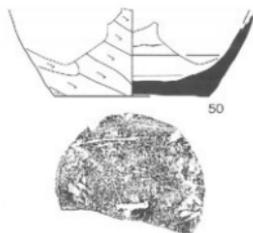
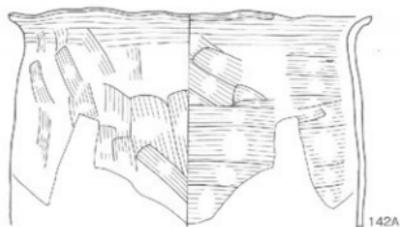
139



48

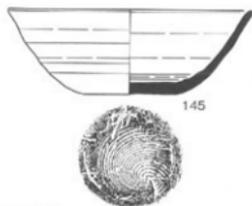


第77図 土師器・須恵器 (15)



RD488

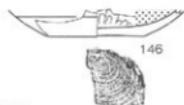
RD494



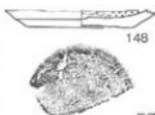
RD495



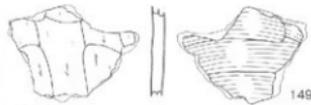
RG069-RG070



RG058



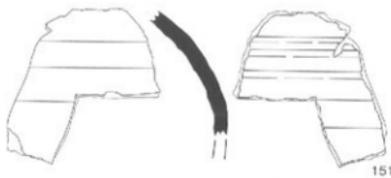
RZ020



PP59



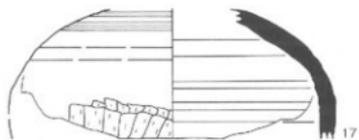
PP73



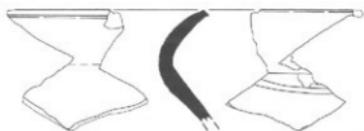
遺構外



第78図 土師器・須恵器 (16)



17



19



152



153



154

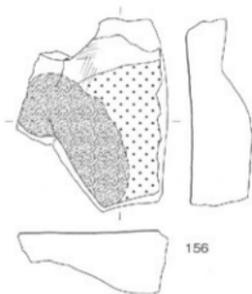


143

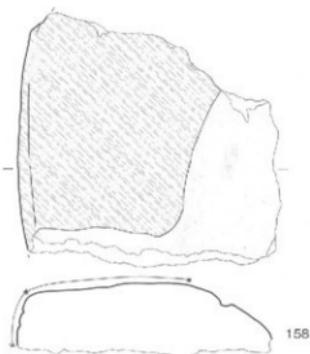


155

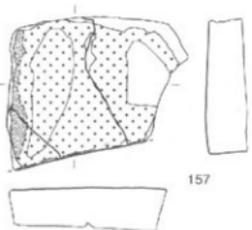
遺構外



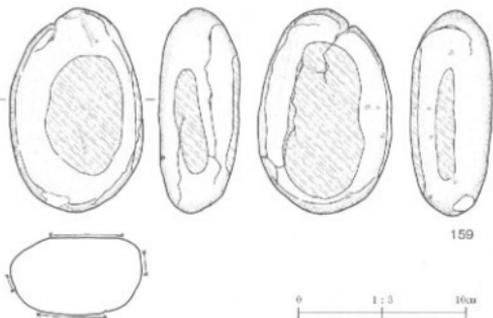
156



158

 焼成痕


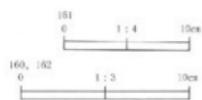
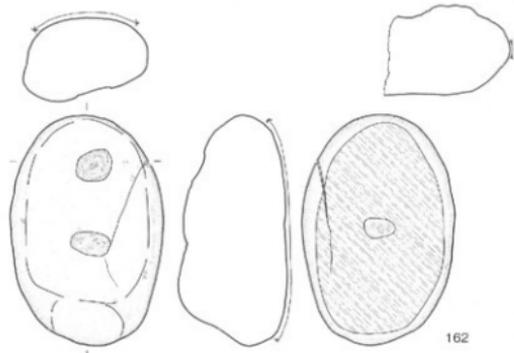
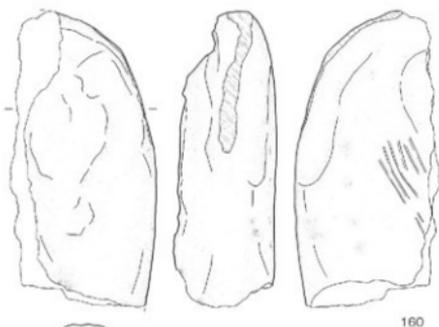
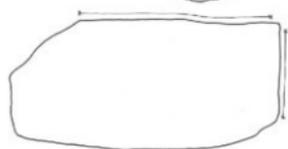
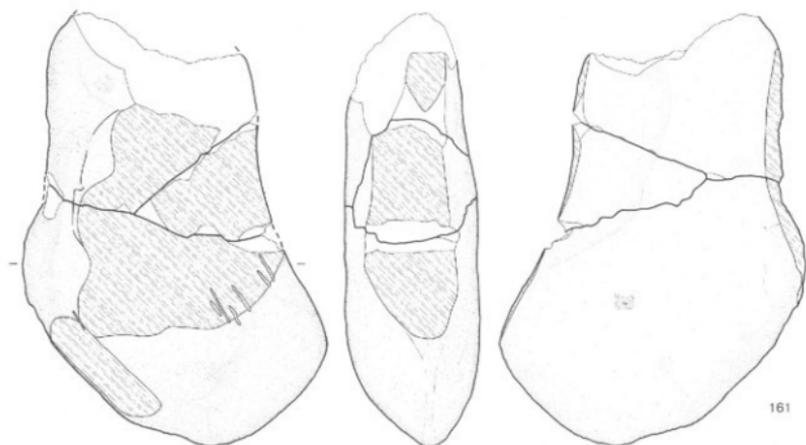
157



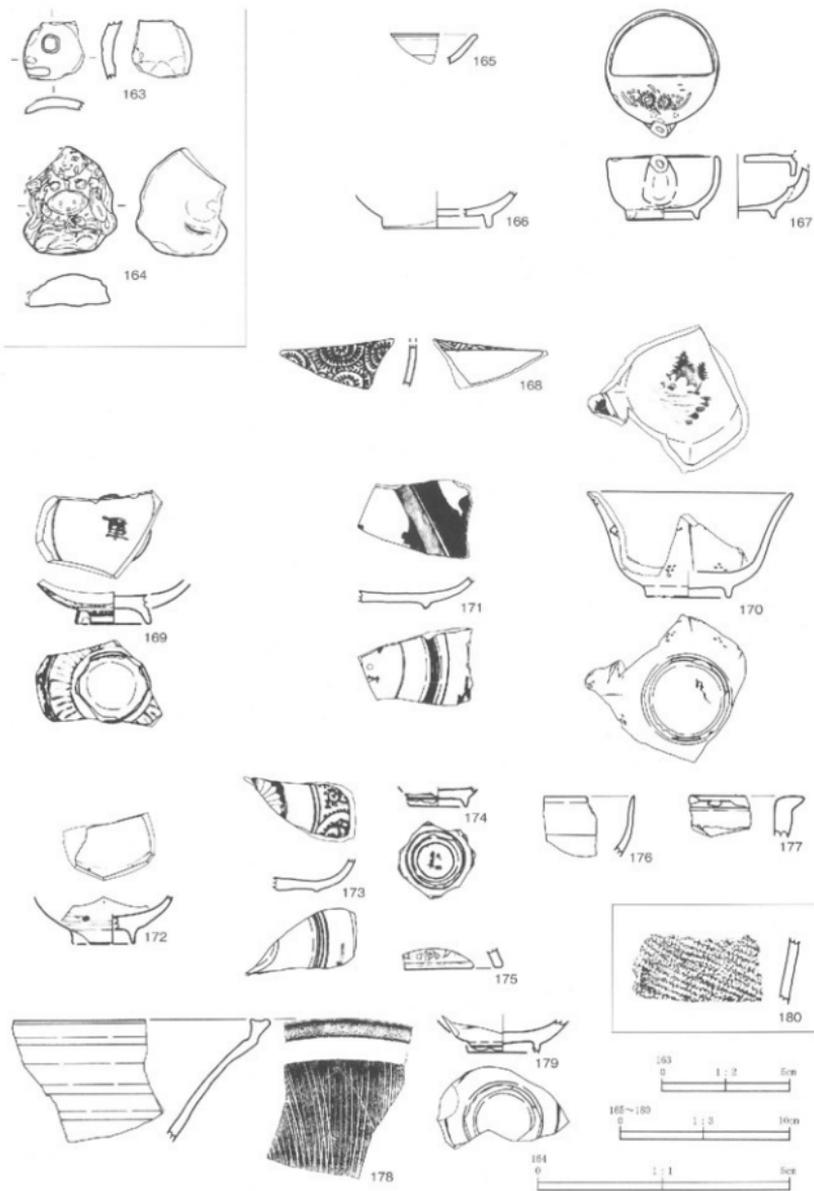
159



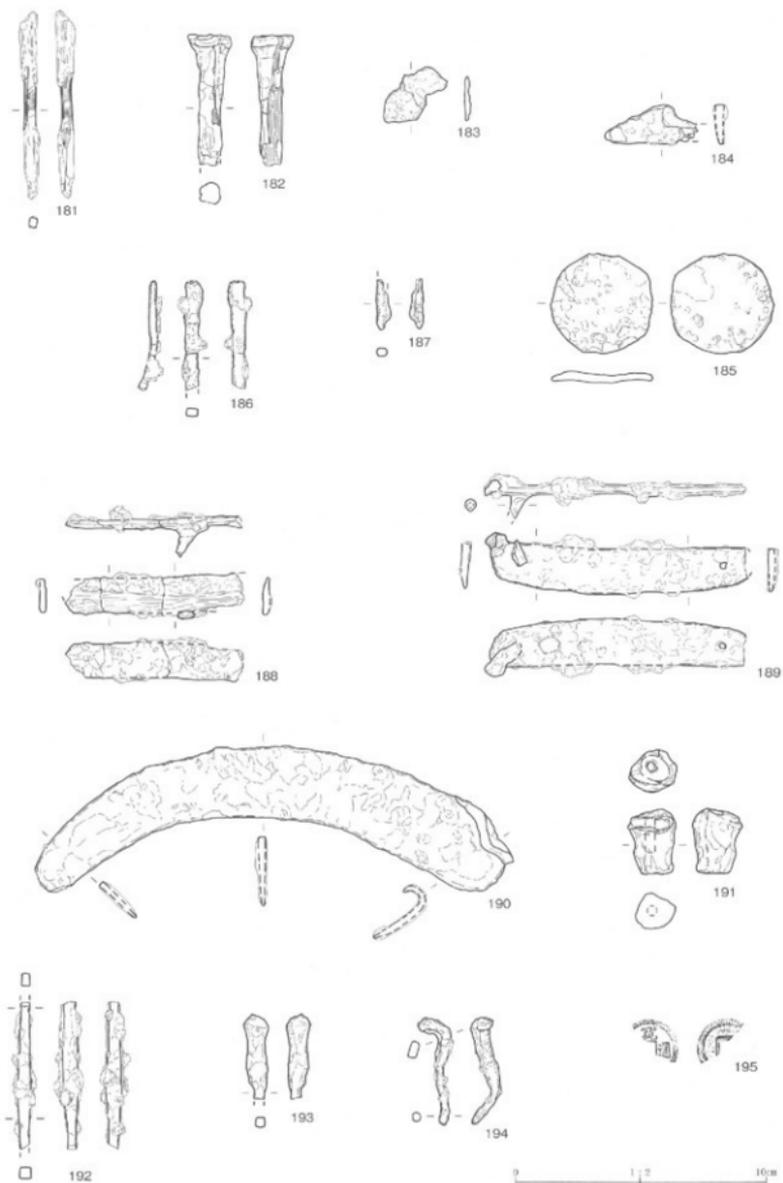
第79図 土師器・須恵器 (17)・石器 (1)



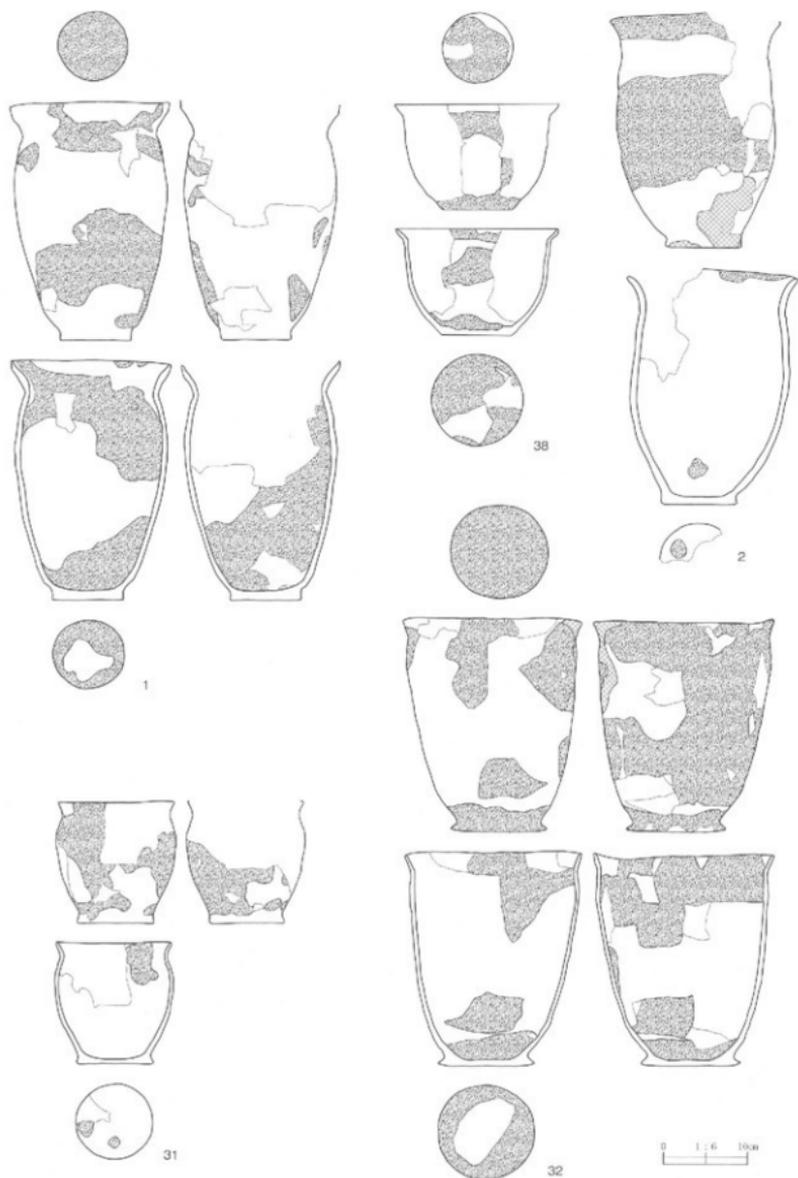
第80圖 石器 (2)



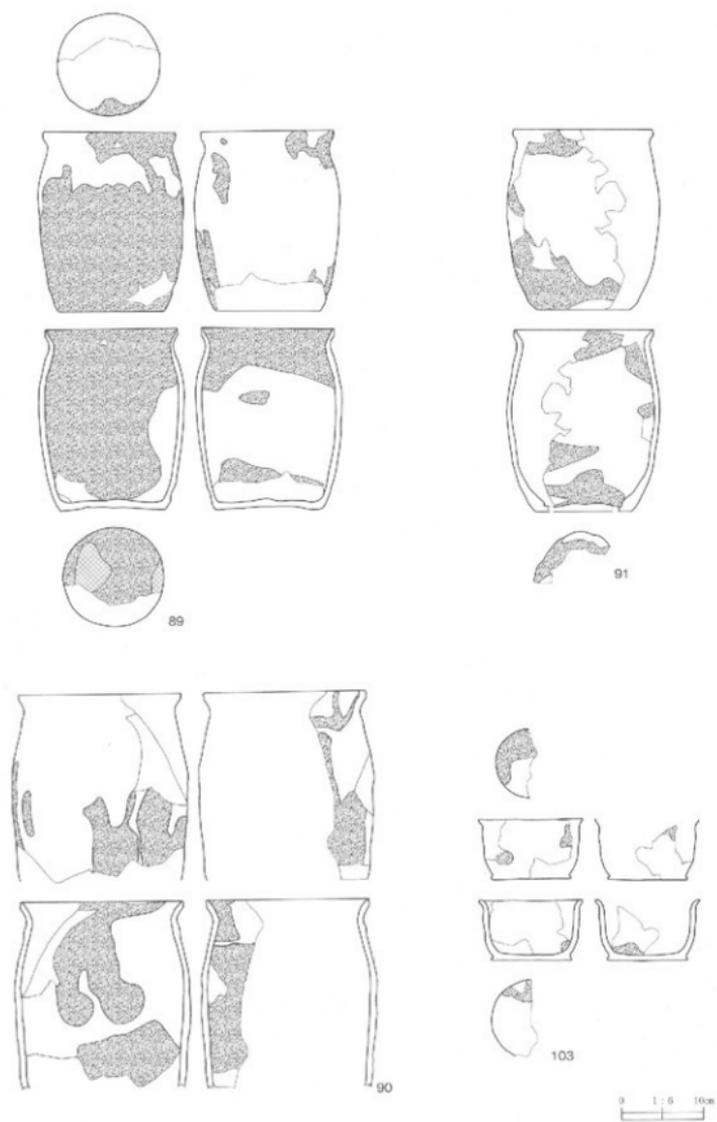
第81図 土製品・陶磁器・縄文土器



第82図 鉄製品・錢貨



第83回 土師器壺 ススコゲ実測図(1)



第84図 土師器壺 ススコゲ実測図(2)

第12表 出土區別別遺物重量表

塚名	遺物名	銅器	鐵器	陶器	埴土器	土製品	石器	玻璃品	鏡片	合計	
野次井原塚	RA128									0.0	
	RA127	2561.0	9.9	42.5					15.1	2719.5	
	RA128	2894.8	98.9	3.1					6.9	3287.7	
	RA189	2579.2	47.6				607.3	24.3		3158.1	
	RA190	2923.8	10.2	1.0						2935.0	
	RA191	846.3								846.3	
	RA192	1833.2	286.7	3.8					2.1	2227.8	
	RA193	5493.7	603.8	5.8	37.3					6330.8	
	RA194	20619.7	1446.5			29	1316.5	99.3		13685.0	
	RA195	1443.9								1443.9	
	RA196	1699.9	17.0	1.5					6.1	1694.5	
	RA197	2764.4	76.4				3500.0			8340.8	
	RA198	2477.2	424.5	4.1						2905.8	
	RA199	3208	516.1							3624.1	
	RA200									6.0	
	RA201	795.9								795.9	
	小計	39463.0	4305.7	63.8	37.5	29	7523.8	147.8		51343.3	
	標品柱状物群	2D026									0.0
		2D027	18.2	22.0							40.2
2D028										0.0	
2D029										0.0	
2D030										0.0	
2D031										0.0	
2D032										0.0	
2D033										0.0	
小計		18.2	22.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	40.2	
柱状列		2D035									0.0
	2D036									0.0	
	2D037									0.0	
	2D038									0.0	
	小計	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	土坑	2D481	45.4								45.4
		2D482	11.1								11.1
		2D483	3.1								3.1
2D484										0.0	
2D485		61.4								61.4	
2D486		7.7								7.7	
2D487		20.7								20.7	
2D488		2288.8	136.9	10.1						2425.8	
2D489		33.3								33.3	
2D490		62.0								62.0	
2D491										0.0	
2D492		34.9								34.9	
2D493										0.0	
2D494		29.3								29.3	
2D495		24.6	137.6							162.2	
2D496										0.0	
2D497		32.3								32.3	
2D498										0.0	
2D499										0.0	
2D500				25.7						25.7	
2D501										0.0	
2D502		1.0						3.3		4.3	
2D503		11.0								11.0	
2D504	14.5								14.5		
2D505			103.3						103.3		
2D506									0.0		
2D507									0.0		
小計	2731.1	261.5	139.1	0.0	0.0	0.0	3.3	0.0	3180.0		

区分	遺物名	土師器	須恵器	埴器	縄文土器	土製品	石器	鉄製品	鏡	金
弥生遺跡	RG013	82								82
	RG011	78		08						86
	小計	160	00	08	00	00	00	00	00	168
弥生遺物	RG012	10								10
	小計	10	00	00	00	00	00	00	00	10
遺跡・塚	RG058	191								191
	RG083									00
	RG084									00
	RG085									00
	RG086									00
	RG087									00
	RG088			53					36	89
	RG089	4560	1734	2404						30798
	小計	4751	1734	2457	00	00	00	36	00	33078
	その他の遺物	RZ019								
RZ020		321								321
RZ021										00
RZ022		1381	833	1523						3737
RZ023										00
小計	1702	833	1523	00	00	00	00	00	3658	
住穴出土	PF18			79						79
	PF35	27								27
	PF39	471	185							656
	PF73	1264								1264
	PF87	142								142
	PF135			801						801
	小計	1901	185	880	00	00	00	00	00	2965
北沢地区	手a層	15115	2245	40						17400
	上b層	542	27							569
	野a層	25								25
	不明		16							16
	小計	15682	2288	40	00	00	00	00	00	18010
遺物群	西塚B層	392								392
	溝内I - II層	4341	662	552						5555
	溝内B層	7149	2111							9260
	東塚B層	107								107
	南塚B層	5141	2411	66						7618
	穴の地	365		878						1243
	小計	17305	5487	1496	00	00	00	00	00	24288
	東塚	527		327						854
	西塚	789	341	192						1222
	南塚	1496	374	1516						3386
北塚	9586	2093	5447					15	17711	
西塚	269		1876						2145	
東北	772	707	2531						4010	
中央	1528	12	2919	24	20				4533	
中央北寄り			1057						1057	
中央西寄り	173		1454						1627	
南塚	1033	705	286						2022	
上層	130		319						449	
笠置小町	211	61	80			10750			11102	
小計	16714	4996	18034	24	20	10750	00	15	30853	
合計	660151	61445	48967	299	49	85968	1517	15	678061	

第13表 土師器・須恵器観象表

( ) は推定値、&lt; &gt; は存在確

No.	品上通例	品上位置	種類	器種	色相	色名	数量g	径mm	高さmm	器径cm
1	RA187	上器1 (内上中位位)、横溝群内器、 Q4(高倉中層)	土師器	甕	10YR6/4	にぶい黄緑	1307.3	(19.0)	8.5	29.0
2	RA187	Q4(高倉中層、上器1(横土中位位))	土師器	甕	7.5YR7/6	緑	1016.5	(20.2)	(8.8)	28.6
3	RA187	上器2 (横土中位位)	須恵器	壺	2.5GY4/1	緑オリーブ灰	94.5	—	6.4	<14>
4	RA188	土器27(下層)、29(上層)、Q2トレンチ	内器 土師器	杯	10YR6/4	にぶい黄緑	599.4	14.6	6.2	5.3
5	RA188	土器16 (カマド内)	内器 土師器	杯	7.5YR6/6	黄	79.2	—	3.8	<30>
6	RA188	器土前	内器 土師器	杯	7.5YR4/3	黄	39.7	—	6.2	<22>
7	RA188	土器33(下層)	内器 土師器	杯	7.5YR7/4	にぶい黄	73.8	—	6.9	<29>
8	RA188	土器2 (横溝)	内器 土師器	杯	10YR7/3	にぶい黄緑	61.7	—	6.4	<16>
9	RA188	Q2掘り方	内器 土師器	裏付片	7.5YR6/1	にぶい黄	60.1	—	(7.2)	<19>
10	RA188	土器31(上層)	須恵器?	杯	7.5YR6/6	黄	89.5	(13.2)	5.8	5.3
11	RA188	Q3掘り方	須恵器	杯	5Y7/2	灰白	81.3	(14.8)	(5.6)	4.5
12	RA188	カマド検出器	須恵 土師器	杯?	10YR2/1	灰	19.0	—	—	<5>
13	RA188	Q1トレンチ	土師器	甕	7.5YR5/6	明緑	211	—	—	<5>
14	RA188	Q1トレンチ	土師器	甕	7.5YR7/6	黄	56.1	—	—	<9>
15	RA188	土器9 (カマド内層上層土層、カマド検出器)	須恵器	甕	2.5YR5/6	明赤緑	87.7	—	—	<9.1>
16	RA188	土器22(上層)、Q1トレンチ、横土中位	土師器	甕	5YR7/8	緑	136.9	(20.2)	—	<14.7>
17	RA188 - 遺構内	RA188土器21(横土中位)、土器25(上層)、Q1トレンチ、北東高品	須恵器	灰皿	2.5YR4/2	灰水	47.1	—	—	<8>
18	RA188	土器5 (カマド内層上層土中位)、カマド検出器	須恵器	灰皿	5Y6/2	灰オリーブ	136.7	(16.9)	—	<11.2>
19	RA188 - 遺構内	RA188Q1トレンチ、北掘31内遺構検出器	須恵器	壺	2.5YR5/3	にぶい赤緑	62.2	—	—	<7.3>
20	RA188	土器6 (カマド内層上)	須恵器	甕	10YR7/1	灰白	72.0	—	—	<70>
21	RA189	Q17層	内器 土師器	杯	10YR4/2	灰黄緑	38.0	(15.6)	—	<40>
22	RA189	Q2トレンチ、掘り方、上層	土師器	杯	10YR6/3	にぶい黄緑	69.9	—	6.0	<2.3>
23	RA189	土器7 (北東掘土器内)	土師器	甕	7.5YR5/3	にぶい黄	103.7	—	(9.2)	<7>
24	RA189	Q1トレンチ、ベルト1層	土師器	甕	5YR4/6	赤緑	63.3	—	—	<5.7>
25	RA189	土器12 (2号カマド内層土中位)	土師器	甕	7.5YR7/4	にぶい黄	42.9	—	—	<6.7>
26	RA189	土器19(1号カマド内層上層土中位、土器43上層、検出器)	土師器	甕	7.5YR8/4	黄赤緑	131.1	(21.2)	—	<7.2>
27	RA189	土器5 (カマド内層上層) 土器10(東部)、土器9(カマド内層土)、15(1号土中位)	土師器	甕	5YR5/6	明赤緑	281.2	(21.0)	—	<17.2>
28	RA189	土器3(掘り方)	土師器	甕	7.5YR7/6	黄	194.4	—	—	<18.7>
29	RA189	Q3 上層	須恵器	壺	2.5Y/2	薄灰青	23.1	—	—	<2.4>
30	RA190	土器10(カマド内層、13(土中位下層)、Q1上層、F層、遺構内土下層)、Q1上層、F層、カマド土中位下層	内器 土師器	杯	10YR7/4	にぶい黄緑	82.9	(14.3)	6.0	4.7
31	RA190	土器11(検出器、2(検出器)、4(赤黄)、7(下層)、Q2掘り方下位、下層)	土師器	甕	5YR6/6	黄	379.2	(13.8)	9.8	14.7
32	RA190	土器12(検出器、2(検出器)、4(赤黄)、7(下層)、Q2掘り方下位、下層)	土師器	甕	7.5YR6/8	黄	1628.9	21.4	11.6	26.0
33	RA190	Q1下層	土師器	甕	10YR4/2	灰黄緑	29.1	—	—	<50>
34	RA190	土器15(カマド内層土中位上層の穴)	土師器	甕	5Y7/6	黄	52.7	—	—	<7.5>
35	RA190	Q1上層、Q1下層	土師器	甕	5YR4/3	にぶい赤緑	156.6	—	(9.0)	<80>
36	RA190	土器18(カマド右側内層)、Q1上層、1号土器土)	土師器	甕	7.5YR6/6	黄	292.5	—	9.7	<10.2>
37	RA191	土器3(下層)、Q3掘り方	土師器	杯	7.5YR8/6	黄赤緑	38.7	(13.4)	4.8	4.5
38	RA191 - RA198	土器2(カマド右側土中位、4(中位)、横溝群上層)、Q2上層、Q2検出器、Q3トレンチ、RA198Q2下層	土師器	甕	7.5YR6/4	にぶい黄	280.4	(19.5)	8.3	12.8
39	RA191	土器1(カマド内層、カマド土)	土師器	甕	7.5YR6/6	黄	306.3	(23.3)	—	<16.9>
40	RA192	Q3下層	内器 土師器	杯	10YR6/4	にぶい黄緑	14.1	—	(5.2)	<2.7>
41	RA192	Q3掘り方掘り土中位	内器 土師器	杯	7.5YR6/6	黄	23.7	(14.2)	—	<3.5>
42	RA192	土器3(赤黄)、Q2 F層	土師器	杯	7.5YR6/6	黄	36.4	(15.0)	—	<4.2>
43	RA192	須恵器出器1	土師器	甕	5YR6/6	黄	27.5	—	—	<5.8>
44	RA192	Q3 上層	土師器	甕	5YR5/6	明赤緑	30.5	—	—	<6.2>
45	RA192	須恵器出器上	土師器	甕	5YR5/6	明赤緑	44.5	—	—	<7.0>
46	RA192	Q3下層	土師器	甕	7.5YR7/6	黄	21.3	—	—	<3.7>
47	RA192	須恵器一坑(内層上層)、検出器	土師器	甕	7.5YR6/4	にぶい黄	55.8	—	—	<12.0>
48	RA192 - KU188	RA192土器3、RD488土器5	土師器	甕	5YR6/8	黄	286.3	—	(18.3)	<11.8>
49	RA192	柱穴埋土	須恵器	壺	5Y/	黄	101.5	—	—	<10.1>
50	RA190 - RA192	RA190土器3(下層)、カマド内層土中位、横溝群上層より上、RA192ベルト上層、RA192を穿る柱穴	須恵器	灰皿	7.5Y4/1	灰	329.9	(16.4)	—	<20.5>
51	RA192 - KU188	RA192土器1(下層) RD488土器13(下層)	須恵器	壺	2.5Y4/1	黄灰	161.6	—	9.0	<5.3>

T: 手打ち K: 鑑定

No.	外形識別	底面	表面調整	焼成状況	調査時付け	備考
1	ヘラナダ		ハケメ	口縁～胴部上手の1/2を欠く		
2	ハケメ		ハケメ	ト下1/2を欠く		
3	ロクロナダ、一筋キキメ	K糸巻り	ロクロナダ	遠縁のみ		
4	ロクロナダ→ヘラナダ→作部下層Tヘラケズリ	切り直し不明 手打ちヘラケズリ	ロクロナダ→ミダキ	4/5		口縁部の約1/2に黒色焼痕はみみし。
5	ロクロナダ→作部下層Tヘラケズリ	K糸巻り	ロクロナダ→ミダキ	胴部～底部破片		
6	ロクロナダ→作部下層Kヘラケズリ	切り直し不明Kヘラケズリ	ロクロナダ→ミダキ	作部下層～底部破片		
7	ロクロナダ	K糸巻り	ロクロナダ→ミダキ	作部下層～底部破片		底面にすのこ痕?
8	ロクロナダ	K糸巻り	ロクロナダ→ミダキ	底縁破片		内面底面の黒色焼痕疑義
9	ロクロナダ	切り直し不明	ロクロナダ→ミダキ	作部下層～両面破片	工凡ナナス→ナダ	
10	ロクロナダ	K糸巻り	ロクロナダ	1/2		外表面酸化、内面の一部酸化
11	ロクロナダ	K糸巻り?	ロクロナダ	1/3		蓋等土器 作部同位?
12	ロクロナダ→胴部?ミダキ		ロクロナダ→胴部?ミダキ	口縁～作部破片		
13	ヘラナダ		ヘラナダ	口縁部破片		
14	カキメ風		カキメ風	口縁部～胴部破片		
15	ヘラナダ		ヘラナダ	口縁～胴部破片		
16	ロクロナダ→ケズリ		ロクロナダ	口縁～胴部破片		
17	ロクロナダ、一部カキメ→Tヘラケズリ		ロクロナダ	作部上T4/5		内外面とも酸化
18	ロクロナダ、一部カキメ→Tヘラケズリ		ロクロナダ、一部カキメ	口縁～作部上層破片		
19	ロクロナダ		ロクロナダ	口縁～作部上層破片		内外面とも酸化
20	ロクロナダ→Tヘラケズリ		ロクロナダ	作部上層破片		
21	ロクロナダ		ロクロナダ→ミダキ	口縁部～各部の1/4		
22	ロクロナダ	K糸巻り	ロクロナダ	底縁破片		
23	ナダ		ナダ	底縁破片		
24	ナダ		ナダ	口縁部破片		
25	ナダ、ハケメ		ハケメ	口縁部破片		
26	ロクロナダ、ヘラナダ		ロクロナダ	口縁部～胴部上層1/3		
27	ヘラナダ		ヘラナダ、一部ハケメ	口縁～胴部上上の1/3		
28	ロクロナダ→ヘラケズリ		ロクロナダ	口縁部～胴部破片		
29	ロクロナダ		ナダ、カキメ	口縁部破片		内外面に自然焼
30	ロクロナダ→作部下層Kヘラケズリ	切り直し不明	ロクロナダ→ミダキ	1/2		
31	ヘラナダ	木炭痕	ヘラナダ	1/2		
32	ヘラナダ	木炭痕、緑斑	ハケメ	ほぼ北縁		底面に凸形の文様痕?
33	ナダ		ナダ	口縁部破片		
34	ヘラナダ		ハケメ	口縁部破片		
35	ケズリ	ナダ	ハケメ	胴部下T～底縁		
36	ハケメ下層ケズリ	ナダ	ヘラナダ	胴部下層～底縁		
37	ロクロナダ	K糸巻り	ロクロナダ	1/4		
38	ロクロナダ底縁K糸巻り		ロクロナダ	1/4		
39	ロクロナダ→ヘラケズリ		ロクロナダ	口縁部～胴部上層破片		
40	ロクロナダ→作部下層Kヘラケズリ	切り直し不明Kヘラケズリ	ロクロナダ→ミダキ	作部下層～底部破片		黒赤土器 多文字「[T]」
41	ロクロナダ		ロクロナダ→ミダキ	口縁部1/4		外口唇までスス
42	ロクロナダ→作部下層Tヘラケズリ		ロクロナダ	口縁～作部の1/4		
43	ナダ		ナダ	口縁部破片		
44	ナダ		ナダ	口縁部破片		
45	ヘラケズリ		ナダ	口縁部破片		
46	ロクロナダ		ロクロナダ	口縁部破片		
47	ロクロナダ		ロクロナダ	口縁部破片		
48	ヘラナダ→作部下層ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラナダ	胴部下層～底縁		内面に黒み4個 胴部下層の一部にスス ロクロナダ
49	ロクロナダ→Tヘラケズリ		ロクロナダ→作部下層ヘラケズリ	作部下層の残片		外口自然焼 灰～黒色
50	ロクロナダ、ヘラナダ、Tヘラケズリ		ロクロナダ	1/6		外表面の一部に自然焼
51	ロクロナダ→Tヘラケズリ	ナダ	ロクロナダ	作部下層～底縁破片		

No.	井上通称	取土位置	土種	製種	集積	色名	集積量	口内径	深さ(m)	割合%
52	RA193	Q1下層	内質 土層砂	灰	75YR7/2	にぶい砂	331	0(32)	6(4)	43
53	RA193	RA190Q2内土層、RD48壁土上～F	内質 土層砂	灰	10YR6/6	明赤黄	909	(142)	5(5)	44
54	RA193	Q4下層	内質 土層砂	灰	75YR6/4	にぶい砂	514	(144)	6(9)	42
55	RA193	砂利層中、Q1動り床	内質 土層砂	灰	10YR7/2	にぶい黄	420	(134)	5(8)	45
56	RA193	Q2ベルト層	内質 土層砂	灰	10YR7/4	にぶい黄	469	(134)	5(8)	44
57	RA193	Q2壁土上層	内質 土層砂	灰	75YR7/4	にぶい砂	250	—	6(4)	<15>
58	RA193	上層22(カマド基礎部)、Q3壁面	土層砂	灰	25YR6/8	黄	1772	14.7	5.3	5.5
59	RA193	上層22の下(カマド基礎部)	土層砂	灰	5YR7/6	黄	1064	14.1	6.4	5.1
60	RA193	上層1(下層)、Q4下層	土層砂	灰	25YR6/8	黄	1154	13.7	5(5)	4.7
61	RA193	Q4下層、カマド筋床面	土層砂	灰	5YR6/6	黄	550	(146)	(4.4)	4.8
62	RA193	F.001(カマド筋床)、カマド筋内	土層砂	灰	5YR6/6	黄	482	(148)	(6.0)	5.1
63	RA193	Q4下層	土層砂	灰	75YR7/4	にぶい砂	486	(146)	(5.2)	4.8
64	RA193	Q2壁土上層	土層砂	灰	5YR6/6	黄	41	—	—	<27>
65	RA193	F.014(カマド)	内質 土層砂	高倉付灰	10YR3/2	黒黄	495	—	7.1	<28>
66	RA193	カマド基礎部土	土層砂	黄	25YR6/6	明赤黄	672	(166)	—	<56>
67	RA193	カマド筋土層	土層砂	黄	5YR6/6	明赤黄	956	—	—	<16.6>
68	RA193	F.022(筋土)	土層砂	黄	75YR6/6	黄	1073	(170)	—	<66>
69	RA193	Q1下層	内質 土層砂	灰	10YR7/2	にぶい黄	459	(126)	—	<64>
70	RA193	Q1筋床	内質 土層砂	灰	10YR7/2	にぶい黄	613	—	—	<42>
71	RA193	Q1筋土層	内質 土層砂	灰	10YR7/2	にぶい黄	391	—	—	<72>
72	RA193	Q1筋土上層	内質 土層砂	灰	75YR7/4	にぶい黄	212	—	—	<81>
73	RA193	筋土筋土層	内質 土層砂	灰	10YR7/4	にぶい黄	791	—	—	<39>
74	RA194	F.022(カマド筋土)	内質 土層砂	灰	10YR7/4	にぶい黄	211	(140)	(5.0)	4.7
75	RA194	F.027(筋土、壁土2の下、床土、Q4上層)	内質 土層砂	灰	5YR7/6	黄	92	(140)	5.8	<12>
76	KA194	F.07カマド筋土、Q2トレンチ	内質 土層砂	灰	75YR5/3	にぶい黄	65	(146)	(5.0)	4.5
77	KA194	F.08(下層)、9(中層)、12(上層)	内質 土層砂	灰	10YR5/2	にぶい黄	470	(130)	—	<38>
78	RA194	土層24(筋土上層)、Q2トレンチ、Q3トレンチ、Q1床高ベアラー	内質 土層砂	灰	75YR6/4	にぶい黄	669	(136)	5.1	<44>
79	RA194	土層25(筋土)、筋土1、2(F)	内質 土層砂	灰	75YR6/4	にぶい黄	778	(142)	5.1	4.7
80	RA194	土層26(筋土)、Q2下層、カマド筋土	内質 土層砂	灰	75YR6/4	にぶい黄	450	(142)	6(3)	44
81	RA194	Q3下層	内質 土層砂	灰	75YR5/4	にぶい黄	234	—	—	<34>
82	RA194	土層21(F下)	内質 土層砂	灰	5YR6/6	黄	1496	128	5.0	4.5
83	RA194	土層26(筋土)、土層27(筋土)、土層28(筋土)	土層砂	灰	10YR6/2	明赤黄	343	(129)	5.6	5.2
84	RA194	土層15(上層)、Q2下層	土層砂	灰	5YR7/6	黄	813	(141)	5.6	5.5
85	RA194	土層30(壁面)	土層砂	灰	5YR7/6	黄	294	(132)	—	<35>
86	RA194	Q2土層	土層砂	高倉付灰	75YR7/6	黄	362	—	6(4)	<29>
87	RA194	F.029(筋土)	土層砂	高倉付灰	5YR7/6	黄	668	—	6.7	<25>
88	KA194	F.053、Q2上層	土層砂	黄	75YR5/3	にぶい黄	2519	—	12(8)	<11.4>
89	KA194	土層26(床土)、Q2下層	土層砂	黄	75YR7/6	黄	1300	160	12(3)	21.9
90	RA194	土層16(土層)21(上層)、23(カマド土層上)、25(下層)、23、29(カマド土層)Q2上層、筋土筋土層、Q3トレンチ	土層砂	黄	5YR6/6	明赤黄	7418	19(6)	—	<22.6>
91	RA194	土層22、23、24、25、26(カマド土層上)、27(カマド土層上)、28、30(カマド土層上層)、Q2土層、筋土筋土層、Q3トレンチ、筋土筋土層、Q2トレンチ、筋土筋土層	土層砂	黄	75YR6/6	黄	3776	(166)	61.0	21.9
92A	RA194	土層36(カマド土層)、Q2トレンチ	土層砂	黄	5YR6/6	黄	1416	(180)	—	<13.6>
92B	RA194	土層66(F下)	土層砂	黄	5YR6/6	黄	1191	—	—	<7.9>
93	RA194	土層44(F)	土層砂	黄	75YR7/4	にぶい黄	558	(146)	—	<10.8>
94	RA194	土層63、Q2上層	土層砂	黄	75YR7/6	黄	1372	—	—	<54>
95	RA194	Q1トレンチ	土層砂	灰	5YR6/2	明赤黄	729	—	—	<54>
96	RA194	F.017(F下)、31(筋土)	土層砂	灰	75YR6/1	灰	1033	—	—	<5.7>
97	RA194	土層13(中層)、Q2ベルト上層	土層砂	黄	5YR5/1	明赤黄	1473	—	—	<4.0>
98	RA194	土層19(筋土)、Q3土層	土層砂	黄	25YR7/2	明赤黄	2460	—	—	<9.8>
99	RA194-RA191	土層61、OHY-092RA191	土層砂	灰	5YR3/1	明赤黄	3462	—	—	<10.3>
100	RA195	土層7(F上F下)、10(土層中層)、筋土上層、カマド土層	内質 土層砂	灰	10YR6/4	にぶい黄	1336	144	6.4	5.0
101	RA195	土層5(土層中層)、Q3壁面	内質 土層砂	灰	75YR6/4	にぶい黄	924	(130)	5.8	4.9
102	RA195	土層17(土層中層)、土層8(土層中層)、17(土層中層)	内質 土層砂	灰	10YR6/6	明赤黄	1810	145	5.3	5.0
103	RA195	土層2(土層中層)、4(F上F中層)、6(F中層)、カマド土層	土層砂	黄(赤心)	5YR5/6	明赤黄	1362	(126)	(8.8)	7.4
104	RA195	土層9(土層中層)、13(土層上層)、16(F上F下)	土層砂	灰	10YR7/2	明赤黄	3312	(174)	—	<30.8>

No.	外周調整	底記	内周調整	残存状況	空白部(付)	備考
52	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	1/5		蓋部全周「舞」
53	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	3/5		外周一部スス
54	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	1/5		外周(口縁部)まで黒色
55	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	1/4		
56	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	1/4		口縁部まで黒色
57	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	底面破片		蓋部全周 裏面にヘラ書き「ス」
58	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ	ほぼ全周		内周面にスポット状に径0.5~1cm程度の凹み
59	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ	3/5		蓋部全周一部に布紋
60	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ	3/5		外周一部スス、赤化、内周一部スス
61	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ	1/4		内周一部赤化
62	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ	1/5		内周部の1/2程度赤化
63	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ	1/3		内周面一部赤化
64	ロクロナデ	—	ロクロナデ	—		蓋部全周 凹みあり
65	ロクロナデ→ミギキ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	底面破片	損ネキ→ナデ	
66	ヘラナデ	—	ヘラナデ	口縁→胴部上縁1/4		
67	ヘラナデ	—	ヘラナデ	口縁→胴部破片		
68	ヘラナデ	—	ヘラナデ	口縁→胴部上縁破片		
69	ヘラナデ	—	ヘラナデ	口縁→胴部上縁1/3		
70	ロクロナデ→ヘラナデ	—	ロクロナデ	胴部→胴部破片		蓋部縁部リング状凹み
71	ロクロナデ→ヘラナデ	—	ロクロナデ	口縁破片		
72	ロクロナデ	—	ロクロナデ	口縁破片		
73	タタキ目	—	—	蓋部全周		
74	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ	2/5		内周部: 2が黒色処理痕跡
75	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	2/3		
76	ロクロナデ	—	ロクロナデ→ミギキ	蓋部を欠く 1/4		
77	ロクロナデ	—	ロクロナデ→ミギキ	蓋部を欠く 1/4		内周面黒色処理痕跡
78	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	1/4		一部破片が黒色処理痕跡
79	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	1/3		
80	ヘラナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	1/4		外周口縁部一部スス
81	ロクロナデ	—	ロクロナデ→ミギキ	口縁破片		蓋部全周 全体外周にヘラ書き「ス」
82	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ	口縁		外周面口縁部スス
83	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ	1/4		
84	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ	1/4		外周一部赤化
85	ロクロナデ	—	ロクロナデ	口縁部の1/4		外周面的にスス
86	ロクロナデ	不明	ロクロナデ	蓋部→蓋部の1/2	損ネキ→ナデ	蓋部全周 内周面部にヘラ書き「人」
87	ロクロナデ	不明	ロクロナデ	蓋部→蓋部破片	損ネキ→ナデ	
88	ナデ、下胴ナデ	ナデ	ヘラナデ	胴部全周→底面1/3		
89	ロクロナデ→ヘラナデ	ナデ	ロクロナデ	胴部全周の一部を欠く、縁部		
90	ロクロナデ→ヘラナデ	—	ロクロナデ	口縁→胴部下部の2/5		
91	ロクロナデ→ヘラナデ	ナデ	ロクロナデ	2/3		
92A	ロクロナデ→ヘラナデ	—	ロクロナデ	口縁→胴部破片		
92B	ロクロナデ	—	ロクロナデ	口縁部→胴部上縁破片		
94	ロクロナデ	—	ロクロナデ	口縁→胴部破片		
95	ロクロナデ	—	ロクロナデ	口縁部破片		胴と蓋部同
96	胴部ロクロナデ、体部タタキ目(平打)	—	胴部ロクロナデ、体部全周(平打)	蓋部→胴部破片		胴と蓋部同
97	体部上縁ナデ、体部タタキ目(平打)	—	体部上縁ナデ、体部全周(平打)	体部→胴部破片		外周自然輪 蓋上に黒色塗 97、153と同一形状 表面赤化
98	タタキ目(平打)	—	—	体部破片		外周部白色、黒色
99	タタキ目(平打)	—	—	体部上縁破片		外周自然輪 蓋上に黒色塗 97、153と同一形状 内周赤化、外周部一部赤化
100	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	4/5		約1/3の破片が内周の黒色処理痕跡
101	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	1/2		胴部1/3 全体外周にヘラ書き「人」
102	ロクロナデ	K糸切り	ロクロナデ→ミギキ	4/5		内周→一部黒色処理痕跡
103	ヘラナデ	未調査	ヘラナデ	全体の1/4		
104	ヘラナデ	—	ヘラナデ	口縁→胴部1/3		

No	用土場所	用土位置	種類	仕様	色別	色名	重量g	17℃cm	凍結cm	融氷cm
105	RA106	土部1(埋戻し土)、土部2(埋戻し土)、3(埋戻し土)	内照 土砂部	環	10YR6/1	にぶい黄砂	144.8	14.6	6.4	5.1
106	RA106	土部8(土部基礎)	土砂部	環	10YR5/3	にぶい黄砂	145.5	15.0	6.0	4.9
107	RA106	橋脚部	内照 土砂部	高心付環	5Y2/1	黒	61.7	-	0.8	<1.0>
108	RA106	土部9(カマド敷土)、12(カマド火筒敷土)、21(カマド敷土内)	土砂部	環	7.5YR6/6	黄	227.3	18.2	-	<18.7>
109	RA106	土部13(カマド右側足り付)、14(カマド敷土埋戻し)、18(埋戻し)、カマド内、カマド焼土、Q3ト層、カマド足り付	土砂部	環	5YR5/6	明赤黄	316.3	-	-	<29.4>
110	RA107	土部7、Q3ト層	内照 土砂部	環	7.5YR6/6	黄	66.4	-	5.8	<3.4>
111	RA107	土部6(土部上層)	内照 土砂部	環	10YR6/1	にぶい黄砂	58.4	13.1	8.2	4.6
112	RA107	Q3ト層	土砂部	環	7.5YR6/6	黄	40.0	14.0	6.5	4.9
113	RA107	Q1ト層	土砂部	環	7.5YR6/1	黄	71.3	-	5.8	<4.8>
114	RA107	Q1ト層	土砂部	環	7.5YR6/6	黄	53.3	-	6.4	<5.1>
115	RA107	Q2ト層、Q3ト層	土砂部	環	2YR6/6	黄	9.3	-	-	<5.1>
116	RA107	Q1ト層	土砂部	環	7.5YR7/6	黄	32.4	-	-	<4.4>
117	RA107	土部8(ト層)	土砂部	環	5YR5/6	明赤黄	167.1	-	10.8	<9.3>
118	RA107	土部2、3、6、9-12(ト層)、Q4ベルト層、Q3ト層、Q1ト層	土砂部	環	5YR5/8	黄	917.0	-	11.6	<18.8>
119	RA107	土部10(ト層)、Q2ト層	土砂部	環	7.5YR7/4	にぶい黄	129.8	19.2	-	<13.4>
120	RA107	Q2ト層	灰土部	環	2.5Y4/1	黄	32.4	-	-	<4.2>
121	RA107	Q2ト層	灰土部	環	5Y6/1	灰	49.6	-	-	<3.0>
122	RA108	土部20(土部21の上)	内照 土砂部	環	7.5YR6/6	黄	166.3	13.7	7.0	5.0
123	RA108	土部25(右側)	内照 土砂部	環	7.5YR7/6	黄	96.9	14.2	7.0	5.1
124	RA108	土部7(敷土)、8(敷土)、12(敷土)、カマド敷土	内照 土砂部	環	10YR6/3	にぶい黄砂	59.3	17.2	6.0	5.8
125	RA108	土部17(右敷土)、22(焼土)	土砂部	環	2.5Y7/2	灰黄	77.5	14.9	5.8	5.2
126	RA108	土部21(赤黄)	土砂部	環	2.5YR6/8	黄	133.5	14.8	5.8	5.1
127	RA108	土部14(赤黄)、16(赤黄)、Q1ト層、Q4ト層、Q1ベルト土	土砂部	環	2.5YR6/8	黄	96.9	13.0	5.1	3.1
128	RA108	土部3(赤黄)、4(赤土)、13(赤土)、カマド焼土、Q2ト層、敷土	灰土部	環	2.5YR6/8	黄	93.3	14.0	5.8	5.1
129	RA108	Q3ト層	内照 土砂部	高心付環	2.5YR7/8	黄	85.6	-	6.4	<3.4>
130	RA108	土部16(灰土)、床土、土部赤土、Q3ベルト土、Q3ト層	土砂部	環	5YR6/8	黄	384.1	20.0	10.8	<7.8+> <9.4>以下
131	RA108	土部19(赤黄)、24(赤黄)、Q2ト層	灰土部	環	2.5Y4/1	黄	118.8	15.7	-	<6.1>
132	RA108	土部5(赤土)、カマド敷土	灰土部	環	2.5Y4/1	黄	202.1	-	-	<10.5>
133	RA109	C-Cベルト土	土砂部	環	7.5YR6/6	黄	74.2	-	6.4	<3.5>
134	RA109	焼土層上土	土砂部	環	10YR8/6	黄	30.4	-	5.4	<3.1>
135	RA109	焼土層上土	土砂部	環	5YR6/6	黄	37.7	-	-	<3.6>
136	RA109	Q3ト層	灰土部	環	10Y4/1	黄	163.3	-	-	<11.7>
137	RA201	焼土下土	内照 土砂部	環	10YR6/3	にぶい黄砂	242	14.6	-	<6.6>
138	RA201	カマド敷土上	土砂部	環	7.5YR7/6	黄	22.6	12.6	-	<4.9>
139	RA201	カマド敷土下土、赤黄焼土土	土砂部	環	7.5YR6/6	黄	45.7	12.3	-	<18.8>
140	RD495	灰土	土砂部	環	7.5YR6/6	黄	24.1	-	-	<4.4>
141	RD498	土部10(下層)	土砂部	環	7.5YR6/4	にぶい黄	63.2	-	-	<7.7>
142	A	土部5(敷土)9(下層)、12(埋戻し)、16(敷土)、27(上層)、29(ト層)、埋戻しト層、敷土	土砂部	環	10YR8/3	黄	215.0	21.0	13.0	<22.2> 以下
142	B	土部18(焼土)、28(下層)、30(上層)、33(下層)、35(下層)、37(下層)、埋戻し土中土、埋戻しト層	土砂部	環	10YR8/3	黄	407.8	-	-	<3.8>
143	RD488-遺構跡	土部6(敷土)、灰土	灰土部	環	2.5Y5/1	黄	104.5	-	-	<4.7>
144	RD494	B土部	土砂部	環	7.5YR8/6	黄	12.0	-	-	<3.2>
145	RD495	土部1(埋戻し)、2(埋戻し)	灰土部	環	10Y5/1	灰	137.5	14.0	5.6	3.2
146	RG568	埋土部	内照 土砂部	環	10YR5/2	黄	19.1	-	6.8	<1.6>
147	R7022	埋土中(埋戻し1から埋戻し)	灰土部	環	10YR4/1	黄	77.0	-	-	<4.8>
148	R7020	16赤土部	内照 土砂部	環	10YR6/4	にぶい黄砂	31.9	-	6.0	<1.1>
149	PF29	埋土	土砂部	環	10YR8/3	黄	33.5	-	-	<5.8>
150	PF23	埋土	土砂部	環	7.5YR6/6	黄	70.3	-	-	<10.1>
151	黄 博 外-25C RA181	埋戻し下土、OHY09RA181	灰土部	環	2.5Y7/1	灰白	78.8	-	-	<9.5>
152	遺構跡	東北の人の名を冠した	灰土部	環	2.5Y6/1	灰白	13.1	-	7.0	<2.3>
153	1号遺跡	A-A'ベルト土	灰土部	環	2.5Y3/1	黄	36.8	-	-	<5.1>
154	1号遺跡	C-C'ベルト土	灰土部	環	2.5Y3/1	黄	27.6	-	-	<2.9>
155	埋戻し	南側土層	灰土部	環	10YR1/1	黄	151.5	-	10.0	<3.9>

No.	主要図號	主要	主要圖號	保存状況	高倉収付方法	備考
106	ロクロナダ→体部下層Kヘラケズリ	K糸切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナダ→ミダキ	3/4	—	外面体部下層に漆合の間の工具痕1-2
106	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	ほぼ完成、底面粗削片	—	外面体部の 漆、内面口縁部1/2にスス
107	ロクロナダ→ミダキ	K糸切り	ロクロナダ→ミダキ	漆部→高台焼片	前オキム→ナダ	焼内上層 底面内面にヘラキ「X」造成後
208	ヘラナダ→ヘラケズリ		ヘラナダ	口縁→削製下層片		
109	胴部上層ヘラナダ、下層ヘラケズリ		ハケメ、胴部上層ヘラナダ	口縁部→胴部下層の1/3		
110	ロクロナダ→体部下層Kヘラケズリ	K糸切り→Kヘラケズリ	ロクロナダ→ミダキ	1/3	—	内面口縁部黒色焼取残
111	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ→ミダキ	1/3	—	—
112	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	1/4	—	—
113	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	1/3	—	—
114	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	1/3	—	—
115	ロクロナダ	—	ロクロナダ	体部破片	—	黒色土層 体部内面に黒色あり
116	ヘラケズリ	—	ヘラナダ	口縁部破片	—	—
117	ナダ、ヘラケズリ	ヘラナダ	ヘラナダ	胴部上層破片1/4	—	—
118	ヘラナダ	ナダ	ヘラナダ	胴部→底面	—	—
119	ロクロナダ→ヘラケズリ	—	ロクロナダ	1層→胴部破片	—	—
120	ロクロナダ→ヘラケズリ	—	ロクロナダ	体部下層破片	—	128と同一器本?
121	ロクロナダ→ヘラケズリ	—	ロクロナダ	体部下層破片	—	127と同一器本?
122	ロクロナダ→体部下層Kヘラケズリ	K糸切り→Kヘラケズリ	ロクロナダ→ミダキ	完成	—	焼内上層 体部内面に「大キ六ク」
123	ロクロナダ→体部下層Kヘラケズリ	切り荒し不明Kヘラケズリ	ロクロナダ→ミダキ	1/3	—	内面口縁部と底面の一部を黒色焼取残
124	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ→ミダキ	1/4	—	—
125	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	1/4	—	—
126	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	3/4	—	刃面口縁部1層→体部にスス、内面胴部と口縁部の一層にスス
127	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	1/2	—	—
128	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	1/3	—	内面口縁部の一部
129	ロクロナダ	切り荒し不明	ロクロナダ→ミダキ	体部下層→底面破片	前オキム→ナダ	—
130	ロクロナダ→ヘラケズリ	ナダ	ロクロナダ、ナダ	口縁→胴部上層破片、胴部下層→底面	—	—
131	ロクロナダ	—	ロクロナダ	口縁部1/2	—	口縁部内面に自然蝕
132	ロクロナダ→ヘラケズリ	—	ロクロナダ	体部破片	—	—
133	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	口縁部を削きし2	—	底面にすのこ? 穴跡
134	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	底面→体部1/3	—	—
135	ヘラナダ、ヘラケズリ	—	ハケメ	口縁部破片	—	—
136	タタキ目(平行)	—	高て鼻(筒体)	体部破片	—	—
137	ロクロナダ	—	ロクロナダ→ミダキ	1層部→体部破片	—	内面口縁部により自然焼取残
138	ロクロナダ	—	ロクロナダ	1層部→体部破片	—	—
139	ナダ、ミダキ	—	ハケメ	1層→胴部下層2/5	—	—
140	ヘラナダ	—	ハケメ	1層部破片	—	—
141	ヘラナダ	—	ヘラナダ	1層部破片	—	—
142	A	ヘラナダ	ヘラナダ	口縁部→底面1/3	—	—
142	B	—	—	—	—	—
143	タタキ目(平行)	—	高て鼻(筒体)	体部上層破片	—	—
144	ロクロナダ	—	ロクロナダ	口縁→底面破片	—	—
145	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ	1/2	—	—
146	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ→ミダキ	体部下層→底面破片	—	外面焼取→体部にスス
147	ロクロナダ、カキメ	—	ロクロナダ、カキメ	胴部→体部上層破片	—	—
148	ロクロナダ	K糸切り	ロクロナダ→ミダキ	底面破片	—	内面の黒色処理→底面
149	ヘラケズリ	—	ヘラナダ	胴部破片	—	—
150	ヘラナダ	—	ヘラナダ	口縁部→胴部破片	—	—
151	ロクロナダ	—	ロクロナダ	底面→上層破片	—	外面一部に自然蝕(鉄・オキシド)
152	ロクロナダ	ロクロナダ?	ロクロナダ	底面、高台破片	—	—
153	ロクロナダ	—	ロクロナダ	1層部破片	—	内外面自然蝕 底→黒色 胴部に黒色 99と同一器本
204	胴部ロクロナダ、体部タタキ目(平行)	—	胴部ロクロナダ、体部高て鼻(筒体)	底面→体部上層破片	—	内面胴部、外面自然蝕
205	タタキ目(平行)	ナダ、タタキ目	カキメ	底面破片	—	内面胴部に自然蝕(底)、外面自然蝕(底) 底面に粘土が付着

第14表 石器観察表

&lt; &gt;は残存部

No.	発掘名	器種	出土位置	図説	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石材	産地	時代	備考
156	RA189	石5	上段(埋土)	コマノ楕圓形	<11.8>	<8.9>	<1.0>	207.1	凝灰岩	奥羽山脈	新石器新編三期	ケート付著、 底面残存あり
157	RA189	石4		コマノ楕圓形	<9.3>	<10.8>	<2.6>	230.2	凝灰岩	奥羽山脈	新石器新編三期	ク、ル付著、 底面残存あり
158	RA194	石21	床底	磨り石	<15.3>	<13.7>	<4.4>	153.1	安山岩	野手山付近	新石器新編四期	
159	RA194	石1	中層	磨り石	12.4	8.0	40.7	630.8	アノサイト	奥羽山脈	新石器新編三期	
160	RA194	石1		磨り石?	<17.95>	<8.8>	6.1	732.6	安山岩	野手山付近	新石器新編四期	
161	RA197	石2+石8+石9	墓土	加工痕のある環	<35.3>	24.2	10.8	3,500.0	安山岩	野手山付近	新石器新編四期	
162	不明	不明		磨り石	13.9	9.2	6.5	1,075.0	アノサイト	奥羽山脈	新石器新編三期	

第15表 土製品観察

&lt; &gt;は残存部

No.	出土位置	器種	図説	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	色調	備考
163	RA194	灰土直土器2	土人形?	<2.4>	<2.4>	0.45	<2.9>	7.5Y2/1に灰土性	胴裏り、胴口ぎなどの5%の面残存か?
164	中央民孔		透汗下	2.2	1.9	<0.7>	<2.0>	5YR6-6黄	大黒立流、胴右側面～右肩を欠く。右手に小孔? 左手に窪の口を穿つ。

第16表 陶磁器観察表

( )は測定値、&lt; &gt;は残存部

No.	器種	出土位置	器種	図説	長さcm	幅cm	高さcm	文様等	胎色	残存状況	産地	時期	備考	
165	緑地刺青	RA192	皿	3	3.1	-	<1.8>		灰オリーブ	口縁部破片	赤漆塗り	9世紀後半		
166	陶器	RD900	湯か	25.0	-	(6.4)	<4.1>		灰緑 陶質粗	底部下縁～ 高台破片	不明			
167	陶器	RD566	煎土器下位	日次	81.6	6.8	4.4	(4.0)	上腹に菊の薄刺	灰緑	法17.5割を欠く	唐宋	18世紀後半	京流馬蹄 煎土器
168	陶器	RG089	煎土器上段(割代器土)	陶か	8.5	-	<3.0>	外周部草花、見込みに厚塗方唐	透明	底部破片	肥前	V期		
169	磁器	RG089	CCベルト磨土器	磁	52.2	-	4.4	<2.4>	見込み 磨り 外曲	透明	底部破片	不明	V期前半	土前では 未著
170	磁器	RG280	A-Aベルト磨土器2	磁	106.3	(12.2)	5.1	6.4	見込み、山水 赤土内(大口・ 口)	透明	L/I	不明	19世紀	赤土内に 未著
171	磁器	RG089	B-Dベルト磨土器	磁	28.8	-	-	<1.9>	見込み 山水 赤土内(大口・ 口)	透明	底部破片	肥前	V期	
172	磁器	RZ022	煎土器上段	陶	25.9	-	(3.0)	<2.9>		透明	底部下縁～ 底面破片	肥前	V期	
173	磁器	RZ022	煎土器上段	陶	21.7	-	-	-	見込み草花、棘 葉	透明	底部破片	肥前	V期	蛇ノ目出 新高台
174	磁器	RZ022	煎土器上段	小陶	15.7	-	(3.4)	<1.2>	高台内「人馬車 輪」	透明	底部破片	肥前	V期	
175	磁器	RZ022	(赤土製刺青 古式)煎土器	陶	4.4	-	-	<1.3>	赤地 唐草?	透明(口縁部 破片)	底部破片	肥前	不明	
176	陶器	SZ022	煎土器上段	陶	8.0	-	-	<3.7>		灰緑	口縁～底部 破片	大塚山脈	18世紀以降	
177	陶器	RZ022	(横1から横 4m)煎土器	陶	14.5	-	-	<2.5>		灰オリーブ	口縁部破片	不明	19世紀	
178	陶器	FP135	煎土器(アタリ)	陶	66.7	-	-	<7.4>	赤陶器?	緑色	口縁部～ 底部破片	不明		
179	磁器	透障外	コタラン L500(約生)	陶	43.4	-	(4.2)	<2.3>		透明	底部下縁～ 底部破片	不明	不明	昭和25年

第17表 縄文土器観察表

&lt; &gt;は残存部

No.	器種	出土位置	器種	図説	長さcm	幅cm	高さcm	文様	残存状況	時期	備考
180	縄文土器	RA193	Q4 字罫	陶	27.5	<13>	8.8	丸底	底部破片	前期?	

第18表 鉄製品観察表

&lt; &gt;は残存数

No.	遺物名	位所	部位	形状	発見状況	重量g	長さcm	幅cm	厚さcm	備考	
181	RA187	ナギ	中～下位	棒状	両端欠	63	<7.6>	0.8	0.8	断面方形？ 断面半圓？	
182	RA187	土橋1の土	礎土	釘？	不彫	88	<5.4>	1.7	0.9	断面四角？ 元の形状不明	
183	RA188	カマド	板出窓	不彫 鉄片状	？	09	<2.3>	<2.3>	0.3	薄い板状物	
184	RA189	堂ノマド土	製土	不明	鉄片状	？	50	<3.7>	1.7	0.6	
185	RA189		板出窓	門簾状	完形？	293	4.1	4.1	0.3	釘しい？	
186	RA192	Q3	礎土上層	釘？	両端欠	21	<4.4>	0.9	0.8	紐やかに両端 断面長方形	
187	RA194	カマド前	礎土	不明	不彫	05	<2.1>	0.6	0.4	棒状	
188	RA194	鉄3	礎土下位	穂柄具	両端欠	76	<7.0>	1.8	0.4	釘目が残存。	
189	RA194	鉄2	礎土下位	穂柄具	端欠形	174	<10.6>	1.9	1.8	1釘目が残存、1か所欠。刃先はゆるいカーブ	
190	RA194	鉄1	所置	棒	完形	629	<19.1>	3.2	0.3	曲刃部。基部を折り曲げている。先端に行くに従い、細い。筋の波典先は140度くらい。	
191	RA194	土釘3	礎土	円柱状	？	109	<3.7>	2.0	1.4	長過ぎない丸あり	
192	RA196		1層下位	釘？	不明	61	<6.0>	1.1	1.1	短冊方形、板方形	
193	RD502		洲土	釘？	先端欠	33	<3.5>	1.0	1.0	短冊方形	
194	RD588		礎土	釘？	完形？	36	4.4	5.7	0.8	S字状にくる。断面長四角形、その断面長方形	

第19表 銭貨観察表

&lt; &gt;は残存数

No.	遺物名	位所	種類	素材	現存半両量g	長さcm	厚さcm	重さcm	両高年代	
195	掛銭	RA188を越る	寛永通宝(両重)一文銭	銅	約1/2	15	<1.9>	<1.9>	0.2	1636-1639

第20表 その他の遺物観察表

No.	遺物	遺物名	部位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	調査・分析等
196	産光された鉄片	RA194	Q2 礎土2層 黒色土	30	35	1.6	62	表面は黒土によりつやのある黒～暗灰色。裏面は粉砕しつやなしの灰黄。パズル状。鋭い。
197	銅糸の断片？	RA192	Q1 上層	34	34	2.8	36.6	表面は赤みを帯びた緑色～灰緑。細かい気泡。裏面は赤みを帯びた灰黒。やや大きめの気泡が若干認められる。広い。メタルスキャナーの反応無し。

第21表 火山灰一覧

No.	遺物	位所	部位	とりあげ番号	右行	調査番号	重量	測定結果
1	RA297	Q1	1層	サンプル41	5/14	測定1	10.6g	Toaテラフ
2		Q1	1層	サンプル2	5/15			
3	RD194	a	1層兼窓		5/10			
4		a	1層		5/10			
5	RD197	H-1	1層		3/10	測定2	1.8g	Toaテラフ
6		礎土	1層		3/10			
7	RD201		1層	マフラサンプル①	5/11	測定3	10.5g	Toaテラフ
8	RD200	2層	板出窓	サンプル1	6/4	測定4	10.6g	Toaテラフ
9		5層	板出窓	サンプル2				
10		6層	板出窓	サンプル3				
11		14層	下層	サンプル5				
12		14層	6層層	サンプル4		測定5	21.9g	Toaテラフ
13		5層		サンプル6a				
14		5層		サンプル6b				
15		5層		サンプル6c				
16		13層		サンプル7a				
17		13層		サンプル7b				
18		13層		サンプル7c				

\*測定結果は右行2部区

## VI ま と め

### 1 才川南岸の古代集落について

現在、本遺跡の範囲内の古代の集落の調査は、南東側の一部と南側を除きほぼ終盤にかかっている。これを機に本遺跡の概要、特徴などを概観してみたい。

本遺跡は礫石川が形成した低位段丘上にある。遺跡の範囲は小河川才川の南岸に東西方向に並び、南流する礫石川の旧河道に至って南東側に折れている。古代の遺構は才川の北岸にも広がり、飯岡才川遺跡、向中野館遺跡として登録されている。なお、南岸の集落の一部は向中野館遺跡の南半も含まれるが、中世城館の一部として掘で区画されている部分であり、古代の集落としては一体である。

#### (1) 奈良時代以前

現在までに検出された最も古い遺構は才川と南流する旧河道の合流点を見下ろす場所で、段丘の屈曲部から検出されている。向中野館遺跡第10・11次調査で検出されたRD051土坑で、7世紀後葉の土師器杯、甕が出土している。該期の遺構はこの土坑のみであるが、この周辺は中世に城館の建設のため、近代には水田造成のため地形が改変されて削られており、他にも複数の遺構が存在していた可能性がある。

7世紀末～8世紀の集落は段丘屈曲部から南東にかけて、遺跡の東半から検出されており、西半には及ばない。遺構は竪穴住居跡のほか、土坑がある。遺物の出土から該期と判明した土坑は4基のみであるが、実際はより多くの土坑が該期に相当すると思われる。

竪穴住居跡は26棟で、重複することなく点在しているが、屈曲部の東西方向の沢状の低地を境に北側に5棟、南側に21棟がある。

北側の5棟のうち煙道の残る3棟については、煙道方向がN-76°-97°-Wと西方向を示している。煙道が攪乱によって破壊されている残り2棟も壁の方向から、西方向を指向しているのに対し、南側はN-27°-72°-Wとばらつきがあるが、特にN-45°-60°-W付近に偏在しており、北西方向を指向している。

竪穴住居跡21棟は辺長5～6mの中型が17棟、辺長4m以下の小型が9棟である。中型の住居の中には比較的大きめで、5.5×5.5mや6.2×4.4mのものがあるが、二辺がいずれも6mを超え、床面積が40㎡以上の大型の住居跡はない。

南側の集落は自然堤防上に北西～南方向に延びる2条の沢状の低地（黒色土が堆積する）の間に展開している。この2条の沢の両側、東西は若干標高が高く、礫層が上がっていて、このような場所を回避していることが窺える。

なお、才川の北岸は、飯岡才川遺跡の南端と向中野館遺跡であるが、両遺跡の川に面したこの地点からは該期の住居跡は認められない。

#### (2) 平安時代

多くの住居跡が検出されており、現在までのところ埋蔵文化財センターで調査した分だけでも186棟に上る。集落の構成要素としては、他に樹立柱建物跡20棟、土坑、溝跡、竪穴状遺構、畝間状遺構9箇所がある。



第85図 才川周辺の古代集落遺構配置図

### 竪穴住居跡

自然堤防上に広く分布しており、奈良時代以前に回避されていた自然堤防端部、礫層の表出する所にもつくられる。自然堤防の屈曲部から南東側では重複が少ないのに対し、西半では密集し重複する頻度が高い。

カマドの位置は以下のとおりである。位置が判明した179棟を8方位別に分類した。このとき複数のカマドを持つ住居跡は、最も古いと思われるものについてカウントした。最古のカマドがどれかわからないものは“不明”としている。

東壁64棟、西壁45棟、北西壁18棟、北壁17棟、南壁13棟、南東壁10棟、北東壁8棟、南西壁4棟、不明3棟である。東壁か西壁にカマドを設置する傾向が高い。

規模は判明した186棟のうち、辺長6mを超える大型が8棟、5～6mの中型が68棟、4m以下の小型が110棟である。

大型の住居跡は集落中央～やや西寄りに集中する傾向があり、10～45mの間隔を取って位置している。東側は80～140mで散在している。規模の大きい住居跡は複数のカマドを持つ傾向が高く、8棟中5棟を占める。

なお、工房跡が2棟検出されている。第14次調査のRA131が、鍛造剥片、粒状滓の出土と鍛冶炉の検出から鍛冶工房、第15次調査のRA153がロクロピットの検出と多くの土器片の出土から土器制作工房と考えられている。

### 掘立柱建物跡

20棟中15棟が集落中央～やや西寄りから検出されている。

規模は2間×2間か1間×2間で、まれに庖のつく極小型のものが16棟を占めており、わずかに上回る大きさの2間×3間が1棟、その他1間×4間が1棟、2間×不明のものが1棟である。構造は極小型の16棟のうち6棟が総柱で、その他は側柱である。以上の桁行き2間～3間規模の建物は総柱でも、側柱でも倉庫、貯蔵施設と考えられており（高島・山中ほか1998）、本遺跡でもその可能性が高い。

これらの掘立柱建物は、数多く検出されている竪穴住居跡とごくわずかに近接する例はあるものの、ほとんど重複することなく検出されており、周囲は該期の遺構の空白が見られることが多い（あっても土坑程度）。一方掘立柱建物同士では2棟が重複したり、近接したりする例があるほか、直線上に2棟並んでいる例が2例ある。倉庫としての建物は集落内の広場（第85図中アミ線で囲んだ部分）に建設されているようである。

なお、才川北岸にも掘立柱建物が検出されており、飯岡才川遺跡では同規模の建物が8棟検出されている。

### 溝跡

20条余の溝跡が検出されている。埋土にTo-aテフラを含むもの、埋土の性状や遺構の重複関係で古代と思われるものなどがある。ほとんどは性格を特定できる材料がなく、区画などの用途を推測するにすぎない。これらのうち、平行する2条の溝が3箇所認められる。溝間の幅は第13、14、16、17、26次調査のRG058とRG083のように6mのものが2箇所、3mのものが1か所あり、道路状遺構になりうるか注目される。

### 竅間状遺構

南東部分を除き、9か所検出されている。第8次、9・10次、16・17次、19・20次、26次とかなりの頻度において検出されているほか、4・5次においても時期不明の同様の遺構が検出されている。To-aテフラを含んだ黒色土が平行する溝状に検出されており、黒色土の残りの良い状況の地形や住

居跡の埋土中から検出される例がほとんどである。住居跡の埋土中から検出されたのは3箇所、当然住居跡より新しい。土坑や掘立柱建物などの遺構と重複している3か所でも、畝間状遺構が新しいようである。住居跡の埋土中から検出された例については、廃絶した住居跡が埋まり切らず窪んだ状態になっていてもかまわず耕作していたのであろうか。

第8次調査検出の畝間状遺構からは、イネ、キビ、オオムギが、第9・10次調査ではイネ属、キビ属のほかムギ?と思われる植物珪酸体が検出された。また、第16・17次調査では、イネ類、ムギ類、ヒエ類、キビ類が検出されたほか、To-a層準の上下で量や種類の多寡が認められ、農耕履歴を示す可能性が示唆されている。

このような畝間状遺構は軽米町巨角子久保VI遺跡、二戸市人向上平遺跡、大向II遺跡、平泉町本町II遺跡など県内では検出例が増えてきたが、盛岡市内では本遺跡のほかに塚根遺跡の例のみである。いわゆる盛南地区では、調査を積み重ね総面積は80万㎡を超えているが、本遺跡の例しかないことが注目される。

なお、畝間状遺構をそのまま畠と認定し、畝の間の痕跡とするかどうかについては、なお検討すべき課題ではある(中村 2000)が、耕作に関連する遺構である可能性は高いと思われる。

#### 土坑

該期または古代(奈良時代及びそれ以前と特定される土坑を除く)とされる土坑が250基余検出されている。用途が推測されるものは少ないが、底面、壁面に焼土が形成されるか、埋土中に炭、焼土が認められ、土坑内で焼成を行った可能性の高い土坑(便宜的に焼成土坑とする)が70基余、墓塚と考えられる土坑が6基、土器埋納遺構が1基などである。墓塚については2基が重複する例を除き、100m内外の間隔で点在する。

細谷地遺跡では、8次調査のRD140土坑、13・14次調査のRD312土坑から土器の剥片が多量に出土し、焼成中に剥離した不良品を廃棄していたことがわかった。このような事実から、集落内での土師器生産の証拠が発見され、焼成が認められる土坑にも土師器生産遺構が含まれる可能性が高まった。焼成土坑は、土器を焼成する遺構とするにはそれぞれの属性をさらに検討する必要があるとおもわれるが、第15次調査ではロクロピットを持つ工房の周辺から多く検出されていることが興味深い。

(註1)

以上、各遺構を概観したが、盛南地区の他の遺跡と比して、細谷地遺跡と向中野館遺跡の一部では掘立柱建物が多くみられ、細谷地遺跡の中央付近から西側、北岸を含めた才川を中心とした区域に集中している。この付近では大型の竪穴住居跡も多くみられ、集落の中心地といってもよいだろう。才川が宇石川の旧河道と合流する付近では、向中野館遺跡第4次・5次、第10・11次調査によって、旧河道中から多くの黒書土器が出土しており、水刃の祭祀が示唆されている。祭祀を行う川を中心として古代の村落が展開していたのではないだろうか。

また、特筆すべき事項として畝に関連する畝間状遺構のほか、土器生産といった生産関連の遺構が検出されている。

長年の広範な調査によって、細谷地遺跡のほぼ全体像が明らかになってきつつある。個々の遺構、遺物をさらに深く分析し、検討することによって、古代の人々の暮らしのありさまがより明らかになってくるものと思われる。

(金子)

## 2 RG089堀跡について

細谷地遺跡第26次調査で検出したRG089堀跡は、向中野館遺跡第10・11次調査及び第12・13次調査（一部細谷地遺跡第25次調査区を含む）で検出されたRG012堀跡の続きとなる遺構で、遺跡範囲の関係から向中野館遺跡と細谷地遺跡を跨いでいるが同一の堀跡である。RG089堀跡は、向中野館遺跡南側（※南館とも呼ばれている）の土郭を囲む堀の南辺に相当し、遺跡の性格・年代が中世城館であったかどうかを推定する手掛かりとなる遺構である。RG089堀跡の調査で得られた成果をまとめ、その上で過去の調査成果を含めて総括してみたい。

## &lt;RG089堀跡の調査成果&gt;

①堀跡南辺の様子や範囲が概ね明らかとなった。東-西方向にかけて総全長75m以上にある。ただ、堀跡の東端部分は既に破壊された向中野館東辺の様子を明確にできなかった。向中野館遺跡第10・11次調査で、RG013と命名された堀跡北辺の北東隅（※コーナー部分）部分が検出されているが、この付近は擾乱による破壊が著しく、これより東辺にかけて堀跡が延長するかどうか判断が難しい。向中野館遺跡第12・13次調査報告書では、東辺には堀跡が存在せず、自然地形を生かした段丘崖によって厩館東辺の区画的役割がされていた旨の内容が考察されている。

②土橋の可能性がある地山作り出しによる張り出しを検出した。A-A'断面とB-B'断面作成地の中間付近に位置する（※第55図や写真図版59などを参照いただきたい）。平面形は角が丸み帯びる台形状で、長さ約1.1m、幅2.1～2.9mである。周辺から柱穴などは未検出にある。

③堀跡の埋土は、埋土上位が近現代と捉えられる盛土層が厚く堆積し、それより下位から近世及びそれ以前の可能性が示唆される堀本来の埋土と捉えられる自然堆積層を確認した。自然堆積層の埋土は1～8層に分層した。これら遺物の層位的状況から、1層は近世に構築された農用水路である「才川溝」の構築年代（18世紀代と推定される）前後の堆積層、2～8層は断定できないが18世紀代より古い時代の堆積層と推定される。併せて、4・5・8層など堀底面付近にみられる泥質土は、堀の埋設過程初期若しくは堀機能時の堆積層と考えられる。

## &lt;過去の調査成果を含めた総括&gt;

向中野館遺跡は、向中野館遺跡第3～9次調査で検出されたRG006・007・008・011により構成される遺跡北側を囲む堀跡と（※以後この空間を北館と呼称する）、向中野館遺跡第10～13次・細谷地遺跡第25次調査で検出されたRG012・013及び今回調査したRG089により遺跡南側を囲む堀跡（※以後南館と呼称する）に分かれる。

①北館について、堀内部（外堀により区画される空間）に曲輪が少なくとも5つあることが明らかになっている。堀内部より検出された遺構の中で、中世に帰属する可能性が高いものとして、掘立柱建物跡2棟、堅穴状遺構3棟、堀跡4条、柱穴群が挙げられる。中世に帰属する遺物は、中国産磁器、瀬戸美濃産陶器など16世紀頃を中心とするが、調査全体でも僅かで、また確実に堀跡から出土している遺物は第5・6次調査RG006の南辺より出土した15世紀代と推定される珠洲産の挿鉢1点のみである。これら遺物の年代から、北館が機能していたのは16世紀後半頃ではないかと推定する向きもある。遺構の変遷の観点からは、第9次調査報告書で北館の主郭と推定される平場内に所在する中世～近世の掘立柱建物跡の変遷が検討されている。その結果、17世紀中頃～18世紀後半頃には近世屋敷が存在したことが推定され、従って中世の掘立柱建物跡はそれ以前、おそらくは16世紀末頃には廃絶していた可能性が指摘されている。



第86図 向中野館遺跡・細谷地遺跡で検出された埴跡及び中世と推定される遺構集成図

②南館については、向中野館遺跡RG012・013及び細谷地遺跡RG089の検出により堀跡の西辺・南辺・北辺の全容がほぼ明らかとなった。また、上述のとおり東辺が自然地形を生かした段丘崖が堀の役割を果たしていると考えた場合、主郭と想定される空間の範囲はほぼ確立をみる。堀内部において中世の可能性のある遺構を挙げると、堀跡2条、堅穴建物跡1棟、掘立柱建物跡3棟、溝跡2条、土塁がある。中世を窺わせる遺物は古銭などが僅かに出土しただけで、また堀跡そのものからは中世遺物の出土は確認されていない。従って、堀の構築や機能時の年代が中世まで遡るか否かは本だ不明の状況にある。堀跡の埋没年代については、今回調査したRG089の1層より17世紀後半～18世紀後半の陶磁器類が出土している。また、中野館遺跡第12・13次調査においてRG012より18世紀代～19世紀中頃の肥前産を中心とする陶器が多く得られている。これら陶磁器の年代は、堀が農業用水路に転用された時期以降を反映した遺物の可能性があり、18世紀代若しくはそれ以前には既に堀としての機能を失った埋没が始まっていたと考えられる。

③向中野館が中世城館か否かを巡る問題や課題について、各調査報告書中ではそれぞれ精神的に検討・考察が行われてきているが、発掘調査で得られた事実から中世城館とするには確証が弱いことは否めない。問題点や課題などを整理すると、中世城館なのか否か、北館と南館は同時期か異時期か、向中野館遺跡が向中野館なのかどうか、根本的に向中野館自体存在したのかどうか、など様々な観点から問題提起が行われてきた。

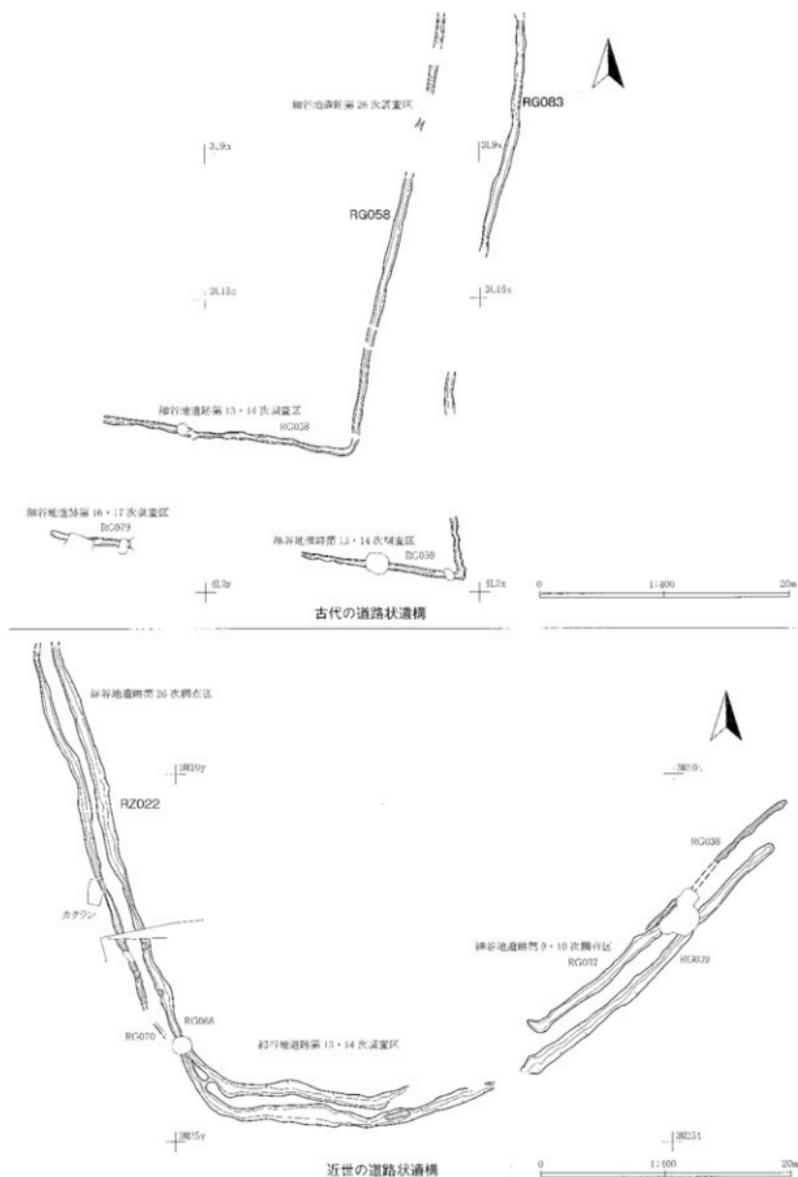
北館と南館の同時性に関連しては、どちらかが非常時の詰め城で他方が常の居所として使われていたのではないかと推定する説もあるが、北館の堀からは中世陶器が1点出土しているのに対して、南館の堀からは中世遺物の出土は皆無にあり、出土遺物から同時性についての言及は難しい。

第92区には向中野館遺跡第3～13次調査及び細谷地遺跡第25・26次調査で検出された堀跡と、中世と推定される遺構を抽出し、合成・図化を行った。机上からの所見記述になるが、北館の主郭と推定される土輪と、南館の主郭はほぼ同じ面積規模にあると読み取れる。また、北館の西辺の堀であるRG006と、南館西辺のRG012は旧河道を挟みほぼ延長線上に築かれている。さらに、北館で検出されたRB007・008掘立柱建物跡と、南館のRB012掘立柱建物跡は、建物規模や堅穴建物が重複する（※併う？）などの点で類似性が窺え、近時する時期の建物跡と推定できるかもしれない。上述してきた内容から、北館と南館は一連の設計（縄張り）による居館と捉え、同時性が高いと考えた方が自然と思われる。

### 3 RZ022道路状遺構について

RZ022道路状遺構について、細谷地遺跡第10次調査検出のRG38・39溝跡及び、第13次調査検出のRG70・073溝跡と一連の遺構と判断し、それらを第87図に集成した。

この遺構の最大の特徴としては、溝底が二つに分かれる様相を示し、中央は中州状にやや高まり、断面形がW字状に近い形態を呈することが指摘される。走行は、北東→南西方向にほぼ直線的に延びた後、一度東→西に方向を変え、さらに南東→北西方向に直線的に延びる。残念ながら本遺構の北端は、水田造成で完全に破壊を受け、延長部分はその存否を含め不明にある。幅は200～360cm、深さ10～30cmである。総全長は検出部だけで90m以上に及ぶ大規模なものである。時期は、今回の調査で近世と推定される陶磁器が出土している。遺構同士の重複関係からは、古代の溝跡より確実に新しいことは把握できる。中世まで遡ることを示唆する事実は得られていないことから、過年度調査に倣い近世と推定しておきたい。本遺構の性格は不明にあるものの、その規模、断面形のあり方、溝幅などか



第87図 道路状遺構集成図

らは、道路跡である可能性も考えられる。

(星)

#### 4 今次調査の遺物について

##### (1) 遺構間接合

土師器、須恵器ともに、近接する遺構間の接合関係が認められた。過去の調査においては須恵器が100m余りも遠い遺構の遺物と接合したこともあったが、今回は須恵器については隣接する遺構間にとどまった。過去の調査の遺物収納場所が離れていたため、整理作業期間中に持ってこられず、周辺調査区の掲載の須恵器の一部としか接合を試みることでできなかったことも一因であろう。

RA192竪穴住居跡とRD488土坑とは、土師器、須恵器それぞれ1点が接合しており、特に強い関連が認められる。

##### (2) 土器

###### 奈良時代以前の土器

該期と思われる竪穴住居跡は2棟あるが、今回遺物が出土したのはRA187竪穴住居跡のみである。

カマド脇から出土した甕2点である。1は口縁部が口唇で直立気味に立ち上がり、頸部と口唇部に段を持つ。2は胴部の最大径がやや下半にあり、若干下ぶくれ気味で頸部に段を持ち、口唇部で外反する。いずれも、底部は若干突出気味であるが、内面は平底を呈する。調整はいずれも内面ハケメ、外面は1がヘラナデ、2がハケメである。

以上の特徴から八木氏編年のC～D段階に相当し、7世紀末～8世紀に属すると考えられる。

###### 平安時代の土器

竪穴住居跡14棟のうち、遺物が出土したのは12棟である。これらのうち埋土及び重複する遺構の埋土にTo-aテフラを含み、10世紀初頭までに廃絶していたと考えられる竪穴住居跡はRA196、RA197、RA189、RA193の4棟である。これらは埋土上位にTo-aテフラが粒状に含まれるものがほとんどであるが、RA193に限

っては埋土下位から

第22表 竪穴住居跡出土の土器

含まれており、他の3棟の住居跡よりもやや新しい可能性がある。住居跡ごとの土器の組成は別表のとおりで、今回の調査で出土した土器は器形等からおおむね9世紀中葉から10世紀前半の間に属すると思われる。

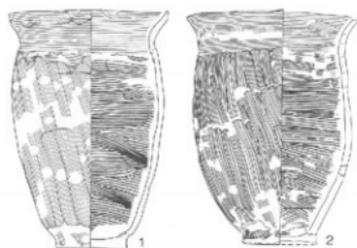
RA188竪穴住居跡

遺物名	発見位置	坑		形状	高台付平			甕 (ロクロ使用)			その他	To-aテフラ
		うち西側壁	土師器		須恵器	小型	中型	大型	小型	中型		
RA187											2	底上位
RA188	5	4		2	1	瓶蓋	ハ					
RA190	1	1							2		1	
RA195	3								1		1	
RA196	1	1	1	1	1	瓶蓋					2	上位の器類
RA197	2	1	3						1			上層
RA189	1	1	1						1		3	埋上位
RA198	3	2	3	1	1	瓶蓋		1				
RA192	2	1										埋1
RA193	5		6	1	1	瓶蓋			1		3	下位～中位
RA194	7		4	2		瓶蓋	瓶蓋		2	4		
RA201	1		1								1	
RA191			1						1			

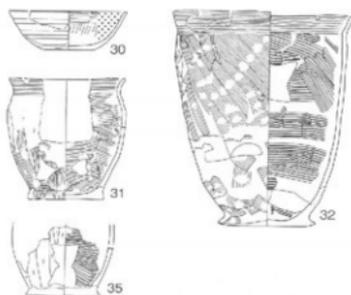


第88図 遺構間接合

4 今次調査の遺物について



RA187

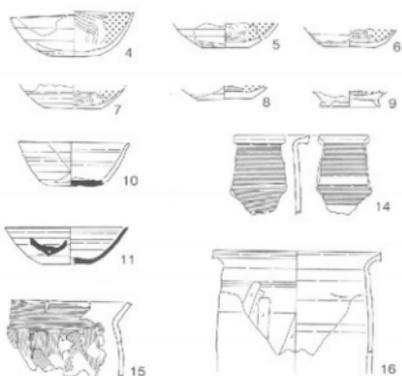
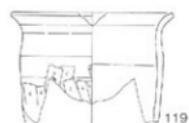
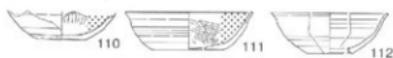


RA190

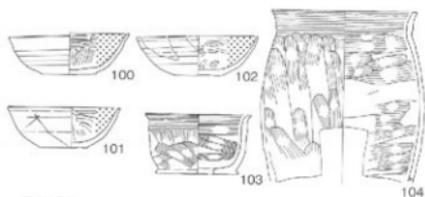


RA196

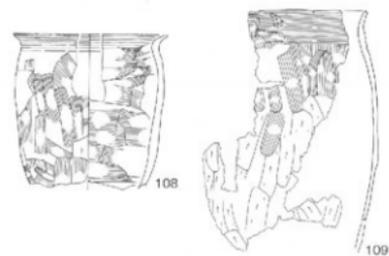
RA197



RA188



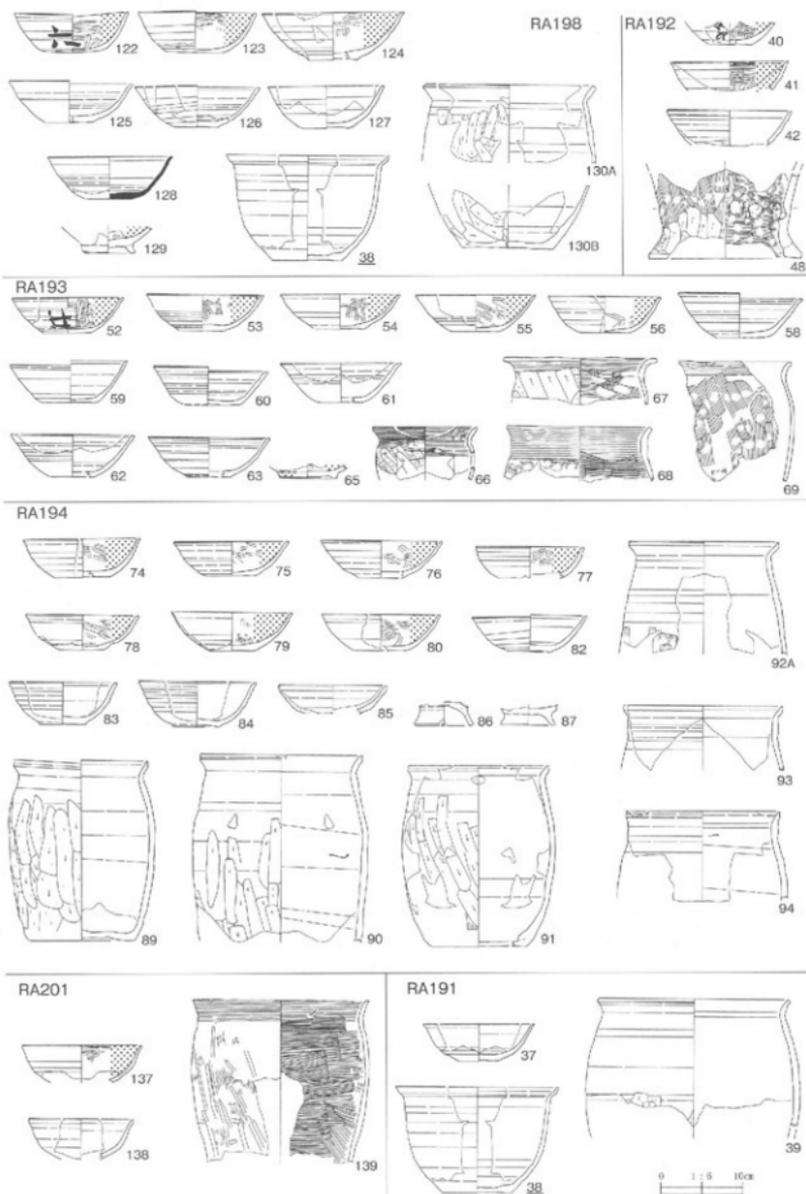
RA195



RA189



第89図 土師器・須恵器集成図(1)



第90図 土師器・須恵器集成図(2)

の上器は、黒色処理のない土師器環は含まず、内黒土師器のほとんどに再調整がある。須恵器環を持つ。ロクロ成形の甕は口縁部が外反し、端部が上方に引き出される。非ロクロの甕は口縁部が比較的長い。以上の特徴から9世紀中ば～第3四半期ごろのものと推定される。

RA198竪穴住居跡の上器は、内黒土師器環に再調整が施されるものが多く、底径の口径に対する割合が0.5前後と広いものが多い。須恵器環を持つ。土師器環の底径比は0.4以下である。以上の特徴からRA188よりはやや新しい様相であるが、9世紀後半ぐらいと考えられる。

To-aテフラを埋土に含むRA196、RA197、RA189、RA193竪穴住居跡の土器は、内黒土師器環と黒色処理のない土師器環がほぼ同程度出土していること、内黒土師器環の再調整が少ないこと、須恵器環がないこと、非ロクロの甕の口縁部が強く外反するものがあること等共通点があり、RA198竪穴住居跡の土器よりやや新しい9世紀後半～10世紀初頭のものと考えられる。

RA194竪穴住居跡の土器は内黒土師器環7点がすべて無調整であること、底径の口径に対する比率が0.4を切るものが多いこと、口径がやや小ぶりとなること、須恵器環を含まないこと、黒色処理のない土師器環が多いことが特徴としてあげられる。前述の土器より若干新しい様相を示していると思われる。埋土にTo-aテフラを含まないことからテフラ降下後の、10世紀前半とも考えられる。同住居跡の検出面はⅡ層であり、他に比して比較的削平は少ないと思われるが、なお、To-aテフラを含む埋土上層が削られている可能性も否定できないことから9世紀後半～10世紀前半としておく。土器の点数はすくないものの、RA201とRA191も同様の特徴があり、同時期の可能性がある。

#### RA192竪穴住居跡出土の甕について

今回の調査で出土した平安時代の酸化焙焼成（ロクロ使用、今回は土師器と分類している）の甕は周辺では出土例が少ない。岩手県内の平安時代の甕の出土例は、第91岡のとおり数例が認められ、すべて酸化焙焼成である。底部の形状は、筒抜けで、体部下端が“く”の字状に屈曲するもの、屈曲がないものに二分される。屈曲のないものについては棧木受けが認められない。なお、(屈曲しない) 塚向Ⅱ遺跡例はロクロ成形の痕跡が認められない点が、他と異なる。年代は、共伴した土器からおおむね9世紀後半代と考えられているが、杉の炊例については、9世紀前半の年代観が与えられている。このほかにも出土しているかもしれないが、県内では日常性が乏しく一般的な器種とは言えないだろう。

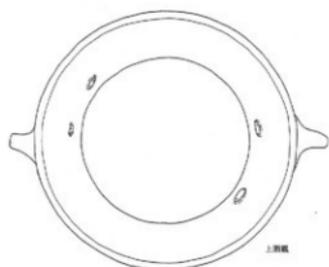
このほか、土師器甕を甕に転用した可能性のあるものに盛岡市本宮熊堂B遺跡第20次調査出土の1点がある。

乏しい出土例から器形全体を推定できるものはないが、体部下端に屈曲が認められる4例は

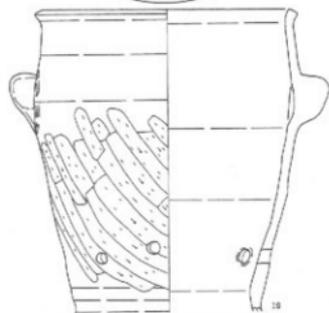
- ① ロクロを使用して成形しており、酸化焙焼成であること
- ② 底部は筒抜けで、体部下端が“く”の字状に屈曲して外側に開いていること
- ③ 屈曲部の径は12.8～15.3cmであること（推定含む）
- ④ 体部下半に棧木を渡すための貫通孔または窪みを有する。

ことが共通している。法量は不明であるが、細谷地遺跡第5次の出土例では器高30cm弱と推定される。また、同例では把手が体部上方に対面に2箇所付いている。脚部の径は佐野原例、西田東例では20cm内外と推定され、器高は佐野原例が残存値で21cmである。

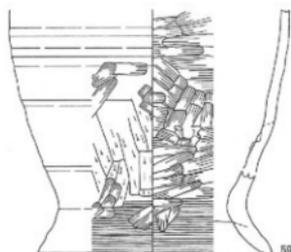
今回RA192竪穴住居跡から出土した甕は体部下半径の4分の1程度の破片で、全体の器形は推し量れないが、脚が“く”の字状に屈曲する。表面の整形はナデ、ケズリであるが、おそらくロクロを使用して成形していると考えられ、屈曲部径、脚部径ともに上記4例と同様である。脚の端部の断面形は佐野原例と異なり、個々に相違点があるが、ほぼ上記の共通点を満たしているといつてよいだろう。



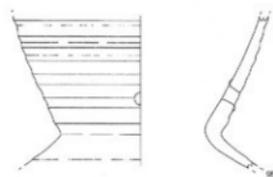
上野原



1 細谷地溝跡第5次(盛岡市)



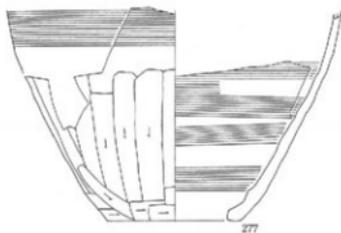
2 佐野原遺跡(奥州市)



3 西田東遺跡(栗波町)



3 西田東遺跡(栗波町)



4 飯岡林崎遺跡(盛岡市)



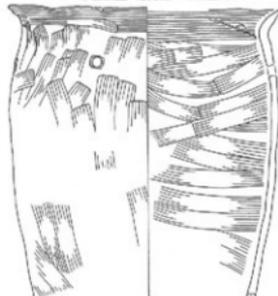
6 鎌向II遺跡(北上市)



5 杉の堂遺跡(奥州市)

参考資料

7 本宮新堂B遺跡第20次(盛岡市)



KA294

さらに器高は少なくとも残存値の倍はあると考えられ、20cm以上であったと推定される。

平安時代の甗については外山政子氏の論考がある(外山1987)。氏によると群馬県下の平安時代の甗は、古墳時代に出現した須恵器甗の延長線上に位置づけられ、底部筒抜けで椀木受けが穿孔でつくられているものは9世紀後半代～11世紀に続いている。一方土師器の甗は古墳時代に盛行するが奈良時代に急速に減少し、平安時代のものはごくまれで、須恵器甗を模倣したものがある。また、須恵器の系譜を持つ該期の甗は土師器の甗より大型品が多いこと、当時の社会情勢(東国経営のための東北派兵)などから、日常の調理というより一度に大量に蒸す必要のある輪の調理に関連があるのではないかと推定している。

今回出土の甗及び岩手県内出土の甗については、断片的な資料ではあるが、外山氏のいう須恵器甗の系譜であり、時期的には他の出土遺物などから9世紀後半以降のものと位置付けて矛盾はない。

(金子)

### (3) 今次調査の墨書土器について

細谷地遺跡第26次調査で出土した墨書土器は6点で、それらの釈文などについては第23表にまとめられている。そのうち、RA192から緑釉陶器とともに出土した墨書土器は、文字が複数行記されており、いわゆる「盛南開発関連遺跡」では初めての事例である。そこで、若干の考察を以下に加えた。

釈文 [斤] 所

所□

□

墨書の特徴 土師器坯の体部外面に正位にて記されている。ほとんど底部に近い位置に記されているので、「所」と判読した文字の上にも複数文字が記されていた可能性がある。当初、肉眼で確認していたのは初行のみだったが、念のため赤外線カメラを使用したところ、その左側にも墨痕があることが判明した。ただし、土器が欠損しているため、文字のごく一部のみしか残存しておらず、どんな文字なのか何文字書かれていたのかは不明である。なお、細谷地遺跡をはじめとする「盛南開発関連遺跡」では墨書土器の出土は珍しくないが、2行以上にわたって記されているものは本例がおそらく初めてだと思われる。残存する部分からではあるが、1行目の2字目を見る限り、識字層による書記と考えられる。特に、筆を左下に運んだ後に右上に抜いているが、運筆に躊躇はなく、文字を書くことに慣れ親しんだ者によるものだろう。本資料が出土したRA192竪穴住居跡からは緑釉陶器が出土しているようだが、そうした貴重品を持つことができたのがいかなる者だったのかを知る手がかりになろう。1行目1字目は、一番長い縦画が横画の上に突き出ているが、「所」と判読した。2字目は、1画目が左上から右下へ筆を動かした後、左下に払いながら最後は右上に抜いているため、読み切っていないが「斤」であろう。

墨書の内容 前述のように、「所」の上にも何文字か記されていた可能性がある。その場合、行政機構としての「○○所」と記されていたのであろう。本資料の年代は9世紀中ごろと



第92図 多文字の墨書土器

されているが、この時期の地方官衙において、業務が各「所」に分担されるようになったという（渡辺遊『日本古代行政機構の展開過程』〈吉村武彦編『律令制国家と古代社会』塙書房 2005年〉）。この時期の遺跡周辺を支配する行政機構といえば徳丹城が想定される。土器は移動することもあるから（隣接する向中野館遺跡からは「厨□」と記された9世紀初頭の土器が出土しており、志波城から持ち込まれたものと考えられる）、この土器は本来、徳丹城で用いられていたものが何かの理由で細谷地遺跡に持ち込まれたものと推測される。前述のように本資料が出土したRA192竈穴住居跡からは緑釉陶器が出土している。それを手にすることができたのは、この地域では城柵とつながりがあった者だろう。「所」と記された土器が、城柵から離れた場所で出土したのはそうした経緯があったからなのではなかろうか。

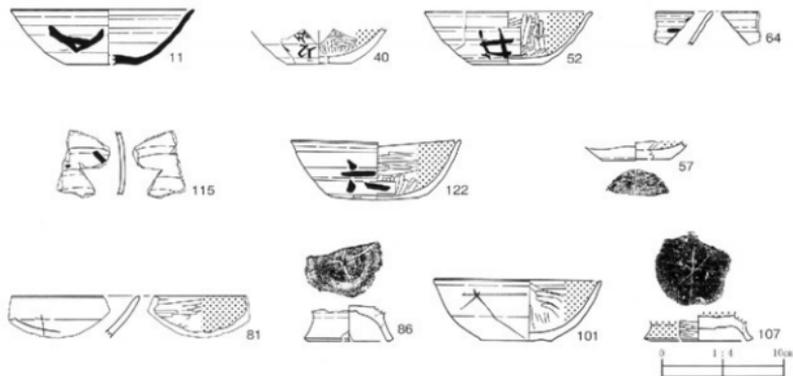
（石崎高臣）



赤外線写真

第23表 墨書土器・刻書土器一覧表

No	館跡	器種	出土遺構	器種	文字等の位置	釈文等
11	藤野	圓底器	RA188	杯	体部 側位	「△」記号
40	墨雲	内黒土師器	RA192	杯	体部 正位	多文字「□野」文字（「野」の可能性もあるが、なお慎重を同じ読み切っていない）
52	墨雲	内黒土師器	RA193	杯	体部 正位	
64	墨雲	土師器	RA193	杯	体部	墨痕あり
115	墨雲	土師器	RA197	杯	体部	墨痕あり
122	墨雲	内黒土師器	RA198	杯	底部 正位	「六」
57	藤野	内黒土師器	RA193	杯	底部 外周	
81	刺森	内黒土師器	RA194	杯	体部	ヘラ書き「今」
86	刺森	土師器	RA194	高台付杯	底部 内周	ヘラ書き「十」
101	刺森	内黒土師器	RA195	杯	体部 正位	ヘラ書き「天」記号
107	刺森	内黒土師器	RA196	高台付杯	底部 内周	ヘラ書き「×」模成後 +と×を重ねて墨書



第93図 墨書土器・刻書土器集成図

## (4) 竪穴住居跡から出土した炭化材について

今回の調査では焼失住居跡とみられる2棟の住居跡出土の炭化材について、樹種同定を行った(付篇1)。その結果、RA187ではクリとコナラ属コナラ節で樹種が限られていたのに対し、RA190では、モクレン属、ヌルデ、ハシバミ属、カバノキ属と多くの樹種が認められている。

同定を行った吉川純子氏は、クリ、コナラ属は本遺跡及び周辺の該期の住居跡でもみられる建築部材であるが、モクレン属、カバノキ属、ヌルデは耐久性に乏しいことから、土壌や雨水に接しない箇所で使用されたか、耐久性を必要としない建物で使用されたのではないかと指摘している。

2棟の住居跡を比較すると、RA187竪穴住居跡は7世紀末～8世紀に属すると考えられ、本遺跡の該期の住居跡としては小型の方ではあるが、これまでの調査結果(岩埋文 2010)をみると一般的な住居跡である。一方RA190竪穴住居跡は平安時代のもので考えられる。今次調査では最も規模が小さく、遺跡全体で見ても極小型の類である。採取したサンプルが建築部材のどの部分なのかは最も重要な点であるが、2棟の住居跡におけるサンプルの出土位置には大きな違いはない(各遺構図参照)。

北に隣接する向中野館遺跡第10次調査における8世紀のRA018竪穴住居跡の炭化材樹種同定では5点中4点がコナラ属コナラ節、1点がケヤキとの結果を得ており、建材を選んでるように思える。

今次のRA187では向中野館RA018と同様建材を選んでるようにあるが、RA190についてはそのような意思はないように思える。この違いは竪穴住居の時期の違いによるものかもしれないが、建物としての規模、用途の違いの可能性もあり、今後の検討課題としたい。(金子)

(註1) 焼成土坑については、当センター調査報告書第514集「細谷地遺跡第15次発掘調査報告書」において、「焼土坑」として夜間開発地域の遺跡も含め集成している(金子昭2008)。

## 参考・引用文献

- [財団法人岩手県文化振興事業団歴史文化財センター報告書など] (※発行年順)
- 1995『西田東遺跡発掘調査報告書』岩埋文第221集
- 2000『佐野原遺跡発掘調査報告書』岩埋文第327集
- 2000『向中野館跡第4次・小幡遺跡第11次・台太郎遺跡第19次発掘調査報告書』岩埋文第321集
- 2000『向中野館跡第3次・小幡遺跡第10次調査発掘調査報告書』岩埋文第338集
- 2003『細谷地遺跡第4・5次発掘調査報告書』岩埋文第414集
- 2003『本町Ⅱ遺跡第二次発掘調査報告書』岩埋文第410集
- 2007『向中野館遺跡第5・6次調査発掘調査報告書』岩埋文第503集
- 2007『向中野館遺跡第7・8次調査発掘調査報告書』岩埋文第504集
- 2008『矢倉遺跡第10・11次・向中野館遺跡第9次・台太郎遺跡第58次調査発掘調査報告書』岩埋文第516集
- 2008『細谷地遺跡第15次発掘調査報告書』岩埋文第514集
- 2010『向中野館遺跡第10・11次調査発掘調査報告書』岩埋文第557集
- 2011『細谷地遺跡第24・25次、向中野館遺跡第12・13次調査発掘調査報告書』岩埋文第577集
- 外山成子 1987『飯について、平安時代の飯を中心にして』群馬県歴史文化財調査事業団研究紀要4
- 伊藤博幸 1998『北上盆地南部の緑相』『城根と地域社会の変容』第24回古代城根官衙遺跡検討会シンポジウム資料
- 金子昭彦 2008『IV考察 土師器焼成坑』『細谷地遺跡第15次発掘調査報告書』岩埋文第514集
- 高島英之・山中敏史 1998『古代の稲食と村落・郷里の支配』
- 中村直美 2000『Vまとめ遺構2平安時代(4)炊問状遺構』『大向I平遺跡発掘調査報告書』岩埋文第335集
- 八木光則 1993『古代新潟郡と隣接体の土器様相』『北日本における律令期の土器様相』第18回古代城根官衙遺跡検討会シンポジウム資料
- 八木光則 2007『東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係』vii『岩手県中部』『古代東北北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』

## 付篇 細谷地遺跡の自然科学分析

### 1 細谷地遺跡から出土した炭化材の樹種

吉川純子（古代の森研究会）

#### 1 はじめに

細谷地遺跡は盛岡市の半石川の河岸段丘上に位置する9世紀後半～10世紀初頭の平安時代の住居群で、焼失住居や鍛冶工房跡なども発見されている。これらの住居群において当時の木材利用状況を調査するため住居および土坑より出土した炭化材20試料の樹種同定を行った。

#### 2 同定結果と考察

炭化材試料からは剃刀で横断面、接線断面、放射断面の3方向の断面を割り出し、反射照明型顕微鏡で炭化材組織の構造を観察し同定した。表1に同定結果を示す。20試料の内訳はコナラ属コナラ節が8点、クリが6点、モクレン属が3点で、ハシバミ属、カバノキ属、スルデが1点ずつであった。

表1 細谷地遺跡出土炭化材

試料番号	遺構	炭番号	樹種
1	RA187	2	クリ
2	RA187	3	コナラ属コナラ節
3	RA187	5	クリ
4	RA187	8	クリ
5	RA187	11	クリ
6	RA187	13	コナラ属コナラ節
7	RA187	15	クリ
8	RA187	16	クリ
9	RA187	17	コナラ属コナラ節
10	RA187	18	コナラ属コナラ節
11	RA187	20	コナラ属コナラ節
12	RA187	21	コナラ属コナラ節
13	RA190	1	モクレン属
14	RA190	8	スルデ
15	RA190	10	ハシバミ属
16	RA190	12	モクレン属
17	RA190	15	モクレン属
18	RA190	16	カバノキ属
19	RD498	1	コナラ属コナラ節
20	RD498	2	コナラ属コナラ節

以下に同定した炭化材の細胞構造学的記載をおこなう。

ハシバミ属 (Corylus) : やや小型の道管が単独ないし数個放射方向に複合して数列が波状に配列する散孔材。道管は階段穿孔を有し側壁は交互壁孔。放射組織は異性で単列ないし2・3細胞幅で幅の広い集合放射組織がある。

カバノキ属 (Betula) : 中型の道管が数個放射方向に複合して年輪内にほぼ均一に散在するが晩材部でやや個数と径を減じる散孔材。道管は階段穿孔を有し道管放射組織間壁孔が大変小さく多数である。

放射組織は異性で1-4細胞幅。

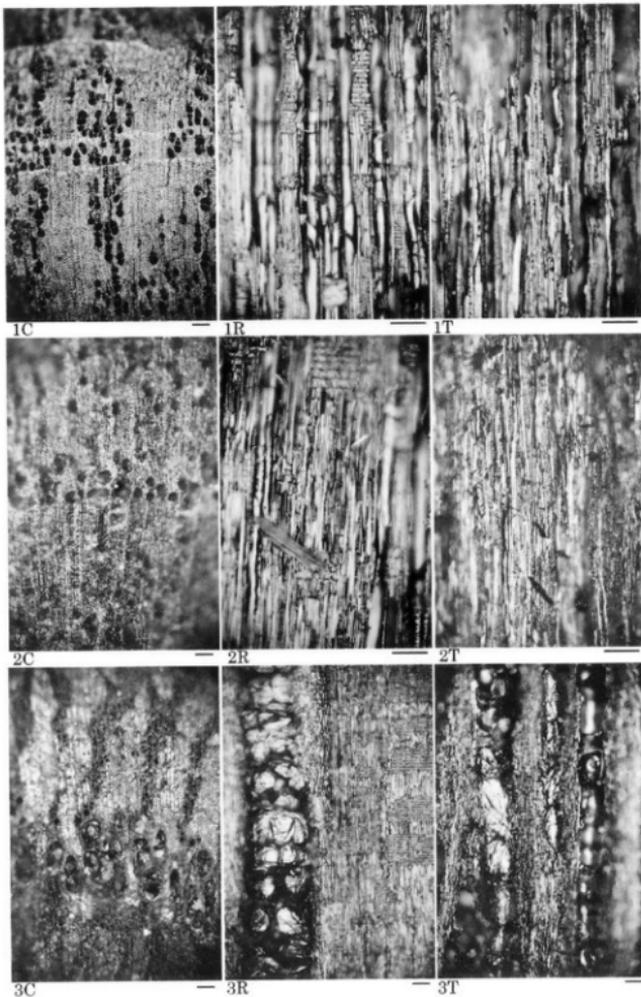
クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) : 年輪の最初に大きな道管が2,3列並びその後徐々に径を減しながら火炎状に小道管が配列する環孔材。放射組織は1列ないし2列で同性。道管内にはチロースがあり、単一穿孔。

コナラ属コナラ節 (*Quercus* sect. *Prinus*) : 年輪のはじめに大きな道管が2-3列集合し、その後径が急減して波状に薄壁で角張った小管孔が配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で放射組織は同性で単列と広放射組織があり、横断面で広放射組織が目立つ。

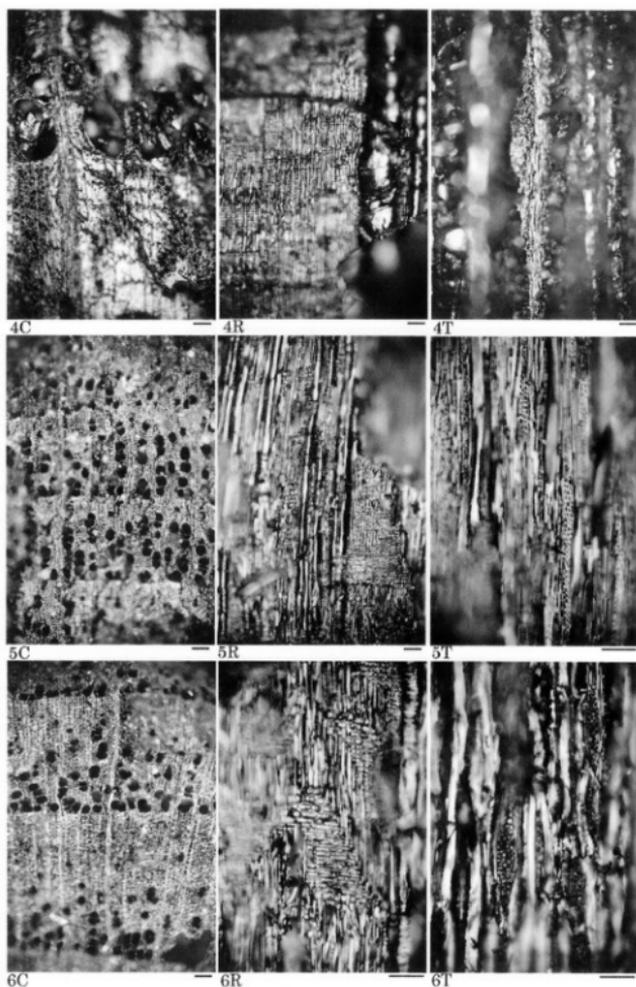
モクレン属 (*Magnolia*) : やや小さい道管が数個複合して年輪内に平等に分布する散孔材。道管は単一と階段穿孔があり、道管側壁は対列壁孔と階段壁孔がみられる。放射組織は異性で1-3細胞幅である。

ヌルデ (*Rhus javanica* L.) : 中型の道管が単独ないし2-4個複合し晩材部に近づくにつれて徐々に径を減じる環孔材。道管には単穿孔を有し、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で1-4細胞幅の紡錘形である。

RA187の炭化材はクリとコナラ属コナラ節がそれぞれ6点ずつで回数であり、住居構築材としてクリとコナラ属コナラ節を利用していたと考えられる。RA190では、6試料のうち3点確認されたモクレン属の保存耐久性はそれほど高くなく、現在の住居の場合は床柱や垂木などに利用される。しかし東北にはモクレン属のホノキやコブシが大変多く生育しているため、耐久性をあまり必要としない建物の構築材に、周辺に生育していたこれらの樹種を用いた可能性もある。また、ハシバミ属は低木、カバノキ属とヌルデは軽くて耐久性がかなり低いが、土壌や雨水に接しない部位にこれらの樹種を利用していたとも考えられる。2008年の細谷地遺跡の炭化材調査では住居からクリとニレ属が確認され、近隣の飯岡才川遺跡では平安の集落跡からクリ、コナラ節、ニレ属の炭化材を出土し、いずれの遺跡においても住居構築材としてこれらの樹種を使用していたと推測している。今回の調査ではニレ属は確認されなかったが、平安時代における住居構築材としてコナラ節とクリの利用が一般的であったという傾向がうかがえる。



図版1 細谷地遺跡出土炭化材の顕微鏡写真(1)  
 1.ハシバミ属(No.15) 2.カバノキ属(No.18) 3.クリ(No.5)  
 C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm



図版2 細谷地遺跡出土炭化材の顕微鏡写真(2)

4.コナラ属コナラ節 (No.10) 5.モクレン属 (No.16) 6.ヌルデ (No.14)

C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm

## 2 細谷地遺跡第26次調査出土の火山灰について

弘前大学大学院理工学研究科  
柴 正敏・長沢知周

細谷地遺跡第26次調査により採集された、火山灰サンプル5試料について、以下の観察・分析を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて構成鉱物の種類、火山ガラスの形態を記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成及び共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（Machida,1999;町田・新井,2003;町田・新井,2006）。本報告では、電子プローブマイクロアナライザー（以下EPMA）を用いて、火山灰サンプル5試料に含まれる火山ガラスの化学組成を明らかにした。その結果を表2に示した。EPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8230を使用した。使用条件は、加速電圧15kV、試料電流 $6 \times 10^{-9}$ A、ビーム径10 $\mu$ mである。

ガラスの形態と構成鉱物（表1）及びEPMA分析値（表2）より、5試料とも十和田aテフラ起源の火山ガラスよりなる。これら試料は、軽石型の火山ガラスを主とし、一部試料で褐色ガラス（オブシディアン）を含む。構成鉱物は、斜長石、石英、斜方輝石、単斜輝石及び鉄鉱である。また、径が0.5~2mm程度の軽石粒子を含む。

## (引用文献)

- 青木かおり・町田 洋 (2006) 日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成, K<sub>2</sub>O-TiO<sub>2</sub>比によるテフラの識別. 地質調査研究報告, 第57巻, 第7/8号, 239-258.
- Machida, H. (1999) Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan/Recent progress. 第四紀研究, 第38巻, 194-201.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス, 日本列島とその周辺. 東京大学出版会, 336p.
- 柴 正敏・重松直樹・佐々木 実 (2000) 青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成 (1) 弘前大学理工学部研究報告, 第1巻, 第1号, 11-19.
- 柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実 (2001) 十和田火山, 降下軽石の化学組成変化 ? 宇樽部の一断面を例として, 弘前大学理工学部研究報告, 第4巻, 第1号, 11-17.

表1 細谷地遺跡第26次調査、火山灰の鉱物学的記載

製粉No.	寄附No.	産地	品位	ガラス及び鉱物	径目径	火山灰の層厚
サンプル1	1	KA197	1層	ガラス (pm>2 $\mu$ m)、褐色ガラス、黒方解石、黒斜輝石、斜長石、石英、鉄鉱	0.5-1.5mm	Toa
サンプル2	5	KD197	1層	ガラス (pm>2 $\mu$ m)、褐色ガラス、黒方解石、黒斜輝石、斜長石、石英、鉄鉱	0.5-1.5mm	Toa
サンプル3	7	K2021	1層	ガラス (pm>2 $\mu$ m)、褐色ガラス、黒方解石、黒斜輝石、斜長石、石英、鉄鉱	0.5-2mm	Toa
サンプル4	8	R2020	検出なし	ガラス (pm>2 $\mu$ m)、斜方輝石、黒斜輝石、斜長石、石英、鉄鉱	0.5-2mm	Toa
サンプル5	12	R2020	6層	ガラス (pm>2 $\mu$ m)、斜方輝石、黒斜輝石、斜長石、石英、鉄鉱	0.5-2mm	Toa

pm: 径目径, lw: パブルクォール径, &gt;: より多い, Toa: 1枚目aテフラ

表2 細谷地遺跡第26次調査、火山ガラスのEPMA分析値

細谷地遺跡第26次調査の火山灰試料													
		SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	n	Total	EPMA
サンプル1	最小	76.26	0.23	12.36	1.77	0.00	0.33	1.83	4.09	1.32			
	最大	77.28	0.46	12.90	2.16	0.17	0.49	2.23	4.76	1.53			
	平均	76.67	0.36	12.66	1.95	0.10	0.39	2.03	4.42	1.42	23	98.523	WDS
	標準偏差	0.304	0.054	0.137	0.108	0.045	0.041	0.1	0.162	0.063			
サンプル2	最小	73.34	0.21	12.39	1.78	0.01	0.31	1.85	4.12	1.29			
	最大	77.24	0.55	13.81	3.01	0.17	0.76	3.11	4.68	1.54			
	平均	76.51	0.35	12.71	2.02	0.10	0.40	2.03	4.16	1.41	21	99.335	WDS
	標準偏差	0.783	0.067	0.279	0.247	0.048	0.091	0.257	0.148	0.063			
サンプル3	最小	75.58	0.28	12.40	1.83	0.03	0.31	1.85	4.15	1.30			
	最大	77.10	0.43	13.02	2.40	0.13	0.58	2.30	4.63	1.58			
	平均	76.60	0.36	12.70	2.01	0.09	0.41	2.03	4.38	1.42	23	99.438	WDS
	標準偏差	0.409	0.040	0.174	0.137	0.028	0.055	0.157	0.144	0.069			
サンプル4	最小	74.38	0.25	12.43	1.77	0.03	0.28	1.91	4.01	1.29			
	最大	77.09	0.47	13.57	2.51	0.15	0.70	2.57	4.70	1.70			
	平均	76.66	0.34	12.68	2.00	0.10	0.39	2.05	4.37	1.42	26	99.122	WDS
	標準偏差	0.526	0.05	0.217	0.152	0.033	0.071	0.125	0.16	0.084			
サンプル5	最小	74.79	0.28	12.52	1.70	0.00	0.29	1.88	4.11	1.33			
	最大	77.37	0.44	13.40	2.47	0.16	0.53	2.56	4.61	1.54			
	平均	76.56	0.36	12.75	2.03	0.09	0.38	2.03	4.10	1.42	14	98.579	WDS
	標準偏差	0.721	0.039	0.283	0.19	0.045	0.063	0.236	0.143	0.065			
十和田aテフラ													
青木・町山(2006)	To-a	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	19	98.41	WDS
	SID 35												
	To-a	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56	18	92.89	WDS
	SID 37												

FeO\*全鉄をFeOとして計算した。\*: 分析値を表す。WDS: 波長分散型EPMAを表す。

写 真 图 版





航空写真（南東から）



北側調査区遠景（南から）

写真図版1 調査前風景（1）



北側調査区遠景（北から）



北側調査区（南から）

写真図版2 調査前風景（2）



北側調査区（南から）



南側調査区（西から）



北側調査区 南半



北側調査区 北半

写真図版4 航空写真



基本土層（北端低地）



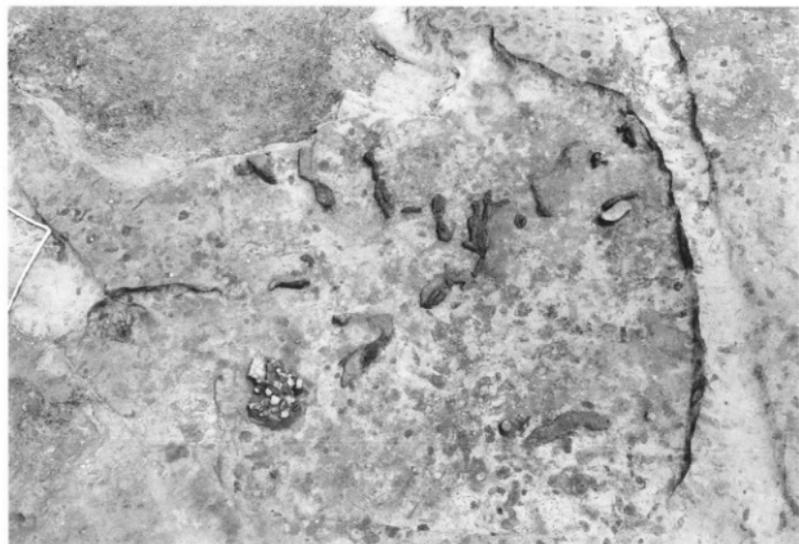
基本土層



RA128 煙出（東から）



RA128 煙出 B断面



遺物出土状況（南西から）



埋土 断面（南西から）



埋土 断面（南西から）



カマド



煙道 断面



カマド 断面



カマド胎出土遺物



カマド燃焼部焼土 断面



土坑 断面



炭化材出土状況



遺物出土状況 (北から)



埋土 断面 (南から)



埋土 断面 (西から)



1号カマド



1号カマド煙道・煙出 断面



1号カマド基焼部 断面



2号カマド



遺物出土状況



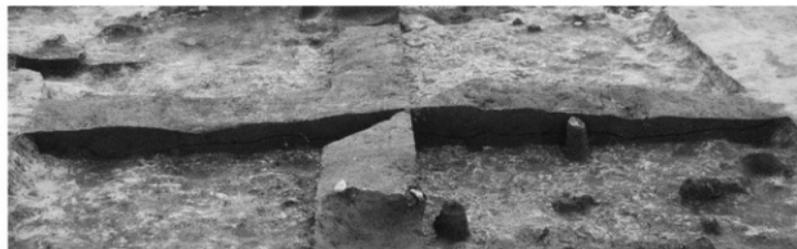
2号カマド 断面



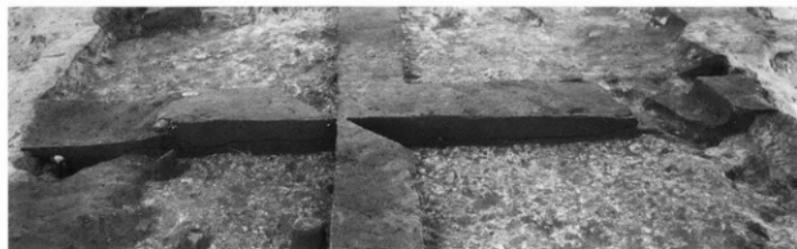
遺物出土状況



完掘（南から）



埋土 断面（西から）



埋土 断面（南から）



1号カマド



2号カマド



1号カマド煙出 断面



2号カマド煙道 断面



1号カマド 断面



土坑1 断面



土坑2 遺物出土状況



土坑2 断面

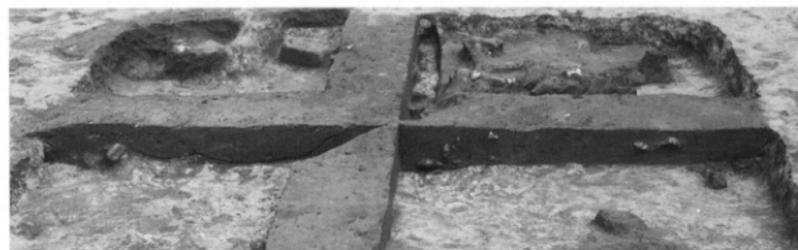
写真図版11 RA189竪穴住居跡(2)



完掘（南から）



埋土 断面（南から）



埋土 断面（西から）



カマド



カマド埋土 断面



カマド断面ち割り



カマド断面ち割り



土坑 断面 (北西から)



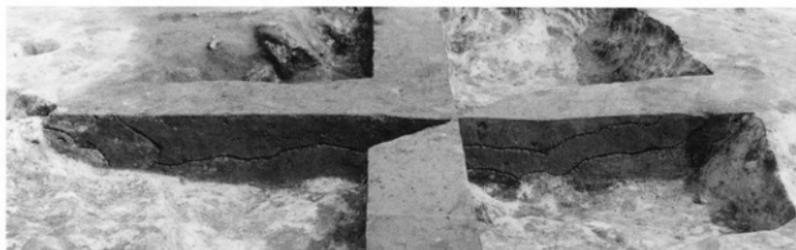
炭化材出土状況 (北から)



遺物出土状況 (北西から)



完掘（北西から）



埋土 断面（北西から）

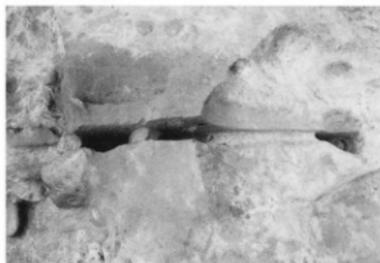


埋土 断面（南西から）

写真図版14 RA191竪穴住居跡（1）



カマド



煙道・煙出 断面



燃焼部 断面



カマド断ち割り (北西から)



柱穴 1 断面



カマド焼土 断面 (南西から)



掘り方



完掘（北東から）



埋土 断面（南東から）



埋土 断面（南西から）

写真図版16 RA192竪穴住居跡（1）



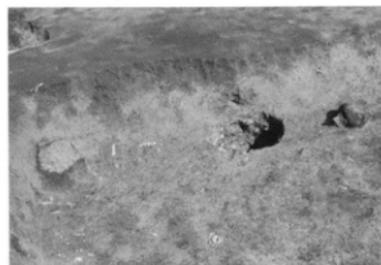
カマド



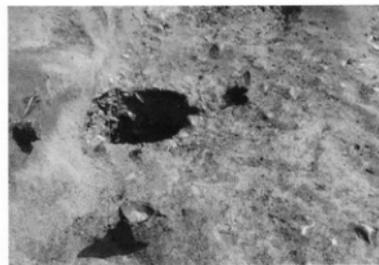
煙道・煙出 断面



煙出埋土中の遺物出土状況



遺物出土状況 壁際（西から）



遺物出土状況（北から）



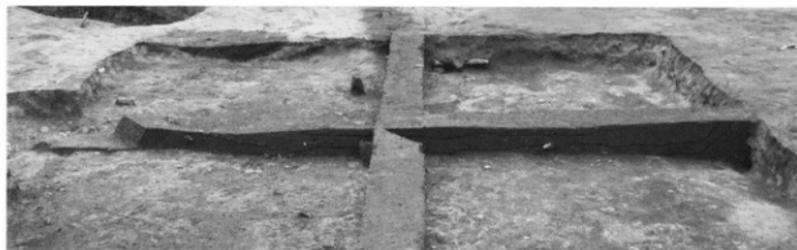
遺物出土状況



遺物出土状況



完掘 (南東から)



埋土 断面 (南東から)



埋土 断面 (南西から)

写真図版18 RA193竪穴住居跡 (1)



カマド



煙道・煙出 断面



燃焼部 断面



燃焼部断ち割り



床面の焼土 (南東から)



柱穴5 断面



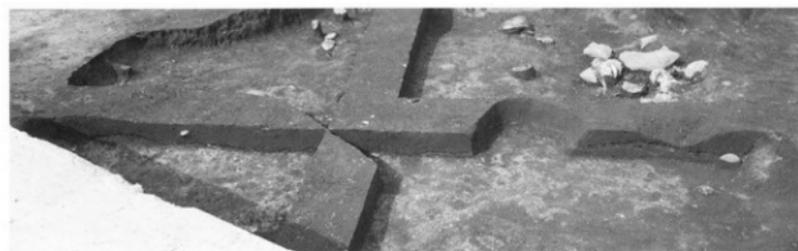
柱穴6 断面



完掘 (北西から)



埋土 断面 (北西から)



埋土 断面 (南西から)



カマド・土坑4



煙道・煙出 断面



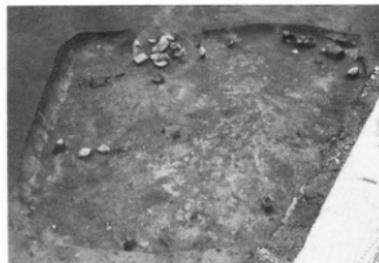
土坑1 断面



燃焼部 断面



土坑3 断面



遺物出土状況



カマド土器出土状況



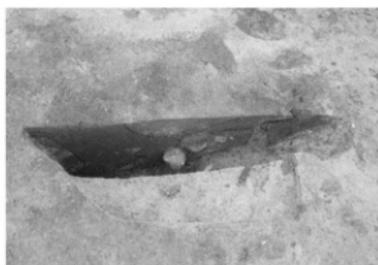
鏝 出土状況



完掘（東から）



埋土 断面（西から）



煙道・煙出 断面



土坑1 遺物出土状況



土坑1 断面



完掘（東から）



埋土 断面（東から）



埋土 断面（南から）



カマド・土坑1



カマド 断面 (南から)



カマド燃焼部 断面



カマド断ち割り



カマド支脚検出状況



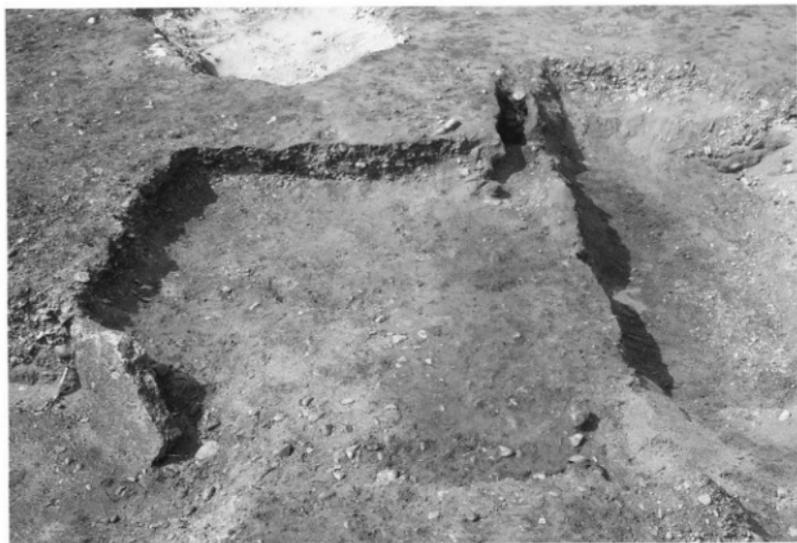
土坑1 断面



遺物出土状況・南壁周辺



遺物出土状況・東壁周辺



完掘（南から）



埋土 断面（南から）



埋土 断面（西から）



遺物出土状況（南から）



カマド



煙道・煙出 断面



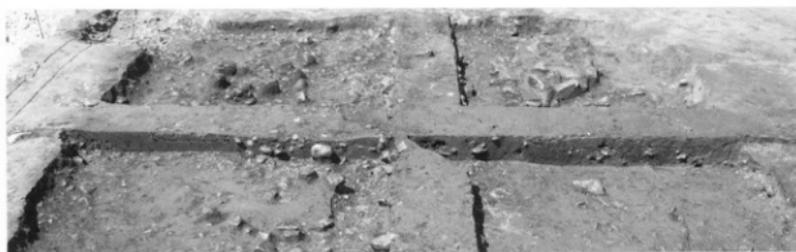
カマド 断面



カマド焼土 断面（東から）



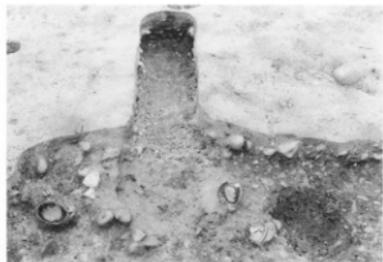
遺物出土状況（南から）



埋土 断面（南から）



埋土 断面（西から）



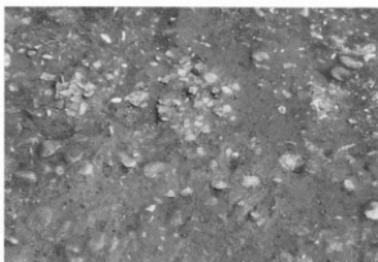
カマド



カマド 断面



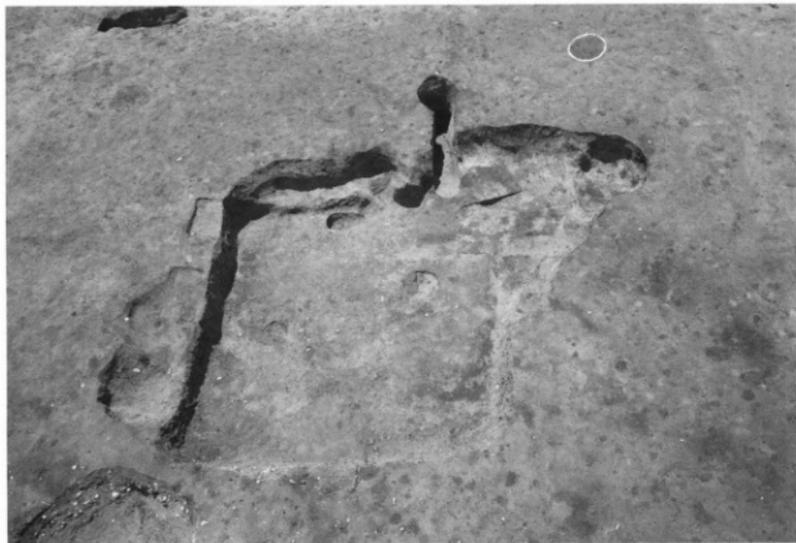
カマド前 遺物出土状況 (西から)



床面 遺物出土状況



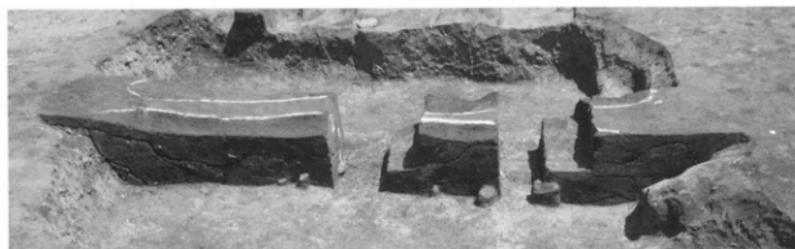
完掘 (南から)



実撮 (北から)



埋土 断面 A-A'・B-B' (南から)



埋土 断面 C-C' (西から)



カマド (北から)



カマド煙道部 断面a-a' (西から)



カマド燃焼部 (西から)



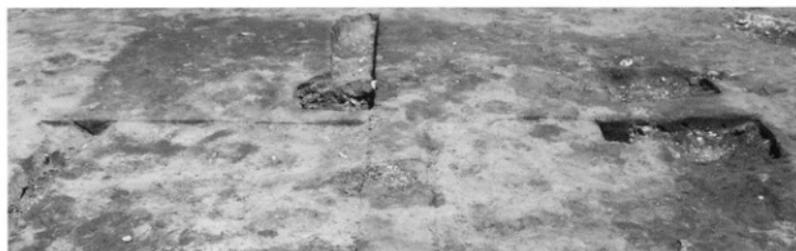
埋土 断面D-D' (南から)



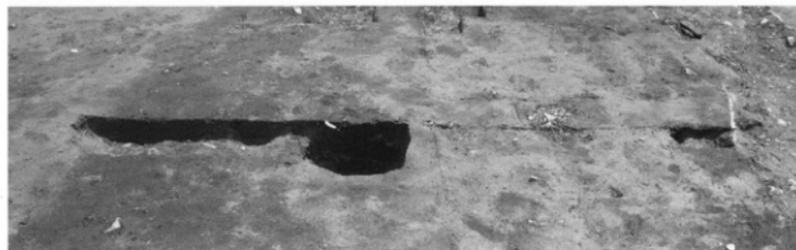
貼床 (南から)



完掘 (南から)



埋土 断面A-A' (南から)



埋土 断面B-B' (西から)



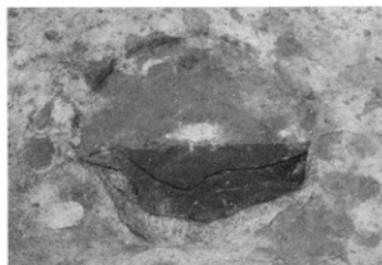
完掘（北西から）



埋土 断面A-A'（南西から）



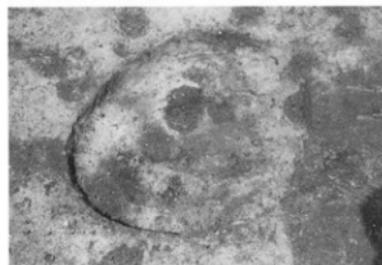
完掘 (南から)



PP96 断面 (東から)



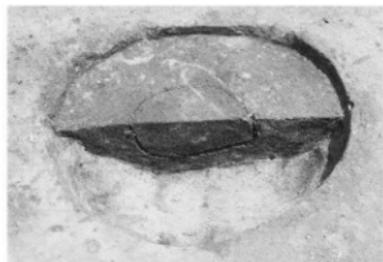
PP95 断面 (東から)



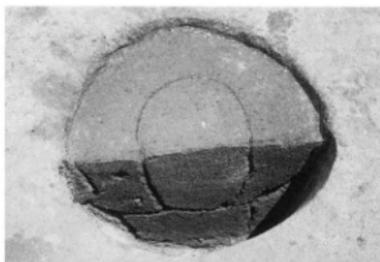
PP94 断面 (東から)



PP93 断面 (南から)



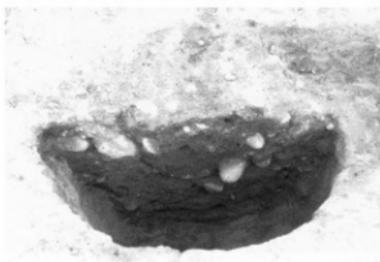
RB026 PP90 断面 (西から)



RB026 PP91 断面 (西から)



RB026 PP92 断面 (西から)



RB031 PP136 断面 (南から)

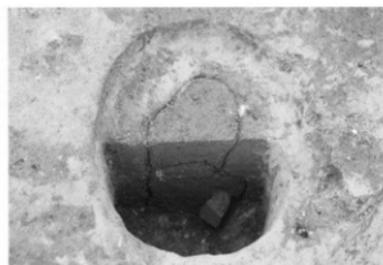


RB031 · RC005完掘 (南から)

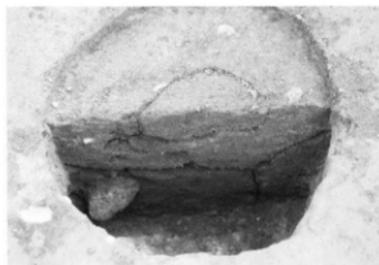
写真図版34 RB026 (2) · RB031掘立柱建物跡 · RC005柱穴列



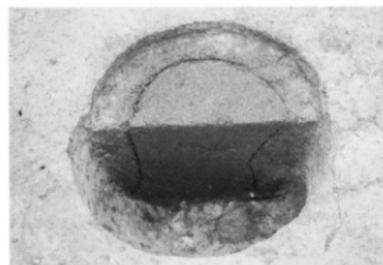
完掘 (南から)



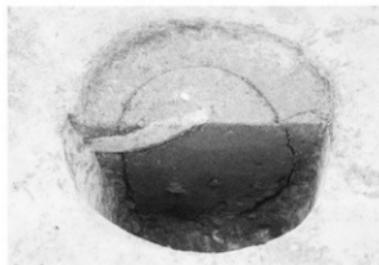
PP67 断面 (東から)



PP68 断面 (西から)



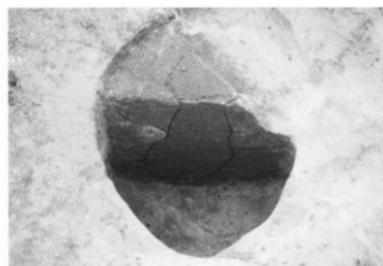
PP65 断面 (西から)



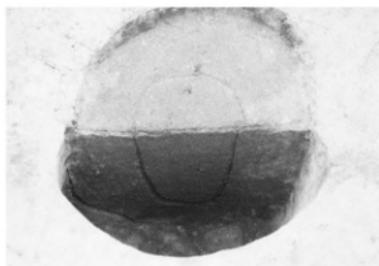
PP66 断面 (南から)



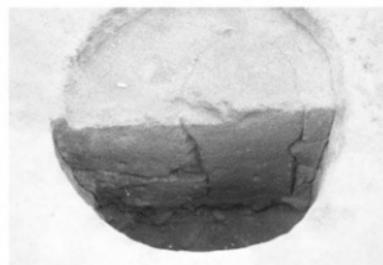
完掘 (南から)



PP33 断面 (西から)



PP34 断面 (西から)



PP35 断面 (南から)



PP40 断面 (西から)



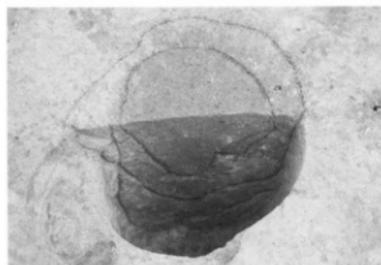
完掘 (南から)



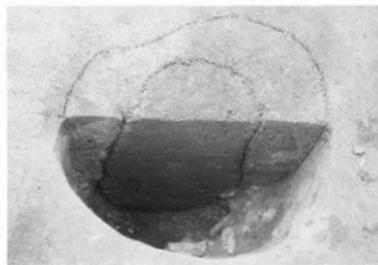
PP50 断面 (南から)



PP51 断面 (南から)



PP52 断面 (南から)



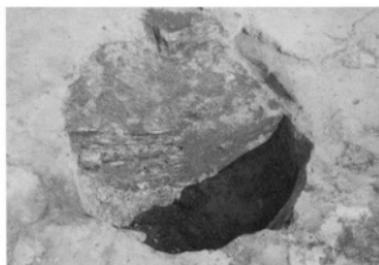
PP53 断面 (南東から)



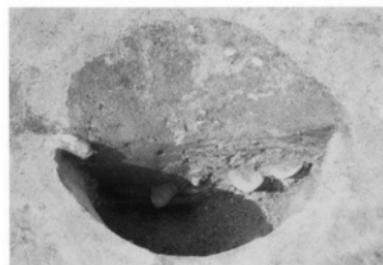
実掘 (南から)



PP112 断面 (西から)



PP113 断面 (西から)

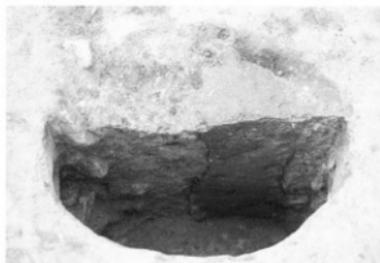


PP117 断面 (南から)

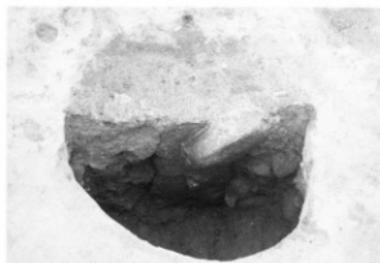


PP114 断面 (西から)

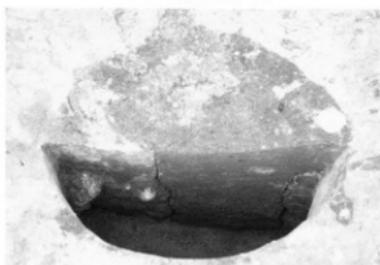
写真図版38 RB030掘立柱建物跡 (1)



PP115 断面 (南から)



PP116 断面 (南から)



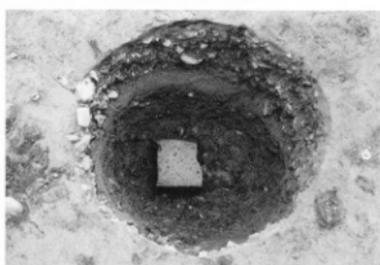
PP118 断面 (東から)



PP119 断面 (南から)



PP112 掘出土状況 (西から)



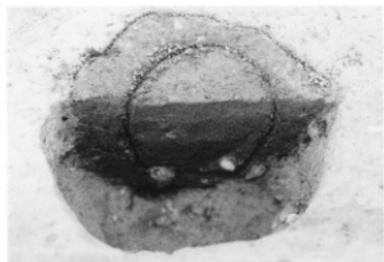
PP114 掘出土状況 (西から)



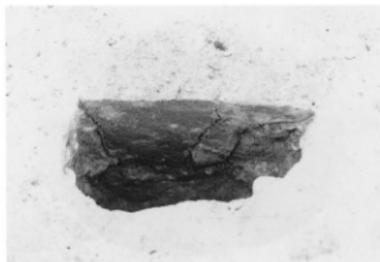
RB030・RC008完掘状況 (南から)



調査風景



RB033 PP106 断面 (南から)



RB033 PP100 断面 (東から)



PP101 (RB032)・102 (RB033) 断面 (東から)



RB032完掘 (南から)

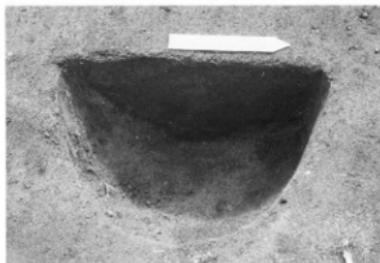


RB032・RB033完掘 (南から)

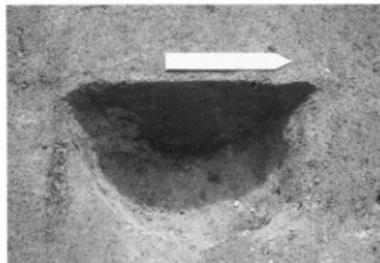
写真図版40 RB032・RB033掘立柱建物跡



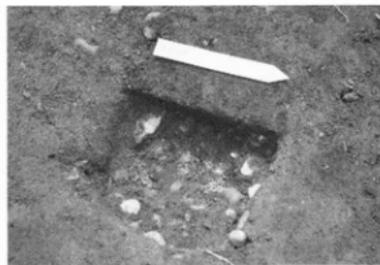
RC007完掘 (南から)



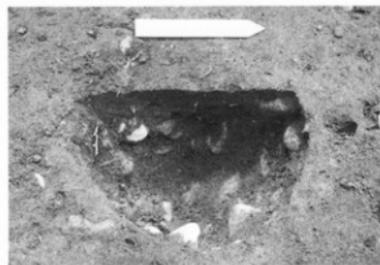
RC007 PP75埋土 断面 (東から)



RC007 PP77埋土 断面 (東から)



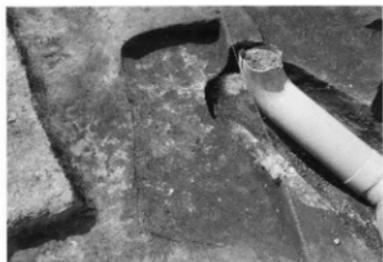
RC007 PP85埋土 断面 (東から)



RC007 PP86埋土 断面 (東から)



RC008完掘 (南から)



RD481 To-a検出状況



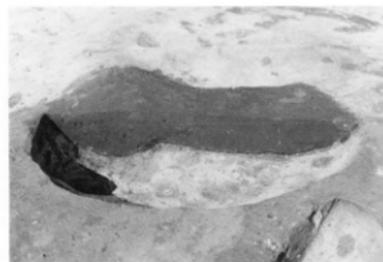
RD481 断面



RD481 完掘



RD482 完掘



RD482 断面



RD482 掘り方



RD483 完掘



RD483 断面

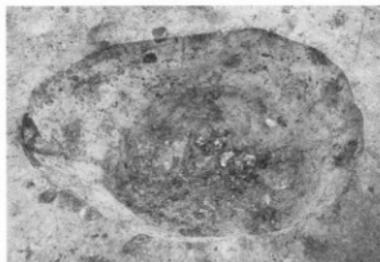
写真図版42 RD481~483土坑



RD484 完掘 (南から)



RD484 断面 (南から)



RD485 完掘 (西から)



RD485 断面 (西から)



RD486 完掘 (西から)



RD486 断面 (西から)



RD487 完掘 (南東から)



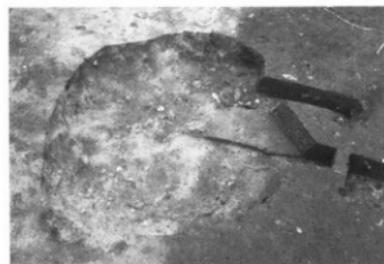
RD487 断面 (南東から)



RD488 検出状況 (東から)



RD488 遺物出土状況 (東から)



RD488 完掘 (東から)



RD488 断面 (東から)



RD489 完掘 (南東から)



RD489 断面 (南西から)



RD490 完掘 (西から)



RD490 断面 (西から)

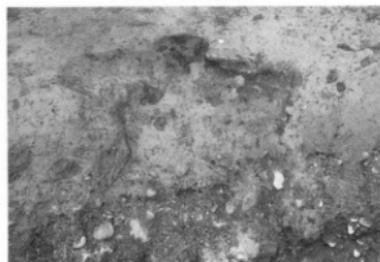
写真図版44 RD488~490土坑



RD491 完掘 (東から)



RD491 断面 (南から)



RD492 使用面 (北から)



RD492 断面 (西から)



RD492 完掘 (北から)



RD492 立ち割り (西から)



RD493 使用面 (北から)



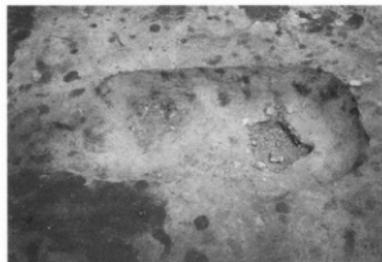
RD493 断面 (西から)



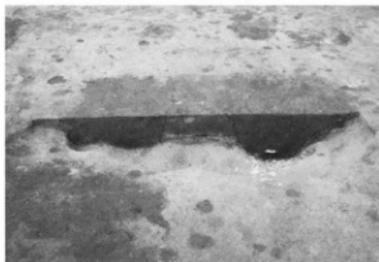
RD493 掘り方 (北から)



RD493 断ち割り (西から)



RD494 完掘 (南から)



RD494 断面 (南から)



RD495 完掘 (南東から)



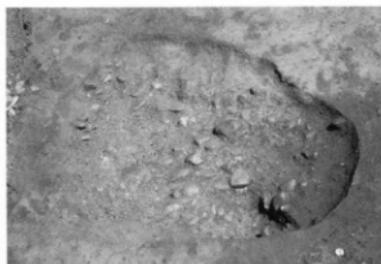
RD495 断面 (南西から)



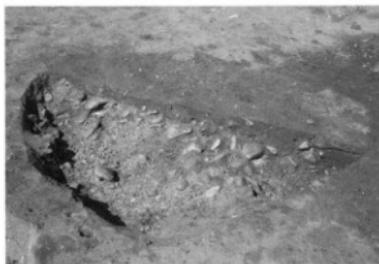
RD495 遺物出土状況 (東から)



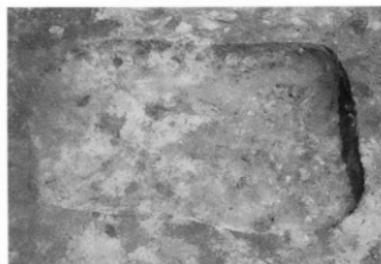
RD495 焼土断ち割り (南西から)



RD496 完掘 (南から)



RD496 断面 (南西から)



RD497 完掘 (南西から)



RD497 断面 (南西から)



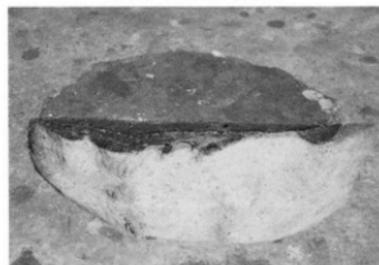
RD498 炭化材出土状況 (西から)



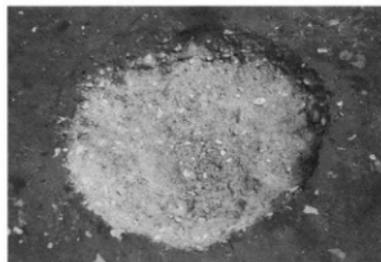
RD498 埋土断面 (西から)



RD499 完掘 (南から)



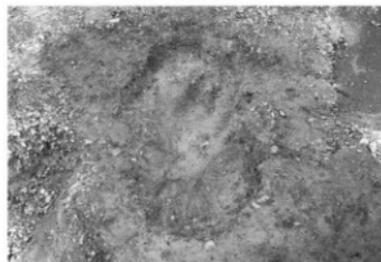
RD499 断面 (南から)



RD500 完掘 (南西から)



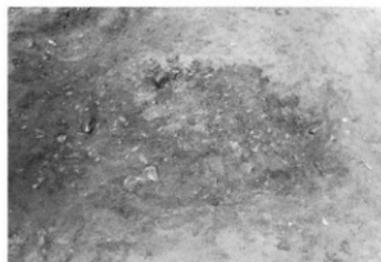
RD500 断面 (南西から)



RD501 完掘 (南から)



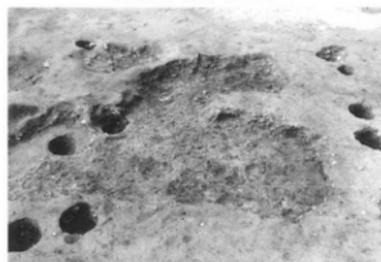
RD501 埋土 断面 (西から)



RD502a 完掘 (南から)



RD502a 断面 (南から)



RD502b 完掘 (南から)



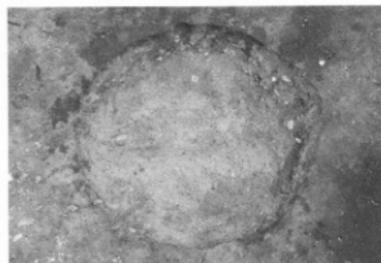
RD502b 断面 (西から)



RD503 完掘 (南西から)



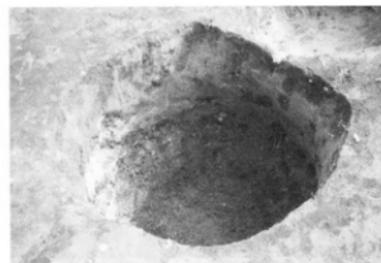
RD503 埋土 断面 (南西から)



RD504 完掘 (西から)



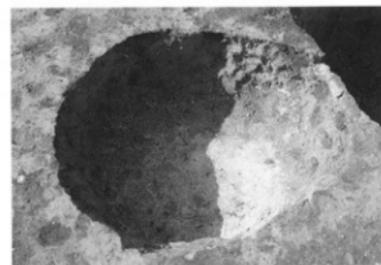
RD504 埋土 断面 (西から)



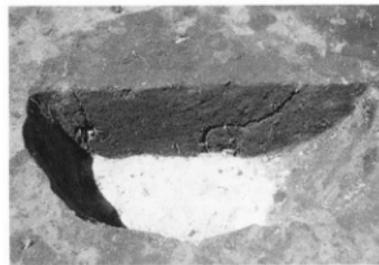
RD505 完掘 (北から)



RD505 断面 (南東から)



RD506 完掘 (南から)



RD506 断面 (南東から)



RD507 完掘 (南から)



RD507 断面 (西から)



RE013 完掘 (西から)



RE013 断面 (西から)



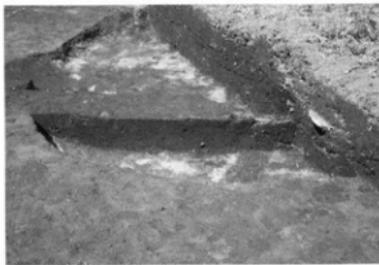
調査風景 (南東から)



RE014 完掘 (西から)



RE014 埋土 断面A-A' (西から)



RE014 埋土 断面B-B' (東から)



RF012 検出状況



RF012 断面



RG058・083 完掘（下が北）



RG058・083 完掘（南から）

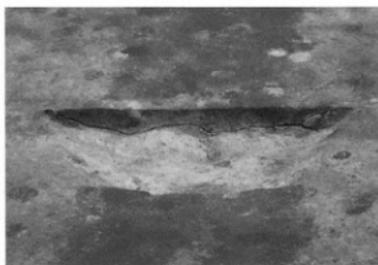
写真図版52 RG058（1）・RG083（1）溝跡



RG058 完掘 (東から)



RG058 全景 (東から)



RG083 埋土 断面A-A' (南から)



RG083 埋土 断面B-B' (南から)



RG083 埋土 断面C-C' (南から)



RG058 埋土 断面D-D' (南から)



RG058 埋土 断面E-E' (南から)



RG058 埋土 断面F-F' (南から)



RG058 埋土 断面G-G' (西から)



RG084 完掘 (西から)



RG084 埋土 断面 (西から)



RG087 完掘 (南から)



RG087 断面 (南から)



RG085 埋土 断面 (南から)



RG085 埋土 断面 (南から)



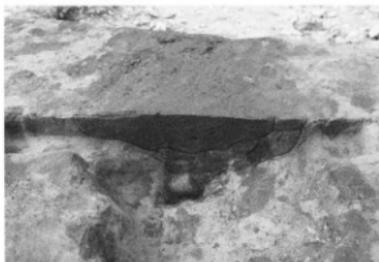
RG085 完掘 (南から)



RG086 完掘 (南から)



RG086 完掘 (南から)



RG086 C-C'断面 (南から)



RG086 D-D'断面 (南から)



RG086 E-E'断面 (南から)



RG086 F-F'断面 (西から)



RG086 G-G'断面 (西から)



RG088 完掘 (南から)



RG088 埋土 断面 (南から)



遠景（東から）



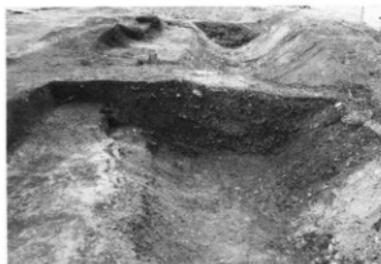
全景（上が南）



完備（東から）



埋土 断面B-B'（東から）



埋土 断面A-A' (東から)



埋土 断面C-C' (東から)



土橋 (南から)



土橋 (西から)



作業風景 (東から)



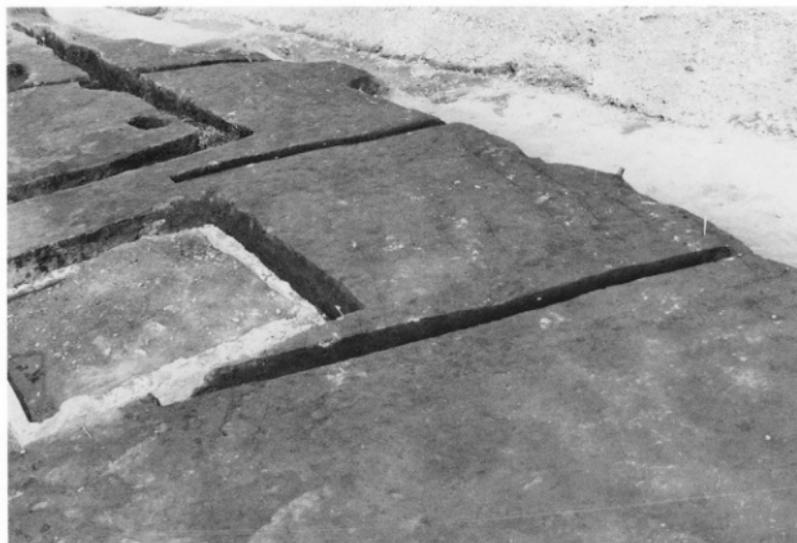
作業風景 (東から)



作業風景 (東から)



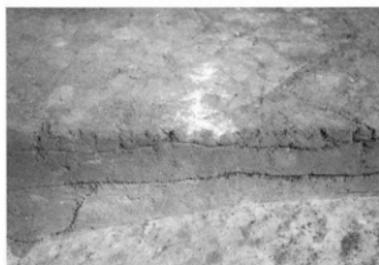
作業風景



西側検出状況（南東から）



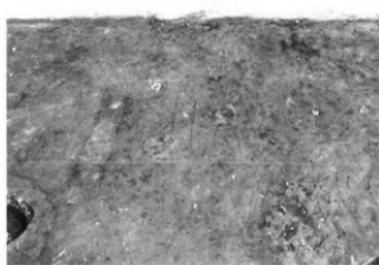
西端 断面（東から）



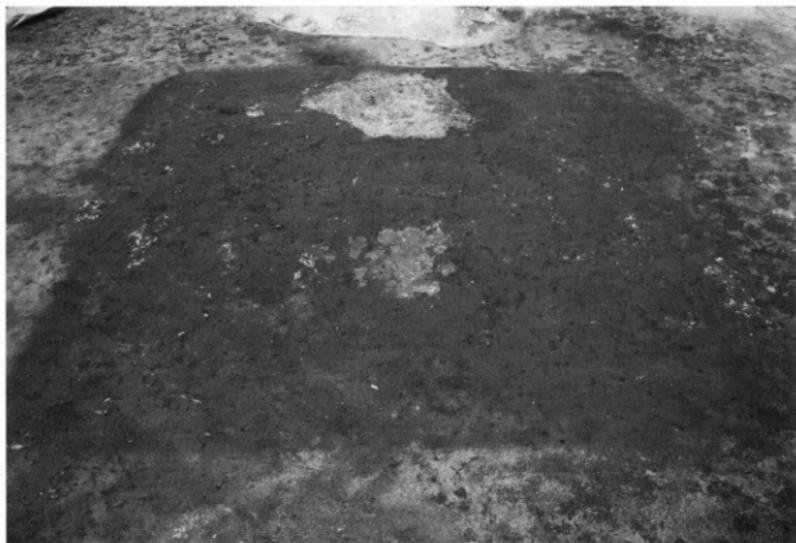
西側 断面（西から）



東側検出状況（南東から）



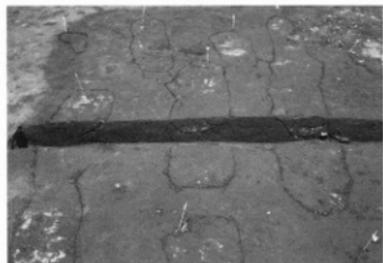
東側検出状況（南から）



検出状況（南から）



断面（南から）



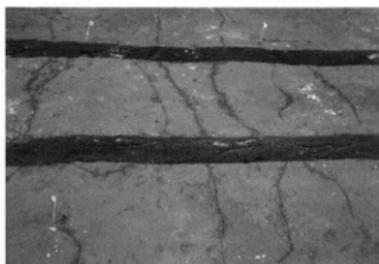
畝2・4・7 断面 (南から)



畝9・10・13 断面 (南から)



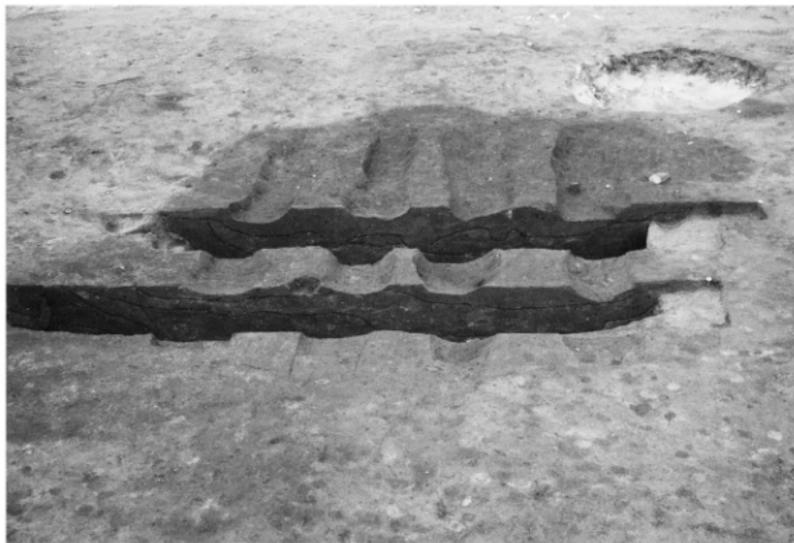
畝5・8 断面 (南から)



畝13・14・15 断面 (南から)



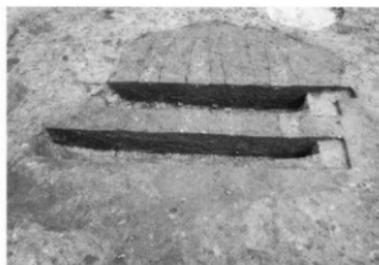
完掘 (南から)



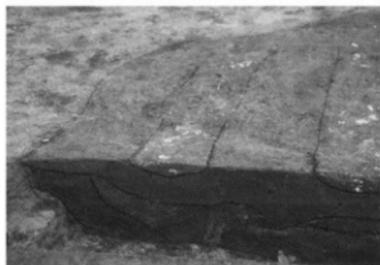
完掘 (南から)



検出状況 (南から)



埋土 断面 (南から)



埋土西側 断面 (南から)



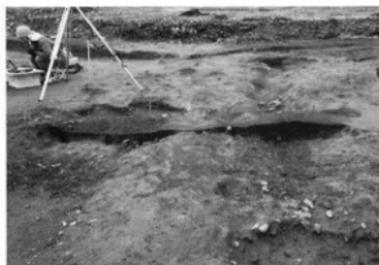
埋土中央～東側 断面 (南から)



完掘 (南から)



埋土 断面A-A'・B-B' (南から)



埋土 断面C-C' (南から)



完掘 (南から)



作業風景 (南から)



完掘（東から）



埋土 断面A-A'（西から）



埋土 断面B-B'（西から）



埋土 断面C-C'（西から）



完掘（東から）



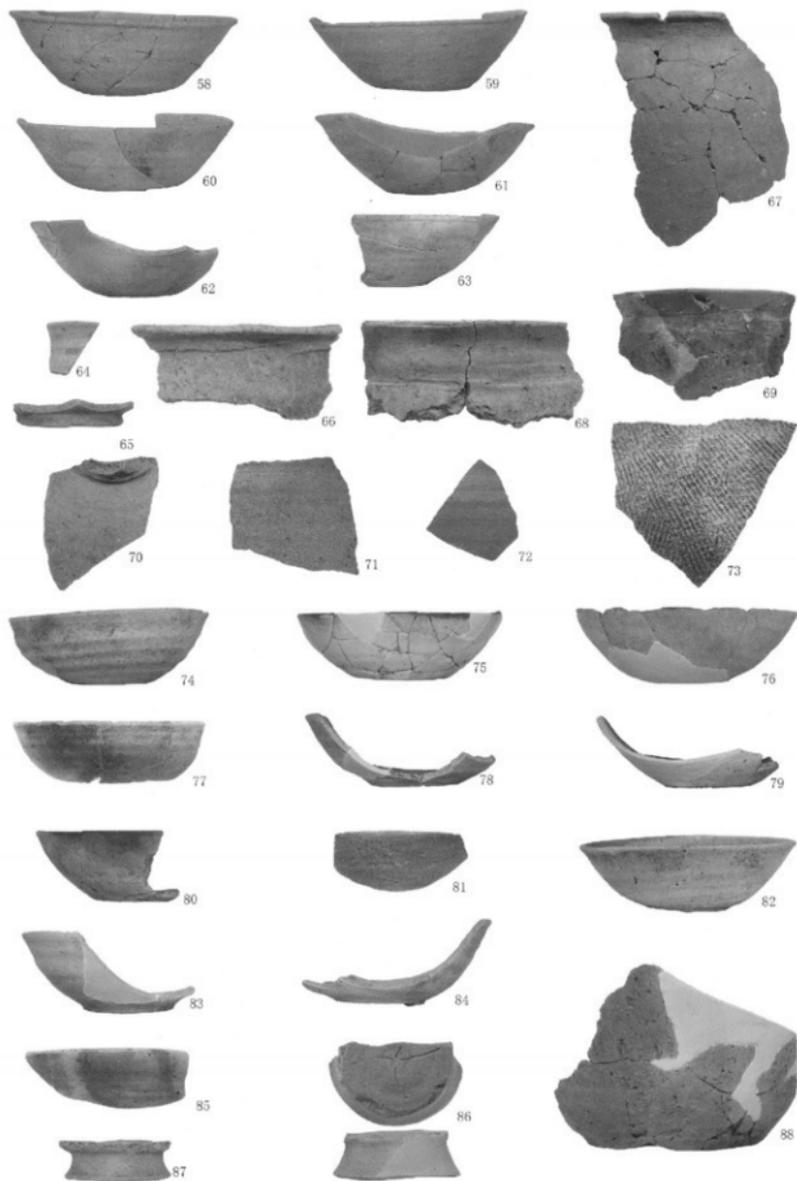
写真図版66 土師器・須恵器（1）



写真図版67 土師器・須恵器（2）



写真図版68 土師器・須恵器（3）



写真図版69 土師器・須恵器 (4)



89



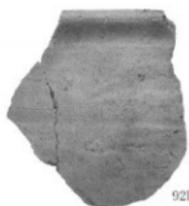
90



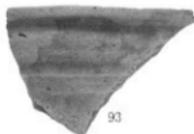
91



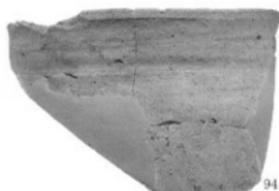
92A



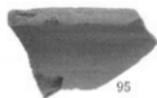
92B



93



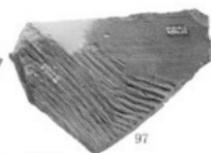
94



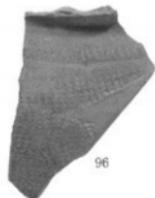
95



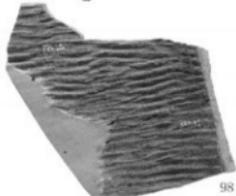
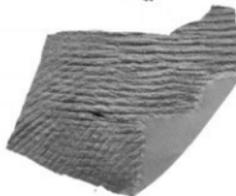
97



97

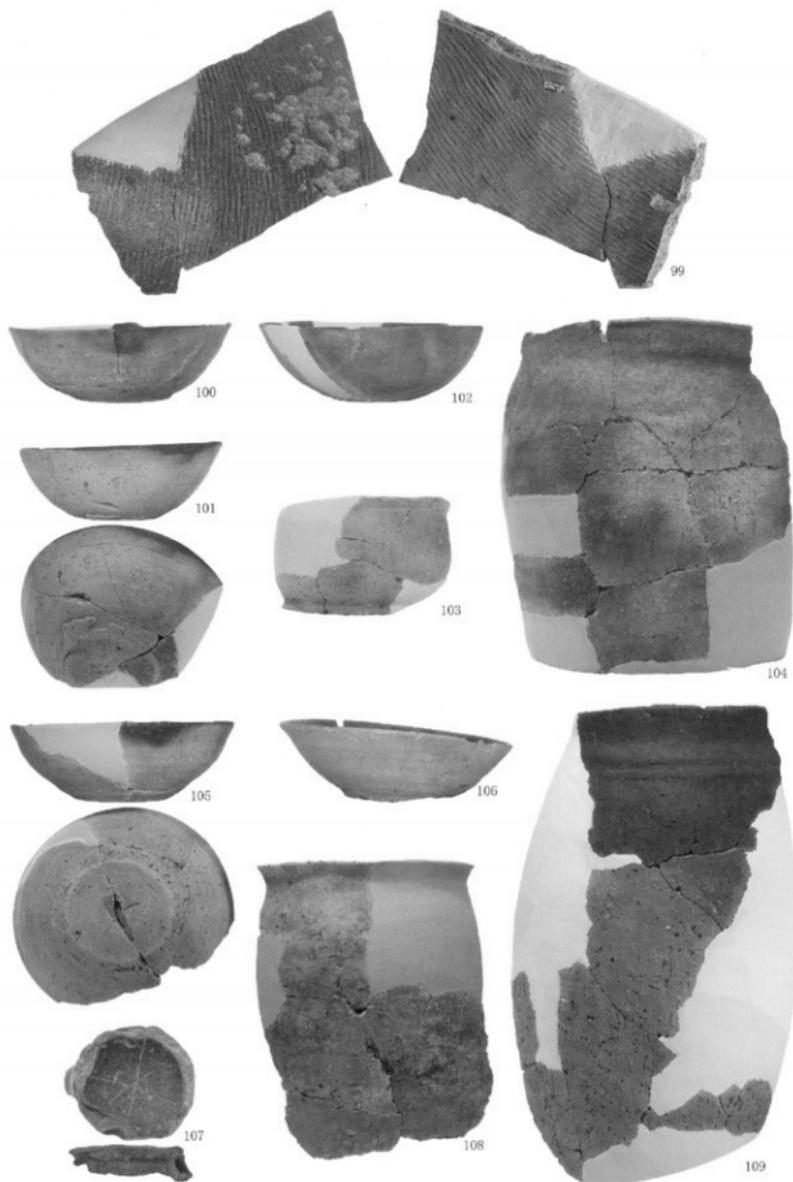


96



98

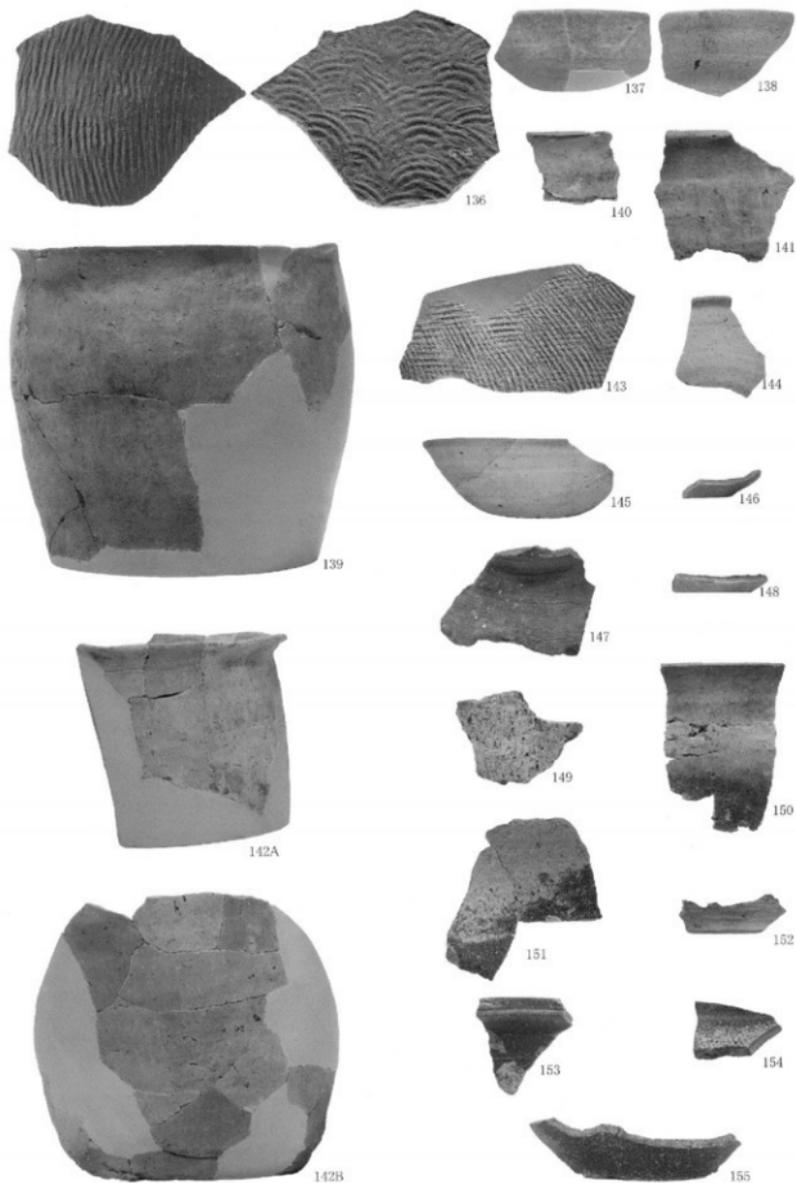
写真図版70 土師器・須恵器 (5)



写真図版71 土師器・須恵器（6）



写真図版72 土師器・須恵器（7）



写真図版73 土師器・須恵器(8)



156



157



158



159



160

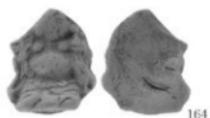


162

161 1/2 S=1/4  
1/3 S=1/3



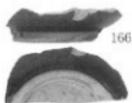
163



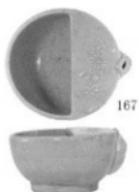
164



165



166



167



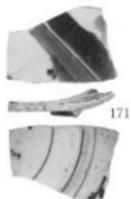
168



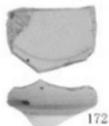
170



169



171



172



173



174



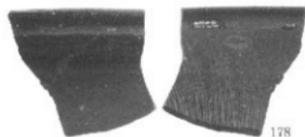
175



176



177



178



179



180

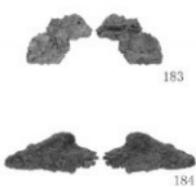
163 寸 S=1/2  
 164 寸 S=1/1  
 他は S=1/3



181



182



183

184



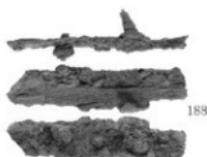
185



186



187



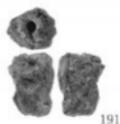
188



189



190



191



192



193



194



195



196



197

すべてS=1/2

写真図版76 鉄製品・銭貨・鉄滓・その他

# 報告書抄録

ふりがな はそやちいせきだいにじゅうろくじはっくつちようさほうこくしょ								
書名	細谷地遺跡第26次発掘調査報告書							
副書名	盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第595集							
編著者名	金子佐知子・星 雅之							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2012年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ-ド 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
細谷地遺跡 (第26次)	岩手県盛岡市向中 野字野原S-1 ほか	03201	LE26-0214	39度 40分 37秒	141度 08分 21秒	2010.04.09 ～ 2010.08.11	6,633㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
細谷地遺跡 (第26次)	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡	2棟	土師器・須恵器中コンテナ	9箱	平安時代の緑釉陶器皿破片、甌、墨書土器、刻書土器 2条の平行する溝跡(道路?) 畝間状遺構(うち住居跡の垣土中に2箇所)	
		平安時代	竪穴住居跡	14棟	鉄製品			
		9世紀中	掘立柱建物跡	4棟				
			竪穴状遺構	1基				
		前牛	竪穴状遺構	1基				
			焼土遺構	1基				
			溝跡	5条				
			畝間状遺構	3箇所				
		古代	竪穴状遺構	1基				
		中世～近世	堀跡	1条	陶磁器 中コンテナ	1箱		遺物のない掘立柱建物跡
			掘立柱建物跡	2棟	泥面土	寛永通宝		
			柱穴列	1条				
近世	土壇墓	2基			京・何楽焼の汁次			
近世以降～	掘立柱建物跡	2棟						
近代・現代	柱穴列	3条						
	土坑	5基						
	土坑墓	2基						
	溝跡	2条						
	道路状遺構	1条						
時期不明	柱穴状土坑	多数						
要約	<p>今回は23回目の本調査である。調査区は、遺跡の北東側に位置する。開拓地はこれまでに調査されており、奈良～平安時代の集落が広がり、中世以降の堀跡が遺跡北辺にかかることが予想されていた。</p> <p>今回の調査では、遺跡東側の奈良時代集落が今回調査区まで広がっていること、平安時代の集落には倉庫と思われる2×2間程度の小型掘立柱建物跡が伴っていること、奥に関連すると思われる畝間状遺構が広がることが確認された。畝間状遺構の中には、竪穴住居跡の埋土中から検出されたものが2箇所あることが特筆される。</p> <p>遺物では、周辺では珍しい平安時代の緑釉陶器の皿の破片が竪穴住居跡埋土から出土した。両住居跡は通常の竪穴住居跡と形状に差異はないが、多文字の墨書土器、甌破片も出土しており、注目される。</p>							

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書595集

**細谷地遺跡第26次発掘調査報告書**

盛岡南新都市土地地区直整理事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成24年3月16日

発行 平成24年3月23日

編集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

発行 盛岡市都市整備部盛岡南整備課

〒020-8531 岩手県盛岡市津志田14地割37番地2号

電話 (019) 651-4111

(公財) 岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電話 (019) 654-2235

印刷 川崎印刷株式会社

〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野厚21

電話 (0191) 46-4161

